

茨城県教育財団文化財調査報告第131集

主要地方道つくば古河線緊急地方
道路事業地内埋蔵文化財調査報告書

大橋 B 遺跡
釈迦才仏遺跡

平成10年3月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第131集

主要地方道つくば古河線緊急地方 道路事業地内埋蔵文化財調査報告書

おお はし
大 橋 B 遺 跡
しや か さい ぶつ
釈 迦 才 仏 遺 跡

平成10年3月

茨 城 県
財団法人 茨城県教育財団



土製仮面



土偶

序

茨城県は、長期的な展望のもとに、県土の基盤整備事業を行っております。道路網につきましても、「県土60分構想」の具体化や円滑な都市交通確保を図るなど、ゆとりある社会の実現をめざして快適な道路の整備を進めております。

主要地方道つくば古河線地方道路事業は、総和町釈迦地区から古河市中田地区にかけての交通渋滞の緩和を目的として計画されたものでありますが、その予定地内には埋蔵文化財包蔵地である大橋B遺跡及び釈迦才仏遺跡が確認されております。

財団法人茨城県教育財団は、茨城県から埋蔵文化財発掘調査について委託を受け、平成7年10月から平成8年3月にかけて発掘調査を実施してまいりました。

本書は、大橋B遺跡及び釈迦才仏遺跡の調査成果を取録したものであり、本書が学術的な資料としてはもとより、教育・文化の向上の一助として広く活用されますことを希望いたします。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である茨城県から多大な御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、総和町教育委員会をはじめ、関係各機関及び関係各位から御指導、御協力をいただきましたことに対し、衷心より感謝の意を表します。

平成10年3月

財団法人 茨城県教育財団
理事長 橋本 昌

例 言

1 本書は、茨城県の委託により、財団法人茨城県教育財団が、平成7年10月から平成8年3月まで発掘調査を実施した、大橋B遺跡、釈迦才仏遺跡の発掘調査報告書である。

なお、2遺跡の所在地は次のとおりである。

大橋B遺跡 猿島郡総和町釈迦964番地の4ほか

釈迦才仏遺跡 猿島郡総和町釈迦62番地の1ほか

2 上記の2遺跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は、次のとおりである。

理事長	橋本 昌	平成7年4月～	
副理事長	小林 秀文	平成6年4月～平成8年3月	
	中島 弘光 齋藤 佳郎	平成7年4月～ 平成8年4月～	
常務理事	一木 邦彦	平成7年4月～平成8年3月	
	齋藤 紀彦	平成9年4月～	
事務局 長	齋藤 紀彦	平成7年4月～平成8年3月	
	西村 敏一	平成9年4月～	
埋蔵文化財部長	安藏 幸重	平成5年4月～平成8年3月	
	沼田 文夫	平成8年4月～	
埋蔵文化財部長代理	河野 佑司	平成6年4月～	
企画管理課	課 長	水 剣 敏 夫	平成4年4月～平成8年3月
	課 長	河 崎 孝 典	平成9年4月～
	課長代理	根 本 達 夫	平成7年4月～ (平成6年4月～平成7年3月係長)
	課長代理	清 水 薫	平成9年4月～
	主任調査員	海老澤 隆	平成6年4月～平成8年3月
	主任調査員	小 高 五十二	平成8年4月～
経 理 課	課 長	小 幡 弘 明	平成5年4月～平成8年3月
	課 長	鈴 木 三 郎	平成9年4月～ (平成7年4月～平成8年3月主査)
	主 査	田 所 多佳男	平成8年4月～
	課長代理	大 高 春 夫	平成7年4月～平成9年3月
	主 任	小 池 孝 孝	平成7年4月～
	主 任	宮 本 勉	平成9年4月～
	主 事	軍 司 浩 作	平成5年4月～平成8年3月
主 事	小 西 孝 典	平成9年4月～	
調 査 課	課長(部長兼務)	安 藏 幸 重	平成5年4月～平成8年3月
	課長(部長兼務)	沼 田 文 夫	平成8年4月～
	調査第四班長	鶴 見 貞 雄	平成7年4月～平成8年3月
	主任調査員	川 津 法 伸	平成7年10月～平成8年3月
	主任調査員	土 生 朗 治	平成7年10月～平成8年3月

整理課	課長	小泉光正	平成9年4月
	主任調査員	川津法伸	平成9年7月～平成10年3月整理・執筆・編集

- 3 本書に使用した記号等については、凡例を参照されたい。
- 4 本書の作成に当たり、土製仮面については、磯前順一氏（日本女子大学助教授）に御指導いただいた。
- 5 炭化材及び種実遺体の種類についての自然科学分析を、パリノ・サーヴエイ株式会社 に依頼した。分析結果は付章として報告する。
- 6 発掘調査及び整理に際して、御指導、御協力を賜った関係各機関並びに関係各位に対し、深く感謝の意を表します。
- 7 遺跡の概略

ふりがな	しゅうちゅうほうどう こがせんきんきゅうちゅうほうどうろじぎょうちないまいどうふんかざいりょうさほうこくしょ						
書名	主要地方道つくば古河線緊急地方道路事業地内埋蔵文化財調査報告書						
副書名	大橋B遺跡・駅道才仏遺跡						
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告						
シリーズ番号	第131集						
編著者名	川津法伸						
編集機関	財団法人 茨城県教育財団						
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2				TEL029(225)6587		
発行機関	財団法人 茨城県教育財団						
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2				TEL029(225)6587		
発行年月日	1998(平成10)年3月20日						
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡	所在地	市町村遺跡番号					
おおし	いちはし		36°	139°	19951001～	2,246㎡	主要地方道つくば古河線緊急地方道路事業に伴う事前調査
大橋B遺跡	茨城県猿島郡	08541	9'	45'	19960331		
	そらむらしやか 総和町駅道	-57	23°	19°			
	964番地の4 ほか						

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コ ー ド 市町村遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
しゃかさいぶつ 釈迦才仏遺跡	いばらきけんさとしまぐん 茨城県猿島郡 そうむまちしゃか 総和町釈迦 62番地の1 ほか	08541 -59	36° 9' 22"	139° 45' 11"	19951001～ 19960331	5,237㎡	
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特記事項
大橋B遺跡	集 落 跡	縄文時代	竪穴住居跡	2軒	縄文土器片		縄文時代前期 の集落跡であ る。
		近 世	土 坑	1基	土師質土器		
		時期不明	土 坑	4基			
釈迦才仏遺跡	集 落 跡	縄文時代	竪穴住居跡	32軒	縄文土器・石器・石製品(石 棒・石剣・独鈷石・勾玉)土 製品(耳飾り・土版・土偶・ 土製仮面)	縄文時代中期 ～晩期, 及び 古墳時代前期 の複合遺跡で ある。縄文時 代後期前半の 土製仮面が, 調査によって 出土したのは 県内初めてで ある。	
			土 坑	34基	縄文土器・土製品(耳飾り)		
		古墳時代	方形周溝墓	6基	土師器(壺・小形甕)		
		近 世	塚	1基	土師質土器		
		時期不明	土 坑	78基			
			溝	6条			

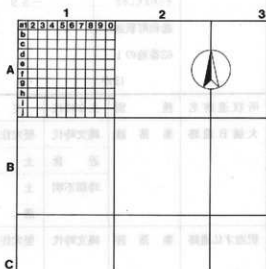
凡 例

- 1 大橋B遺跡、釈迦才仏遺跡の発掘調査を実施するに当たり、遺跡及び遺構の位置を明確にするため調査区を設定した。

調査区の設定は、日本平面直角座標第Ⅹ系座標を基準点とし、X軸（南北）+17400m、Y軸（東西）-7400mの交点をそれぞれ基準点とした。

大調査区は、この基準点を基に遺跡範囲を東西南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西、南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA、B、C・・・、西から東へ1、2、3・・・とし、「A1区」、「A2区」のように呼称した。大調査区内の小調査区は、北から南へa、b、c・・・j、西から東へ1、2、3・・・0とし、名称は、大調査区の名称を冠し、「A1a区」、「B2b区」のように呼称した。



第1図 調査区呼称方法概念図

- 2 遺構、遺物、土層に使用した記号は、次のとおりである。

遺構 住居跡-SI 土坑-SK 溝-SD 方形周溝墓-TM 塚-SX ビット-P
 遺物 土器-P 土製品-DP 石器・石製品-Q 拓本-TP
 土層 擾乱-K

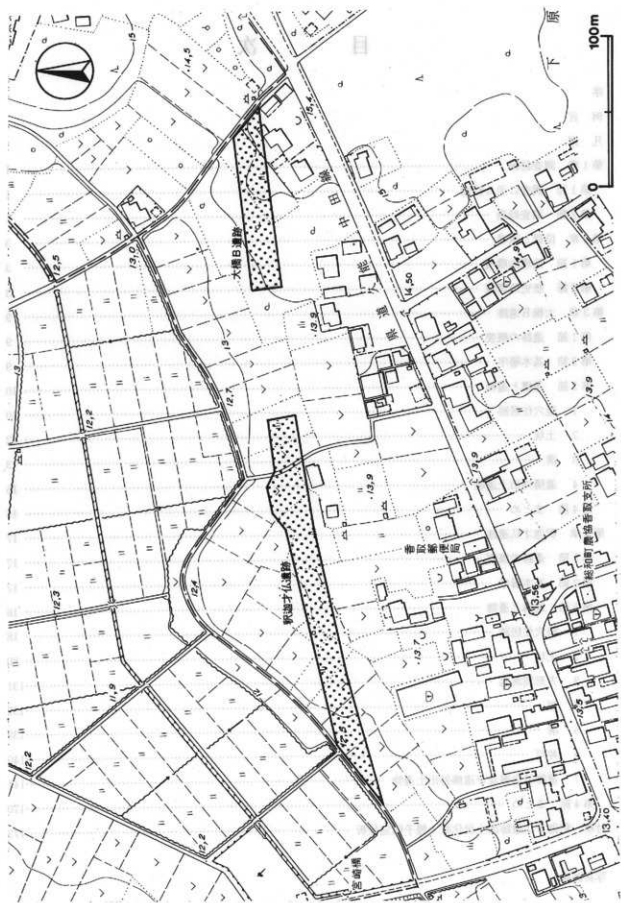
- 3 遺構及び遺物の実測図中の表示は、次のとおりである。

= 炉
 = 赤彩
 = 縄線土器
 = 軸
 ● = 土器 □ = 土製品 ○ = 石器・石製品 △ = 金属製品

- 4 土層観察と遺物における色調の判定は、「新版標準土色帖」（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。
- 5 遺構・遺物実測図の作成方法及び掲載方法については、次のとおりである。
- (1) 各遺構の実測図は、60分の1の縮尺で掲載することを基本とした。
 - (2) 各遺構の実測図は、縄文土器については4分の1、その他の遺物については3分の1の縮尺で掲載することを基本とした。種類や大きさにより異なる場合もあり、それらについては、個々にS=1/○と表示した。
 - (3) 「主軸方向」は、刃を通る軸線、あるいは南北の柱穴を結ぶ軸線を主軸とし、その主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。（例 N-10°-E, N-10°-W）なお、[] を付したものは推定である。
 - (4) 土器の計測値は、A-口径、B-器高、C-底径とし、単位はcmである。なお、現存値は（ ）で、推定値は[] を付して示した。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 大橋B遺跡	9
第1節 遺跡の概要	9
第2節 基本層序	9
第3節 遺構と遺物	10
1 竪穴住居跡	10
2 土坑	12
3 溝	13
4 遺構外出土遺物	15
第4節 まとめ	16
第4章 釈迦才仏遺跡	17
第1節 遺跡の概要	17
第2節 基本層序	17
第3節 遺構と遺物	18
1 竪穴住居跡	18
2 土坑	89
3 方形周溝墓	131
4 塚	137
5 溝	139
6 井戸	140
7 遺物包含層及び遺構外出土遺物	141
第4節 まとめ	170
付章 釈迦才仏遺跡出土炭化材・種子同定分析	173



第2図 大橋B遺跡・釈迦才小遺跡周辺地形図

插图 目 次

第 1 图 调查区称呼方法概念图	第 35 图 第 15—A、B 号住居跡实测图 40
第 2 图 大橋 B 遺跡・釈迦才仏遺跡周辺地形图	第 36 图 第 15—A 号住居跡出土遺物实测・拓影图(1) 41
第 3 图 周辺遺跡分布图 6	第 37 图 第 15—A 号住居跡出土遺物实测・拓影图(2) 42
第 4 图 大橋 B 遺跡・釈迦才仏遺跡遺構全体图...7~8	第 38 图 第 15—A 号住居跡出土遺物实测图(3) 43
第 5 图 基本土層图 9	第 39 图 第 15—B 号住居跡出土遺物实测图 47
第 6 图 第 1 号住居跡・出土遺物实测拓影图 10	第 40 图 第 16 号住居跡实测图 48
第 7 图 第 2 号住居跡・出土遺物实测・拓影图 11	第 41 图 第 16 号住居跡出土遺物实测・拓影图 49
第 8 图 第 1~5 号土坑实测图 12	第 42 图 第 17 号住居跡实测图 50
第 9 图 第 5 号土坑出土遺物实测・拓影图 13	第 43 图 第 17 号住居跡出土遺物实测・拓影图 51
第 10 图 第 1~4 号溝实测图 14	第 44 图 第 18、19、21 号住居跡实测图 53
第 11 图 遺構外出土遺物实测拓影图 15	第 45 图 第 18 号住居跡出土遺物实测・拓影图(1) 54
第 12 图 基本土層图 17	第 46 图 第 18 号住居跡出土遺物实测图(2) 55
第 13 图 第 1 号住居跡实测图 18	第 47 图 第 19 号住居跡出土遺物实测・拓影图 57
第 14 图 第 1 号住居跡出土遺物实测・拓影图 19	第 48 图 第 20 号住居跡实测图 59
第 15 图 第 2 号住居跡实测图 21	第 49 图 第 20 号住居跡出土遺物实测・拓影图 59
第 16 图 第 2 号住居跡出土遺物实测・拓影图 22	第 50 图 第 21 号住居跡出土遺物实测・拓影图(1) 61
第 17 图 第 3~5 号住居跡・出土遺物实测・拓影图 23	第 51 图 第 21 号住居跡出土遺物实测图(2) 62
第 18 图 第 3 号住居跡出土遺物实测・拓影图 23	第 52 图 第 22 号住居跡实测图 64
第 19 图 第 4 号住居跡出土遺物实测拓影图 24	第 53 图 第 23 号住居跡实测图 65
第 20 图 第 5 号住居跡出土遺物实测拓影图 25	第 54 图 第 23 号住居跡出土遺物实测・拓影图 66
第 21 图 第 6 号住居跡实测图 26	第 55 图 第 24—A、B 号住居跡实测图 68
第 22 图 第 6 号住居跡出土遺物实测・拓影图 26	第 56 图 第 24—A 号住居跡出土遺物实测・拓影图(1) 70
第 23 图 第 7 号住居跡实测图 28	第 57 图 第 24—A 号住居跡出土遺物实测图(2) 71
第 24 图 第 7 号住居跡出土遺物实测・拓影图 28	第 58 图 第 24—B 号住居跡出土遺物实测・拓影图 72
第 25 图 第 8 号住居跡实测图 29	第 59 图 第 25 号住居跡实测图 73
第 26 图 第 8 号住居跡出土遺物实测拓影图 30	第 60 图 第 25 号住居跡出土遺物实测・拓影图 74
第 27 图 第 9 号住居跡实测图 31	第 61 图 第 26 号住居跡实测图 75
第 28 图 第 9 号住居跡出土遺物实测・拓影图 32	第 62 图 第 26 号住居跡出土遺物实测图 76
第 29 图 第 10 号住居跡实测图 34	第 63 图 第 28 号住居跡实测图 77
第 30 图 第 10 号住居跡出土遺物实测图(1) 35	第 64 图 第 28 号住居跡出土遺物实测・拓影图 78
第 31 图 第 10 号住居跡出土遺物实测・拓影图(2) 36	第 65 图 第 29 号住居跡实测图 79
第 32 图 第 10 号住居跡出土遺物实测图(3) 37	
第 33 图 第 12 号住居跡・出土遺物实测拓影图 38	
第 34 图 第 14 号住居跡・出土遺物实测・拓影图 39	

第66图	第29号住居跡出土遺物実測・拓影图	80	第94图	土坑出土遺物実測・拓影图04	116
第67图	第30号住居跡実測图	82	第95图	第1~3号方形周溝墓実測图	132
第68图	第30号住居跡出土遺物実測・拓影图	83	第96图	第4~6号方形周溝墓実測图	135
第69图	第31号住居跡・出土遺物実測・拓影图	84	第97图	第1~6号方形周溝墓出土遺物実測图	136
第70图	第32号住居跡実測图	86	第98图	第1号塚実測图	138
第71图	第32号住居跡出土遺物実測・拓影图	86	第99图	第1号塚出土遺物実測・拓影图	138
第72图	第33号住居跡実測图	87	第100图	第1~6号溝実測图	139
第73图	第33号住居跡出土遺物実測拓影图	88	第101图	第1号井戸実測图	140
第74图	土坑実測图(1)	93	第102图	包含層実測图	142
第75图	土坑実測图(2)	94	第103图	包含層出土遺物実測・拓影图(1)	143
第76图	土坑実測图(3)	95	第104图	包含層出土遺物実測・拓影图(2)	144
第77图	土坑実測图(4)	96	第105图	遺構外出土遺物実測图(1)	154
第78图	土坑実測图(5)	97	第106图	遺構外出土遺物実測图(2)	155
第79图	土坑実測图(6)	98	第107图	遺構外出土遺物実測图(3)	156
第80图	土坑出土遺物実測・拓影图(1)	102	第108图	遺構外出土遺物実測图(4)	157
第81图	土坑出土遺物実測・拓影图(2)	103	第109图	遺構外出土遺物実測图(5)	158
第82图	土坑出土遺物実測・拓影图(3)	104	第110图	遺構外出土遺物実測图(6)	159
第83图	土坑出土遺物実測・拓影图(4)	105	第111图	遺構外出土遺物実測图(7)	160
第84图	土坑出土遺物実測・拓影图(5)	106	第112图	遺構外出土遺物実測图(8)	161
第85图	土坑出土遺物実測・拓影图(6)	107	第113图	遺構外出土遺物実測图(9)	162
第86图	土坑出土遺物実測・拓影图(7)	108	第114图	遺構外出土遺物実測图04	163
第87图	土坑出土遺物実測・拓影图(8)	109	第115图	遺構外出土遺物実測图01	164
第88图	土坑出土遺物実測・拓影图(9)	110	第116图	遺構外出土遺物実測图02	165
第89图	土坑出土遺物実測・拓影图04	111	第117图	遺構外出土遺物実測拓影图03	166
第90图	土坑出土遺物実測・拓影图01	112	第118图	遺構外出土遺物実測拓影图04	167
第91图	土坑出土遺物実測・拓影图02	113	第119图	遺構外出土遺物実測拓影图05	168
第92图	土坑出土遺物実測・拓影图03	114	第120图	遺構外出土遺物実測拓影图06	169
第93图	土坑出土遺物実測・拓影图04	115			

表 目 次

表1	周辺遺跡一覧表	5	表5	釈迦才仏遺跡住居跡一覧表	88
表2	大橋B遺跡住居跡一覧表	12	表6	釈迦才仏遺跡土坑一覧表	129
表3	大橋B遺跡土坑一覧表	13	表7	釈迦才仏遺跡溝一覧表	140
表4	大橋B遺跡溝一覧表	15			

写真図版目次

大橋B遺跡

PL 1 調査前風景、遺構確認状況、第1号住居跡遺物出土状況、第1号住居跡炉完掘、第2号住居跡完掘、第2号住居跡遺物出土状況、第1号溝土層セクション、第1号溝完掘

PL 2 第1・2号住居跡・第5号土坑・遺構外出土遺物

釈迦才伝遺跡

PL 3 調査前風景、第1号住居跡完掘、第2号住居跡・第3号土坑完掘、第3号住居跡遺物出土状況、第4・5号住居跡・第21・23-A・B・C号土坑完掘、第6号住居跡完掘、第6号住居跡遺物出土状況、第7号住居跡・第132号土坑完掘

PL 4 第8号住居跡完掘、第9号住居跡遺物出土状況、第10号住居跡完掘、第10号住居跡遺物出土状況、第6・9・10号住居跡完掘、第15-A・B・16号住居跡完掘、第15-A・B号住居跡遺物出土状況

PL 5 第15-A号住居跡遺物出土状況、第18号住居跡・第132・133・135号土坑完掘、第18号住居跡遺物出土状況、第19号住居跡・第124・126~131・134号土坑完掘、第19号住居跡遺物出土状況、第21号住居跡・第121~123・135号土坑完掘、第21号住居跡遺物出土状況、第21号住居跡遺物出土状況

PL 6 第23号住居跡・第75・81・119号土坑完掘、第24-A号住居跡完掘、第24-A号住居跡遺物出土状況、第24-A・B号住居跡遺物出土状況、第24-B号住居跡遺物出土状況、第25号住居跡・第163・164号土坑完掘、第25号住居跡遺物出土状況、第26号住居跡完掘

PL 7 第26号住居跡遺物出土状況、第28号住居跡・第77・109・115号土坑完掘、第28号住居跡遺

物出土状況、第28号住居跡遺物出土状況、第29号住居跡遺物出土状況、第30号住居跡完掘、第30号住居跡遺物出土状況

PL 8 第31号住居跡出入り口部完掘、第32号住居跡完掘、第33号住居跡・第111・112・116号土坑完掘、第15号土坑完掘、第29号土坑完掘、第38号土坑完掘、第47号土坑完掘、第48号土坑完掘

PL 9 第52号土坑完掘、第52号土坑遺物出土状況、第59号土坑完掘、第66号土坑遺物出土状況、第69号土坑完掘、第78号土坑完掘、第86号土坑完掘、第101号土坑完掘

PL 10 第105号土坑遺物出土状況、第111号土坑遺物出土状況、第112号土坑完掘、第112号土坑遺物出土状況、第114号土坑遺物出土状況、第124号土坑遺物出土状況、第1号方形周溝墓完掘、第161号土坑遺物出土状況

PL 11 第2号方形周溝墓完掘、第3号方形周溝墓完掘、第3号方形周溝墓遺物出土状況、第4号方形周溝墓遺物出土状況、第5号方形周溝墓遺物出土状況、井戸完掘、包含層遺物出土状況

PL 12 第1~3・6・7・9号住居跡出土遺物

PL 13 第9・10・14・15-A号住居跡出土遺物

PL 14 第15-A・B・16号住居跡出土遺物

PL 15 第18~21号住居跡出土遺物

PL 16 第21・24-A号住居跡出土遺物

PL 17 第24-B・25・26・28号住居跡出土遺物

PL 18 第29・30・32号住居跡出土遺物

PL 19 第3・7・17・29・47号土坑出土遺物

PL 20 第52・63・105・111・124号土坑出土遺物

PL 21 第140・149・155・161・165・174号土坑・第1~5号方形周溝墓出土遺物

PL 22 第6号方形周溝墓・塚・包含層出土遺物

PL 23 遺構外出土遺物

P L 24 遺構外出土遺物

P L 25 遺構外出土遺物

P L 26 土製品出土遺物

P L 27 土製品出土遺物

P L 28 土製品出土遺物

P L 29 土製品出土遺物

P L 30 土製品出土遺物

P L 31 石製品出土遺物

P L 32 石製品出土遺物

P L 33 石製品出土遺物

P L 34 石製品出土遺物

P L 35 石製品出土遺物

P L 36 石製品出土遺物

P L 37 石製品出土遺物，鉄製品出土遺物

P L 38 包含層・遺構外出土遺物

P L 39 遺構外出土遺物

P L 40 遺構外出土遺物



大橋日蓮跡・釈迦才仏遺跡全景

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経過

主要地方道つくば古河線は、つくば市と古河市を東西に結ぶという重要な役割を果たしてきた道路である。しかしながら、沿線地域の近年における目覚ましい発展は交通量の増加を招き、さらなる発展を目指していくには道路網の整備を図る必要性が生じていた。そうした中、茨城県は、総和町駅周辺地区に、主要地方道つくば古河線緊急地方道整備事業を計画した。

工事に先立ち、茨城県は、平成4年9月22日に茨城県教育委員会に対し、この予定地内である総和町駅周辺地区における埋蔵文化財包蔵地の有無について照会した。これを受け、茨城県教育委員会は、平成6年11月16日に現地踏査を実施し、平成7年2月8日に事業予定地内に大橋B遺跡及び釈迦才仏遺跡が存在することを茨城県あてに回答した。平成7年3月6日から、茨城県と茨城県教育委員会は、埋蔵文化財の取り扱いについて、文化財保護の立場から慎重な協議を重ねてきた。その結果、茨城県教育委員会は、平成7年3月9日、大橋B遺跡及び釈迦才仏遺跡については、現状保存することが困難であると判断し、記録保存とする旨を茨城県に回答し、調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

茨城県教育財団は、平成7年9月18日、茨城県と埋蔵文化財発掘調査に関する業務委託契約を結び、同年10月から大橋B遺跡及び釈迦才仏遺跡の発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査経過

大橋B遺跡及び釈迦才仏遺跡の調査は、平成7年10月1日から平成8年3月31日までの6か月にわたり実施した。以下、調査経過の概要を月ごとに記述する。

10月 2日から事前準備を開始し、続いて器材の搬入など発掘調査のための諸準備を行った。9日から調査区内の清掃をし、17日には関係者列席のもとに納入式を挙行了。

18日からは調査区の手掘りによる試掘調査を開始し、遺構及び遺物の存在を確認した。

11月 6日からは重機による表土除去とともに、遺構確認作業を開始した。13日には、大橋B遺跡の表土除去及び遺構確認作業が終了し、堅穴住居跡2軒、土坑5基、溝4条を検出した。14日からは堅穴住居跡を中心とした遺構調査を開始し、それと並行して釈迦才仏遺跡の表土除去及び遺構確認作業を行った。

表土除去は24日に終え、遺構確認作業も28日には終了した。28・29日には方眼杭打ち測量を実施し、29日からは堅穴住居跡を中心とした遺構調査を開始した。

12月 大橋B遺跡の調査は、8日に終了し完掘全景の写真撮影を行った。

11日からは、釈迦才仏遺跡の調査を開始した。

1月 5日から引き続き、堅穴住居跡及び土坑を中心とした遺構調査を実施した。

22日から、堅穴住居跡と並行して溝の調査を行った。掘り込みが深くかなりの時間を費やした。

2月 堅穴住居跡と並行して土坑及び溝の調査を行った。第15、16号住居跡、第18、19、21号住居跡は、重複しており多くの遺物が出土した。

16日に降雪、17日は1日中除雪に追われた。22日には掘り込みは、溝2条を残し終了した。

3月 遺構調査を概ね終えたのに伴い、5日に委託者に対する報告会を実施した。7日に、埋蔵文化財の啓蒙普及のための報道公開を実施した。調査区内を清掃して、9日には現地説明会を開催し、多数の見学者が来訪し、調査の成果を発表した。12日には完掘全景の航空写真撮影を実施した。以後、補足調査及び安全対策を行いながら、これまでに作成した図面類の点検、修正、遺物の洗浄及び注記を行い、19日にはすべて調査を終了し、22日には安全対策を含めた撤収作業も完了した。

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

総和町は、茨城県の南西部に位置しており、東部で三和町、西部で古河市、南部で境町及び利根川を隔てて五霞村、北部は栃木県下都賀郡野木町に隣接している。面積は53.34㎢で、人口は47,128人(1997年7月1日現在)である。かつては純農村地帯であったが、現在は大企業が進出して工業化が進んでいる。また、東京から約60kmということもあって、人口も増え首都圏のベッドタウンとしても発展している。農業は、首都圏向けの近郊農業が盛んである。鉄道はないが、町の東部を国道新4号バイパスが南北に、町の北部を国道125号線が東西に走り交通の便がよい。

地形は、なだらかな猿島台地が町域の大部分を占め、南部は利根川に沿った沖積地となっている。猿島台地は、利根川と飯沼川に挟まれた北西から南東方向へ広がる台地で、関東構造盆地の中心部に近い古河市で標高15~16m程で、北部に向かってしだいに高くなり平均20m程である。

利根川は、関東平野を貫流し、太平洋に注いでいるが、古くは東京湾へ流れ込みたびたび氾濫をくり返していた。そのため、人工的に何度か流路が変えられ、沿岸に低湿な沖積地と多くの湖沼が形成された。利根川左岸の沖積地に存在した大山沼・釈迦沼・水海沼・長井戸沼・一ノ谷沼・鶴戸沼などは、利根川の氾濫により流路が変わり形成されたものである。調査前の現況は、雑木林である。

参考文献

- ・茨城県 『茨城県史 市町村編Ⅱ』 1975年3月
- ・蜂須 紀夫 『茨城県 地学のガイド』 1991年7月
- ・大森 昌南、蜂須 紀夫 『茨城の地質をめぐって』 1987年8月

第2節 歴史的環境

大橋B遺跡・釈迦仏道遺跡の所在する総和町は、かつては低湿地や湖沼が多く生産活動の妨げとなっていた。しかし、現在は、護岸工事や干拓などにより、水田が広がり、台地は野菜の生産地、工業団地と活用されている。このように人々が営々と築いてきた生活の跡は、原始・古代から認めることができる。

ここでは、『茨城県遺跡地図』、『総和町埋蔵文化財包蔵地—基本調査報告書』の中で報告されている当該遺跡周辺の主な遺跡について、時代別に概観することにした。

旧石器時代の遺跡は、まだ調査されていないが、上大野地区の古内遺跡、稲宮地区の行屋西遺跡をはじめとして葛生・釈迦・下辺見地区などでナイフ形石器、尖頭器などの遺物が採集されている。

縄文時代の遺跡は、鷹根山遺跡(4)、羽黒遺跡(14)、磯ノ井遺跡(17)、香取東遺跡(21)等がある。駒羽根遺跡では早~晩期の遺物が検出され、前期黒浜期の住居跡が検出されている。隣接する大橋A遺跡(23)では前・中・後期の遺物が検出されている。久能西原遺跡(27)では、前期の住居跡が検出されている。思案橋遺跡(3)では、縄文時代後期掘之内式から晩期安行Ⅲ式の遺物が検出され、住居跡も調査されている。また、思案橋遺跡の対岸、大堤の新田義貝塚は、向堀川の谷津に接した台地の平坦部に所在する鹹水性の貝塚である。

弥生時代の遺跡は、渡海道遺跡(8)、笹山A遺跡(12)、浅間南遺跡(18)、表ノ前遺跡(28)等がある。久能西原遺跡からは中・後期の甕・壺の破片が出土しており、西のうせん山遺跡では整地の際、大形の住居跡が検出された。萩山A遺跡からは、櫛櫛文を有する後期の土器片が採集されている。

古墳時代になると遺跡の数が増加する傾向にあり、釜山遺跡(5)、下山遺跡(6)、天王南遺跡(7)、稲荷山遺跡(9)、新開遺跡(10)、大道西磯ノ井遺跡(11)、日下部遺跡(15)、大道北遺跡(16)、浅間南遺跡、勝願寺遺跡(20)、道丁遺跡(22)、新田遺跡(24)、向山遺跡(25)、向新田遺跡(26)、神明西遺跡(29)、三島前遺跡(30)、観音前遺跡(31)、新田山遺跡(32)等がある。向坪B遺跡では、勾玉、子持勾玉、白玉などの祭祀遺物が多量に出土している。長井戸沼に面する台地には向原古墳、横塚古墳、毘沙門塚古墳、べつたり塚古墳等の遺跡が多く存在している。向原古墳は、円墳3基からなり、2号墳からは直刀1振が出土しており、毘沙門塚古墳は、全長約60m、高さ7mの前方後円墳で、直刀や埴輪が出土している。

奈良・平安時代では、笹山A遺跡、笹山B遺跡(13)、勝願寺遺跡、神明西遺跡等がある。金糞B遺跡、弁才天B遺跡、萩山C遺跡では鉄滓が出土しており、古代製鉄が多く確認されている。

中世では、古河公方足利氏の支配下にあり、柳橋城跡、小堤城跡、水海城跡などの城館跡が知られている。

注

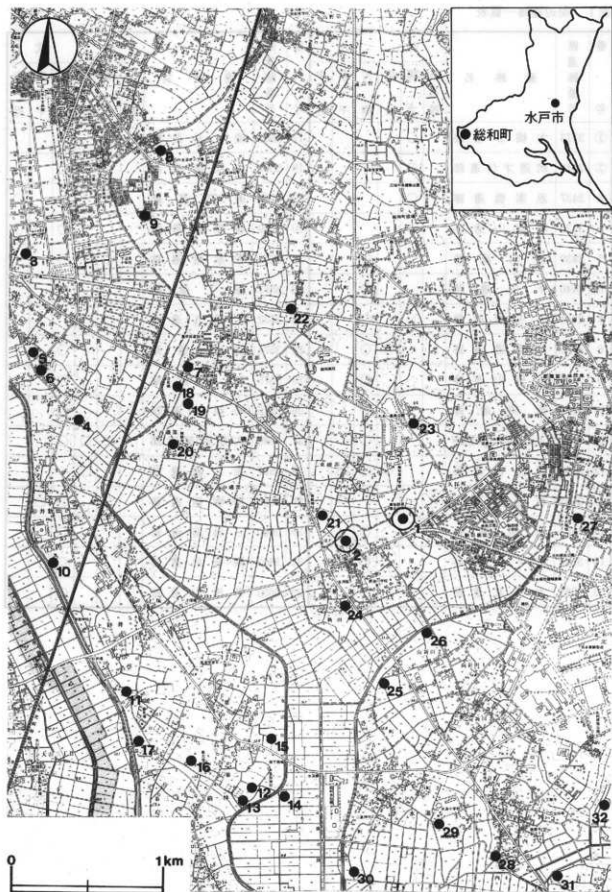
- (1)(2) 総和町教育委員会 『駒羽根遺跡・大橋A遺跡』 1991年3月
- (3) 総和町教育委員会 『久能西原遺跡』 1994年3月
- (4) 総和町教育委員会 『思案橋遺跡』 1987年6月
- (5) 総和町教育委員会 『そうわの文化財 1号』 1990年7月

参考文献

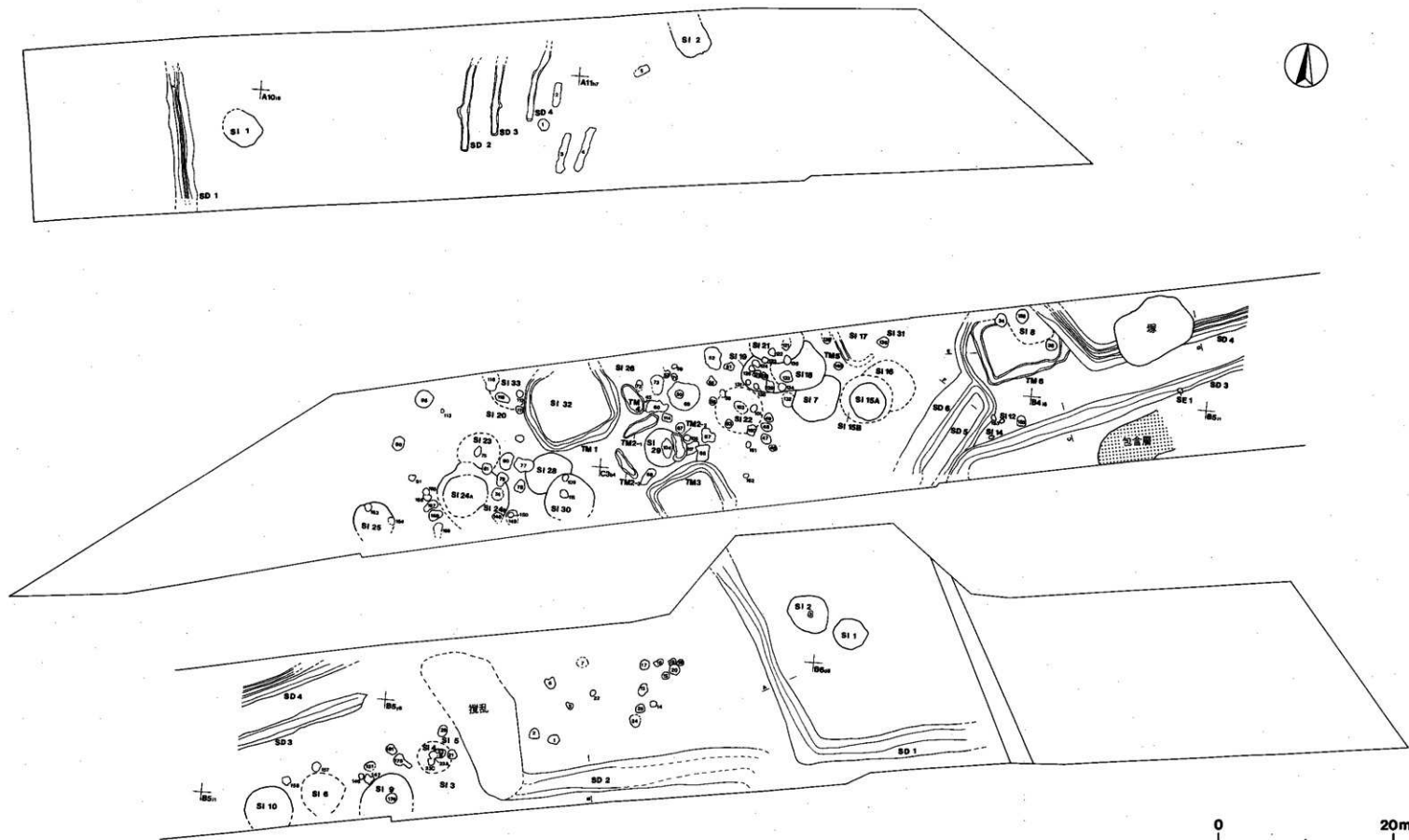
- ・ 茨城県 『茨城県史料考古資料編 先土器・縄文時代』 1979年3月
- ・ 茨城県教育委員会 『茨城県遺跡地図』 1990年3月
- ・ 総和町教育委員会 『総和町埋蔵文化財包蔵地基本調査報告書』 1977年
- ・ 総和町教育委員会 『そうわの文化財 2号』 1991年8月
- ・ 茨城県教育財団 『一般国道4号改築工事地内埋蔵文化財調査報告書1(総和地区)市坪A・B・C遺跡・高野遺跡・西坪A・B遺跡・向坪A・B遺跡・北新田A・B・C遺跡・渚原B遺跡』(茨城県教育財団文化財調査報告第38集) 1986年8月

表1 周辺遺跡一覧表

番 号	県 遺 跡 番 号	遺 跡 名	時 代					番 号	県 遺 跡 番 号	遺 跡 名	時 代				
			旧 石 器	縄 文	弥 生	古 墳	奈 ・ 平				中 近	旧 石 器	縄 文	弥 生	古 墳
①	3573	大橋 B 遺跡	○					17	3566	磯ノ井遺跡	○	○			
②	2445	釈迦才仏遺跡	○					18	3567	浅間南遺跡		○	○		
3	2437	思案橋遺跡	○					19	3568	磯部遺跡					○
4	2438	鷹根山遺跡	○					20	3569	勝願寺遺跡			○	○	○
5	2439	釜山遺跡			○			21	3570	香取東遺跡	○	○			
6	2440	下山遺跡			○			22	3571	道丁遺跡		○			
7	2444	天王南遺跡			○			23	3572	大橋 A 遺跡	○				
8	3535	渡海遺跡		○	○			24	3574	新田遺跡			○		
9	3536	稲荷山遺跡			○			25	3575	向山遺跡			○		
10	3559	新開遺跡			○			26	3576	向新田遺跡			○		
11	3560	大道西磯ノ井遺跡			○			27	3580	久能西原遺跡	○	○	○		
12	3561	釜山 A 遺跡		○	○	○		28	3597	表ノ前遺跡		○			
13	3562	釜山 B 遺跡				○		29	3599	神明西遺跡			○	○	
14	3563	羽黒遺跡	○		○			30	3600	三島前遺跡			○		
15	3564	日下部遺跡			○			31	3602	観音前遺跡			○		
16	3565	大遺北遺跡			○			32	3603	新田山遺跡			○		



第3図 周辺遺跡分布図



第4図 大橋B遺跡・釈迦才仏遺跡遺構全体図

第3章 大橋 B 遺跡

新編 大橋 B

第1節 遺跡の概要

大橋 B 遺跡は、総和町役場から南に直線で 2 km 程の釈迦地区に所在している。また、女沼川が流れている旧釈迦沼に、東から舌状に張り出した標高約 12 m の台地上に位置している。調査面積は 2,246 m² で、現況は雑草が密生した雑木林であった。当遺跡は、縄文時代及び近世の複合遺跡で、遺跡の中心となる時期は縄文時代である。

今回の調査では、縄文時代前期の竪穴住居跡 2 軒、近世の土坑 1 基、時期不明の土坑 4 基及び溝 4 条を検出した。

遺物は、縄文土器（深鉢片）を中心に遺物収納箱（60×40×20 cm）に 2 箱出土した。近世の土坑からは、土師質土器（ほうろく）が出土している。

第2節 基本層序

調査区内にテストピットを掘り、基本土層の観察を行った。（第 5 図）

第 1 層は、20~40 cm の厚さで、明るい褐色ハードロームブロック主体の層から暗褐色ハードロームブロックが主体となる層への漸移層である。

第 2 層は、20~30 cm の厚さで、暗褐色ハードローム主体の層である。ロームブロック中には、微量の赤褐色粒子や炭化粒子を含む。

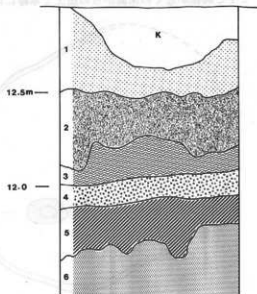
第 3 層は、16~20 cm の厚さで、明るい褐色ローム層でやや粘性があり粒子が細かい層である。

第 4 層は、20 cm 前後の厚さで、褐色の明るい粘性のあるハードローム層である。

第 5 層は、20~26 cm の厚さで、褐色の明るい粘性のあるハードローム層で、暗い褐色のブロックを少し含み 4 層より暗い褐色の層である。

第 6 層は、20~30 cm の厚さで、褐色の明るい粘性のあるハードローム層で、暗い褐色のブロックを多量に含み、下層に粘土層がある。

大橋 B 遺跡の遺構は、第 1 層中面で確認されている。



第 5 図 基本土層図

第3節 遺構と遺物 日 録 大 章 2 稿

1 竪穴住居跡

今回の調査では、縄文時代前期の竪穴住居跡2軒を検出した。以下、検出した遺構と遺物について記載する。

第1号住居跡（第6図）

位置 調査区の西部、A10j区。
規模と平面形 ローム層への掘り込みがほとんどなく、壁の立ち上がり及び床の広がりを確認することができなかった。よって、規模及び平面形は不明である。

長径方向 不明

床 やや起伏があり、炉周辺を中心として、部分的に踏み固められた面が見られる。

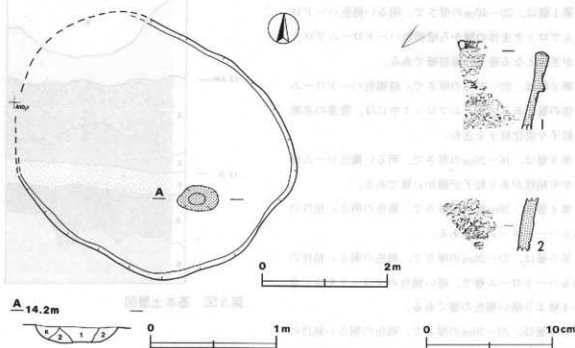
炉 平面形は長径66cm、短径40cmの楕円形で、床面を12cm掘り窪めた地床炉である。炉床面は、火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説

1 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子少量

2 褐色 ローム小ブロック・焼土大ブロック多量

遺物 縄文土器及び縄文土器片が、炉及びその周辺から20点ほど出土している。ほとんどの土器片は黒浜式期に属するものである。第6図1は、浅鉢形土器の口縁部片で炉近くの床面から、2は、深鉢形土器の胴部片で1と同様炉近くの床面からの出土で本跡に伴うものと思われる。



第6図 第1号住居跡・出土遺物実測拓影図

第6図1・2は縄文土器の拓影図である。1は口縁部片で、口唇部は棒状工具による押圧がなされ、口縁部に一条の隆帯がめぐるとと思われる。隆帯上部に一列、隆帯下部に二列の半截竹管による刺突文が巡る。下部に単節Rに横位に施文しており、黒浜式併行と思われる。2は無節の縄文が施文されている。

所見 本跡は、壁の立ち上がり及び床の広がりを確認することができなかったが、炉1基を検出したことよって、竪穴住居跡であると判断した。時期は、出土遺物から縄文時代前期（黒浜式期）と考えられる。

第2号住居跡（第7図）

縄文-弥生前期後部石器時代 5 号

位置 調査区の東部，A11f区。

規模と平面形 長径3.88m，短径(3.59m)の楕円形である。

長径方向 [N-64°-E]

壁 壁高は8～12cmで，外傾ぎみに立ち上がる。

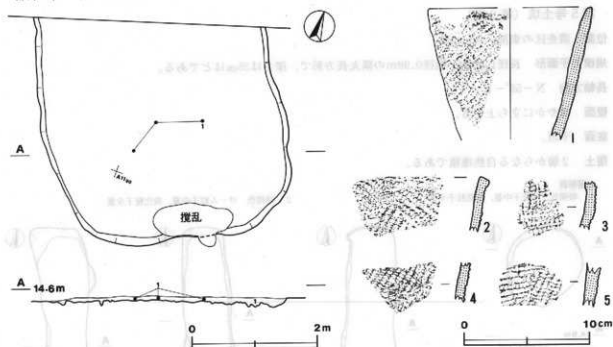
床 やや凹凸があり，全体的に締まりがない。

覆土 1層からなる自然堆積である。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量，炭化粒子・焼土粒子微量

遺物 縄文土器及び縄文土器片が，覆土中から床面にかけて37点ほど出土している。土器は，全体的に散在して出土している。第7図1は，深鉢形土器の口縁部から胴部上半にかけての破片，2～5は深鉢形土器の胴部片で，いずれも床面から出土している。1～5は，すべて本跡に伴うものと思われる。



第7図 第2号住居跡出土遺物実測・拓影図

第2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第7図	深鉢形土器	A (13.0)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部から口縁部にかけてゆるやかに外傾して立ち上がる。器面全体に縄文(単筋LRの横回転)を地文とし，半截竹管による横位と斜位の沈線が施されている。	長石・スコリア にぶい黄褐色 繊維少量 普通	P1 10% 中央部床面 (黒炭)
1	縄文土器	B (10.6)			

第7図2～5は縄文土器の拓影図である。2は口縁部片で，口唇部直下からRLの単筋斜縄文を横位に施文し，一部縦回転し羽状構成をしている。3～5は胴部片で，3はLRの単条斜縄文を施文し，羽状構成をしている。4はLRの単筋斜縄文が施文され，5は単筋RLが斜位，LRが横位に施文されている。

所見 本跡は，炉及びピットは確認できなかったが，平面形及び出土遺物より，縄文時代前期(黒浜式期)の住居跡と考えられる。

表2 大橋B遺跡住居跡一覧表

住居跡	位置	長径方向	平面形	規模(m) (長径×短径)	壁高 (cm)	床面	主柱穴	ピット	竈	覆土	出土遺物	備考
1	A10j	不明	不明	不明	不明	凹凸			1		縄文土器	縄文時代前期(縄文式期)
2	A11f	[N-64°-E]	[楕円形]	3.88×(3.59)	8~12	凹凸				自然	縄文土器	縄文時代前期(縄文式期)

2 土坑

当遺跡からは、近世の土坑1基、時期不明土坑4基の計5基の土坑が検出されている。近世の土坑を除き、それぞれの土坑からの遺物はなく、時期や性格については不明である。近世の土坑について、ここに解説を加え、その他については一覧表に記載した。

第5号土坑 (第8図)

位置 調査区の東部, A11g区。

規模と平面形 長径1.90m, 短径0.98mの隅丸長方形で、深さは35cmほどである。

長軸方向 N-59°-E

壁面 緩やかに立ち上がる。

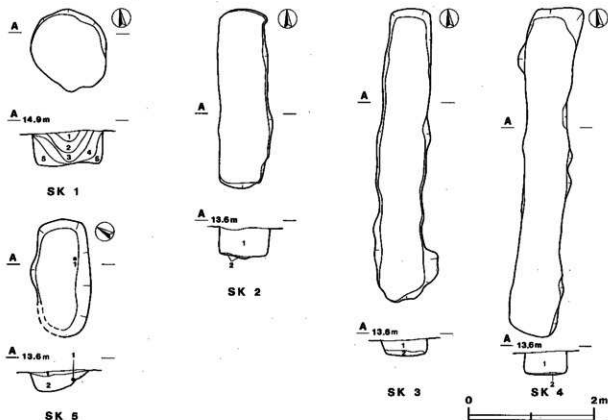
底面 平坦。

覆土 2層からなる自然堆積である。

土層解説

1 暗褐色 灰粒子中量, 炭化粒子少量

2 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子少量



第8図 第1～5号土坑実測図

遺物 本跡からは、縄文土器片12点、ほうろく片1点、漆碗片1点が出土している。縄文土器片及び漆碗片は、いずれも覆土上層から出土している。第9図1のほうろくは、底部から口縁部にかけての破片で、中央部の覆土下層からの出土で本跡に伴うものと思われる。漆碗片は、遺存状態が悪い。2は縄文土器の胴部片、3は底部から胴部下半にかけての破片で覆土上層から出土しており、いずれも流れ込みと考えられる。

所見 本跡は、性格は不明であるが、出土遺物から近世後半（18世紀）の土坑と思われる。

第1号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック中量
- 2 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック少量
- 4 褐色 ローム粒子少量、ローム大・中・小ブロック少量
- 5 褐色 ローム大・中ブロック中量

第3号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック多量
- 2 黒褐色 ローム中・小ブロック少量

第4号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック多量
- 2 黒褐色 ローム中・小ブロック少量

第2号土坑土層解説

- 1 暗褐色 ローム中・小ブロック多量、黒褐色土少量
- 2 黒褐色 ローム中・小ブロック少量



第9図 第5号土坑出土遺物実測・拓影図

第5号土坑出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第9図1	ほうろく 土師質土器	A(34.6) B 5.0 C(29.0)	底部から口縁部にかけての破片。平底で、体部は僅かに内彎して立ち上がる。	内・外面横ナデ。	砂粒・石英・雲母にふい褐色 普通	P2 10% 中央部覆土下層 近世後半

第9図2・3は縄文土器の拓影図である。2は胴部片で、単節の横回転により羽状構成をしている。3は底部下端まで縄文が施され、底部は上げ底でミガキが施されている。

表3 大橋B遺跡土坑一覧表

土坑番号	位置	長径(軸)方向	平面形	長径×短径(m)	深さ(cm)	壁面	底面	覆土時期	出土遺物	備考
1	A11j	N-50°-W	楕円形	1.34×1.15	55	垂直	平坦	自然不明	無	
2	A11he	N-4°-E	隅丸長方形	2.89×0.76	50	垂直	平坦	人為不明	無	
3	A11j	N-10°-E	隅丸長方形	4.70×0.77	26	垂直	平坦	自然不明	無	
4	A11j	N-16°-E	隅丸長方形	5.28×0.70	38	垂直	平坦	自然不明	無	
5	A11ga	N-59°-E	隅丸長方形	1.90×0.98	35	緩斜	平坦	自然	土師質土器、縄文土器、漆碗片	

3 溝

当遺跡からは、4条の溝が検出されている。いずれの溝も出土遺物がなく、時期、性格とも不明である。こ

ここでは、形状に特徴が見られる第1号溝についてのみ解説を加え、その他については一覧表に記載した。

第1号溝 (第10図)

位置 調査区の西部, A10j区。

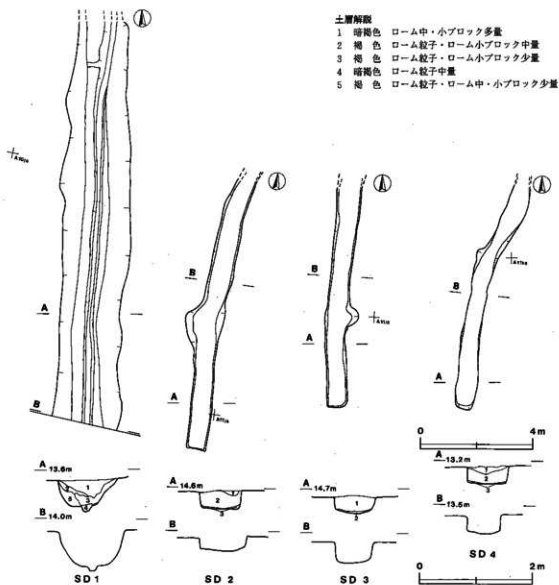
規模と形状 上幅1.8~2.5m, 下幅0.7~1.0m, 深さ1.45mで, 全長(14.4)mである。両端は、さらに調査区域外へと延びている。断面形は、「U」字状を呈している。

方向 N-4°-E。

覆土 5層からなる自然堆積である。

遺物 出土していない。

所見 本跡は、エリア内をほぼ南北に掘り込まれており、その形状から地境に伴う区画溝と思われる。時期については、出土遺物もなく不明である。



第10図第1~4号溝実測図

第2号遺土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム大・中ブロック中量
- 3 黒褐色 非常にしまりのある黒褐色土の腐植土多量

第4号遺土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム大・中・小ブロック少量
- 2 褐色 ローム大・中・小ブロック多量
- 3 黒褐色 非常にしまりのある黒褐色土多量

第3号遺土層解説

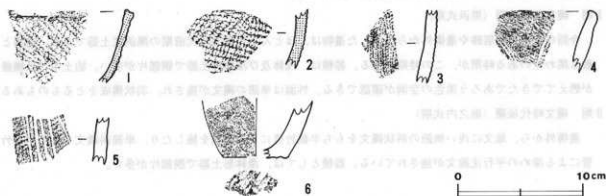
- 1 暗褐色 ローム中・小ブロック多量
- 2 黒褐色 やややわらかい黒褐色土の腐植土多量

表4 大橋B遺跡溝一覧表

溝番号	位置	主軸方向	断面形状	規 模				壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考
				長さ (m)	上 幅 (m)	下 幅 (m)	最深 (m)					
1	A10j1	N-4°-E	U字状	直線状 (14.4)	1.8-2.5	0.7-1.0	1.45	垂直	平坦	自然	無	
2	A11j1	N-3°-E	皿状	直線状	9.90	0.7-1.3	0.6-0.8	0.32	垂直	平坦	自然	無
3	A11h4	N-2°-E	皿状	直線状	7.89	0.7-1.2	0.6-0.9	0.34	垂直	平坦	自然	無
4	A11h1	N-11°-E	皿状	直線状	8.64	0.5-0.8	0.3-0.7	0.27	傾斜	平坦	自然	無

4 遺構外出土遺物

今回の調査では、表土、確認面から、遺構に伴わない遺物が出土している。ここでは、特徴的な遺物の拓影図を掲載した。(第11図)



第11図 遺構外出土遺物実測拓影図

1・2は、胎土に機織を含む縄文時代前期の黒浜式土器である。1は口縁部片で、外削状を呈し口唇部直下からRLの単節斜縄文を横位に施し、その下部に縦位に施し羽状構成をしている。2は胴部片で、1と同様同一原体による縦横施文により羽状構成をしている。3は胴部片で、地文に捺糸文をもち竹管による刺突文が施されている諸磯a式段階の縄文土器と思われる。4～6は、縄文時代後期の堀之内1式期の土器片である。4は口縁部片で、地文に浅い無節の斜状縄文をもち、半截竹管による沈線が施されている。5は胴部片で、地文に単節斜縄文をもち半截竹管による深めの平行沈線文が施されている。6は底部から胴部下半にかけての破片で、下端はいいねいに磨かれ底部に網代痕を有する。

第4節 まとめ

大橋B遺跡からは、縄文時代の堅穴住居跡2軒、近世の土坑1基、時期不明の土坑4基及び溝4条が検出された。出土遺物は、ほとんどが縄文土器片である。ここでは、住居跡と土器について時期ごとにまとめてみた。

1 住居跡について

当遺跡の住居跡は、現況が篠の密生した雑木林で、根による攪乱が激しかったため、遺構・遺物ともに遺存状態が悪く、住居跡の調査としては十分な資料を得られなかった。

今回の調査では、住居跡2軒が検出された。両住居跡とも縄文時代前期に比定される黒浜式期のものである。第1号住居跡では地床炉が確認されているが、柱穴は確認されていない。隣接する駒羽根遺跡では、同時期の住居跡が1軒検出されている。この住居跡は、7か所の柱穴をもち、南部に地床炉1基が確認されている。

また、住居跡は検出されていないが、大橋A遺跡でも黒浜式期の土器片が多く出土している。このことから、この台地上は、縄文時代前期に人間の生活の場であり居住地としての機能をもった地域であったことが推察できる。

2 遺物について

当遺跡から出土した縄文土器は、概ね2期に推察できる。

I期 縄文時代前期（黒浜式期）

今回の調査で住居跡や遺構外から出土した遺物は、ほとんどが縄文時代前期の黒浜式土器である。遺構と最も関わりのある時期が、この時期である。器種は、浅鉢及び深鉢形土器で胴部片が多い。胎土中には繊維が燃えてきたであろう黒色の空洞が確認できる。外面は単節の縄文が施され、羽状構成をとるものもある。

II期 縄文時代後期（堀之内式期）

遺構外から、地文に浅い無節の斜状縄文をもち半截竹管により文様を施したり、単節斜縄文をもち半截竹管による深めの平行沈線文が施されている。器種としては、深鉢形土器で胴部片が多い。

第4章 釈迦才仏遺跡

—縄文遺跡—

第1節 遺跡の概要

釈迦才仏遺跡は、大橋B遺跡の西側に隣接しており、同一台地上に所在している。調査面積は5,237㎡で、現況は藪が密生した雑木林と畑であった。台地の平坦部からは、縄文土器片及び土師器片などが採集でき縄文時代及び古墳時代の複合遺跡で、遺跡の中心となる時期は縄文時代である。

今回の調査では、縄文時代中期から晩期にかけての堅穴住居跡32軒、土坑34基、古墳時代前期の方形周溝墓6基、近世の塚1基、時期不明土坑78基及び溝6条を検出した。

遺物は、遺物収納箱(60×40×20cm)に155箱出土した。

縄文時代の遺物としては、縄文土器(深鉢、浅鉢、注口土器、異形台付土器、ミニチュア土器及びその破片等)、土製品(耳飾り、土版、土偶、土面、土鍾、円板等)、石器(石皿、磨石、石鍾、石鏃、石匙、石錐、磨製石斧、打製石斧等)、石製品(石棒、石剣、独站石、勾玉、丸玉、小玉、浮子等)が出土している。古墳時代の遺物としては、土師器(高坏、壺)が出土している。

第2節 基本層序

調査区内(B6d区)にテストピットを掘り基本土層の観察を行った。(第12図)

第1層は、上面がかなり削平されており6cm前後の厚さで、褐色のソフトローム層でしまりがある。

第2層は、14~20cmの厚さで、褐色をしたハードローム層でしまりがある。

第3層は、10~24cmの厚さで、暗褐色で炭化粒子、赤色スコリアを微量に含むブラックバンド層でしまりがある。

第4層は、16~32cmの厚さで、明褐色で炭化粒子を微量に含むソフトローム層で粘性としまりがある。

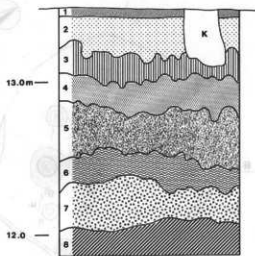
第5層は、24~50cmの厚さで、褐色で白色細粒子を少量含むハードローム層でしまりがある。

第6層は、10~24cmの厚さで、褐色で炭化粒子を少量含みしまりがあり、やや粘土化したハードローム層である。

第7層は、20~36cmの厚さで、にぶい褐色で炭化粒子、赤色スコリアを少量含みしまりがあり、粘性の強い粘土層である。

第8層は、10~20cmの厚さで、にぶい褐色で炭化粒子、赤色スコリアを微量に含みしまりがあり、粘性の強い粘土層である。

釈迦才仏遺跡の遺構は、第2層上面で確認されている。



第12図 基本土層図

第3節 遺物と遺構

1 竪穴住居跡

今回の調査では、竪穴住居跡32軒を検出した。以下、検出した遺構と遺物について記載する。

第1号住居跡 (第13図)

位置 調査区の東部、B6bs区。

規模と平面形 長径[4.28]m、短径[3.70]mの[楕円形]である。

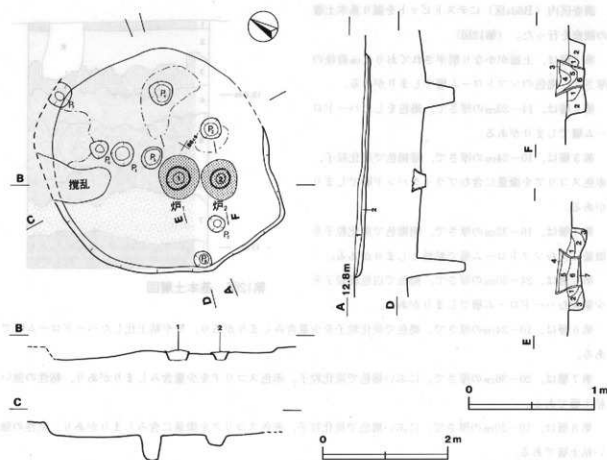
長径方向 N-75°-W

壁 壁高は6~20cmで、外傾ぎみに立ち上がる。東部は、削平されており壁の立ち上がりをとらえることができなかった。

床 平坦である。P₂の周りが踏み固められていて固い。

ピット 8か所 (P₁~P₈)。P₁~P₈は長径28~40cm、短径25~36cmの円形で、深さ22~46cm。ばらつきがあるが、規模及び配列から主柱穴と思われる。P₁、P₈は性格不明である。

炉 2か所。炉1と炉2は近接している。炉1は本跡の南側に寄って付設されている。長径40cm、短径36cmの楕円形で、深鉢形土器を埋め込んだ土器埋設炉である。炉床はそれほど焼けてなく、赤変硬化した部分も見られない。炉2は南壁寄りに付設されている。直径36cmの円形で、中央部に深鉢形土器を埋め込んだ土器埋設炉である。炉1と同様に炉床はそれほど焼けてなく、硬い部分も見られない。



第13図 第1号住居跡実測図

炉1 土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------------|-------|--------------------|
| 1 暗褐色 | 炭化小ブロック中量、焼土粒子微量、ローム粒子微量 | 5 黒褐色 | 炭化物・焼土粒子少量、ローム粒子微量 |
| 2 褐色 | 炭化粒子少量、焼土粒子微量 | 6 褐色 | 炭化物少量、焼土粒子・ローム粒子微量 |
| 3 暗褐色 | 炭化粒子・焼土粒子微量 | 7 褐色 | ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子微量 | | |

炉2 土層解説

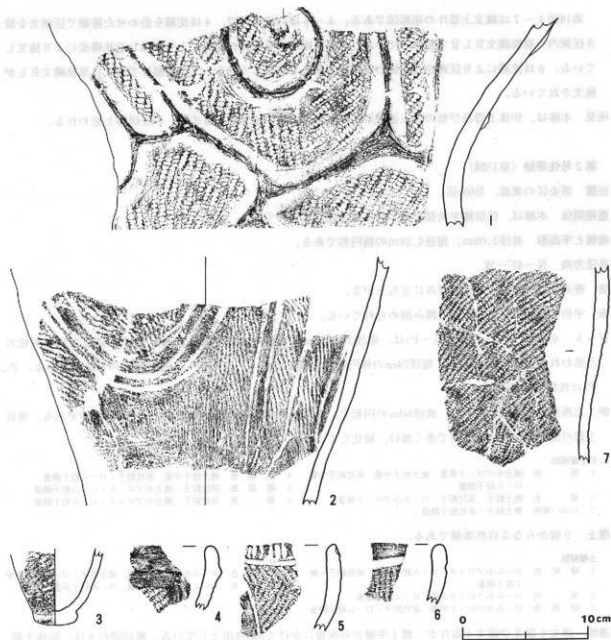
- | | | | |
|-------|------------------------------|-------|--------------------|
| 1 暗褐色 | 炭化物・焼土小ブロック中量、焼土粒子少量、ローム粒子微量 | 4 黒褐色 | 焼土粒子少量、炭化物・ローム粒子微量 |
| 2 褐色 | 炭化粒子・焼土粒子微量 | 5 暗褐色 | 焼土粒子少量、炭化物・ローム粒子微量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子少量、炭化物・焼土粒子微量 | 6 褐色 | 焼土粒子少量 |

覆土 2層からなる自然堆積である。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------------|------|-----------------------|
| 1 黒褐色 | 炭化粒子少量、炭化物・ローム小ブロック・ローム粒子微量 | 2 褐色 | 炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量 |
|-------|-----------------------------|------|-----------------------|

遺物 縄文土器及び縄文土器片が、覆土中及び炉内から132点出土している。土器は、全体的に散在して出土



第14図 第1号住居跡出土遺物実測・拓影図

している。第14図の1, 2は炉体土器で、炉内から出土している。3はミニチュア土器の底部から胴部にかけての破片で覆土中から、4-6は口縁部片、7は胴部片で東部覆土下層から出土している。

第1号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第14図 1	深鉢形土器 縄文土器	B(16.6)	口縁部及び胴部下半を欠損する。胴部は外傾して立ち上がり、沈線、隆線により区画されている。区画内は、縦位の単節縄文R.L.で施文している。	長石・パミス にぶい褐色 普通	P1 30% 炉内 (加曾利EⅢ)
2	深鉢形土器 縄文土器	B(19.7)	口縁部及び胴部下半を欠損する。胴部は、外傾してゆるやかに立ち上がる。胴部は無節縄文Lで施文している。胴部下端は、帯状工具により施文している。	長石・石英・パミス 黄褐色 普通	P2 20% 炉内 (加曾利EⅢ)
3	ミニチュア土器 縄文土器	B(6.2) C(3.6)	底部から胴部下にかけての破片。丸底で、胴部は外傾して立ち上がる。僅かに縄文が施されている。	長石・スコリア 褐色	P3 45% 覆土中

第14図4-7は縄文土器片の拓影図である。4-6は口縁部片で、4は沈線を沿わせた隆線で区画文を描き区画内を複節縄文R.L.Rで施文している。5は口縁部下を横位の沈線により区画し羽状構成により施文している。6は沈線により区画され斜位の単節縄文R.L.を施文している。7は胴部片で地文に単節縄文R.L.が施文されている。

所見 本跡は、炉体土器及び他の出土遺物から縄文時代中期(加曾利EⅢ式期)の住居跡と思われる。

第2号住居跡(第15図)

位置 調査区の東部、B6b7区。

重複関係 本跡は、住居跡中央部を第3号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形 長径5.09m, 短径4.24mの楕円形である。

長径方向 N-47°-W

壁 壁高は12-16cmで、外傾ぎみに立ち上がる。

床 平坦である。北東部が固く踏み固められている。

ピット 6か所(P₁-P₆)。P₁-P₃は、直径20-32cmの円形で、深さ20-30cm。規模及び配列から主柱穴と思われる。P₄は長径34cm, 短径24cmの楕円形で、深さ10cm。P₁に近接し、補助柱穴の可能性がある。P₅, P₆は性格不明である。

炉 北西部に付設されている。直径60cmの円形で、中央部に深鉢形土器を埋め込んだ土器埋設炉である。埋設土器の周囲は、炉床が火熱で赤く焼け、硬化している。

炉土層解説

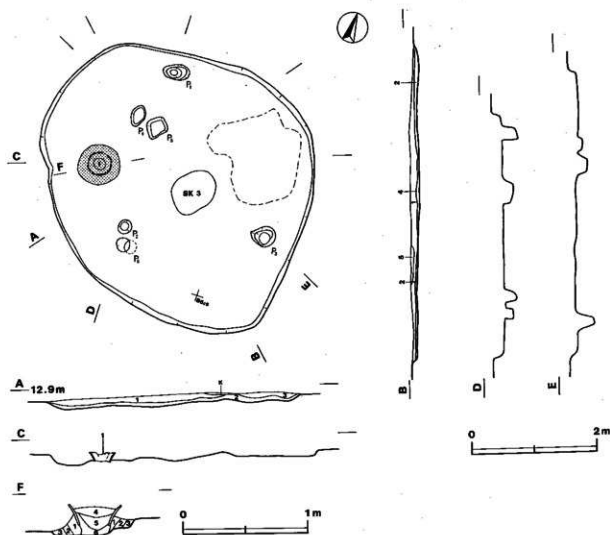
- | | |
|--|----------------------------|
| 1 褐色 焼土小ブロック多量、焼土粒子中量、炭化粒子少量、
ローム粒子微量 | 4 黒褐色 焼土粒子少量、炭化粒子・ローム粒子微量 |
| 2 褐色 焼土粒子・炭化粒子・ローム小ブロック微量 | 5 暗褐色 炭化粒子・焼土小ブロック・ローム粒子微量 |
| 3 にぶい褐色 焼土粒子・炭化粒子微量 | 6 褐色 炭化粒子・焼土小ブロック・ローム粒子微量 |

覆土 5層からなる自然堆積である。

土層解説

- | | |
|------------------------------------|-------------------------------|
| 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子・焼土粒子微量 | 4 暗褐色 ローム小ブロック少量、焼土粒子・ローム粒子少量 |
| 2 褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子微量 | 5 褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子少量 |
| 3 暗褐色 ローム小ブロック少量、炭化粒子・ローム粒子微量 | |

遺物 縄文土器及び縄文土器片が、覆土中層から床面にかけて393点出土している。第16図の1は、炉体土器で、炉内から出土している。2・3は深鉢形土器の口縁部片、4は胴部片、5の石礫はいずれも覆土中から出土している。



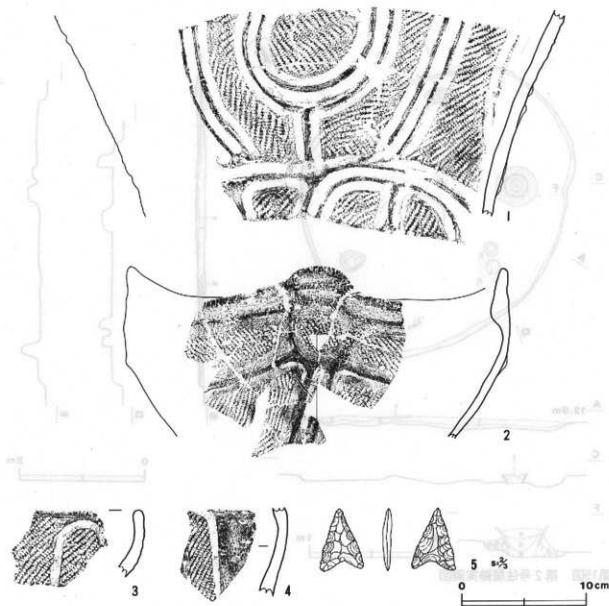
第15図 第2号住居跡実測図

第2号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(m)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第16回 1	深鉢形土器 縄文土器	B(16.7)	口縁部及び胴部下半を欠損する。胴部は外傾して立ち上がり、地文にRLの単節縄文を施文し、胴隆帯によって文様を構成している。	長石・雲母・バミス 赤褐色 普通	P 4 30% 炉内 (加納利三郎)
2	深鉢形土器 縄文土器	A(29.9) B(13.6)	口縁部片。胴部はやや外傾して立ち上がり、内傾しながら口縁部に至る。4単位の波状口縁で波頂部に小突起を有する。縦位の単節縄文RLが充填され、微隆起線により文様を構成している。	長石・スコリア にぶい黄色 普通	P 5 10% 覆土中 (加納利三郎)

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(mm)	重量(g)		
第16回5	石 鏃	2.6	1.7	0.4	1.0	チャート	Q1 凹基無茎 覆土中

第16図3・4は縄文土器片の拓影図である。3は口縁部片で、単節縄文RLの地文に沈線で「 \cap 」状のモチーフが描かれている。4は胴部片で、単節縄文RLの地文に沈線により区画がなされ、区画間は磨り消してある。



第16図 第2号住居跡出土遺物実測・拓影図

所見 本跡は、炉体土器及び他の出土遺物から縄文時代中期（加曾利EⅢ式期）の住居跡と思われる。

第3号住居跡（第17図）

位置 調査区の東部，B5gr区。

重複関係 本跡は、北側部分を第4号住居跡に掘り込まれている。

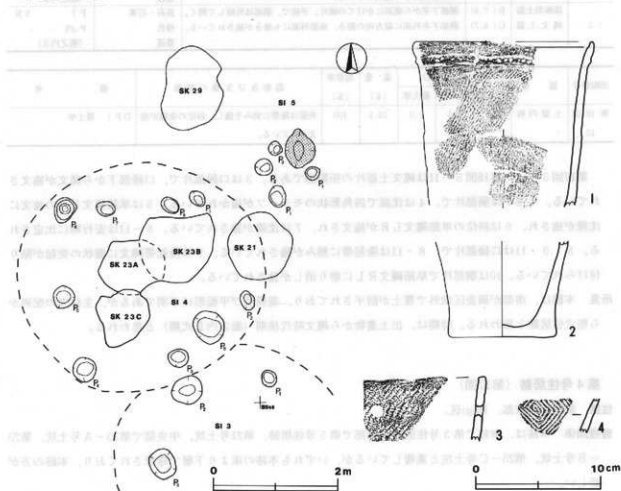
規模と平面形 覆土が削平されているため、壁の立ち上がりをとらえることができなかった。南部は調査区域外となっており、規模及び平面形は不明である。

長径方向 不明。

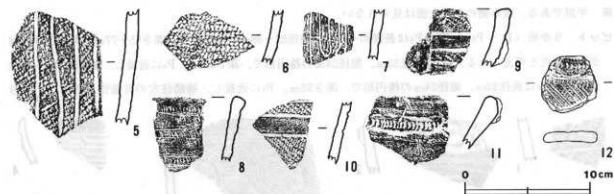
床 平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット 3か所（P₁～P₃）。P₁～P₃は長径28～48cm，短径24～42cmの楕円形で、深さ30～40cm。規模及び配列から主柱穴と考えられる。

遺物 縄文土器及び縄文土器片が、細片であるが住居跡全域の床面から513点出土している。第17図の1は、深鉢形土器の口縁部片でP₂の覆土下層から出土している。2は、深鉢形土器の底部から胴部にかけての破片でP₂の覆土下層から出土している。3は口縁部片、4～7は胴部片で覆土中から、8～11は覆土中から出土しており流れこみと考えられる。12は土製円板で覆土中から出土している。



第17図 第3～5号住居跡・出土遺物実測・拓影図



第18図 第3号住居跡出土遺物実測・拓影図

第3号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第17図 1	深鉢形土器	A (14.2)	口縁部から胴部上半にかけての破片。口縁部はやや外傾する。口縁部下位の隆起帯に刺突文を充填し文様を構成している。胴部は無節縄文で施文している。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P 6 P ₁ 内 (堀之内Ⅱ)
	縄文土器	B (13.3)			
2	深鉢形土器	B (7.6)	胴部下半から底部にかけての破片。平底で、胴部は外傾して開く。胴部下半外面に縦方向の磨き、底部外面にも磨きが施されている。	長石・石英 褐色 普通	P 7 P ₁ 内 (堀之内Ⅱ)
	縄文土器	C (8.7)			

図版番号	器種	計測値(cm)			重量 (g)	現存率 (%)	器形及び文様の特徴	備考
		最大長	最大幅	最大厚				
第18図 12	土製円板	4.6	4.5	1.0	24.1	100	表面は隆帯に刻みを施し、斜位の条線が施文されている。	DP 1 覆土中

第17図3・4、第18図5～11は縄文土器片の拓影図である。3は口縁部片で、口縁部下から縄文が施文されている。4～7は胴部片で、4は沈線で四角形状のモチーフが描かれている。5は単節縄文LRの地文に沈線が施され、6は斜位の単節縄文LRが施文され、7は沈線が施されている。8～11は安行期に比定される。8・9・11は口縁部片で、8・11は隆起帯に刻みが施されている。9は隆起帯縄文に瘤状の突起が貼り付けられている。10は胴部片で単節縄文RLに磨り消しが施されている。

所見 本跡は、南部が調査区域外で覆土が削平されており、規模及び平面形は不明であるが、主柱穴の配列から竪穴住居跡と思われる。時期は、出土遺物から縄文時代後期（堀之内Ⅱ式期）と思われる。

第4号住居跡（第17図）

位置 調査区の東部、B5g区。

重複関係 本跡は、南部で第3号住居跡、東部で第5号住居跡、第21号土坑、中央部で第23-A号土坑、第23-B号土坑、第23-C号土坑と重複しているが、いずれも本跡の床より下層で確認されており、本跡の方が新しい。

規模と平面形 遺構の確認プランが明瞭に把握できず、壁の立ち上がりは確認できなかった。長径方向 不明。

床 平坦である。踏み固められた面は見られない。

ビット 9か所（P₁～P₉）。P₁～P₆は長径30～40cm、短径22～38cmの楕円形で、深さ55～77cm。規模及び配列から主柱穴と考えられる。P₇は長径32cm、短径24cmの楕円形で、深さ32cm。P₈に近接し、補助柱穴の可能性がある。P₉は長径32cm、短径24cmの楕円形で、深さ32cm。P₁に近接し、補助柱穴の可能性がある。P₈は性



第19図 第4号住居跡出土遺物実測拓影図

格不明である。

遺物 縄文土器及び縄文土器片が、細片であるが住居跡全域の床面から53点出土している。第19図の1～4は、深鉢形土器の口縁部及び胴部片で西部覆土中層から出土している。

第19図1～4は縄文土器片の拓影図である。1は胴部片で、平行沈線が施されている。2は口縁部片で、口縁部下に押捺を加えた隆帯が貼り付けられている。3は胴部片で、無節縄文Lの施文に沈線により文様が構成されている。4は口縁部で、縄文施文に6条の横位の沈線が施されている。

所見 本跡は、覆土が削平されて規模及び平面形は不明であるが、柱穴の配列及び遺物の広がりから堅穴住居跡と思われる。遺物は、堀之内I式期から加曾利B I式期まで出土しており、時期は、縄文時代後期としておきたい。

第5号住居跡 (第17図)

位置 調査区の東部、B5gs区。

重複関係 本跡は、南西側部分を第4号住居跡に掘り込まれている。

規模と平面形 覆土が削平されているため、壁の立ち上がりをとらえることができず、規模及び平面形は不明である。

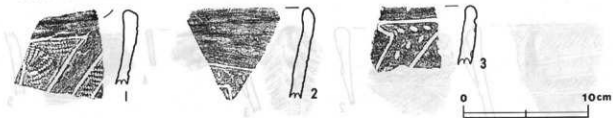
長径方向 不明。

床 平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット 4か所 (P₁～P₄)。P₁は長径34cm、短径28cm、深さ50cmのほぼ円形で、他に同様のピットは見られないが、主柱穴と考えられる。P₂～P₄は、長径24～30cm、短径22～28cmのほぼ円形で、深さ30cm。配列に規則性がなく性格は不明である。

炉 平面形は、長径62cm、短径50cmの楕円形で、床面から10cm掘り込まれた地床炉である。炉床面は火熱を受け、赤変硬化している。

遺物 縄文土器及び縄文土器片が、細片であるが住居跡全域の床面から22点出土している。第20図1～3は、深鉢形土器の口縁部片で炉脇の覆土中から出土している。



第20図 第5号住居跡出土遺物実測拓影図

第20図1～3は縄文土器片の拓影図である。1～3は口縁部片で、1は沈線により区画され、区画内は縄文が充填され、区画外は磨り消されている。2・3は沈線区画内に列点文が施されている。

所見 本跡は、壁の立ち上がり及び床の広がりを確認することができなかったが、炉1基とピット1か所を検出したことにより、堅穴住居跡であると思われる。時期は、出土遺物が少ないが称名寺I式期及び称名寺II式期の土器が出土しており、縄文時代後期(称名寺式期)としておきたい。

第6号住居跡 (第21図)

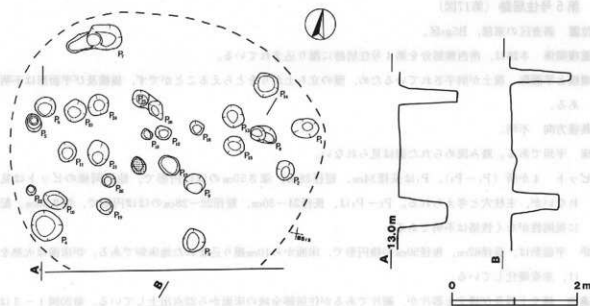
位置 調査区の東部, B5h区。

規模と平面形 本跡は, 南側部分が調査区域外に延びており, また, 覆土が削平されているため, 壁の立ち上がりをとらえることができず, 規模及び平面形は不明である。

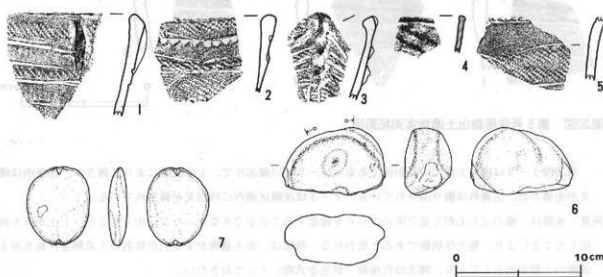
長径方向 不明。

床 平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット 26か所 (P₁ - P₂₆)。P₁は長径44cm, 短径30cmの楕円形で, 深さ68cm。P₂は長径30cm, 短径28cmの不整形形で, 深さ79cm。P₃は長径38cm, 短径36cmの不整形形で, 深さ76cm。P₄は長径50cm, 短径46cmの不整形形で, 深さ79cm。P₅は長径28cm, 短径24cmの不整形形で, 深さ83cm。P₆は長径34cm, 短径30cmの不整形形で, P₇は径24cmの円形で規模及び配列から支柱穴と考えられる。P₈ - P₁₄は長径26 - 40cm, 短径20 - 38cmの円形で, 深さ33 - 43cm。これらは補助柱穴と思われる。P₁₅ - P₂₆は性格不明である。



第21図 第6号住居跡実測図



第22図 第6号住居跡出土遺物実測・拓影図

炉 中央部に付設されている。平面形は長径30cm、短径22cmの楕円形で床面から8cm掘り込まれた地床炉である。炉床面は火熱を受け、赤変硬化している。

遺物 縄文土器及び縄文土器片が、細片であるが住居跡全域の床面から791点出土している。第22図の1～4は口縁部片で覆土中から、5は胴部片でP7から出土している。6の磨石、7の石錘は覆土中から出土している。

第6号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第22図6	磨石	(5.4)	8.3	3.9	(166.6)	安山岩	Q2 磨石専用 欠損品 覆土中
7	石錘	6.3	5.1	1.5	58.8	硬質砂岩	Q3 覆土中

第22図1～5は縄文土器片の拓影図である。1～4は口縁部片で、1は隆起帯縄文に瘤状の突起が貼り付けられており、2も隆起帯縄文下に刻文帯が施されている。3は3段の隆起帯縄文に瘤状の突起が貼り付けられている。4は赤彩が施されている。5は胴部片で沈線により弧線文に縄文が充填されている。

所見 本跡は、覆土は削平されて規模及び平面形は不明であるが、炉1基及び主柱穴の配列から住居跡と判断した。時期は、出土遺物から縄文時代後期（安行I式期）と思われる。

第7号住居跡（第23図）

位置 調査区の中央部、B319区。

重複関係 本跡は、北部を第18号住居跡に掘り込まれている。また、西部で第132号土坑と重複しているが本跡の方が新しい。

規模と平面形 長径5.95m、短径5.01mの楕円形である。

長径方向 N-46°-E

壁 壁高は11～14cmで、外傾ぎみに立ち上がる。

床 平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット 20か所（P1～P20）。P1～P3は、長径42～60cm、短径34～50cmの不整楕円形で、深さ60～77cm規模及び配列から主柱穴と思われる。P4～P11は、長径24～34cm、短径24～34cmのほぼ円形で、深さ59～66cm（P4は87cm）で主柱穴と主柱穴の中間に位置し補助柱穴と思われる。P12、P20は東壁を掘り込んでいる。その他のピットは性格不明である。

炉 南東側部に付設されている。長径62cm、短径56cmの不整形で、床面から40cm掘り込まれた地床炉である。炉床面は火熱を受け、赤変硬化している。

炉土層解説

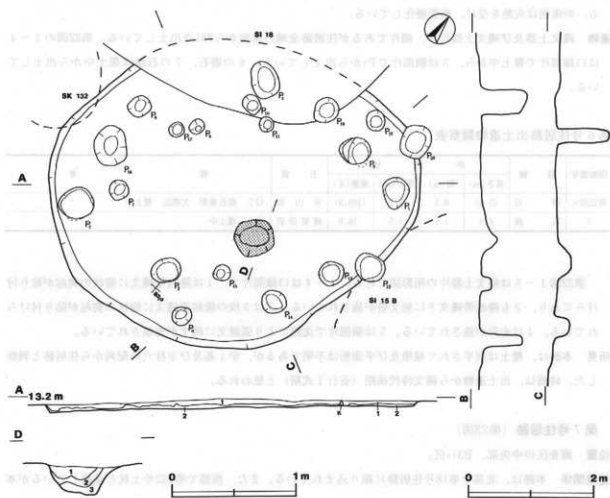
- 1 暗赤褐色 焼土小ブロック少量、炭化粒子・ローム粒子微量 3 赤褐色 焼土大ブロック中量、炭化粒子・ローム粒子微量
2 暗赤褐色 焼土中ブロック中量、炭化粒子・ローム粒子微量

覆土 2層からなる自然堆積である。

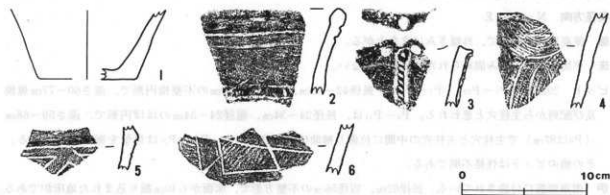
土層解説

- 1 暗褐色 ローム小ブロック少量、炭化粒子・ローム粒子微量 2 褐色 ローム中ブロック・ローム粒子少量、炭化粒子微量

遺物 縄文土器及び縄文土器片が、床面及び覆土中から530点出土している。第24図の1は底部から胴部にかけての破片で覆土中から、2・3は口縁部片で3はP16から出土している。4・6は胴部片で、5はP12から出土している。



第23図 第7号住居跡実測図



第24図 第7号住居跡出土遺物実測・拓影図

第7号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(m)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第24図 I	深鉢形土器 縄文土器	B(5.6) C(7.8)	底部片。平底で、胴部は外傾して開く。胴部下外面に縦方向の筋き、底部外面にも筋きが施されている。	長石 にぶい褐色 普通	P 8 5% 覆土中(堀之内Ⅱ)

第24図2～6は縄文土器片の拓影図である。2・3は口縁部片で、2は無文で口縁部下及び頸部に平行沈線が施され、3は隆起線の上に刻みが施されている。4～6は胴部片で、4は文様が沈線で構成され、5・6は沈線により区画がなされ縄文が充填されている。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代後期（瓶之内Ⅱ式期）と思われる。

第8号住居跡（第25図）

位置 調査区の中央部，B4g5区。

重複関係 本跡は、西部で第34号土坑、北部で第156号土坑と重複しているが、本跡の方が新しい。

規模と平面形 本跡は、北部が調査区域外に延びているため確認できなかったが、径(5.50)m程の円形と推定される。

床 平坦である。柔かく踏み固められた面は見られない。

ピット 18か所（P₁～P₁₈）。P₁～P₆は、長径30～40cm，短径24～32cmの不整形円で、深さ42～73cm（P₂は94cm）。規模及び配列から主柱穴と思われる。P₇～P₁₃は、長径20～32cm，短径18～30cmのほぼ円形，深さ16～25cmで、主柱穴と主柱穴の中間に位置し補助柱穴と思われる。P₁₄～P₁₈は不明である。

炉 ほぼ中央に付設されている。長径60cm，短径[50]cmの楕円形で、床面から16cm掘り込まれた地床炉である。焼土は多いが、炉床はあまり赤変硬化していない。

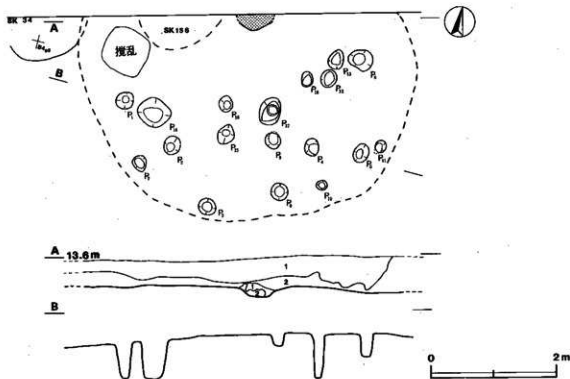
炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土小ブロック中量，炭化粒子少量，炭化物微量
2 赤褐色 焼土粒子少量，炭化粒子・焼土中ブロック・焼土小ブロック少量

覆土 住居跡北部は、エリアの境界になっており耕作土が深い。2層からなる自然堆積である。

土層解説

- 1 褐色 ローム大ブロック・ローム中ブロック・ローム粒子中量，炭化粒子・ローム小ブロック微量
2 褐色 ローム中ブロック・ローム粒子少量



第25図 第8号住居跡実測図

遺物 縄文土器及び縄文土器片が、細片であるが住居跡全域の床面から222点出土している。第26図の1～5は深鉢形土器の口縁部片及び胴部片で、いずれも覆土中からの出土である。



第26図 第8号住居跡出土遺物実測拓影図

第26図1～5は縄文土器片の拓影図である。1・2は胴部片で、1は単節縄文LRの地文に沈線が施され、2は平行沈線により文様が構成されている。3・4は口縁部片で、3は突起口縁で「S」字状を構成し、4は隆帯に刻みを施している。5は胴部片で、単節縄文LRが施文されている。

所見 本跡は、住居跡の北部が調査区域外であり、主柱穴の配列及び遺物の広がりから住居跡と判断した。住居跡を取り囲むように第6号方形周溝墓が検出され、覆土はすでに削平され確認面近くまで耕作土が堆積していた。遺物は、堀之内Ⅱ式期から安行Ⅰ式期までの土器が出土しており、時期はこの範疇であると思われる。

第9号住居跡 (第27図)

位置 調査区の中央部、B5he区。

重複関係 本跡は、中央部を第174号土坑に掘り込まれている。

規模と平面形 南部が調査区域外となっているが、長径(5.66)m、短径(4.01)mの楕円形と推定される。

長径方向 N-76°-W

壁 壁高は8～20cmで、外傾ぎみに立ち上がる。

床 平坦である。

ピット 45か所 (P₁～P₄₅)。P₁～P₇は、長径30～40cm、短径26～32cmの円形で、深さ69～81cm (P₃は41cm、P₄は44cm、P₇は41cm)。規模及び配列から主柱穴と思われる。P₈は長径36cm、短径32cm、深さ32cmの円形でP₂に近接しており、P₉は長径38cm、短径34cm、深さ20cmの円形でP₅に近接しており補助柱穴と思われる。P₂₀～P₄₁は、壁際に沿って柱列が回り壁柱穴と思われる。壁柱穴は、径14～18cm、深さ14～20cmの規模のもの、径20～30cm、深さ20～42cmの規模のものに分けられる。P₄₂～P₄₅は壁を掘り込んでおり、性格は不明である。

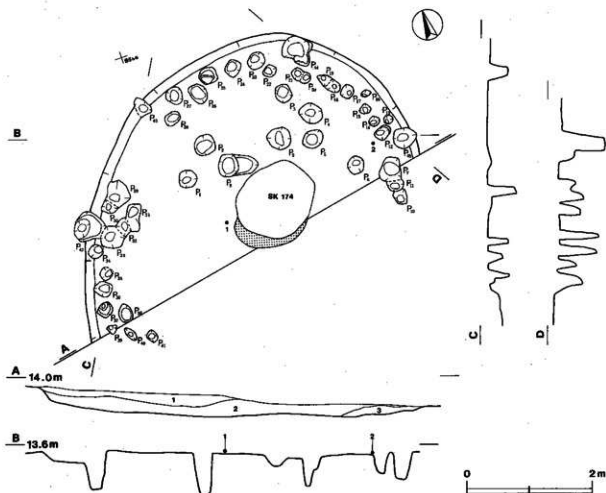
炉 中央部に付設されており、北部は第174号土坑に掘り込まれている。長径120cm、短径[80]cmほどの楕円形と推定される地床炉である。焼土粒子と焼土ブロックが少量で、炉床が少し残存していたが硬化はしていない。

覆土 3層からなる自然堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子中量 3 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子微量
2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量

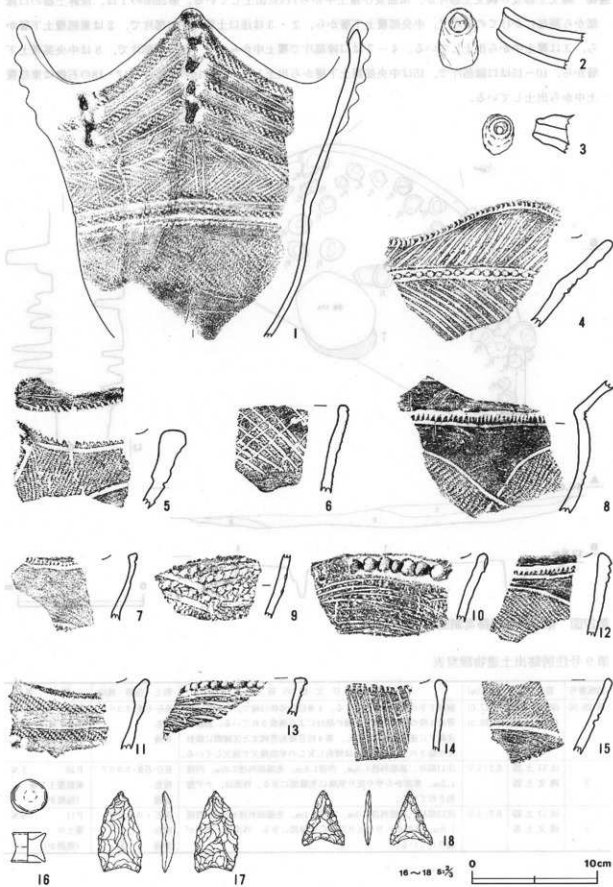
遺物 縄文土器及び縄文土器片が、床面及び覆土中から114点出土している。第28図の1は、深鉢土器の口縁部から胴部にかけての破片で、中央部覆土下層から、2・3は注口土器の注口部片で、2は東部覆土下層から、3は覆土中から出土している。4～7は口縁部片で覆土中から、8・9は胴部片で、8は中央部覆土下層から、10～15は口縁部片で、15は中央部覆土下層から出土している。16の耳飾り、17・18の石織は東部覆土中から出土している。



第27図 第9号住居跡実測図

第9号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第28図 1	深鉢形土器 縄文土器	A (27.0) B (26.3)	胴部下半から底部を欠損する。4単位位の波状口縁で、口縁部文様帯は4段の隆起帯縄文と縞の貼付により構成されている。胴部は沈線下に連続の刻みを施し、第4段目隆起帯縄文と沈線間に波状文が施されている。胴部は彎曲しR.Lの単節縄文で施文している。	長石・石英・スコリア 褐色 普通	P9 40% 覆土下層 (安行I)
2	注口土器 縄文土器	長さ(6.5)	注口部片。基部外径3.0cm、内径1.6cm、先端部外径2.0cm、内径1.2cm、基部からやや反り気味に先端部に至る。外面は、ナデ整形されている。	長石・石英・スコリア 褐色 普通	P10 5% 東部覆土下層 (後期か)
3	注口土器 縄文土器	長さ(3.2)	注口部片。基部外径3.0cm、内径1.1cm、先端部外径1.5cm、内径1.0cm、基部からやや反り気味に先端部に至る。外面は、磨きが施されている。	長石・スコリア 褐色 普通	P11 5% 覆土中 (晩期か)



第28図 第9号住居跡出土遺物実測・拓影図

図版番号	器 種	計 測 値 (cm)			重 量 (g)	現存率 (%)	器 形 及 び 文 様 の 特 徴	備 考
		最大径	最大幅	最大厚				
第 28 図 16	耳 飾 り	1.4	1.5	1.2	1.8	100	表面及び側面は磨きが施されており、無文である。	DP2 覆土中 長石・砂粒 褐色 普通 (後期後葉)

図版番号	器 種	計 測 値				石 質	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第28図17	石 鏝	3.2	1.8	0.6	3.3	チャート	Q4 西基無基礫 東部覆土中
18	石 鏝	2.2	1.7	0.3	0.8	チャート	Q5 西基無基礫 東部覆土中

第28図4～15は縄文土器片の拓影図である。4～9は加曾利BⅢ式期に比定される土器である。4～7は口縁部片で、4は口縁部に刻みが施され、口縁部及び胴部は条線が施され、頸部は2本の沈線で区画され刺突文が施文されている。5は口唇部に刻みが施され、太い沈線で区画され、区画内は単節縄文LRが施文されている。6は条線が施文され、7は口縁部及び頸部に刻みが施されている。8・9は胴部片で、8は頸部に刻みが胴部は上向きの弧線文が施されている。9は縄文地文に沈線が施されている。10～15は口縁部片で、安行I式期に比定される。10は口縁部に隆帯が貼り付けられ押捺がなされている。11は単節縄文RLの地文に磨り消しが施され、12は単節縄文RLの地文に沈線による区画がなされている。13は隆帯に押捺がなされ隆帯直下は粗い条線が施され、14は器面に縦方向の条線が施され、15は単節縄文RLが沈線により区画されている。

所見 本跡は、大・小はあるが壁柱穴が壁際を巡る。出土遺物は、加曾利BⅢ式期及び安行I式期の土器が主体であり、時期もこの範疇であると思われる。

第10号住居跡 (第29図)

位置 調査区の中央部、B51a区。

規模と平面形 南部が調査区域外となっているが、長径5.28m、短径(3.07)mの(楕円形)と推定される。

長径方向 N-12°-W

壁 壁高は15～34cmで、外傾ぎみに立ち上がる。

床 平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット 60か所 (P₁～P₆₀)。新旧の柱列と思われる柱穴が2列検出された。P₃～P₃₁は新しく、P₃₂～P₆₀は古い柱穴と思われる。P₁は長径24cm、短径20cm不整形で、深さ70cm。P₂は、径20cmの円形で、深さ64cm。炉を取り囲むように位置し、規模及び配列から新旧併用の主柱穴と思われる。P₃～P₃₁は新しく立て替えた後の柱列であり、長径18～36cm程の円形及び楕円形で、深さ23～47cm (P₃は78cm, P₉は74cm, P₁₁は75cmと他に比べて深い) である。P₃₂～P₆₀は立て替え前の柱列であり、径14～30cmの円形及び楕円形で、深さ15～40cm (P₃₃は60cm, P₃₄は67cm, P₄₇は56cm, P₅₃は61cmと他に比べて深い) である。

炉 中央部に付設されている。径80cm程の円形と推定される地床炉である。焼土粒子及び焼土ブロックが少量で、炉床が少し残存していたが赤変硬化はしていない。

覆土 11層からなる。1～6層は自然堆積であるが、7～11層は暗赤褐色主体の人為堆積と思われる。

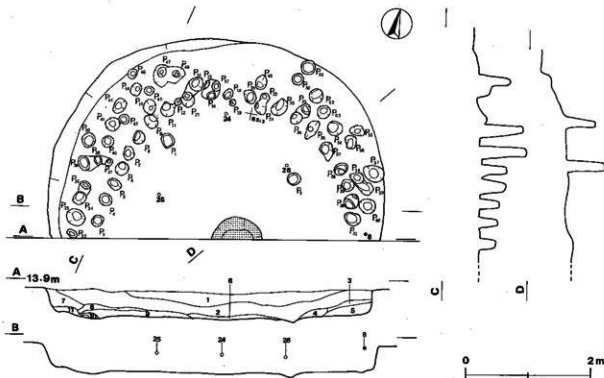
土層解説

1 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量	5 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子中量、ローム粒子微量
2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子・ローム小ブロック微量	6 暗褐色 炭化粒子中量、焼土粒子・ローム粒子少量
3 暗褐色 炭化粒子・ローム粒子中量	7 暗褐色 炭化粒子・焼土粒子少量、ローム粒子微量
4 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量	8 暗褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・炭化粒子少量

9 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子少量、ローム粒子微量
 10 暗赤褐色 焼土粒子少量、炭化粒子・ローム粒子微量

11 暗赤褐色 焼土粒中量、ローム粒子少量

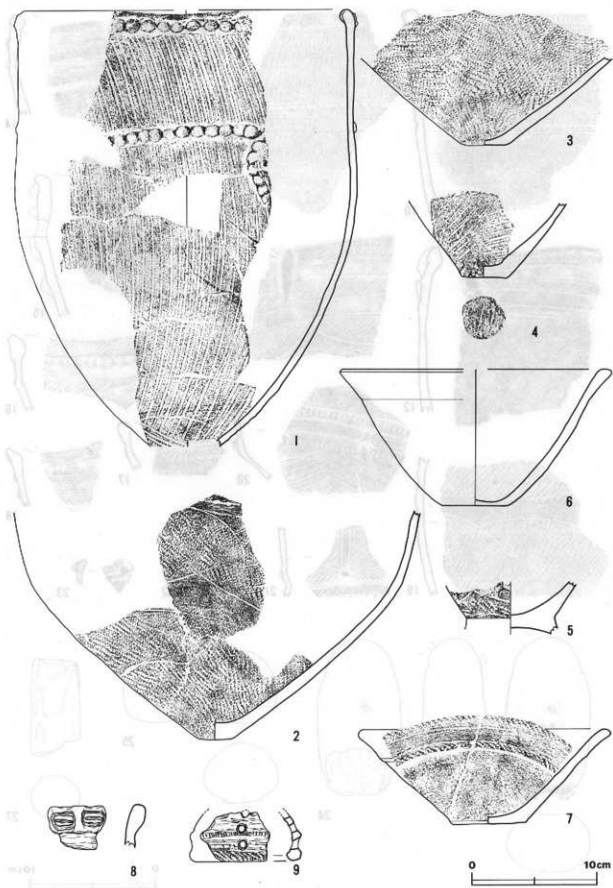
遺物 縄文土器及び縄文土器片が、床面及び覆土中から4,792点出土している。第30図の1は、深鉢形土器の胴部から口縁部にかけての破片で北部の覆土中から、2は深鉢形土器の胴部から底部にかけての破片で覆土中から、3は深鉢形土器の胴部から底部にかけての破片で西部の覆土中から正位の状態、4は浅鉢形土器の底部から胴部にかけての破片で覆土中から、5は台付鉢の台部片、6・7は浅鉢形土器で6は中央部覆土中から、8は突起口縁の破片で東部覆土上層から、9は台付土器の台部片で覆土中から出土している。10-18は、口縁部片でいずれも覆土中から、19・21は胴部片で中央部覆土中から、22・23は赤彩されている。24・25の磨石、26の石皿は覆土中層から、27の石棒、28の打製石斧は覆土中から出土している。



第29図 第10号住居跡実測図

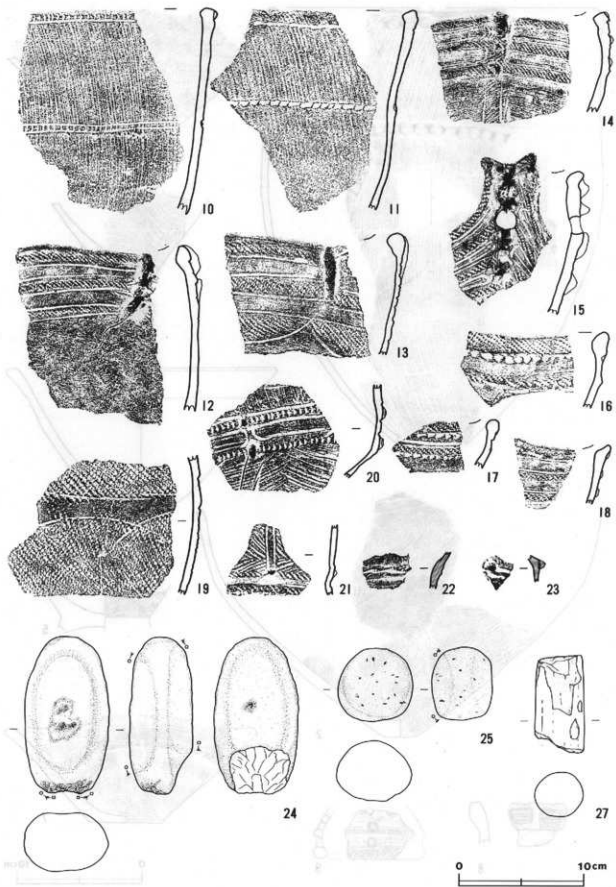
第10号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(m)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第30図 1	深鉢形土器	A (26.0)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は緩やかに内彎しながら口縁部に至る。口縁部及び胴部は隆帯を貼り付け、指痕による押捺が加えられている。口縁部から胴部にかけて浅い条線が施されている。	長石・石英	P12 20% 北部覆土中 (安行Ⅰ)
	縄文土器	B (35.2)		褐色 普通	
2	深鉢形土器	B (18.3)	底部から胴部にかけての破片。底部は小形の平底で、胴部は内彎しながら立ち上がる。底部から胴部下外面に縦方向の削りが施されている。胴部はR Lの単純縄文で施文され、沈線区画内が普通に残されている。	長石・石英	P13 20% 覆土中 (後期後葉)
	縄文土器	C 2.6		暗赤褐色 普通	
3	深鉢形土器	B (7.0)	底部から胴部にかけての破片。底部は小形の平底で、胴部は外傾して立ち上がる。底部から胴部下外面に縦方向の削りが施されている。胴部はR Lの単純縄文で施文している。	長石・石英	P14 10% 西部覆土中 (後期後葉)
	縄文土器	C 3.2		暗赤褐色 普通	
4	深鉢形土器	B (6.1)	底部から胴部下半にかけての破片。底部は小形の平底で、胴部は外傾して立ち上がり、浅い条線が施されている。	長石・石英	P15 5% 覆土中 (後期後葉)
	縄文土器	C 3.7		暗赤褐色 普通	



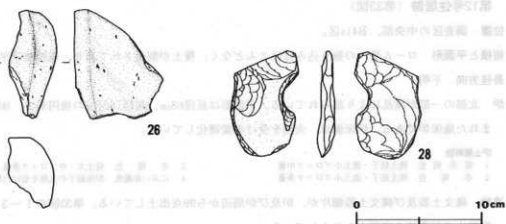
第30图 第10号住居跡出土遺物実測図(1)

10号住居跡、第10号住居跡出土遺物実測図(1)



第31图 第10号住居跡出土遺物実測・拓影(2)

下野県実業館出土品類目録(1) 国史院



第32図 第10号住居跡出土遺物実測図(3)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第30図 5	台付土器 縄文土器	B(4.2) E(1.4)	台部から胴部下半の破片。低い台部で「八」の字状に開くと思われる。胴部下半は無筋縄文Rで施文している。	長石・石英・スコリア 褐色 普通	P16 覆土中 (後期後葉)
6	浅鉢形土器 縄文土器	A(21.8) B 10.9 C(5.2)	小形の平底で、胴部は内嚢し、外傾して口縁部に至る。口縁部下に沈線が施されている。	長石・石英 褐色 普通	P17 50% 覆土中 (後期後葉)
7	浅鉢形土器 縄文土器	A 20.2 B 7.7 C 6.1	小形の平底で、胴部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。口縁部以下に隆起帯縄文を2段施し、隆起帯間は磨り消されている。胴部は、横方向の書きが施されている。	長石・石英 暗褐色 普通	P18 50% 覆土中 (後期後葉)
8	把手 縄文土器	長さ(3.5) 幅(3.9)	環状把手片。隆起帯により4区画がなされ、区画内は沈線により楕円形及び楕円の文様が施されている。	長石・石英・スコリア 褐色 普通	P19 5% 東部覆土上層
9	異形台付土器 縄文土器	B(3.9) C(7.8)	台部片で上部欠損。彎曲した台部で、台部下半には2段の隆起帯縄文を施し、隆起帯間は折頭によってナデ整形し、さらに上下に沈線を施している。第1段隆起帯を挟み径0.6cmほどの孔が穿たれている。	長石・石英 黒褐色 普通	P20 25% 覆土中 (後期後葉)

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第31図24	磨石	12.6	6.8	5.1	605.2	安山岩	Q6 礫石兼用 一部欠損品 覆土中層
25	磨石	5.9	6.0	4.9	217.2	安山岩	Q7 覆土中層
第32図26	石皿	(8.8)	(7.2)	(3.2)	(154.1)	安山岩	Q8 欠損品 覆土中層
第31図27	石棒	(7.8)	3.9	3.6	(166.6)	粘板岩	Q9 欠損品 覆土中
第32図28	打製石斧	(8.6)	(5.5)	(1.5)	(58.2)	凝灰岩	Q10 分銅形 欠損品 覆土中

第31図10～23は縄文土器片の拓影図である。10～18は口縁部片である。10・11は粗製土器で、器面に縦方向の条線が施されている。12・13・14は縄文帯間が磨り消され、瘤状の突起が貼り付けられており、15は突起の下に孔が穿たれている。16・17・18は縄文帯間が磨り消されている。19は単筋縄文RLの地文に磨り消しが施されている。20は刻文帯上に瘤が付されている。21は縄文帯間が磨り消され、斜位の条線は沈線区画内の磨消帯が直線的に垂下している。22・23は赤彩が施されている。

所見 本跡は、住居の建て替えを行ったと思われる2列の壁柱穴跡が検出された。時期は、出土遺物から縄文時代後期(安行I式期)と思われる。

第12号住居跡 (第33図)

位置 調査区の中央部, B4is区。

規模と平面形 ローム層への掘り込みはほとんどなく, 覆土が削平されており, 規模及び平面形は不明である。
長径方向 不明。

炉 北部の一部が攪乱により削られている。平面形は長径68cm, 短径[60]cmの楕円形で, 床面から36cm掘り込まれた地床炉である。炉床面は, 火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説

- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土粒子・焼土小ブロック中量 | 3 赤褐色 焼土大・中ブロック多量 |
| 2 赤褐色 焼土粒子・焼土小ブロック多量 | 4 にぶい赤褐色 炉床面下の火熱を受けた層 |

遺物 縄文土器及び縄文土器細片が, 炉及び炉周辺から99点出土している。第33図の1～3は, 口縁部片及び胴部片で炉周辺の床面から出土している。



第33図 第12号住居跡・出土遺物実測拓影図

第33図1～3は縄文土器片の拓影図である。1は粗製土器で, 2・3は沈線により文様が構成され, 3は列点文が施されている。

所見 本跡は, 壁の立ち上がり及び床の広がりやピットを確認できなかったが, 炉周辺の床面と炉1基を検出したことによって, 竈穴住居跡であると判断した。時期は, 出土遺物から縄文時代晩期(安行ⅢC式期)と思われる。

第14号住居跡 (第34図)

位置 調査区の中央部, B4j区。

重複関係 本跡は, 第3号溝に掘り込まれている。

規模と平面形 ローム層への掘り込みはほとんどなく, 覆土が削平されているため, 壁の立ち上りをとることができず, 規模平面形は不明である。

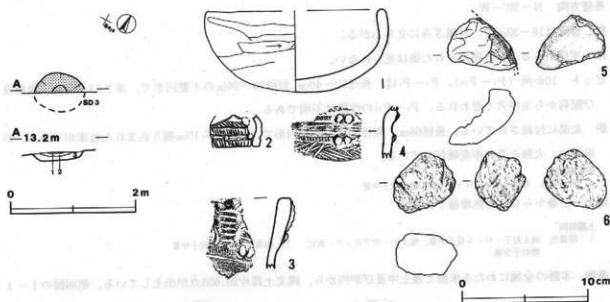
長径方向 不明。

炉 南部を第3号溝により掘り込まれている。平面形は長径80cm, 短径[64]cmの楕円形で, 床面から22cm掘り込まれた地床炉である。炉床面は火熱を受け, 赤変硬化している。

炉土層解説

- | | |
|--------------------------|-------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土粒子多量, 焼土小ブロック中量 | 3 褐色 炉床面下の火熱を受けた層 |
| 2 赤褐色 焼土小・中ブロック多量 | |

遺物 縄文土器及び縄文土器細片が, 炉及び炉周辺から821点出土している。第34図1は, 鉢形土器で炉壁の覆土中から, 2は異形台付土器の上部片で炉内から, 3の口縁部片, 4の胴部片も炉内から出土している。5の石皿の破片は炉内, 6の浮子は炉脇から出土している。



第34図 第14号住居跡・出土遺物実測・拓影図

第14号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第34図 1	鉢形土器 縄文土器	A (14.3) B 6.5	碗状で内縁しながら口縁部に至る。口縁部は平縁で、内面ナデ、外面横方向の削りで整形されている。	長石・石英・スコリア 褐色 普通	P21 60% 加藤層土中 (安行Ⅱ)
2	異形台付土器 縄文土器	B (2.6) C (3.7)	台部片。彎曲した台部で2段の削みが施され、上下2個の径0.4cmほどの孔が穿たれている。	長石・スコリア 明赤褐色 普通	P22 10% 伊内 (安行Ⅱ)

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(K)		
第34図5	石皿	(4.3)	(5.6)	(4.5)	(80.0)	安山岩	Q11 欠損品 伊内
6	浮子	4.8	4.9	3.4	21.9	軽石	Q12 加藤

第34図3・4は縄文土器片の拓影図である。3は口縁部で、貼瘤には横位の刻みがなされ、刻文帯にはブタ鼻状の瘤が貼り付けられている。4は胴部片で、刻文帯にはブタ鼻状の瘤が貼り付けられている。所見 本跡は、壁の立ち上がり及び床の広がりやピットを確認できなかったが、炉周囲の床面と炉1基を検出したことによって、竪穴住居跡であると判断した。時期は、出土遺物から縄文時代後期（安行Ⅱ式期）と思われる。

第15-A号住居跡（第35図）

位置 調査区の中央部、B4ii区。

重複関係 本跡は、中央部で第15-B号住居跡、東部で第16号住居跡を掘り込んでおりいずれの遺構よりも本跡の方が新しい。

規模と平面形 長径4.33m、短径3.87mの楕円形である。

長径方向 N-20°-W

壁 壁高は16-30cmで、外傾ぎみに立ち上がる。

床 平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット 10か所 (P₁~P₁₀)。P₁~P₇は、長径20-40cm、短径20-26cmの不整形形で、深さ33-54cm。規模及び配列から支柱穴と思われる。P₈~P₁₀の性格は不明である。

炉 北部に付設されている。長径66cm、短径60cmの不整形形で、床面から10cm掘り込まれた地床炉である。炉床面は、火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説

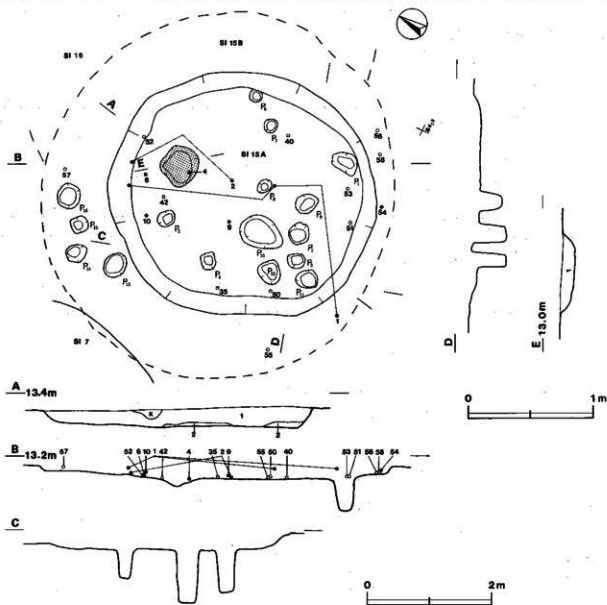
1 暗赤褐色 焼土小・中ブロック中量、焼土粒子少量

覆土 2層からなる自然堆積である。

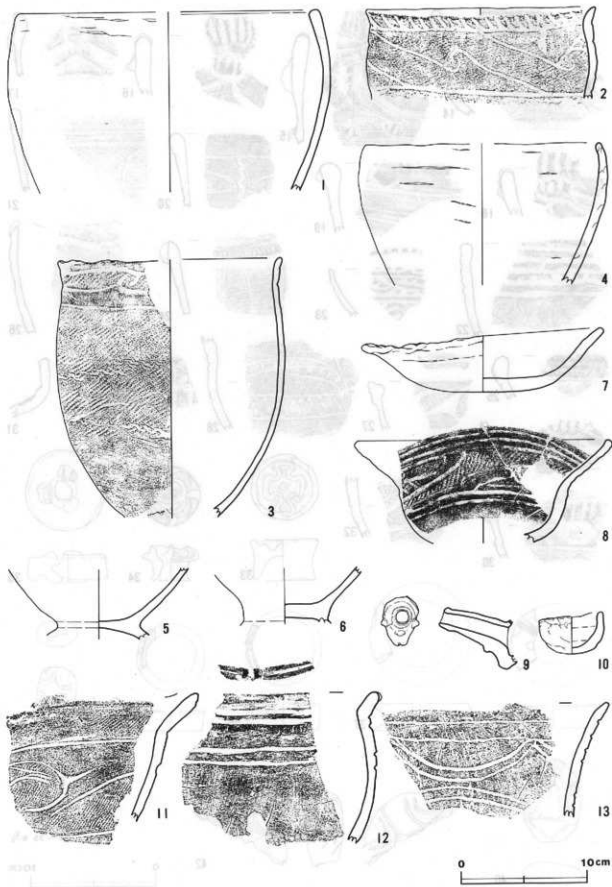
土層解説

1 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子中量、焼土小・中ブロック・炭化 2 暗褐色 ローム粒子中量、物粒子少量

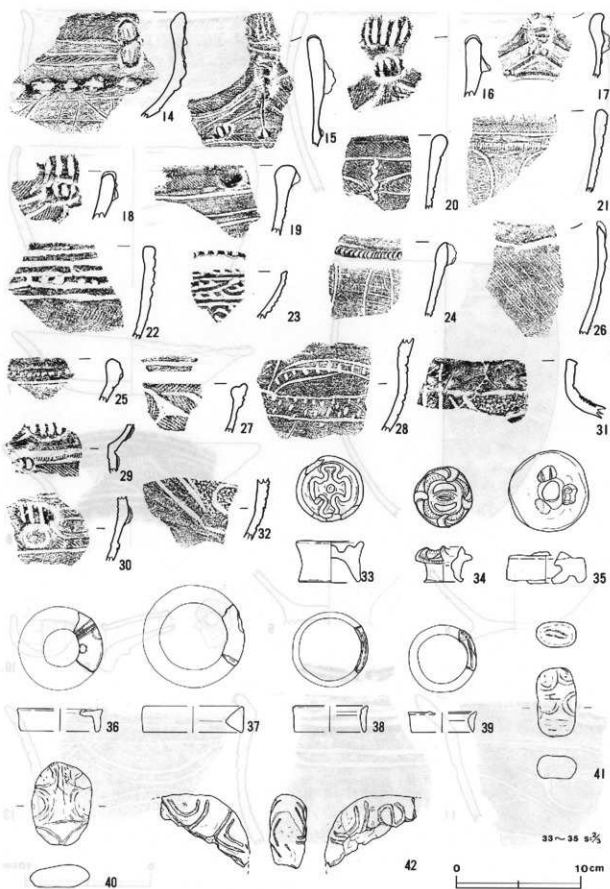
遺物 本跡の全域にわたる床面と覆土中及び炉内から、縄文土器片20,603点が出土している。第36図の1~4



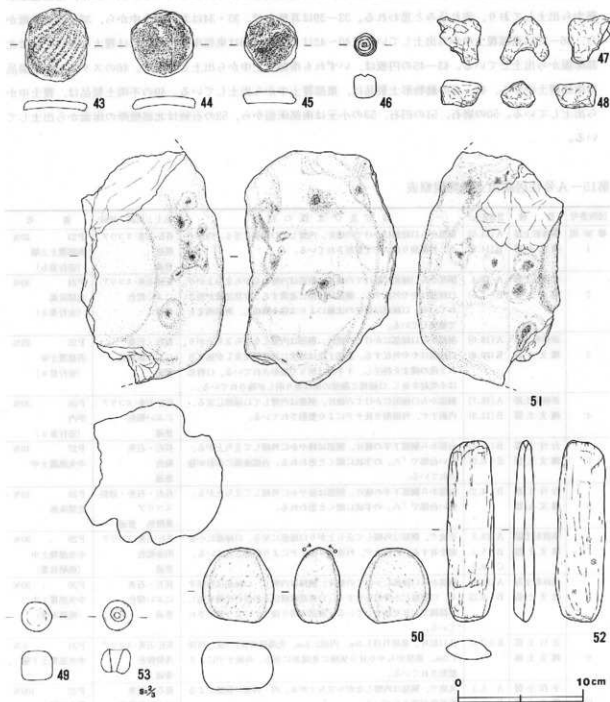
第35図 第15-A・B号住居跡実測図



第36图 第15-A号住居跡出土遺物実測・拓影図(1) 岡部市・岡部町出土遺物調査 A-21号 図36



第37图 第15-A号住居跡出土遺物実測・拓影图(2)



第38図 第15-A号住居跡出土遺物実測図(3)

は、深鉢形土器の口縁部片で、1は南部覆土上層から、2は北部床面から、3は西部覆土中から、4は炉内から出土している。5・6は台付鉢の台部から胴部にかけての破片で、5は中央部覆土中から出土しており台部底面は赤彩されている。6は、北部床面から出土している。7・8は浅鉢形土器で中央部覆土中から、9は注口土器の注口部で、中央部覆土下層から出土している。10は手捏土器で北部中層から、11-23は深鉢形・浅鉢形土器の口縁部片で、11-12は北部床面から、13は東部床面から、14は南部覆土中から、15-16は南部床面から、17-19は南部覆土中から、20は北部覆土中から、21は中央部覆土下層から出土している。22

・23は大洞系の土器片で、22は東部覆土中から、23は南部覆土中から出土している。24～32は、南部覆土中層から出土しており、流れ込みと思われる。33～39は耳飾りで、33・34は北部覆土中から、35は西部床面から、36～39は東部覆土中から出土している。40～42は土版で、40は東部床面から、41は覆土中から、42は北部床面から出土している。43～45の円板は、いずれも南部覆土中から出土している。46のスタンプ形土製品は南部覆土中から、47・48の動物形土製品は、東部覆土中から出土している。49の不明土製品は、覆土中から出土している。50の磨石、51の凹石、53の小玉は南部床面から、52の石剣は北部壁際の床面から出土している。

第15-A号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計面積(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第36回 1	深鉢形土器 縄文土器	A(24.0) B(14.5)	胴部から口縁部にかけての破片。内側して口縁部に至る。内面ナデ、外面磨り後ナデで整形されている。	長石・石英・スコリア 褐色 普通	P23 20% 南部覆土中層 (安行Ⅱb)
2	深鉢形土器 縄文土器	A 18.4 B (7.5)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は内磨しながら立ち上がり、口縁部はやや外反する。胴部は横位に連続するS字状沈線が施されている。口縁部は斜位の沈線により文様を構成し、無彫縄文Lで施文している。	長石・石英・スコリア ぶい褐色 普通	P24 30% 北部床面 (安行Ⅱa)
3	深鉢形土器 縄文土器	A(18.0) B(20.8)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は内磨しながら立ち上がり、口縁部はやや外反する。胴部上半は地文に単筋縄文RLが施文され2段の縄文を押し、下半部は磨りて整形されている。口唇部は小突起を有し、口縁部と胴部の間は磨り消しが施されている。	長石・石英 ぶい黄褐色 普通	P25 25% 西部覆土中 (安行Ⅱa)
4	深鉢形土器 縄文土器	A(18.7) B(11.3)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は内磨して口縁部に至る。内面ナデ、外面磨り後ナデにより整形されている。	長石・石英・スコリア ぶい褐色 普通	P26 20% 知内 (安行Ⅱa)
5	台付土器 縄文土器	B(5.7) E(0.9)	台部から胴部下半の破片。胴部は緩やかに外傾して立ち上がる。低い台部で「八」の字状に開くと思われる。台部底面に赤彩が施されている。	長石・石英 褐色 普通	P27 10% 中央部覆土中
6	台付土器 縄文土器	B(4.2)	台部から胴部下半の破片。胴部は緩やかに外傾して立ち上がる。低い台部で「八」の字状に開くと思われる。	長石・石英・砂粒 スコリア 黄褐色 普通	P28 10% 北部床面
7	浅鉢形土器 縄文土器	A 19.2 B 5.1 C 8.6	平底で、胴部は外傾して立ち上がり口縁部に至る。口縁部に小突起を有する。内面ナデ、外面磨り後ナデにより整形されている。	長石・石英・スコリア 明赤褐色 普通	P29 90% 中央部覆土中 (晩期前葉)
8	浅鉢形土器 縄文土器	A(20.6) B(8.2)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は内磨し、口縁部は外傾する。口唇部に小突起を有する。口縁部は横位と斜位の沈線を施し、単筋縄文LRで施文している。胴部は磨り後ナデにより整形されている。	長石・石英 ぶい褐色 普通	P30 30% 中央部覆土中 (晩期前葉)
9	注口土器 縄文土器	長さ(7.0)	注口部片。基部外径3.4cm、内径2.3cm、先端部外径1.7cm、内径1.0cm、基部からやや反り気味に先端部に至る。外面ナデにより整形されている。	長石・石英・スコリア 浅黄褐色 普通	P31 5% 中央部覆土中層
10	手摺土器 縄文土器	A 5.1 B 3.2 C 1.8	丸底で、胴部は内磨しながら立ち上がる。内・外面に指痕による整形痕が残されている。	長石・石英 ぶい赤褐色 普通	P32 100% 覆土中層

図版番号	器種	計面積(cm)			重量 (g)	現存率 (%)	器形及び文様の特徴	備考
		最大長	最大幅	最大厚				
第37回 33	耳飾り	2.6	2.7	1.7	8.8	100	滑車形。表面は沈線により文様が構成されており、赤彩されている。表面及び側面は磨きが施されている。	DP3 北部覆土中 長石・石英 褐色 良好 (晩期前葉)
34	耳飾り	2.4	2.3	1.4	3.0	100	滑車形。透かし彫りで、表面に孔があり刻み目と沈線により文様が構成され、赤彩されている。表面及び側面は磨きが施されている。	DP4 北部覆土中 長石・石英 褐色 良好 (晩期前葉)

図版番号	器 種	計 測 値 (cm)			重 量 (g)	現存率 (%)	器 形 及 び 文 様 の 特 徴	備 考
		最大長	最大幅	最大厚				
第 37 図 35	耳 飾 り	3.3	3.2	1.6	13.0	100	環形。内径1.1cm。表面に3か所の小突起があり、刻み目が施されている。	DP 5 西部床面 灰石・バミス 褐色 普通 (晩期前葉)
36	耳 飾 り	(6.9)	(6.7)	(1.8)	(13.6)	25	清草形。内径(3.1)cm。表面に瘤及び貼り付けに刻み目を施し文様を構成している。	DP 6 東部覆土中 灰石・スコリア にぶい褐色 普通 (後期後葉)
37	耳 飾 り	(8.1)	(8.1)	2.1	(11.5)	25	清草形。内径(5.4)cmで無文。表面及び側面は磨きが施されている。	DP 7 東部覆土中 灰石・スコリア 褐色 良好 (後期後葉)
38	耳 飾 り	(6.0)	(6.0)	2.1	(5.2)	20	環形。内径(4.9)cmで無文。内面に沈線が1本走る。表面及び側面は磨きが施されている。	DP 8 東部覆土中 灰石・石炭 灰褐色 普通 (後期後葉～晩期前葉)
39	耳 飾 り	(5.5)	(5.3)	1.7	(4.0)	20	環形。内径(4.0)cm。刺突文2個が1個で4か所文様が施されていると思われる。刺突文は赤彩されている。	DP 9 東部覆土中 灰石・石炭 黒褐色 普通 (後期後葉～晩期前葉)
40	土 版	6.7	4.9	1.9	64.6	100	楕円形を呈し、表面は弧線状沈線により文様が構成されている。裏面は無文である。	DP 10 東部床面 灰石 褐色 普通
41	土 版	5.5	3.3	1.9	36.9	100	楕円形を呈し、表面は弧線状沈線により文様が構成されている。裏面は無文である。側面に2本の沈線が施されている。	DP 11 覆土中 灰石 褐色 普通
42	土 版	(5.9)	7.2	3.0	(84.2)	20	長方形を呈し、表・裏面ともに弧線状沈線により文様が構成されている。両面は、丁寧に磨かれている。	DP 12 東部床面 灰石・石炭 褐色 普通
43	土製円板	6.0	5.1	0.9	30.9	100	表面に草履文LR。	DP 13 南部覆土中
44	土製円板	5.4	5.1	1.0	26.7	100	表面に条線文。	DP 14 南部覆土中
45	土製円板	5.1	4.3	1.1	24.3	100	無文。	DP 15 南部覆土中
46	スタンピング土製品	1.8	1.8	1.9	6.1	100	表面は円形の貼り付け文様を構成し、側面及び裏面は、丁寧に磨かれている。	DP 16 南部覆土中 灰石 褐色 普通
47	動物形土製品	(3.9)	(3.5)	3.9	(28.3)	50	体部の下半円足にかけての破片。ナデにより整形されている。	DP 17 東部覆土中 灰石・バミス 褐色 普通
48	動物形土製品	(2.2)	(3.4)	2.7	(16.9)	30	体部の下半の破片。粗雑である。	DP 18 東部覆土中 灰石 褐色 普通
49	不明土製品	2.4	2.5	2.5	15.8	100	表・裏・側面ともに磨きが施され整形されている。	DP 19 覆土中 灰石 褐色 良好

図版番号	器 種	計 測 値				石 質	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第38図50	磨 石	6.0	5.7	3.7	190.3	安 山 岩	Q13 南部床面
51	凹 石	(18.8)	(11.6)	11.4	(1932.5)	安 山 岩	Q14 石屋敷用 欠損品 南部床面
52	石 刺	(14.6)	3.9	1.9	(140.8)	緑 泥 片 岩	Q15 欠損品 北部壁部床面
53	小 玉	1.2	1.3	1.0	2.0	硬 玉	Q16 径0.6cmの通孔 南部床面

第36図11～13、第37図14～32は縄文土器片の拓影図である。11～21は口縁部及び胴部上半にかけての破片である。11～13は突起を有し、11は縄文地文が磨り消され、沈線により曲線の文様が描かれており、12・13は粗製土器で平行沈線が施されている。18は貼瘤に刻みが施されている。14は縦位の2段の瘤及び隆帯は押捺がなされている15～17は波状口縁部の波頂部片で、頂部の突起には貼瘤に刻みが施されている。19は

隆起帯縄文に貼瘤が付され、20は口縁部直下から単節縄文R Lの地文が沈線により区画され磨り消され、21は粗製土器で沈線により区画され、区画内は刻みが施されている。22・23は大洞式の影響が見られる土器で、大洞B C式並行と思われる。24～32は流れ込みと思われる土器である。24～27は口縁部片で、24・25は隆帯に刻みが施され、26は粗製土器で斜位の条線が施文されている。27は三叉文が施されている。28～30は胴部片で、28は沈線区画内に短い刻みが施され、29・30は貼瘤が付され、29は隆起線上には刻みが施され、30は楕円区画内は磨り消されている。31・32は沈線区画内は細かく刺突されている。

所見 本跡は、3軒の住居跡が重複しており流れ込みの遺物もある。時期は、安行Ⅲ a から安行Ⅲ c までの遺物が出土しており縄文時代晩期としておきたい。

第15-B号住居跡 (第35図)

位置 調査区の中央部、B4ii区。

重複関係 本跡は、西部を第7号住居跡、中央部を第15-A号住居跡、東部を第16号住居跡に掘り込まれていることから、いずれの遺構より古い。

規模と平面形 本跡は、西部と中央部と東部で他の住居跡に掘り込まれており、また、覆土が削平されているため、壁の立ち上がりをとらえることができなかった。しかし、遺物の広がり等から長径(5.65)m、短径(5.33)mの〔楕円形〕と推定される。

長径方向 [N-20°-W]

床 平坦である。踏み固められた面は見られない。

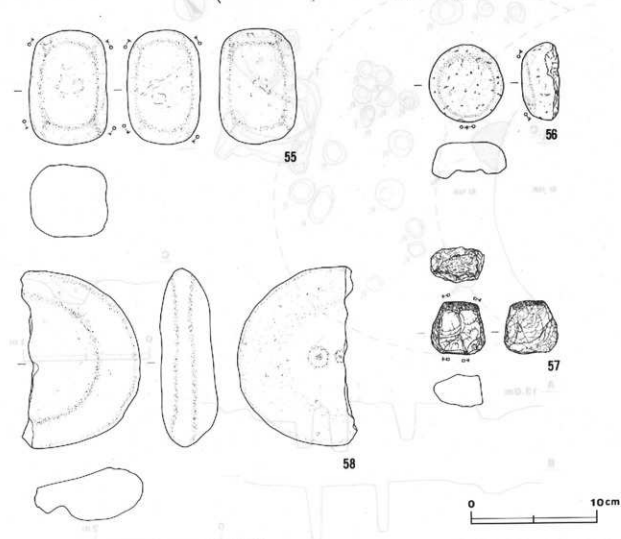
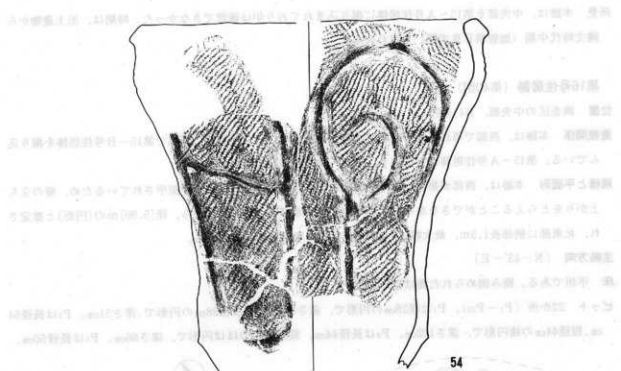
ピット 6か所 (P11～P16)。P11は長径34cm、短径30cmのほぼ円形で、深さ73cm。P12は長径38cm、短径32cmのほぼ円形で、深さ88cm。P13は長径40cm、短径34cmのほぼ円形で、深さ115cm。P14は長径38cm、短径34cmのほぼ円形で、深さ85cm。規模及び配列から主柱穴と思われる。P14は長径32cm、短径28cmのほぼ円形で、深さ35cm。P15は径26cmの円形で、深さ44cm。P14はP13に、P15はP16に近接しており、補助柱穴の可能性がある。

遺物 出土遺物は、ごく僅かである。第39図の54は、縄文土器の深鉢形土器の口縁部から胴部にかけての破片で南部覆土下層から出土している。55の磨石は南西部床面から、56の磨石は南東部床面から、57の敲石は北部覆土下層から、58の石皿は南東部床面から出土している。

第15-B号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 及 び 文 様 の 特 徴	粘土・色調・焼成	備 考
第39図 54	深鉢形土器 縄文土器	A 27.0 B (28.1)	胴部下半から口縁部にかけての破片。胴部は種やかに外傾して立ち上がり、内彎しながら口縁部に至る。歯度地線区画内は、横位・縦位・斜位の単節縄文が施され、口縁部直下まで縄文が施されている。	長石 浅黄褐色 普通	P33 55% 南部覆土下層 (加賀利EⅢ)

図版番号	器 種	計 測 値				石 質	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第39図55	磨 石	9.3	6.3	6.0	579.6	安山岩	Q17 南西部床面
56	磨 石	6.3	6.1	(3.0)	(146.3)	安山岩	Q18 欠損品 南東部床面
57	敲 石	4.3	4.4	2.8	69.4	チャート	Q20 北部覆土下層
58	石 皿	14.2	9.5	4.5	623.7	安山岩	Q21 凹石兼用 南東部床面



第39図 第15-B号住居跡出土遺物実測図

図中数字は寸法を示す

所見 本跡は、中央部を第15-A号住居跡に掘り込まれており炉は確認できなかった。時期は、出土遺物から縄文時代中期（加曾利EⅢ式期）と思われる。

第16号住居跡（第40図）

位置 調査区の中央部、B4jz区。

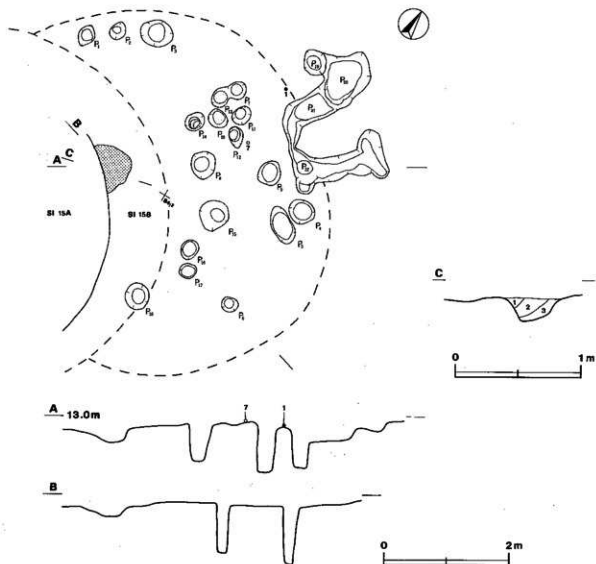
重複関係 本跡は、西部で第15-A号住居跡に掘り込まれている。同じく、西部で第15-B号住居跡を掘り込んでいる。第15-A号住居跡よりは古く、第15-B号住居跡よりは新しい。

規模と平面形 本跡は、西部が第15-A号住居跡に掘り込まれ、また、覆土が削平されているため、壁の立ち上がりをとらえることができなかった。遺物の広がり及びピットの配列から、径(5.90)mの(円形)と推定され、北東部に柄部長1.5m、最大幅1.4mの柄部の付く柄鏡形住居跡である。

主軸方向 [N-43°-E]

床 平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット 22か所 (P₁~P₂₂)。P₁は径28cmの円形で、深さ67cm。P₂は径28cmの円形で、深さ51cm。P₃は長径54cm、短径44cmの楕円形で、深さ102cm。P₄は長径44cm、短径40cmのほぼ円形で、深さ86cm。P₅は長径50cm、



第40図 第16号住居跡実測図

短径32cmの楕円形で、深さ54cm。P₆は径28cmの円形で、深さ97cm。規模にばらつきはあるが配列から支柱穴と思われる。P₇・P₈・P₉は深さ60～85cmの円形で、入口部に位置する同じタイプの柱穴であり柄部に伴うと思われる。P₁₉～P₂₂は、柄部の「八」字形の溝内に掘られており、出入り口施設に伴う柱穴と思われる。

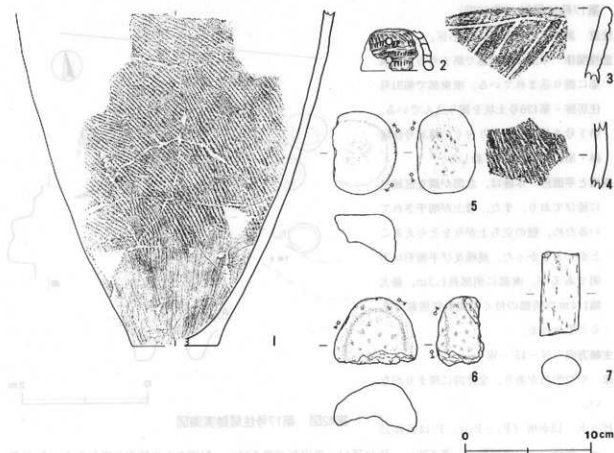
P₁₀～P₁₈は性格不明である。

炉 中央部に付設されている。南西部を第15-A号住居跡に掘り込まれているが、径[74]cmの円形で、床面から20cm掘り込まれた地床炉である。炉床面は、火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 暗褐色 焼土粒子中量、炭化粒子微量 3 赤褐色 炉床面下の火熱を受けた層
2 赤褐色 焼土大ブロック・焼土粒子多量

遺物 縄文土器及び縄文土器片が、細片で器形のわかるものは少ないが、覆土中から床面にかけて8,000点出土している。第41図の1は、深鉢形土器の口縁部から胴部にかけての破片で北部床面から出土している。2は、異形台付土器の台部片で流れ込みと思われる。3は口縁部片で覆土中から、4は胴部片でP₇覆土下層から出土している。5の磨石はP₁₀から、6の磨石は覆土中から、7の石棒は中央部床面から出土している。



第41図 第16号住居跡出土遺物実測・拓影図

第16号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第41図 1	深鉢形土器 縄文土器	B(26.8) C(6.8)	底部から胴部にかけての破片。底部は小形の平底で、胴部は外傾して立ち上がる。底部から胴部下外面に縦方向の削りが施されている。胴部は無胎縄文Rで施文している。	粘土・パミス にぶい褐色 普通	P34 70% 北部床面 (掘之内1)

図版番号	器種	計測値(m)	器形及び文様の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第41図 2	奥形台付土器 縄文土器	D(5.8) E(3.3)	台部片。彎曲した台部で2段の刻みが施され、上下2個の径0.5cmほどの孔が穿たれている。	粘土・色調・焼成 長石・石英・スコリア 黒褐色 普通	P35 覆土中

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重量(g)		
第41図5	磨石	6.7	(5.2)	4.7	(179.1)	安山岩	Q22 欠損品 P14内
6	磨石	(5.6)	6.7	(3.9)	(150.7)	安山岩	Q23 欠損品 覆土中
7	石棒	(6.8)	3.2	2.2	(90.2)	粘板岩	Q24 欠損品 中央部表面

第41図3・4は縄文土器片の拓影図である。3は口縁部直下から縄文地文が沈線により区画され、区画内は磨り消されている。4は粗い糸線が施されている。

所見 本跡は、「八」字形に開く柄をもつ柄鏡形住居跡である。時期は、住居の形態及び出土遺物から縄文時代後期（堀之内I式期）と思われる。

第17号住居跡（第42図）

位置 調査区の中央部，B4g1区。

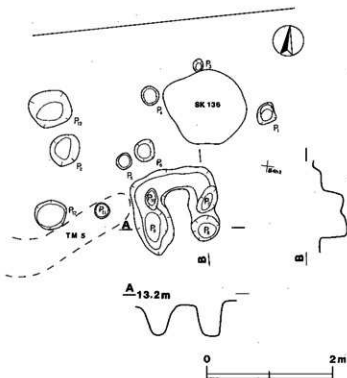
重複関係 本跡は、南部で第5号方形周溝墓に掘り込まれている。南東部で第31号住居跡・第136号土坑を掘り込んでいる。第5号方形周溝墓より古く、第31号住居跡・第136号土坑より新しい。

規模と平面形 本跡は、北部が調査区域外に延びており、また、覆土が削平されているため、壁の立ち上がりをとらえることができなかった。規模及び平面形は不明であるが、南部に柄部長1.3m、最大幅1.4mの柄部の付く柄鏡形住居跡であると思われる。

主軸方向 N-15°-W

床 やや凹凸があり、全体的に締まりがない。

ピット 13か所（P₁-P₁₃）。P₁は長径32



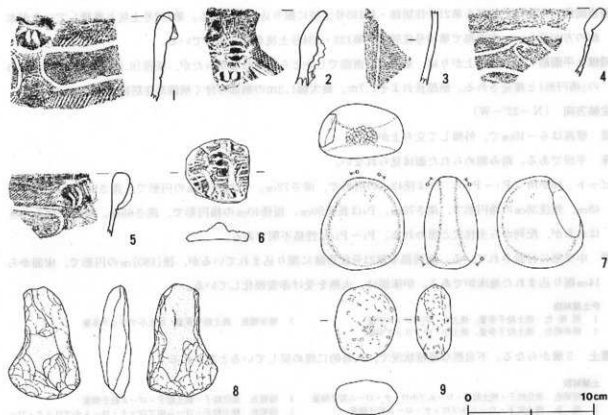
第42図 第17号住居跡実測図

cm、短径24cmの楕円形で、深さ20cm。P₂は径44cmの円形で深さ34cm。配列から主柱穴と思われる。P₇は長径46cm、短径22cmの楕円形で、深さ50cm。P₈は径46cmの円形で、深さ60cm。P₉は長径36cm、短径20cmの楕円形で、深さ38cm。P₁₀は長径64cm、短径40cmの楕円形で深さ60cm。いずれも柄部の溝内に掘られており、出入り口施設に伴う柱穴と思われる。P₁₁-P₁₃は性格不明である。

炉 北部が調査区域外で確認できなかった。

遺物 出土遺物が少量で、いずれも細片で器形のわかるものはほとんどない。第43図の1～5は、深鉢形土器及び鉢形土器の口縁・胴部片で覆土中から出土している。6の土製円板、7の磨石、8の打製石斧、9の浮

いずれも覆土中から出土している。



第43図 第17号住居跡出土遺物実測・拓影図

第17号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)			重量(g)	現存率(%)	器形及び文様の特徴	備考
		最大長	最大幅	最大厚				
第43図6	土製円板	5.2	5.2	1.5	35.2	100	表面隆起帯刻み目。沈線と単筋縄文。	D P 20 覆土中

図版番号	器種	計測値				重量(g)	石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)				
第43図7	磨石	7.4	6.8	4.2	273.7	安山岩	Q25 磨石兼用 覆土中	
8	打製石斧	(9.0)	5.8	2.5	(133.6)	凝灰岩	Q26 分銅形 欠損品 覆土中	
9	洋子	6.0	5.0	2.9	22.9	軽石	Q27 覆土中	

第43図1～5は縄文土器片の拓影図である。1は突起を有し楕円区画内は磨り消されており、2は波状口縁部の波頂部で、波頂部下の貼瘤には刻みが施されている。3は沈線区画内は刻みが施され、4は入り組み状の曲線が見られる。5は隆帯上に貼瘤が付されている。

所見 本跡は、覆土が削平されて壁の立ち上がりをとらえられず、平面形は柄鏡形住居跡の柄部のみが確認できただけであった。時期は、出土遺物が少量で細片ばかりであるが、縄文時代晩期(安行Ⅲb式期)と思われる。

第18号住居跡（第44回）

位置 調査区の西部，B3ha区。

重複関係 本跡は，北部を第21号住居跡・第135号土坑に掘り込まれている。第132号土坑と重複しているが本跡の方が新しい。南西部で第19号住居跡・第133・134号土坑を掘り込んでいる。

規模と平面形 壁の立ち上がりは，東部及び南部でしかとえられなかったが，長径[6.00]m，短径[5.60]mの[楕円形]と推定される。柄部長およそ1.7m，最大幅1.3mの柄部の付く柄鏡形住居跡である。

主軸方向 [N-22°-W]

壁 壁高は6-10cmで，外傾して立ち上がる。

床 平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット 16か所（P₁～P₁₆）。P₁は径42cmの円形で，深さ72cm。P₂は径40cmの円形で，深さ80cm。P₃は長径48cm，短径36cmの楕円形で，深さ70cm。P₄は長径50cm，短径40cmの楕円形で，深さ65cm。規模にばらつきはあるが，配列から主柱穴と思われる。P₅～P₁₆は性格不明である。

炉 中央部に付設されている。北西部を第21号住居跡に掘り込まれているが，径[180]cmの円形で，床面から14cm掘り込まれた地床炉である。炉床面は，火熱を受け赤変硬化している。

伊土層解群

- 1 黒褐色 焼土粒子多量，焼土小・中ブロック中量
 2 暗赤褐色 焼土粒子多量，焼土小・中ブロック少量
 3 暗赤褐色 焼土粒子多量，焼土小ブロック多量

覆土 5層からなる。不自然な堆積状況で，人為的に埋め戻していると思われる。

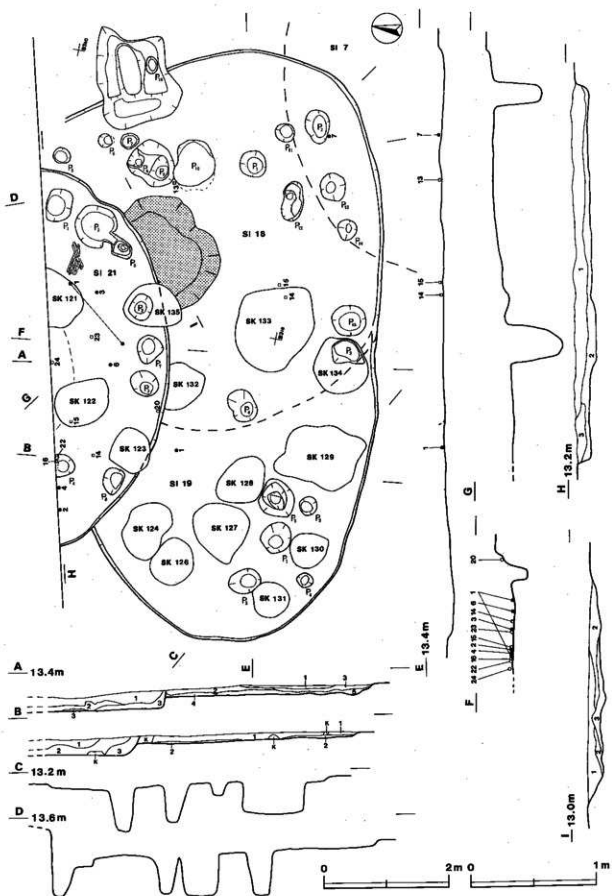
土層解群

- 1 暗褐色 炭化粒子・焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
 2 褐色 焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
 3 暗褐色 炭化粒子少量，ローム粒子微量
 4 暗褐色 炭化粒子・焼土粒子・ローム粒子微量
 5 暗褐色 焼土粒子・ローム中ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子微量

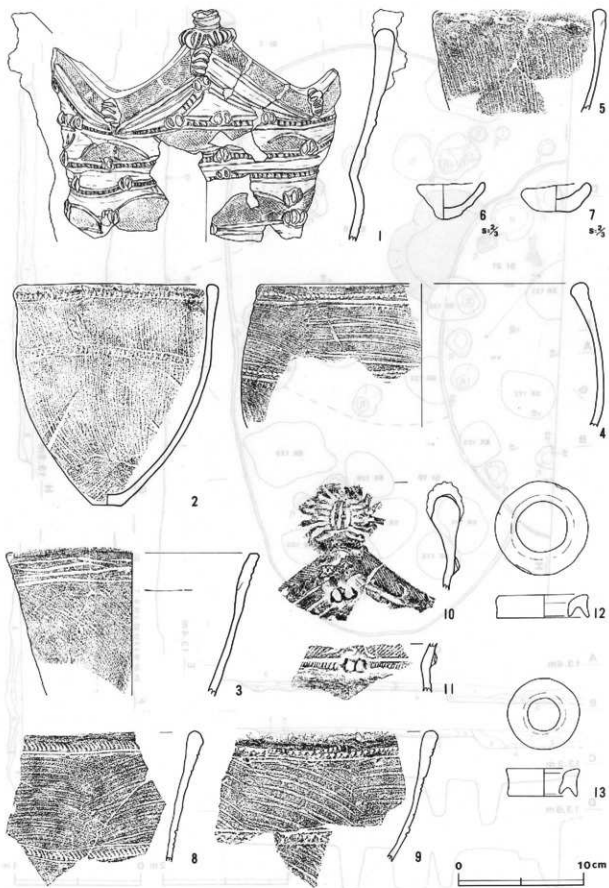
遺物 本跡の全域にわたる床面及び覆土中から，縄文土器及び縄文土器片が6,255点出土している。第45回の1は深鉢形土器の口縁部片で東部覆土中から，2・3・4・5は深鉢形土器で，2はP₂の覆土下層から，3は炉内から，4・5は南部覆土中から，6・7は手捏土器で，6は南東部壁際の覆土中から，7は南東部覆土下層から出土している。8・9・10は深鉢形土器の口縁部片で，8は中央部覆土下層から，9は東部覆土下層から，10は覆土中から出土している。11は胴部片で，覆土中から出土している。12-16は耳飾りで，12・14・15は南部床面から13は東部床面から，16は東部覆土中から出土している。17・18は不明土製品で，17は南部覆土中から，18は南部床面から出土している。19の磨石は東部覆土中から，20の石皿は南部覆土中から，21の勾玉，22の小玉は南部床面から出土している。

第18号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第45回 1	深鉢形土器 縄文土器	A[31.6] B[18.7]	胴部は内壁しながら立ち上がり，上位でくびれや外傾して口縁部に至る。5単位の波状口縁で，口縁部外面に隆起帯縄文が施され，波頂部には割みを加えた突起，波底部には縦長の割みを加えた突起が貼り付けられている。胴くびれ部に隆起帯に割み目を3本巡らし，三角文様が作られ，区画内は磨り滑されている。隆起帯の割み目文が接続する要所にはブク鼻状の瘤が貼り付けられている。くびれ以下の胴部中央は無彫縄文Rで施文し，縦割みを加えた横長粘瘤が2段に施されている。	灰石・石英 灰石・石英 赤褐色 普通	P36 10% 東部覆土中 (安行Ⅱ)

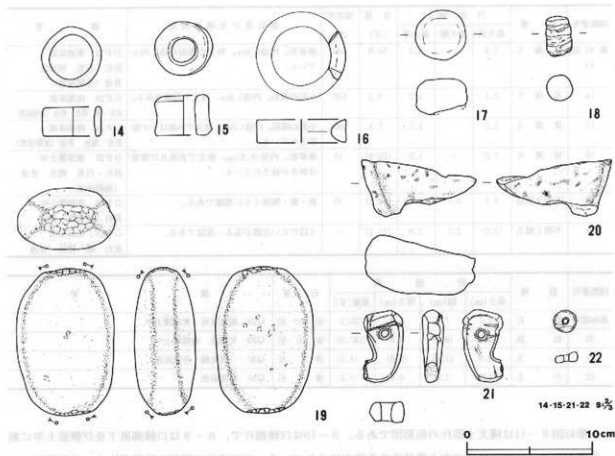


第44图 第18·19·21号住居跡实测图



第45图 第18号住居跡出土遺物実測・拓影图(1)

図録 縄文時代 15-17 第 18 号 1994



第46図 第18号住居跡出土遺物実測図(2)

図版番号	器種	計測値(m)	器形及び文様の特長	粘土・色調・焼成	備考
第45図 2	深鉢形土器	A 16.4	小形の粗製深鉢形土器。底部は小形で平底である。胴部は緩やかに内彎し、口縁部はやや外傾して立ち上がる。口縁部から胴部には右下がり斜行する粗い条線が施され、2段の沈線間に刻みがあり、文様が分断されている。	長石・石英・雑 明褐色 普通	P37 70% P:覆土下層 (安行Ⅱ)
	縄文土器	B 18.0			
		C 2.4			
3	深鉢形土器	A (20.2)	胴部上半から口縁部にかけての破片。口縁部から胴部には右下がり斜行する粗い条線が施され、口縁部には横位の沈線が走る。	長石・石英・スコリア 褐色 普通	P38 20% 炉内 (安行Ⅱ)
	縄文土器	B (11.4)			
4	深鉢形土器	A (26.0)	胴部上半から口縁部にかけての破片。胴部は緩やかに内彎しながら口縁部に至る。口縁部から胴部は粗い条線が施され、棒状工具押し文により文様が構成されている。	長石・スコリア 赤褐色 普通	P39 10% 南部覆土中 (安行Ⅱ)
	縄文土器	B (11.5)			
5	深鉢形土器	A (13.1)	胴部上半から口縁部にかけての破片。胴部は緩やかに内彎しながら口縁部に至る。折り返しにより口縁部は肥厚している。胴部は右下がり斜行する条線が施されている。	長石 褐色 普通	P40 20% 南部覆土中 (安行Ⅱ)
	縄文土器	B (8.3)			
6	手捏土器	A 2.6	丸底で、胴部は外傾しながら立ち上がる。内・外面に指痕による整形痕が残されているが粗い。	長石・石英 褐色 普通	P41 100% 南東部障壁覆土中
	縄文土器	B 1.4			
		C 0.4			
7	手捏土器	A 2.5	丸底で、胴部は外傾しながら立ち上がる。内・外面に指痕による整形痕が残されているが粗い。	長石・スコリア 褐色 普通	P42 100% 南東部覆土下層
	縄文土器	B 1.2			
		C 1.3			

図版番号	器種	計測値(m)			重量 (g)	現存率 (%)	器形及び文様の特徴	備考
		最大長	最大幅	最大厚				
第45図 12	耳飾り	7.5	—	1.8	(52.1)	90	滑草形。内径4.1cm。無文で裏面が深く凹んでいる。	D P21 南部店面 長石 褐色 普通 (後期後葉)

図版番号	器 種	計 測 値 (cm)			重 量 (g)	現存率 (%)	器 形 及 び 文 様 の 特 徴	備 考
		最大長	最大幅	最大厚				
第45図 13	耳 飾 り	5.9	—	2.2	56.9	100	滑車形。内径2.6cm。無文で裏面が浅く凹んでいる。	D P 22 南部床面 長石・石英 明褐色 普通 (後期後葉)
14	耳 飾 り	2.4	—	1.2	4.2	100	小形の楕形。内径1.8cm。無文で粗雑である。	D P 23 南部床面 長石・燧 褐色 普通 (後期後葉)
15	耳 飾 り	2.2	—	1.7	7.3	100	小形の楕形。内径1.0cm。無文で外面はナガ整形されている。	D P 24 南部床面 長石 褐色 普通 (後期後葉)
16	耳 飾 り	7.2	—	1.9	(10.6)	15	滑車形。内径(4.9)cm。無文で表面及び側面は磨きが施されている。	D P 25 東部覆土中 長石・石英 褐色 普通 (後期後葉)
17	不明土製品	4.1	4.1	2.8	(46.5)	95	表・裏・側面ともに粗雑である。	D P 26 南部覆土中 長石 黒褐色 普通
18	不明土製品 (3.2)	2.1	2.0	2.0	(15.1)	—	3段の太い沈線が高る。粗雑である。	D P 27 南部床面 長石・燧 褐色 普通

図版番号	器 種	計 測 値				石 質	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第46図19	磨 石	11.7	7.9	5.0	720.3	安 山 岩	Q28 燧石兼用 東部覆土中
20	石 皿	(4.6)	(9.2)	4.8	(147.2)	安 山 岩	Q29 欠損品 南部覆土中
21	勾 玉	2.8	(1.6)	(0.9)	(4.5)	滑 石	Q30 一部欠損 南部床面
22	小 玉	0.9	1.0	0.4	0.3	滑 石	Q31 南部床面

第45図8～11は縄文土器片の拓影図である。8～10は口縁部片で、8・9は口縁部直下及び胴部上半に刻文帯が廻り、口縁部には下向き弧線状の条線が施されている。10は波状口縁部の波頂部片で、波頂部下にはブタ鼻状の瘤が貼りつけられている。11は刻文帯上にはブタ鼻状の瘤が貼りつけられている。

所見 本跡は、3軒の住居跡が重複しており流れ込みの遺物もあるが、時期は、床面の出土遺物から縄文時代後期(安行Ⅱ式期)と思われる。

第19号住居跡 (第44図)

位置 調査区の西部、B31a区。

重複関係 本跡は、北部で第21号住居跡、第124・126号土坑、東部で第18号住居跡、南西部で第130・131号土坑、中央部で第127・128号土坑、南部で第129・134号土坑に掘り込まれている。いずれの遺構よりも本跡が古い。

規模と平面形 壁の立ち上がりは、西部及び南部でしかとえられなかったが、長径(5.85)m、短径(4.34)mの[楕円形]と推定される。

長径方向 [N-37°-W]

壁 壁高は8～10cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット 5か所 (P₁～P₅)。P₁は長径52cm、短径48cmの円形で、深さ65cm。P₂は長径50cm、短径38cmの楕円形で、深さ72cmの楕円形。規模及び配列から主柱穴と思われる。P₃は径26cmの円形で、深さ25cm。P₄は径20cmの円形で、深さ64cm。規模及び位置関係から補助柱穴と思われる。P₅は性格不明である。

炉 第18号住居跡と8基の土坑に掘り込まれており、炉は確認できなかった。

覆土 2層からなる自然堆積である。

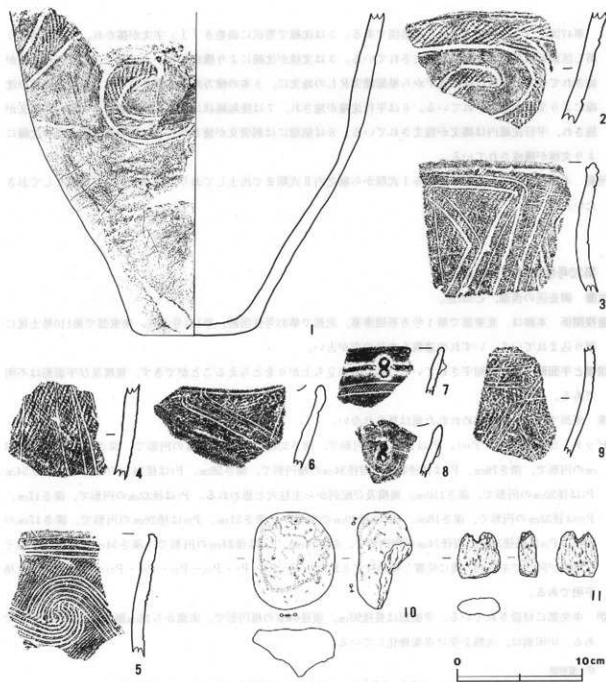
実測拓影(1/10) 土層解説

土層解説

1 暗褐色 炭化粒子少量、焼土粒子・ローム粒子微量

2 暗褐色 炭化粒子・ローム小ブロツク少量、焼土粒子・ローム粒子微量

遺物 全域の床面及び覆土中から、縄文土器及び縄文土器片が1,013点出土している。第47図の1は、深鉢形土器で中央部床面から、2～9は胴部片及び口縁部片で、2は中央部覆土中から、3は西部覆土中から出土している。4・5・6・8は中央部覆土中から、7・9は西部覆土中から出土している。10の磨石は覆土中から、11の浮子は、中央部覆土中層から出土している。



第47図 第19号住居跡出土遺物実測・拓影図

第19号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	首径値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色画・焼成	備考
第47図 1	深鉢形土器 縄文土器	B (26.0) C 10.0	底部から胴部にかけての破片。底部は平底で、胴部はやや内湾して立ち上がる。胴部は沈線で帯状に「J」字文を描き、区画内は縄文が施され区画外は磨り削られている。胴部下半は無文である。	長石・石英 にびい登 普通	P43 40% 中央部床面 (称名寺I)

図版番号	器種	計 画 値				石 質	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第47図10	磨 石	(7.7)	(5.6)	(4.4)	(216.3)	安山岩	Q32 欠損品 中央部覆土中
11	浮 子	(3.7)	3.4	1.5	(5.0)	軽 石	Q33 欠損品 中央部覆土中

第47図2～9は縄文土器片の拓影図である。2は沈線で帯状に渦巻き「J」字文が描かれ、区画内は磨り消し区画外は単節縄文RLが施文されている。3は文様が沈線により構成され、4は縄文に縦方向の沈線が施されている。5は口縁部直下から単節縄文RLの地文に、3本の横方向の沈線及び7本1組の曲線状の沈線により文様が構成されている。6は平行沈線が施され、7は隆起線状に刻み及びび貼瘤には2個の刺突文が施され、平行沈線内は縄文が施文されている。8は貼瘤には刺突文が施され、9は斜め及び縦方向の沈線により文様が構成されている。

所見 本跡の時期は、遺物が称名寺I式期から堀之内II式期まで出土しており、縄文時代後期前葉としておきたい。

第20号住居跡 (第48図)

位置 調査区の西部、C3a1区。

重複関係 本跡は、北東部で第1号方形周溝墓、北部で第33号住居跡、第111号土坑、南東部で第110号土坑に掘り込まれている。いずれの遺構も本跡の方が古い。

規模と平面形 覆土が削平されているため、壁の立ち上がりをとらえることができず、規模及び平面形は不明である。

床 平坦である。踏み固められた面は見られない。

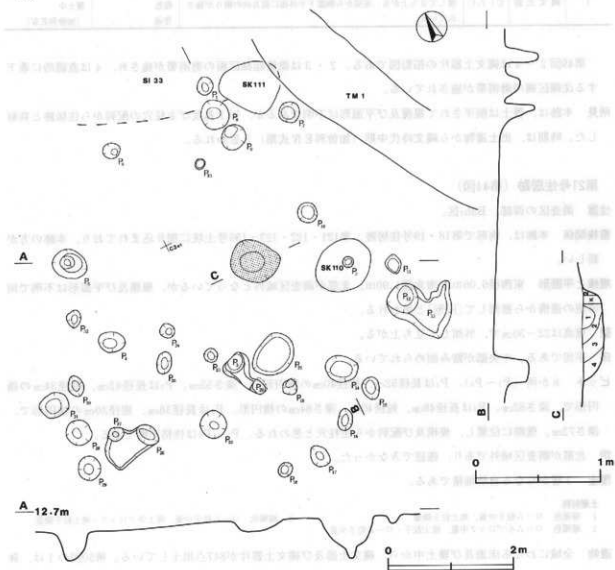
ピット 33か所 (P₁～P₃₃)。P₁は径28cmの円形で、深さ53cm。P₂は径24cmの円形で、深さ68cm。P₃は径34cmの円形で、深さ76cm。P₄は長径40cm、短径34cmの楕円形で、深さ58cm。P₅は径24cmの円形で、深さ54cm。P₆は径30cmの円形で、深さ110cm。規模及び配列から主柱穴と思われる。P₇は径32cmの円形で、深さ17cm。P₁₀は径32cmの円形で、深さ18cm。P₂₃は径20cmの円形で、深さ21cm。P₂₄は径26cmの円形で、深さ17cmの円形。P₂₅は長径32cm、短径24cmの楕円形で、深さ17cm。P₂₆は径24cmの円形で、深さ34cmである。それぞれ規模が同じで主柱穴の間に位置し補助柱穴と思われる。P₈・P₉・P₁₁～P₂₂・P₂₅・P₂₇～P₃₁・P₃₃は性格不明である。

炉 中央部に付設されている。平面形は長径98cm、短径64cmの楕円形で、床面から18cm掘り込まれた地床炉である。炉床面は、火熱を受け赤変硬化している。

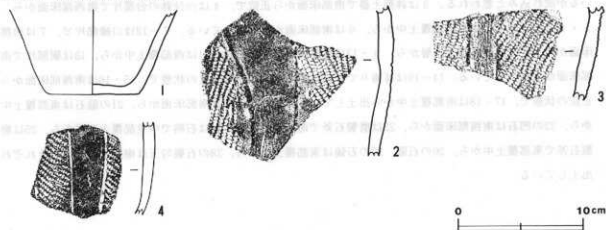
炉土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子・焼土中ブロック多量、炭化小ブロック微量 3 暗褐色 焼土粒子・ローム粒子微量
2 暗褐色 焼土中ブロック少量、焼土粒子・ローム粒子微量 4 暗赤褐色 焼土粒子少量、炭化小ブロック微量

遺物 全域から縄文土器片が548点出土している。第49図の1は、深鉢形土器の底部から胴部にかけての破片で覆土中から、2～4は深鉢形土器の胴部片で、2はP1の覆土下層から、3・4は覆土中から出土している。



第48図 第20号住居跡実測図



第49図 第20号住居跡出土遺物実測・拓影図

第20号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第49図 1	深鉢形土器 縄文土器	B〔6.7〕 C〔7.1〕	底部から胴部下半にかけての破片。底部は平底で、胴部はやや外傾して立ち上がる。底部から胴部下外面に腹方向の削りが施されている。	長石・バミス 橙色 普通	P44 10% 覆土中 (加曾利EIV)

第49図2～4は縄文土器片の拓影図である。2・3は微隆起線区画の磨消帯が施され、4は直線的に垂下する沈線区画の磨消帯が施されている。

所見 本跡は、覆土は削平されて規模及び平面形は不明であるが、炉1基及び主柱穴の配列から住居跡と判断した。時期は、出土遺物から縄文時代中期(加曾利EIV式期)と思われる。

第21号住居跡(第44図)

位置 調査区の西部, B3ha区。

重複関係 本跡は、南部で第18・19号住居跡, 第121・122・123・135号土坑に掘り込まれており, 本跡の方が新しい。

規模と平面形 東西径6.06m, 南北径1.90m。北部が調査区域外となっているが, 規模及び平面形は不明で同時期の遺構から推測して〔円形〕と思われる。

壁 壁高は22～30cmで, 外傾して立ち上がる。

床 平坦である。中央部が踏み固められている。

ピット 8か所(P₁～P₈)。P₁は長径52cm, 短径40cmの楕円形で, 深さ53cm。P₂は長径42cm, 短径34cmの楕円形で, 深さ82cm。P₃は長径48cm, 短径40cm, 深さ84cmの楕円形。P₄は長径36cm, 短径30cmの楕円形で, 深さ72cm。壁際位置し, 規模及び配列から主柱穴と思われる。P₅～P₈は性格不明である。

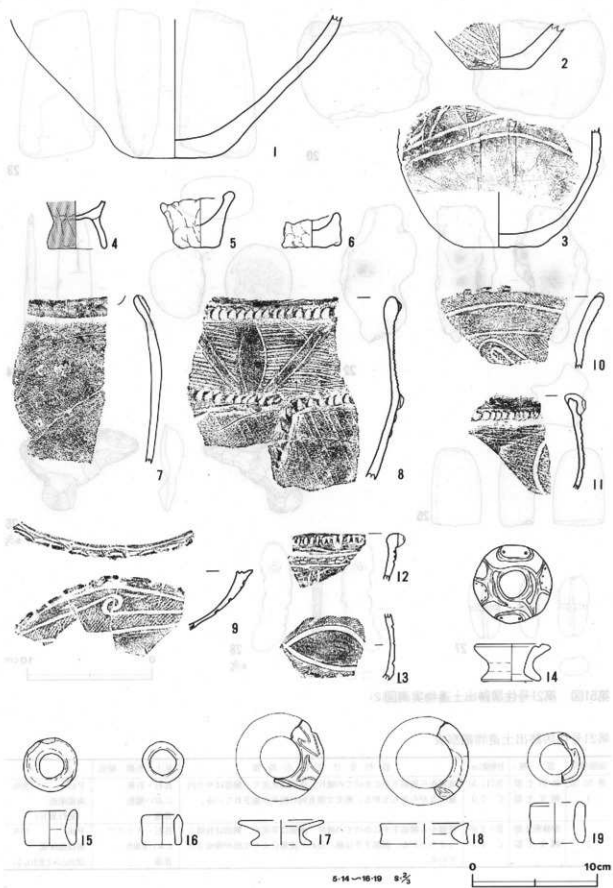
炉 北部が調査区域外であり, 確認できなかった。

覆土 3層からなる自然堆積である。

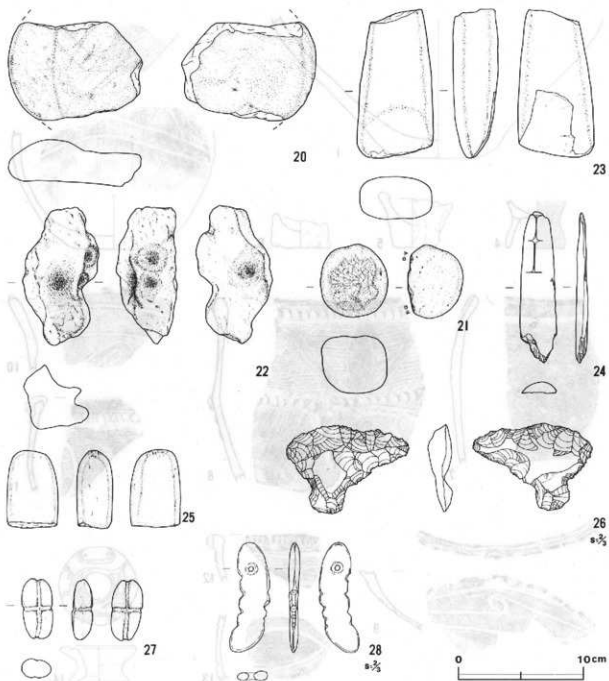
土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子微量 3 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土中ブロック・焼土粒子微量
2 暗褐色 ローム小ブロック中量, 焼土粒子・ローム粒子少量

遺物 全域にわたる床面及び覆土中から, 縄文土器及び縄文土器片が847点出土している。第50図の1は, 鉢形土器の底部から胴部にかけての破片で南部床面から, 2は深鉢形土器の底部片で南西部床面から出土しているが流れ込みと思われる。3は鉢形土器で南部床面から正位で, 4は台付鉢の台部片で南西部床面から, 5・6手捏土器で5は南西部覆土中から, 6は南部床面から出土している。7～12は口縁部片で, 7は南部床面から, 8は北東部覆土下層から, 9・12は東部覆土中から, 10・11は西部覆土中から, 13は胴部片で南部床面から出土している。14～19は耳飾りで, 14は南西部床面から横位の状態で, 15・16は南西部床面から正位の状態で, 17・18は南部覆土中から出土している。20の石皿片は南部床面から, 21の敷石は東部覆土中から, 22の凹石は南西部床面から, 23は磨製石斧で南部床面から, 24は石剣で中央部覆土下層から, 25は磨製石斧で東部覆土中から, 26の石匙, 27の石錘は東部覆土中から, 28の石製勾玉は南部覆土中からそれぞれ出土している。



第50图 第21号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)



第51図 第21号住居跡出土遺物実測図(2)

第21号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 及 び 文 様 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第 50 図 1	鉢形土器	B (11.5)	底部から胴部下手にかけての破片。底部は丸底で、胴部はやや内彎しながら立ち上がる。無文で横方向の網目が施されている。	長石・石英に多い褐色	P45 30% 南部床面 (安行Ⅲ b)
	縄文土器	C 7.0			
2	深鉢形土器	B (3.6)	底部から胴部下手にかけての破片。底部は平底で、胴部は外傾して立ち上がる。胴部下手は細く浅めの沈線により文様が構成されている。	長石・スコリアに多い褐色	P46 15% 南西部床面 (遺れ込みと思われる)
	縄文土器	C 4.6			

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
3	鉢形土器	B (9.5)	碗状で内彎しながら立ち上がる。底部は平底で、胴部は斜位の沈線を描き沈線間に刺突文が巡る。外面は縦方向の削りにより整形されている。	長石・スコリア にぶい褐色 普通	P47 60% 南部床面 (安行Ⅲb)
	縄文土器	C 6.0			
4	台付土器	B (3.9)	台部片。台部は内彎して立ち上がる。無文で外面指痕による整形痕が残されているが粗い。僅かに赤彩されている。	長石・石英・スコリア 浅黄褐色 普通	P48 10% 西部床面 (安行Ⅲb)
	縄文土器	C 4.4			
5	手捏土器	A 2.9	平底で、胴部は外彎しながら立ち上がる。内・外面に指痕による整形痕が残されている。	長石・石英 にぶい褐色 普通	P49 100% 西部覆土中
	縄文土器	B 2.3			
		C 1.6			
6	手捏土器	A 4.0	平底で、内・外面に指痕による整形痕が残されているが粗い。	長石 明赤褐色 普通	P50 90% 南部床面
	縄文土器	B 2.8			
		C 4.3			

図版番号	器種	計測値(cm)			重量(g)	現存率(%)	器形及び文様の特徴	備考
		最大長	最大幅	最大厚				
第50図14	耳飾り	3.2	—	1.5	8.1	100	清室形。内径1.0cm。側面はつづみ状を呈し、表面は沈線により上下・左右対称な文様構成をしている。裏面及び側面は磨きが施されている。	D P28 西部床面 長石・スコリア 褐色 普通 (晩期前期)
		2.2	—	1.4	5.5	90	小形の環形。内径1.0cm。無文で内・外面ナデ整形されているが粗雑である。	D P29 西部床面 長石 褐色 普通 (後期後葉-晩期前期)
16	耳飾り	1.6	—	1.2	2.2	90	小形の環形。内径1.2cm。無文で内・外面ナデ整形されているが粗雑である。	D P30 西部床面 長石・石英 灰褐色普通 (後期後葉-晩期前期)
17	耳飾り	[7.2]	—	2.0	(9.1)	30	清室形。内径[3.2]cm。側面はつづみ状を呈し、表面は沈線により文様が構成されている。	D P31 西部覆土中 長石・石英 褐色 普通 (晩期前期)
18	耳飾り	[7.1]	—	1.6	(16.2)	40	清室形。内径[4.5]cm。無文で表面及び側面は磨きが施されている。	D P32 西部覆土中 長石 暗赤褐色 普通 (後期後葉)
19	耳飾り	[1.8]	—	1.6	(1.9)	40	小形の環形。内径[1.2]cm。無文で内・外面ナデ整形されているが粗雑である。	D P33 西部覆土中 長石・スコリア 褐色 普通 (後期後葉-晩期前期)

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第51図20	石 瓦	(8.1)	(10.7)	3.8	(360.3)	安山岩	Q34 欠損品 南部床面
21	版 石	5.9	5.5	4.5	(178.1)	安山岩	Q35 一部欠損 西部覆土中
22	四石	(11.0)	(6.2)	(4.9)	(148.1)	流紋岩	Q36 欠損品 西部床面
23	磨製石斧	(12.0)	6.1	3.5	(456.6)	緑色凝灰岩	Q37 定角式 刀部欠損 南部床面
24	石 錐	(12.0)	(2.8)	(0.9)	(40.0)	粘板岩	Q38 欠損品 中央部覆土下層
25	磨製石斧	(6.2)	4.0	2.9	(125.5)	硬質砂岩	Q39 乳棒状 欠損品 西部覆土中
26	石 錐	3.5	4.9	1.0	10.2	メノウ石	Q40 西部覆土中
27	石 錐	4.8	2.5	1.7	26.4	砂 岩	Q41 西部覆土中
28	勾 玉	4.4	1.6	0.4	3.6	凝灰岩	Q42 西部覆土中

第50図7～13は縄文土器片の拓影図である。7は粗製土器で、8は2段の隆帯に押捺がなされ、隆帯間は横方向の糸線及び沈線区画内は磨り消されている。9・10は突起を有し沈線区画内は磨り消されている。11は隆帯上は押捺がなされ、12は隆帯上に刻みが施され、平行沈線区画内は列点文が施されている。13は縄文地文に曲線状の沈線区画内は磨り消されている。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代晩期(安行Ⅲb式期)と思われる。

第22号住居跡 (第52図)

位置 調査区の西部, B3j区。

重複関係 本跡は, 西部で第56・57・58号土坑, 南部で第63・160号土坑, 中央部で第103号土坑を掘り込んでおり, 本跡の方が新しい。

規模と平面形 覆土が削平されているため, 壁の立ち上がりをとらえることができなかったが, 遺物の広がり及びピットの配列から長径(5.73)m, 短径(5.06)mの(楕円形)と推定される。

長径方向 [N-66°-W]

床 平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット 17か所。(P₁-P₁₇)。P₁は径32cmの円形で, 深さ102cm。P₂は径30cmの円形で, 深さ60cm。P₃は径24cmの円形で, 深さ60cm。P₄は径40cmの円形で, 深さ100cm。P₅は長径46cm, 短径40cmの不整形円形で, 深さ74cm。P₆は径38cmの円形で, 深さ73cm。P₇は径36cmの円形で, 深さ113cm。P₈は長径60cm, 短径50cmの楕円形で, 深さ86cm。規模及び配列から支柱穴と思われる。P₉-P₁₇は, 規模及び配列にばらつきがあり性格不明である。

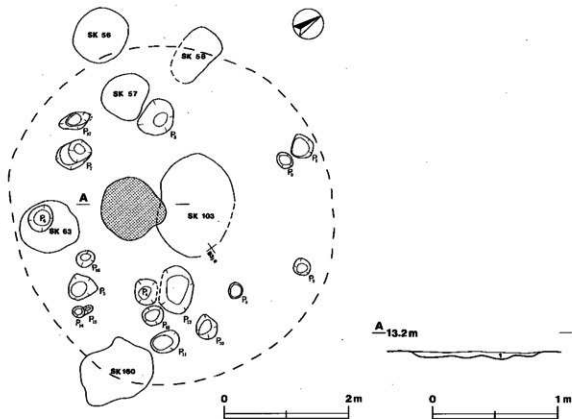
炉 中央部に付設されている。平面形は長径82cm, 短径72cmの楕円形で, 床面から6cm掘り込まれた地床炉である。炉床面は, 火熱を受けているがあまり赤変硬化していない。

伊土層特徴

1 赤褐色 黄土粒子多量, ローム粒子中量, 炭化物粒子微量

遺物 出土遺物は極少量で, いずれも細片で器形のわかるものはない。

所見 本跡は, 覆土が削平されて壁の立ち上がりをとらえられずに, 平面形は炉を中心としたピットの配列からの推定である。時期を判断する遺物がなく, 時期は不明である。



第52図 第22号住居跡実測図

第23号住居跡 (第53図)

位置 調査区の西部, C2a区。

重複関係 本跡は, 南部で第24-B号住居跡, 中央部で第75・81・119号土坑に掘り込まれている。いずれの遺構よりも本跡の方が古い。

規模と平面形 ほとんど覆土が削平されているため, 壁の立ち上がりをとらえることができなかったが, 遺物の広がり及びピットの配列から長径(4.75)m, 短径(4.70)mの(円形)と推定される。

床 平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット 7か所 (P1~P7)。P1は径40cmの円形で, 深さ20cm。P2は径44cmの円形で, 深さ19cm。P3は径40cmの円形で, 深さ20cm。P4は長径38cm, 短径30cmの楕円形で, 深さ31cm。P5は長径30cm, 短径24cmの楕円形で, 深さ19cm。P6は長径38cm, 短径32cmの楕円形で, 深さ20cm。規模及び配列から支柱穴と思われる。P7は長径60cm, 短径58cmのはば円形で, 深さ13cm。他のピットに比べ大形で性格は不明である。

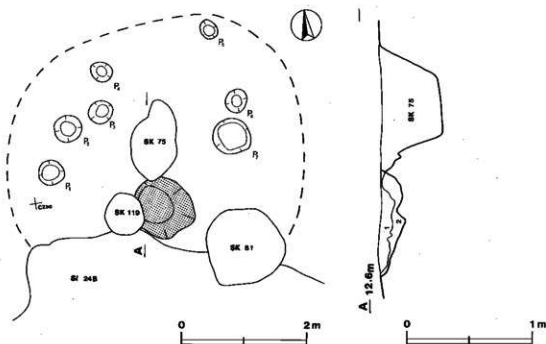
炉 南部に付設されている。平面形は長径102cm, 短径90cmの楕円形で, 床を20cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉床面は, 火熱を受けているがあまり赤変硬化していない。

炉土層観察

1 暗赤褐色 焼土粒子・炭化物粒子・ローム粒子少量

2 暗赤褐色 ローム小ブロック中量, 焼土粒子微量

遺物 出土遺物は少量で, いずれも細片で器形のわかるものはない。第54図の1~3は, 深鉢形土器の口縁部片で, 1は南部覆土中から, 2は東部覆土中から, 3は覆土中から出土している。4の磨石は東部覆土中から出土している。



第53図 第23号住居跡実測図

第23号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計 測 値				石 質	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第54図4	磨 石	(5.2)	5.2	(3.3)	(100.4)	安 山 岩	Q43 欠損品 東部覆土中



第54図 第23号住居跡出土遺物実測・拓影図

第54図1～3は縄文土器片の拓影図である。1～3は口縁部片で、1は沈線で区画文が描かれ、2は口縁部無文帯下に隆起線が施され、3は沈線区画内に縄文が施文されている。

所見 本跡は、縄文時代中期加曾利EⅢ式期から称名寺I式期までの遺物が出土しているが、主体となる遺物が縄文時代中期加曾利EⅢ～Ⅳ式期に比定されるものが多く、本跡の時期と思われる。

第24-A号住居跡 (第55図)

位置 調査区の西部、C2b区。

重複関係 本跡は、第24-B号住居跡に掘り込まれており、本跡の方が古い。

規模と平面形 第24-B住居跡の床面下から本跡が確認された。南部は、覆土が削平されている。長径[5.30]m、短径4.73mの楕円形と推定される。

長径方向 N-33°-E

壁 壁高は15～60cmで、やや外傾して立ち上がる。

床 平坦である。炉東部に踏み固められた面が見られる。

ピット 14か所(P₁～P₁₄)。P₁は長径32cm、短径24cmの楕円形で、深さ34cm。P₂は長径36cm、短径28cmの楕円形で、深さ60cm。P₃は径24cmの円形で、深さ54cm。P₄は長径30cm、短径24cmの楕円形で、深さ34cm。P₅は長径28cm、短径26cmのほぼ円形で、深さ37cm。P₆は長径36cm、短径32cmのほぼ円形で、深さ39cm。P₇は径30cmの円形で、深さ40cm。規模及び配列から主柱穴と思われる。炉内に位置するP₁₆・P₁₇の2つのピットは、炉床を掘り込んでおり第24-B号住居跡のピットと思われる。P₈は径24cmの円形で、深さ85cm。P₉は長径28cm、短径24cmのほぼ円形で、深さ76cm。共に深さが他のピットと比べ深く性格は不明である。

炉 中央部に付設されている。平面形は長径176cm、短径140cmの不整楕円形で、炉南部に2つの深鉢形土器を埋め込んだ土器埋設炉である。炉床は、それほど焼けてなく赤変硬化した部分も見られない。北部に火熱を受け赤変硬化した焼土ブロックが炉床に認められるので、土器埋設炉の使用は短期間であったと思われる。

炉土層解説

- | | | | |
|--------|---------------------------------|-------|---------------------------------|
| 1 暗赤褐色 | 焼土粒子中量、焼土小ブロック・ローム粒子・ローム小ブロック少量 | 3 暗褐色 | 焼土中ブロック中量、焼土粒子・ローム粒子・ローム小ブロック少量 |
| 2 暗褐色 | 焼土粒子中量、ローム粒子少量 | 4 褐色 | ローム小・中ブロック中量 |

覆土 3層からなる自然堆積である。

土層解説

2 極薄褐色 ローム粒子・ローム小ブロック中量、炭化粒子少量、 3 褐色 焼土粒子微量
 焼土粒子・焼土小ブロック微量 4 褐色 ローム・焼土・炭化粒子・ローム小ブロック中量

遺物 全域にわたる床面及び覆土中から、縄文土器及び縄文土器片が4,853点出土している。第56図の1・2は、深鉢形土器で炉内から出土している。3～6は深鉢形土器の口縁部片で、3は南部床面から、4は東部覆土中から、5は北部床面から、6はP₂の覆土下層から、7・8は口縁部の突起部で南部床面から出土している。9は胴部片で、覆土中から出土している。10～13は石皿の破片で、10・11は北部床面から、12は覆土中から、13は覆土中から、14・15は磨石で北部覆土下層から、16・17は打製石斧で北部覆土下層から、18の磨製石斧は覆土中から、19の石剣は北東部覆土中層から、20の勾玉、21～23の石鏃、24の敲石は覆土中から出土している。

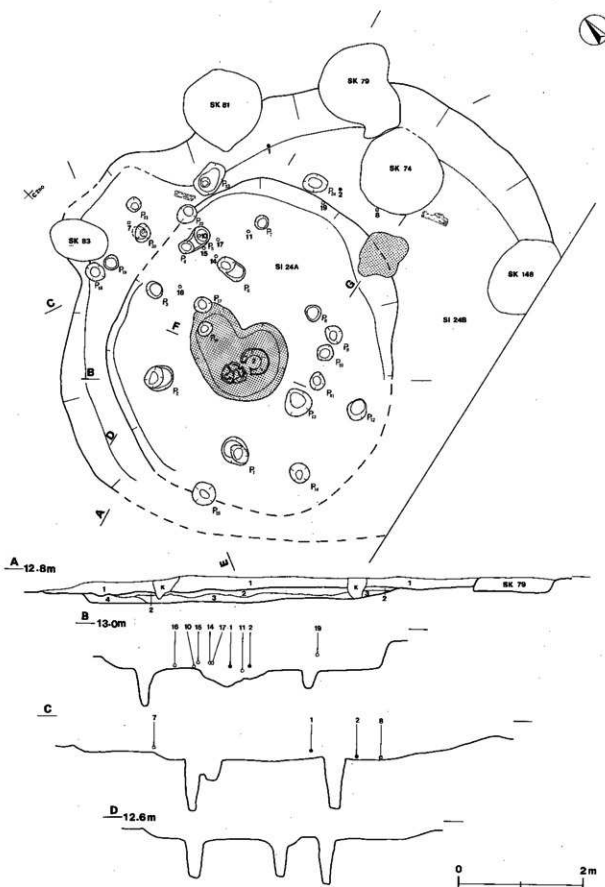
第24-A号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第56図 1	深鉢形土器	A(39.2)	口縁部から胴部上半にかけての破片。胴部は縦やかに外傾し、口縁部は内彎しながら立ち上がる。胴部は地文に単節RLの縄文が施され、3条の沈線で区画された磨消帯を口縁部直下から直線状に懸垂している。	長石・石英にぶい褐色 普通	P51 40% 炉内 (加曾利EⅢ)
	縄文土器	B(23.2)			
2	深鉢形土器	B(14.6)	胴部片。胴部は地文に単節RLの縄文が施され、2条の沈線で区画された磨消帯を口縁部直下から直線状に懸垂している。	長石 にぶい褐色 普通	P52 20% 炉内(加曾利EⅢ)
	縄文土器				

図版番号	器種	計 測 値				石 質	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第57図10	石 皿	(8.7)	(8.3)	3.6	(273.0)	安山岩	Q44 欠損品 北部床面
11	石 皿	(8.1)	(9.3)	6.6	(295.4)	安山岩	Q45 凹形兼用 欠損品 北部床面
12	石 皿	(9.8)	(7.2)	4.7	(245.0)	安山岩	Q46 欠損品 覆土中
13	石 皿	(8.3)	(6.7)	5.0	(262.3)	安山岩	Q47 凹形兼用 欠損品 覆土中
14	磨 石	8.4	8.0	5.9	524.9	安山岩	Q48 北部覆土下層
15	磨 石	5.9	6.2	4.4	230.1	安山岩	Q49 北部覆土下層
16	打製石斧	10.1	5.7	1.3	(134.6)	安山岩	Q50 分銅形 一部欠損 北部覆土下層
17	打製石斧	(11.5)	7.1	2.4	(134.0)	粘板岩	Q51 撥形 一部欠損 北部覆土下層
18	磨製石斧	(9.3)	(5.1)	3.3	(243.2)	硬質砂岩	Q52 乳棒状 刃部欠損後敲石として再利用 覆土中
19	石 剣	(16.8)	2.6	1.8	(117.3)	粘板岩	Q53 欠損品 北東部覆土中層
20	勾 玉	3.8	2.9	0.7	7.1	安山岩	Q54 覆土中
21	石 鏃	1.5	1.4	0.3	0.4	黒曜石	Q55 凹形無茎鏃 覆土中
22	石 鏃	2.1	1.0	0.3	0.4	チャート	Q56 凹形無茎鏃 覆土中
23	石 鏃	(1.7)	1.9	0.6	(1.2)	チャート	Q57 欠損品 凹形無茎鏃 覆土中
24	敲 石	4.1	3.3	2.9	55.2	チャート	Q60 覆土中

第56図3～9は縄文土器片の拓影図である。3～6は口縁部片で、3は単節縄文RLの地文に沈線及び隆線により文様が構成され、4は単節縄文RLの地文が沈線で区画され、区画内は磨消帯が直線的に垂下し、5は隆線内は磨り消されており、6は磨消帯が沈線により区画されている。7・8は把手で波頂部は円形で、波頂部直下からは太い沈線が施されている。9は隆線及び沈線により区画され、区画内は単節縄文RLと蛇行する条線が施されている。

所見 本跡の時期は、炉体土器及び出土遺物から縄文時代中期(加曾利EⅢ式期)と思われる。



第55图 第24-A·B号住居踏实测图

第24-B号住居跡 (第55図)

位置 調査区の西部, C2b区。

重複関係 本跡は、中央部で第24-A号住居跡を掘り込み、東部で第74・79号土坑を掘り込んでおり、本跡の方が新しい。また、南東部で第148号土坑に掘り込まれており、本跡の方が古い。また、北部で第81・83号土坑に掘り込まれているが、後世の掘り込みと思われる。

規模と平面形 南部は、覆土が削平されている。長径8.26m、短径7.90mの楕円形と思われる。

長径方向 N-16°-W

壁 壁高は10-25cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦であるが、軟らかく踏み固められた面は見られない。

ピット 10か所 (P15~P24)。P15は径36cmの円形で、深さ29cm。P16は径32cmの円形で、深さ43cm。P22は径32cmの円形で、深さ50cm。P24は長径38cm、短径30cmの楕円形で、深さ83cm。配列から主柱穴と思われる。P15・P17・P19・P21・P23は規模及び配列にばらつきがあり性格は不明である。

炉 南東部に付設されている。平面形は長軸86cm、短軸78cmの不定形で、床を17cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉床面は、火熱を受けているがあまり赤変硬化していない。

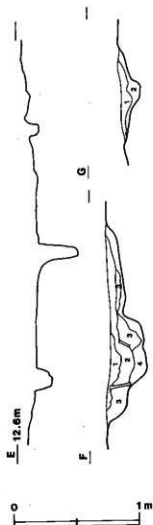
伊土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土小ブロック少量、炭化小ブロック微量
- 2 赤褐色 焼土小ブロック・焼土粒子・ローム小ブロック微量

覆土 1層からなる自然堆積である。

土層解説

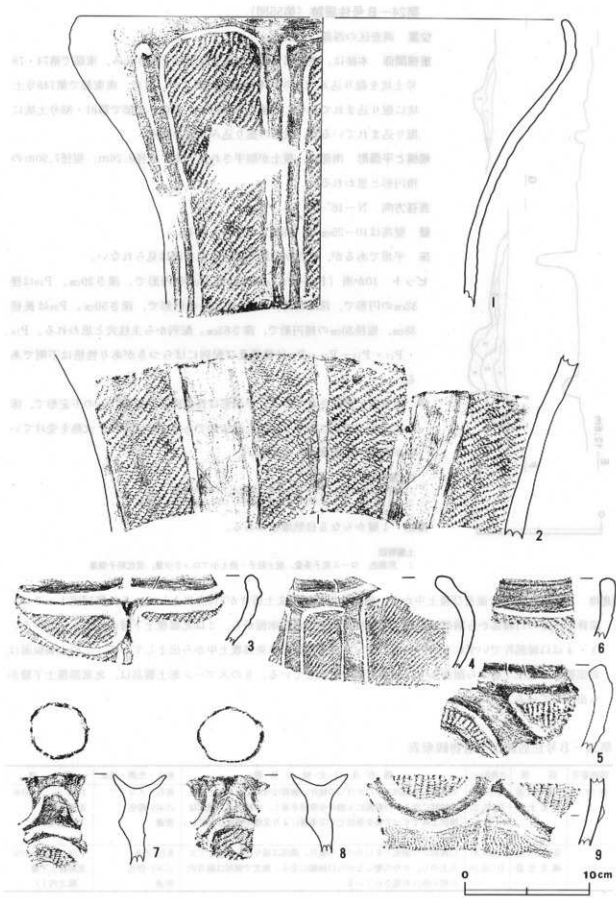
- 1 黒褐色 ローム粒子多量、焼土粒子・焼土小ブロック少量、炭化粒子微量



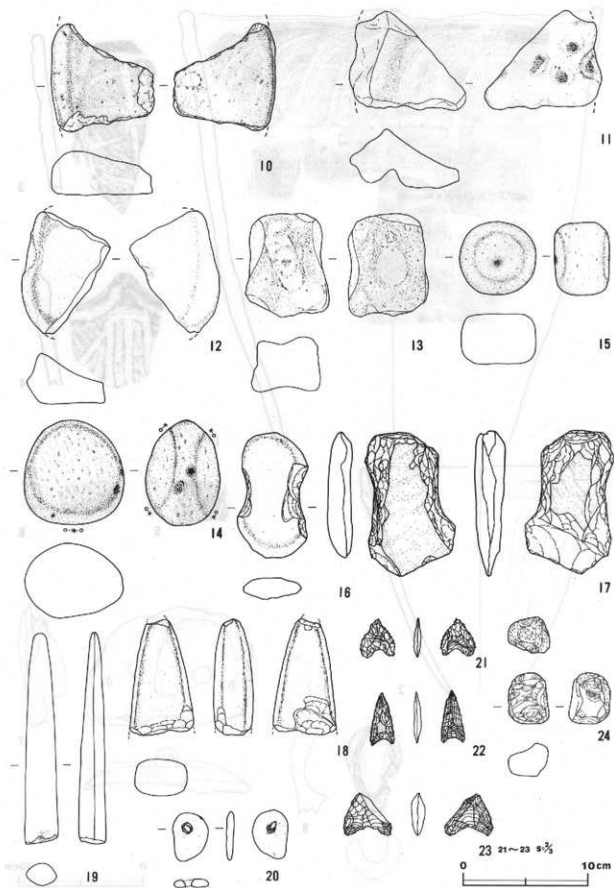
遺物 全域にわたる床面及び覆土中から、縄文土器及び縄文土器片が310点出土している。第58図1・2は、深鉢形土器の口縁部から胴部にかけての破片で、1は北部床面から、2は北部覆土下層から出土している。3・4は口縁部片でいずれも炉内から、5・6は胴部片で中央部覆土中から出土している。7の土製仮面は、北部壁際の覆土下層から顔面を下にした状態で出土している。8のスプーン形土製品は、北東部覆土下層から出土している。

第24-B号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 及 び 文 様 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第 58 図 1	深鉢形土器	A (34.0)	口縁部から胴部下半にかけての破片。胴部は外傾して立ち上がり口縁部に至る。口唇部に4個の小突起を有し、口縁部から胴部は帯状工具で6-7条を単位とする条線により文様が構成されている。	長石・スコリア にぶい褐色 普通	P53 50% 北部床面 (堀之内I)
	縄文土器	B (35.2)			
2	深鉢形土器	A (18.8)	口縁部から胴部下半にかけての破片。胴部は緩やかに外傾して立ち上がり、やや内彎しながら口縁部に至る。無文で胴部は縦方向の粗い削りが施されている。	長石・石灰 にぶい褐色 普通	P54 30% 北部覆土下層 (堀之内I)
	縄文土器	B (18.2)			

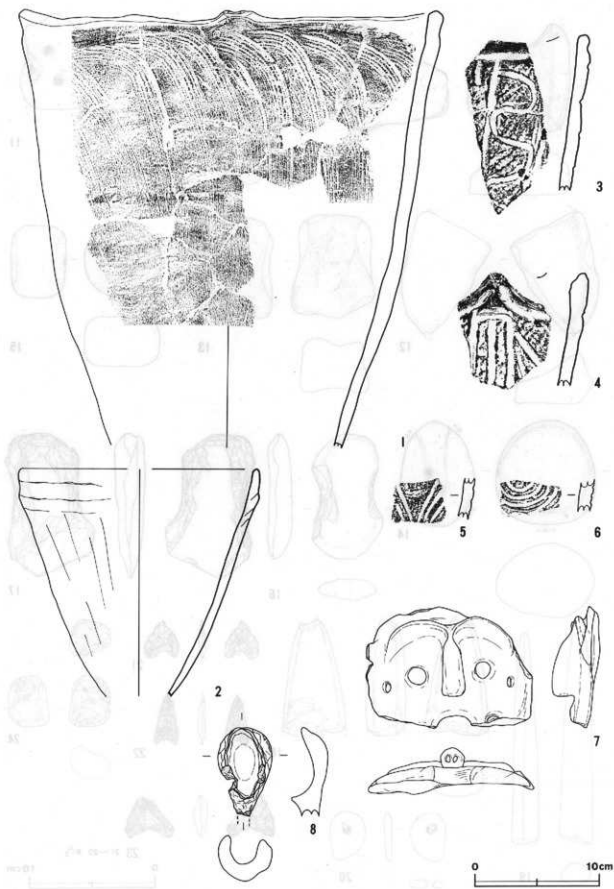


第56図 第24-A号住居跡出土遺物実測・拓影図(1)



第57图 第24-A号住居跡出土遺物実測図(2)

図57(2)・第24-A号住居跡出土遺物実測図(2)



第58图 第24—B号住居出土遗物实测·拓影图

図版番号	器種	計測値(cm)			重量 (g)	現存率 (%)	器形及び文様の特徴	備考
		最大長	最大幅	最大厚				
第58図 7	土製飯面	(10.6)	(13.5)	3.9	(219.9)	70	板状で、両目が内径1.6cmほどで両脇に縦長の孔が開いている。また、頸部から口部は破損しているが、口部は増円形と思われる。肩と鼻はT字状に連結した隆帯で表現されている。	D P 34 北部覆土下層 灰石・石英 灰褐色 普通 (後期前葉)
8	スプーン形 土製品	(7.1)	4.4	3.7	(60.5)	60	内面は丁寧なナデ整形がされているが、外面は粗い。把手部は欠損している。	D P 35 北東部覆土下層 灰石・石英 黒褐色

第58図3～6は縄文土器片の拓影図である。3・4は口縁部片、5・6は胴部片で、蛇行及び直線のな沈線により文様が構成されている。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代後期（堀之内I式期）と思われる。

第25号住居跡（第59図）

位置 調査区の西部、C2c7区。

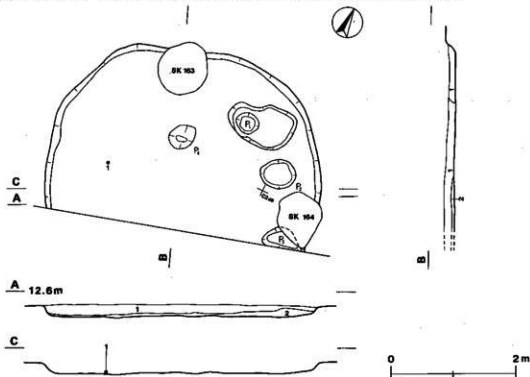
重複関係 本跡は、北部で第163号土坑に掘り込まれている。東部で第164号土坑に掘り込まれているが後世の掘り込みと思われる。いずれよりも、本跡の方が古い。

規模と平面形 南部が調査区域外となっているが、長径4.36m、短径(2.88)mの円形と思われる。

壁 壁高は10～17cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦である。軟らかく踏み固められた面は見られない。

ピット 4か所（P₁～P₄）。P₁は長径38cm、短径32cmのほぼ円形で、深さ53cm。P₂は長径58cm、短径50cmのほぼ円形で、深さ26cm。P₃は長径44cm、短径34cmの不整形円で、深さ24cm。規模にばらつきはあるが、配列から主柱穴と思われる。P₄は長径66cm、短径40cmの楕円形で、深さ18cmで性格不明である。



第59図 第25号住居跡実測図

炉 南部が調査区域外であり確認できなかった。

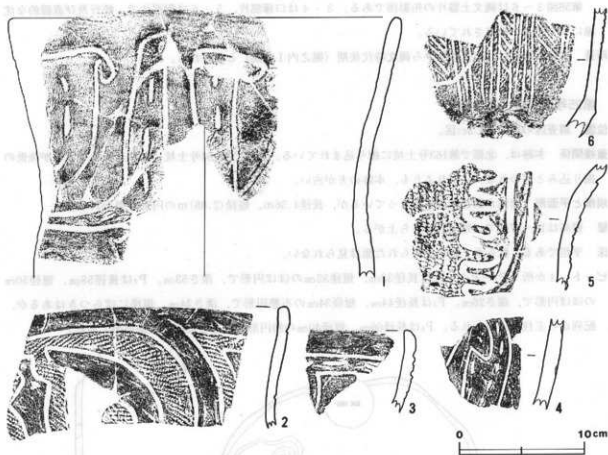
覆土 2層からなる自然堆積である。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化物粒子少量

2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物粒子少量

遺物 縄文土器及び縄文土器片が、覆土中及び床面から1,461点出土している。第60図の1は、深鉢形土器の口縁部から胴部にかけての破片で西部床面から、2・3は口縁部片で、2は東部覆土下層から、3は中央部床面から、4は胴部片で中央部覆土中から、5・6は胴部片で中央部覆土上層からの出土で流れ込みと思われる。



第60図 第25号住居跡出土遺物実測・拓影図

第25号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(m)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第60図 1	深鉢形土器 縄文土器	A (31.5) B (20.9)	口縁部から胴部上半にかけての破片。沈線により文様が構成され 区画内は長めの刺突列点文が施されている。	長石 褐色 普通	P55 30% 西部床面 (称名寺Ⅱ)

第60図2～6は縄文土器片の拓影図である。2は沈線区画内は磨り消され、区画外は単節縄文LRが施文されている。3・4は沈線区画内に列点文が施されている。5は蛇行及び直線の沈線により文様が構成されている。6は縦及び斜め方向の沈線により文様が構成されている。

所見 本跡は、炉は確認できなかったが、出土遺物から縄文時代後期(称名寺Ⅱ式期)の竪穴住居跡と思われる。

第26号住居跡 (第61図)

位置 調査区西部, B3i区。

重複関係 本跡は、西部で第1号方
形周溝墓に掘り込まれている。

規模と平面形 ほとんど覆土が削平
されているために、壁の立ち上がり
をとらえることができなかった。
よって、規模及び平面形は不明で
ある。

床 平坦である。踏み固められた面
は見られない。

ピット 10か所 (P₁~P₁₀)。P₁は
径22cmの円形で、深さ50cm。P₂は
径48cmの円形で、深さ49cm。P₃は
長径36cm, 短径34cmの不整形で、
深さ55cm。P₄は長径32cm, 短径26
cmの不整形円形で、深さ49cm。P₅は
長径30cm, 短径24cmの楕円形, 深
さ55cm。P₆は長径37cm, 短径28cmの楕円形で、深さ49cm。規模にばらつきはあるが、配列から主柱穴と思
われる。P₇・P₈・P₉は、それぞれ主柱穴の間に位置し補助柱穴と思われる。P₁₀は、性格不明である。

埋設土器 本跡の東部床面から埋設土器が出土している。掘り方は、長径45cm, 短径38cmの不整形円形で、78cm
ほど掘り込まれている。出土状況は、正位で底部は欠損しており、土器の中から遺物等は出土していない。

埋設土器土層解説

- | | | | |
|-------|------------------|------|---------------------|
| 1 褐色 | ローム小・中ブロック少量 | 4 褐色 | ローム粒子中量, 炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子少量 | 5 褐色 | ローム粒子中量, ローム小ブロック少量 |
| 3 褐色 | ローム粒子・ローム小ブロック少量 | 6 褐色 | ローム粒子少量 |

炉 中央部に付設されている。平面形は長径110cm, 短径100cmの楕円形で、床を36cmほど掘りくぼめた地床炉
である。炉床面は、火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説

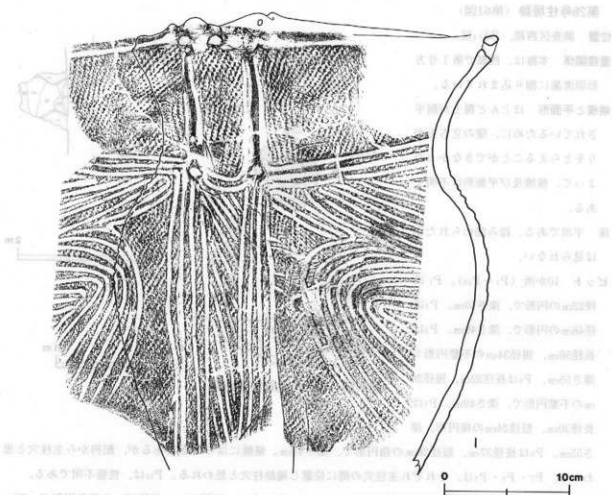
- | | | | |
|--------|---------------------------------------|--------|------------------------|
| 1 暗赤褐色 | 焼土粒子中量, 炭化粒子・ローム粒子少量 | 4 赤褐色 | 焼土粒子少量, 炭化粒子・焼土小ブロック微量 |
| 2 暗赤褐色 | 焼土粒子中量, 焼土小ブロック少量, 炭化粒子・ロ
ム粒子微量 | 5 暗赤褐色 | 焼土粒子少量 |
| 3 暗赤褐色 | 焼土粒子少量, 焼土小ブロック少量, 焼土中ア
ルミナ・炭化粒子微量 | | |

遺物 全城から縄文土器片が64点出土しているが、器形の判断できるものは埋設土器のみで他は細片である。

第62図の1は、埋設土器で北東部から正位で出土している。

第26号住居跡出土遺物観察表

図番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第62図	深鉢形土器	A 28.9	口縁部から胴部下半にかけての破片。胴部は内彎し、外傾しなが ら口縁部に至る。口縁部は2山を単位とする3個の突起を有し、 円形刺突文が沈線と連繋し巡り、いずれも突起の中央に貫通孔を 有し、沈線が巡る。口縁部直下から胴部にかけては地文に単節縄 文LRを施し、突起から胴部には2条の隆帯を重下させ、胴部に 2個の円形刺突文を有する。頸部及び胴部は平行沈線により文様 が構成されている。内面は、横位の筋により整形されている。	長石 褐色 普通	P56 北東部 (堀之内I)
1	縄文土器	B (37.0)			



第62図 第26号住居跡出土遺物実測図

所見 本跡は、覆土は削平されて規模及び平面形は不明であるが、炉1基及び支柱穴の配列から住居跡と判断した。時期は、出土遺物から縄文時代後期（堀之内I時期）と思われる。

第28号住居跡（第63図）

位置 調査区西部、C3b2区。

重複関係 本跡は、南東部で第30号住居跡、第109・115号土坑に掘り込まれている。西部で第77号土坑を掘り込んでいる。本跡は、第30号住居跡、第109・115号土坑より古く、第77号土坑より新しい。

規模と平面形 長径5.25m、短径4.68mの楕円形である。

長径方向 N-35°-E

壁 壁高は10~20cmで、外傾して立ち上がる。

床 平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット 11か所（P₁~P₁₁）。P₁は径24cmの円形で、深さ27cm。P₂は長径24cm、短径20cmのほぼ円形で深さ31cm。P₃は径40cmの円形で、深さ36cm。P₄は長径30cm、短径26cmの不整形円形で、深さ38cm。規模及び配列から支柱穴と思われる。P₅~P₁₁は、規模及び配列にばらつきがあり性格不明である。

炉 中央部に2か所付設されている。炉1は、平面形が長径112cm、短径46cmの楕円形で、床を16cmほど掘りこぼめた地床炉である。炉床面は、火熱を受け赤変硬化している。炉2は、深鉢形土器を埋め込んだ土器埋

設炉である。長径54cm、短径30cmの楕円形で、16cmほど掘り込まれている。出土状況は、正位の状態底部及び口縁部は欠損しており、土器の中から遺物等は出土していないが、焼土粒子が少量確認された。

炉1 土層解説

- | | |
|-------------------------------|--------------------------|
| 1 濃い赤褐色 焼土粒子・焼土小ブロック多量、炭化粒子少量 | 3 赤褐色 焼土小・中ブロック多量、焼土粒子中量 |
| 2 赤褐色 ローム粒子少量 | 4 褐色 焼土粒子少量 |

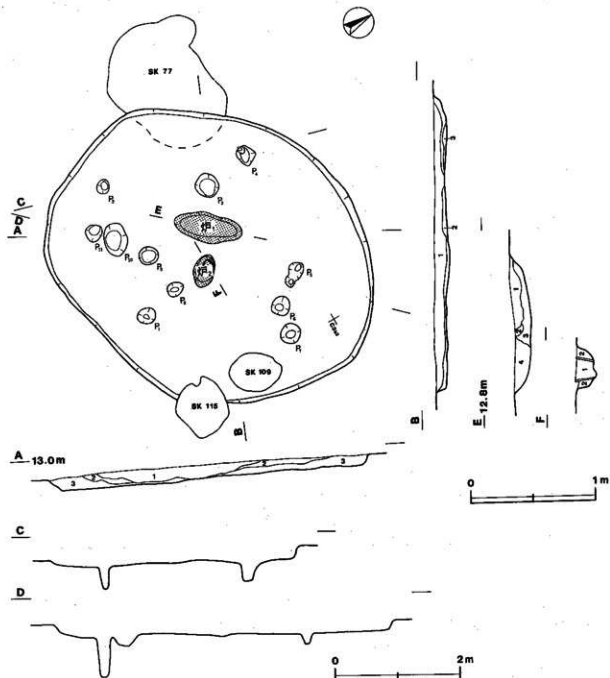
炉2 土層解説

- | | |
|-------------------|---------------|
| 1 褐色 ローム粒子・焼土粒子少量 | 2 暗褐色 ローム粒子少量 |
|-------------------|---------------|

覆土 3層からなる自然堆積である。

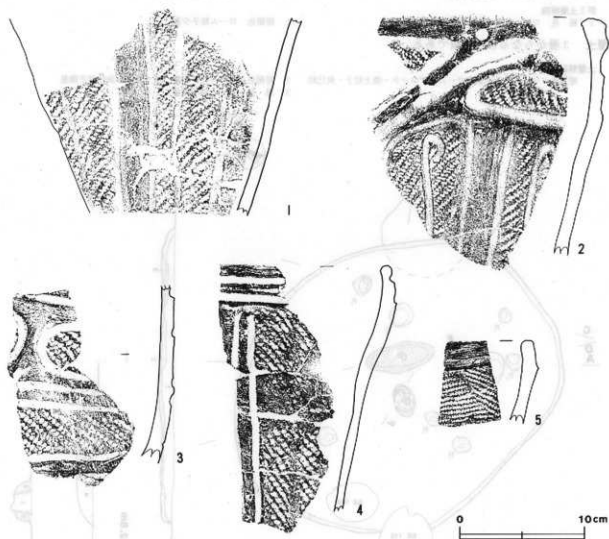
土層解説

- | | |
|------------------------------------|---------------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック・焼土粒子・炭化粒子少量 | 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量 |
| | 3 褐色 ローム粒子微量 |



第63図 第28号住居跡実測図

遺物 縄文土器及び縄文土器片が、覆土中及び床面から798点出土している。第64図の1は、埋設土器で中央部から出土している。2は深鉢形土器の口縁部片、3は胴部片で、2は南部覆土下層から、3は中央部床面から、4・5は中央部覆土中から出土しているが、5の口縁部片は流れ込みと思われる。



第64図 第28号住居跡出土遺物実測・拓影図

第28号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	貯積量(m)	器 形 及 び 文 様 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第 64 図	深鉢形土器	B (15.9)	胴部片。胴部は地文に半節縄文RLを施し、2条の沈線で区画された磨消帯を直線状に懸垂している。	長石・バミス	P58 40%
1	縄文土器			明赤褐色 普通	中央部(加曾利EⅢ)

第64図2～5は縄文土器片の拓影図である。2・3は沈線に沿わせた隆帯で区画され、半節縄文RLの地文に沈線区画の磨消帯が施されている。4の口縁部は2本の沈線で区画され、胴部は縄文地文に縦方向の沈線が施されている。5は微隆起線区画の磨消帯が施されている。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代中期(加曾利EⅢ式期)と思われる。

第29号住居跡 (第65図)

位置 調査区西部, C3as区。

重複関係 本跡は, 東部で第2号方形周溝墓に掘り込まれ, 南東部で第104号土坑を掘り込んでいる。第2号方形周溝墓より古く, 第104号土坑より新しい。

規模と平面形 長径4.19m, 短径3.89mの楕円形である。

長径方向 N-3°-E

壁 壁高は5~14cmで, 外傾して立ち上がる。

床 平坦である。軟らかく踏み固められた面は見られない。

ピット 5か所 (P₁~P₅)。P₁は径30cmの円形で, 深さ43cm。P₂は径30cmの円形で, 深さ52cm。P₃は長径40cm, 短径34cmのほぼ円形で, 深さ42cm。規模及び配列から支柱穴と思われる。P₄・P₅は, 規模及び配列にばらつきがあり性格不明である。

炉 北部に付設されている。平面形は長径108cm, 短径84cmの楕円形で, 床を12cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉床面は, 火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説

1 暗褐色 焼土小・中ブロック中量, 炭化粒子微量

2 暗褐色 焼土小・中ブロック多量, 炭化粒子微量

3 暗褐色 焼土小・中ブロック多量, 炭化粒子少量

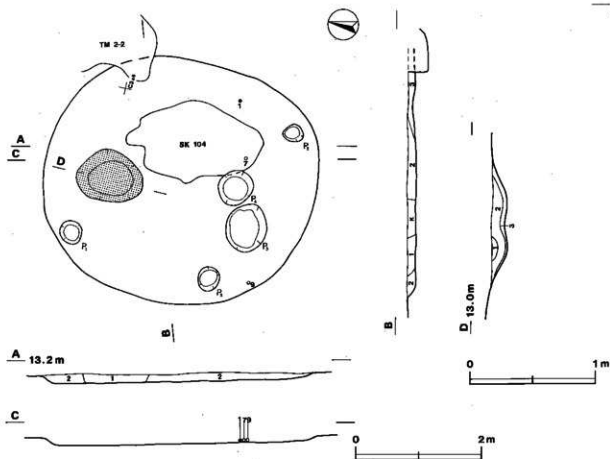
覆土 3層からなる自然堆積である。

土層解説

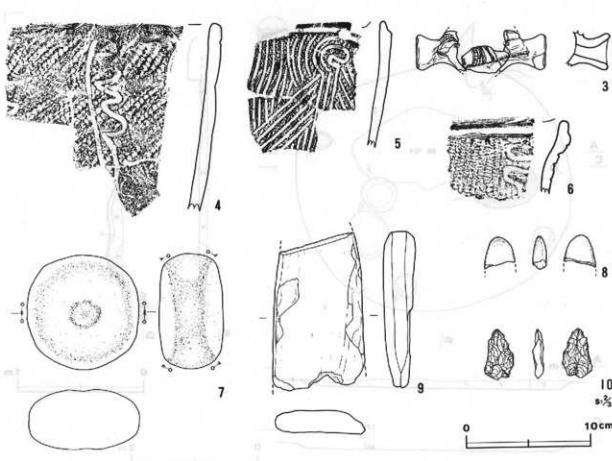
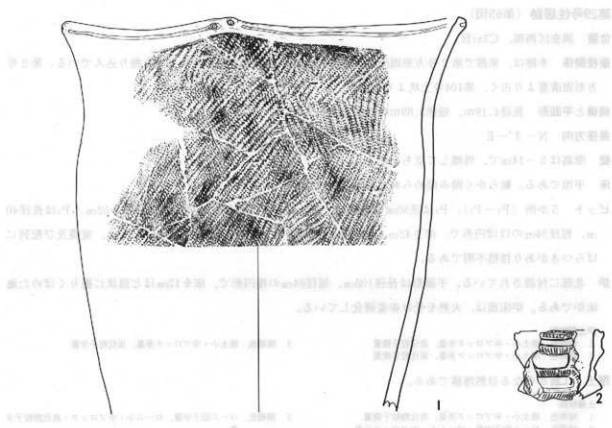
1 暗褐色 焼土小・中ブロック多量, 炭化物粒子微量

2 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小・中ブロック少量

3 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小・中ブロック・炭化物粒子少量



第65図 第29号住居跡実測図



第66図 第29号住居跡出土遺物実測・拓影図

図解実測器公中の第 2929号

遺物 縄文土器及び縄文土器片が、覆土中及び床面から2,336点出土している。第66図の1は、深鉢形土器で南東部床面から、2・3は異形台付土器片で覆土上層から出土しており流れ込みと思われる。4～6は口縁部で、4はP₁覆土下層から、5・6は中央部覆土下層から出土している。7の磨石は南部床面から、8の磨製石斧は南部覆土中から、9の石剣は南西部床面から、10の石鏃は南部覆土中から出土している。

第29号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(cm)	器 形 及 び 文 様 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第 66 図 1	深鉢形土器 縄文土器	A (32.4)	口縁部から胴部下半にかけての破片。胴部はやや内彎し、外傾しながら口縁部に至る。口縁部は4本の突起を有し、円形刺突文が沈線と連繫し返る。口縁部直下から胴部にかけては地文に単純縄文しRが施文されている。	スコリア ぶい般色 普通	P60 75% 南東部床面 (堀之内I)
		B (31.6)			
2	異形台付土器 縄文土器	A (6.2)	台部欠損。胴部は外傾して立ち上がり、口縁部に至る。口縁部から胴部にかけては3段の隆起帯に刻み目が施され、隆起帯間はずが整形され、径0.9cmほどの孔が穿たれている。	長石・石英 褐色 普通	P61 20% 覆土中 (流れ込み)
		B (5.6)			
3	異形台付土器 縄文土器	B (3.1)	胴部片。胴部中央には中空でラッパ状の突起を有する。摩滅が著しい。	長石・石英・スコリア 明赤褐色 普通	P62 10% 覆土中 (流れ込み)

図版番号	器 種	計 測 値				石 質	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第66図7	磨 石	9.3	8.9	5.2	649.3	安山岩	Q61 戴石・凹石兼用 南部床面
8	磨製石斧	(2.6)	2.5	1.0	(8.4)	蛇紋岩	Q62 定角式 欠損品 南部覆土中
9	石 剣	(12.5)	7.5	2.6	(330.5)	粘板岩	Q63 欠損品 南西部床面
10	石 鏃	(2.2)	(1.1)	0.4	(0.9)	黒曜石	Q65 平基無茎鏃 一部欠損品 南部覆土中

第66図4～6は縄文土器片の拓影図である。4～6は口縁部片で、4・6は蛇行する沈線、5は斜め及び縦方向の沈線により文様が構成されている。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代後期(堀之内I式期)と思われる。

第30号住居跡 (第67図)

位置 調査区西部, C3c3区。

重複関係 本跡は、北西部で第28号住居跡を掘り込んでおり、第109号土坑に掘り込まれている。中央部で第115号土坑に掘り込まれている。第109・115号土坑より古く、第28号住居跡より新しい。

規模と平面形 南部が調査区域外となっているが、長径5.66m、短径(3.76)mの[円形]と推定される。

壁 壁高は10～15cmで、外傾ぎみに立ち上がる。

床 平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット 6か所(P₁～P₆)。P₁は径28cmの円形で、深さ46cm。P₂は長径32cm、短径28cmのほぼ円形で深さ39cm。P₃は径30cmの円形で、深さ31cm。P₄は長径38cm、短径34cmのほぼ円形で、深さ34cm。P₅は長径34cm、短径30cmのほぼ円形で、深さ36cm。P₄・P₅は炉に近いがいずれも規模から主柱穴と思われる。P₆は、北部の壁を掘り込んでおり、性格は不明である。

炉 中央部に付設されている。平面形は長径96cm、短径74cmの楕円形で、床を20cmほど皿状に掘りくぼめた地床炉である。炉床面は、火熱を受け赤変硬化している。

炉土層解説

- 1 磨 赤 褐色 焼土粒子・焼土小ブロック少量 2 ぶい赤褐色 焼土粒子少量

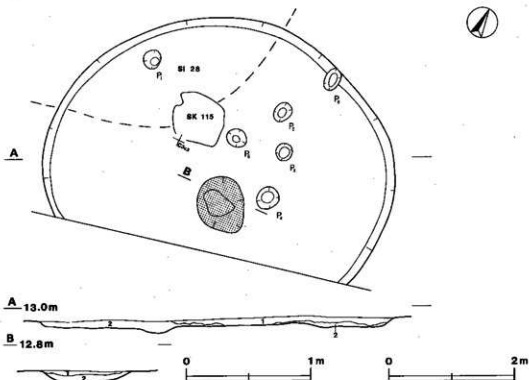
覆土 2層からなる自然堆積である。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子少量

2 褐色 ローム中・大ブロック・ローム粒子少量

遺物 全域から縄文土器片が、118点出土しているが細片が多い。第68図の1・2は深鉢形土器で中央部覆土中層から、3の口縁部片は中央部覆土上層から出土しており流れ込みと思われる。



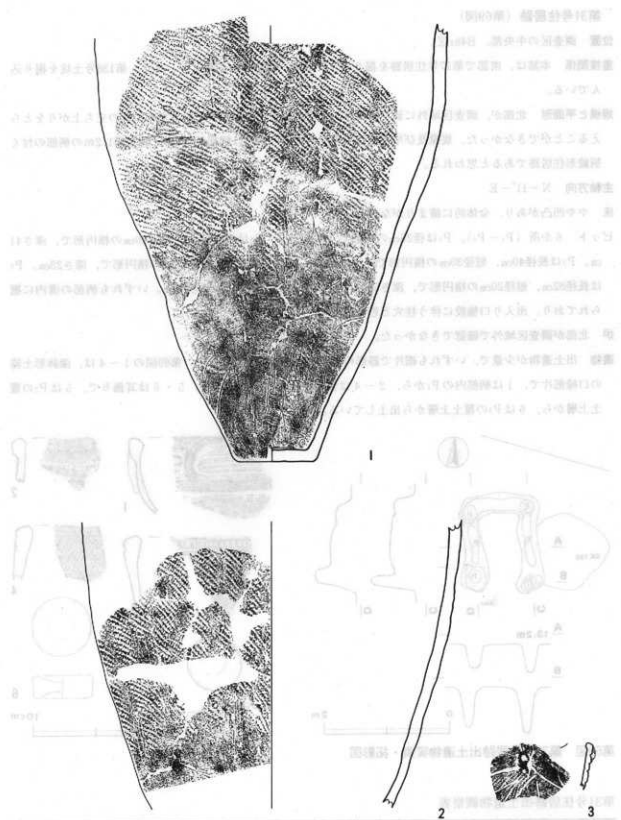
第67図 第30号住居跡実測図

第30号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第68図 1	深鉢形土器 縄文土器	B(35.1) C(6.5)	底部から胴部上半にかけての破片。底部は小形の平底で、胴部は外傾して立ち上がる。底部から胴部下半は外面に縦方向の筋りが施されている。胴部は単筋縄文LRで施文している。	長石・石英 に白い橙色 普通	P59 60% 中央部覆土中層 (堀之内I)
2	深鉢形土器 縄文土器	B(23.0)	胴部片。胴部はやや外傾して立ち上がる。胴部下半は外面に縦方向の筋りが施されており、単筋縄文LRで施文している。	長石 橙色 普通	P63 30% 中央部覆土中層 (堀之内I)

第68図3は縄文土器片の拓影図で、貼瘤には刺突文が施されている。

所見 本跡の時期は、出土遺物が少なく細片であったが、出土遺物から縄文時代後期(堀之内I式期)と思われる。



品名	出土地点	出土層	出土位置	出土状況	出土時期
1	第30号住居跡	第1層	中央部	出土状況	出土時期
2	第30号住居跡	第1層	中央部	出土状況	出土時期
3	第30号住居跡	第1層	中央部	出土状況	出土時期

0 10cm

第68図 第30号住居跡出土遺物実測・拓影図

第31号住居跡 (第69図)

位置 調査区の中央部, B4h2区。

重複関係 本跡は, 南部で第17号住居跡を掘り込んでおり, 本跡の方が新しい。また, 第136号土坑を掘り込んでいる。

規模と平面形 北部が, 調査区域外に延びており, また, 覆土が削平されているため, 壁の立ち上がりをとらえることができなかった。規模及び平面形は不明であるが, 南部に柄杓長1.6m, 最大幅1.2mの柄杓の付く柄杓形住居跡であると思われる。

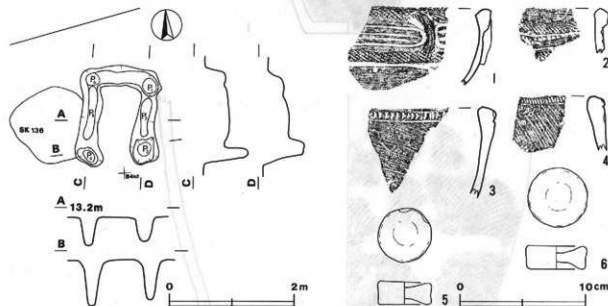
主軸方向 N-11°-E

床 やや凹凸があり, 全体的に締まりがない。

ピット 6か所 (P₁~P₆)。P₁は径26cmの円形で, 深さ30cm。P₂は長径60cm, 短径20cmの楕円形で, 深さ41cm。P₃は長径40cm, 短径30cmの楕円形で, 深さ68cm。P₄は長径36cm, 短径24cmの楕円形で, 深さ23cm。P₅は長径82cm, 短径20cmの楕円形で, 深さ50cm。P₆は径26cmの円形で, 深さ32cm。いずれも柄杓の溝内に掘られており, 出入り口施設に伴う柱穴と思われる。

炉 北部が調査区域外で確認できなかった。

遺物 出土遺物が少量で, いずれも細片で器形のわかるものはほとんどない。第69図の1~4は, 深鉢形土器の口縁部片で, 1は柄杓内のP₁から, 2~4は覆土中から出土している。5・6は耳飾りで, 5はP₂の覆土上層から, 6はP₃の覆土上層から出土している。



第69図 第31号住居跡出土遺物実測・拓影図

第31号住居跡出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)		重量(g)	現存率(%)	器形及び文様の特徴	備考	
		最大長	最大幅					
第69図 5	耳飾り	4.3	4.3	2.0	(36.0)	95	白形。表・裏面ともに凹んでおり, 無文でナデにより整形されている。	DP36 P ₂ 覆土上層 灰石・石英・雲母 に白い褐色 普通(後期後葉)

図版番号	器種	計測値(cm)			重量 (g)	現存率 (%)	器形及び文様の特徴	備考
		最大長	最大幅	最大厚				
5	耳飾り	4.8	4.8	1.8	45.5	100	白形。裏・裏面ともに凹んでおり、無文でナデにより整形されている。	D P 37 P ₃ 覆土層 長石・石英・雲母 に多い褐色 普通(後期後期)

第69図1～4は縄文土器片の拓影図である。1は縄文帯間は沈線により楕円形状の区画がなされている。

2は、縄文帯が施され、3・4は口縁部直下に刻みが施されている。

所見 本跡は、覆土が削平されて壁の立ち上がりをとらえられず、平面形は柄鉢形住居跡の柄部のみが確認できたのであった。時期は、出土遺物が少量で細片ばかりであるが、縄文時代後期(安行I式期)と思われる。

第32号住居跡(第70図)

位置 調査区西部, B3₃区。

重複関係 本跡は、南部から西部にかけて第1号方形周溝墓に掘り込まれており、本跡の方が古い。

規模と平面形 本跡は、すでにほとんどの覆土が削平されており、壁の立ち上がりをとらえることができなかった。よって規模及び平面形は不明である。

床 やや凹凸あり、全体的に締まりがない。

ピット 9か所(P₁～P₉)。P₁は長径80cm, 短径52cmの楕円形で、深さ30cm。P₂は径40cmの円形で、深さ40cm。P₃は長径76cm, 短径68cmの楕円形で、深さ33cm。P₄は径60cmの円形で、深さ33cm。P₅は長径40cm, 短径36cmの不整形円で、深さ23cm。P₆は長径66cm, 短径52cmの楕円形で、深さ35cm。規模にばらつきはあるが配列から主柱穴と思われる。P₇～P₉は長径48～60cm, 短径48～50cmの楕円形で、深さ64～84cm。規則性がなく性格は不明である。

炉 南部に付設されている。平面形は長径70cm, 短径62cmの楕円形で、床を12cmほど掘りくぼめた地床炉である。炉床面は、火熱を受け赤変硬化している。

伊土層解説

1 暗赤褐色 焼土粒子・焼土小ブロック少量

2 暗赤褐色 焼土小・中ブロック中量, 焼土粒子少量

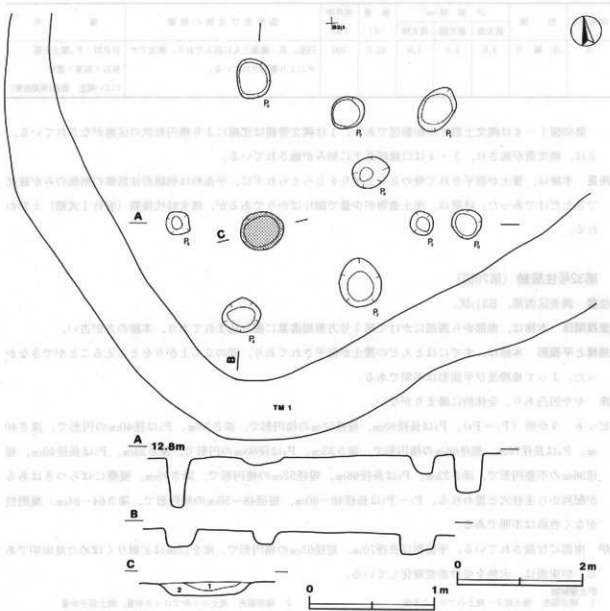
遺物 全域から縄文土器片が354点出土しているが、細片が多い。第71図の1は、深鉢形土器でP₄覆土下層から出土している。2は口縁部片でP₁覆土下層から、3・4は胴部片で、3はP₆覆土下層から、4は覆土中から出土している。

第32号住居跡出土遺物観察表

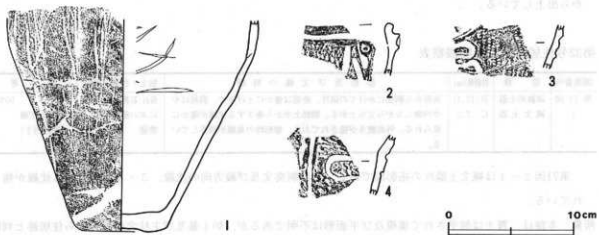
図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第71図 1	深鉢形土器 縄文土器	B(17.1) C 7.2	底部から胴部にかけての破片。底部は僅かに上げ底で、胴部はやや内彎しながら立ち上がる。胴部上半から垂下する沈線が僅かに見られる。外面磨きが施されており、整形時の条線が残存している。	長石・石英・スコリア に多い褐色 普通	P64 50% P ₄ 覆土下層 (堀之内I)

第71図2～4は縄文土器片の拓影図である。2は刺突文及び縦方向の沈線、3・4は蛇行する沈線が施されている。

所見 本跡は、覆土が削平されて規模及び平面形は不明であるが、炉1基及び主柱穴の配列から住居跡と判断した。時期は、出土遺物から縄文時代後期(堀之内I式期)と思われる。



第70図 第32号住居跡実測図



第71図 第32号住居跡出土遺物実測・拓影図

第33号住居跡（第72図）

位置 調査区西部，B3j1区。

重複関係 本跡は，東部から南部にかけて，第1号方形周溝墓に掘り込まれている。南部で第111・112号土坑，西部で第116号土坑を掘り込んでおり，本跡の方が新しい。南西部で，第118号土坑に掘り込まれており，本跡の方が古い。

規模と平面形 北部が調査区域外に延びており，また，覆土が削平されているため，壁の立ち上がりをとらえることができなかったが，径(7.60)mの(円形)と推定される。

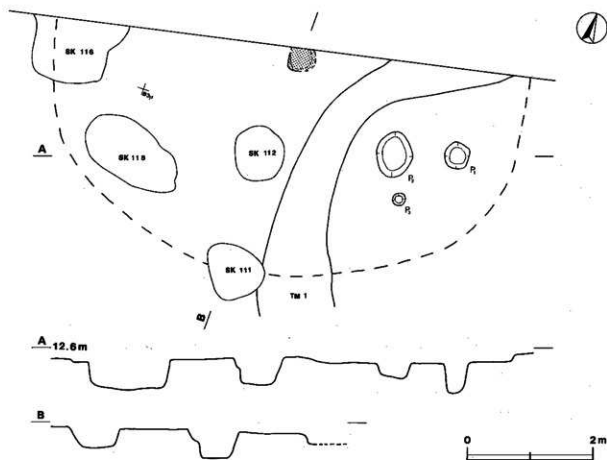
床 平坦である。踏み固められた面は見られない。

ピット 3か所（P₁～P₃）。P₁は径28cmの円形で，深さ51cm。P₂は長径50cm，短径40cmの楕円形で，深さ24cm。P₃は径14cmの円形で，深さ35cm。他にピットが確認されず，規模及び配列から考えると性格不明である。

炉 中央部に付設されている。3分の1ほどが調査区域外であるが，径44cmの円形と推定される。覆土は残存しておらず，赤く焼けた炉床が露出している。

遺物 全域から縄文土器片が47点出土しているが，細片が多い。第73図の1・2は胴部片で，覆土中から出土している。

第73図1・2は縄文土器片の拓影図である。1・2は胴部片で，1は横方向の沈線，2は無節縄文Lが施文されている。



第72図 第33号住居跡実測図

所見 本跡は、覆土が削平されて壁の立ち上がりをとらえられず、平面形は坪及び遺物の広がりからの推定である。時期は、出土遺物が少量で細片ばかりであるが、縄文時代後期型之内式期と考えておきたい。



第73図 第33号住居跡出土遺物実測・拓影図

表5 釈迦才伝遺跡住居跡一覧表

住居跡 番号	位置	長径(軸方向)	平面形	規模(m) (長径×短径)	壁高 (cm)	床面	主柱穴	ピット	如	覆土	出土遺物	備考
1	B50a	8-75°-W	(楕円形)	[4.28]×[3.70]	6-20	平坦	6	2	2	自然	縄文土器	B1・2土器埋没部
2	B50b	8-47°-W	楕円形	5.09×4.24	12-16	平坦	3	3	1	自然	縄文土器、石器	SK3→本跡、B1土器埋没部
3	B52	不明	不明	不明	不明	平坦	3			不明	縄文土器、土製陶板	S14→本跡
4	B52g	不明	不明	不明	不明	平坦	6	3	3	不明	縄文土器	本跡→S13-S15、SK21-23A-23B-23C
5	B52g	不明	不明	不明	不明	平坦	1	3	1	不明	縄文土器	S14→本跡
6	B52h	不明	不明	不明	不明	平坦	7	19	1	不明	縄文土器、磨石、石楯	
7	B31i	8-46°-E	楕円形	5.95×5.01	11-14	平坦	5	15	1	自然	縄文土器	S110→本跡→SK132
8	B44g		[円形]	[5.50]	不明	平坦	6	12	1	自然	縄文土器	本跡→SK34-156
9	B52h	8-76°-W	(楕円形)	(5.66)×(4.01)	8-20	平坦	7	38	1	自然	縄文土器、土製品(河磨石)、 石楯	本跡→SK174→本跡
10	B51r	8-12°-W	(楕円形)	5.28×(3.07)	15-34	平坦	2	58	1	自然	縄文土器、磨石、石楯、石楯、 打製石斧	
12	B41s	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	1	不明	縄文土器	
14	B41s	不明	不明	不明	不明	不明	不明	不明	1	不明	縄文土器、異形台付土器、石楯 浮子	S80→本跡
15-A	B41s	8-20°-W	楕円形	4.33×3.87	16-30	平坦	7	3	1	自然	縄文土器、土製品(河磨石)、 円板、スタンピング、動物彫)、 石器(磨石、四石、石楯、小玉)	本跡→S17、S115-B、S116
15-B	B41s	[8-20°-W]	(楕円形)	[5.63]×[5.33]	不明	平坦	4	2		不明	縄文土器、磨石、磨石、石楯	S115-A、S17、S116→本跡
16	B41j	[8-43°-W]	新鋭形	[5.90] 柄部1.5×1.4	不明	平坦	6	16	1	不明	縄文土器、異形台付土器、磨石 石楯	S115-A→本跡→S115-B
17	B46i	不明	新鋭形	柄部1.3×1.4	不明	凹凸	2	11		不明	縄文土器、円板、打製石斧、 磨石、浮子	本跡→S131、SK136
18	B32h	[8-22°-W]	新鋭形	[6.00]×[5.60] 柄部1.7×1.3	6-10	平坦	4	12	1	人為	縄文土器、手製土器、耳飾り、 磨石、石楯、石製勾玉、小玉	S121、SK135→本跡→S119、SK132-133 134
19	B31s	[8-37°-W]	(楕円形)	[5.85]×[4.34]	8-10	平坦	2	3		自然	縄文土器、磨石、浮子	S118-21、S124-126-127-128-129-13 0-131-134→本跡
20	C3a	不明	不明	不明	不明	平坦	6	27	1	不明	縄文土器	S133、SK110-111、TK1→本跡
21	B32h		[円形]	東西径6.06 南北径1.90	22-30	平坦	4	4		自然	縄文土器、耳飾り、石楯、磨石、 四石、磨製石斧、石楯、石楯、 石楯勾玉	本跡→S118-19、S4121-122-123-135
22	B31j	[8-66°-W]	(楕円形)	[5.72]×[5.06]	不明	平坦	8	9	1	不明	縄文土器	本跡→SK56-57-58-63-103-100
23	C2a		[円形]	[4.75]×[4.70]	不明	平坦	6	1		不明	縄文土器、磨石	S124-B、SK75-B1-119→本跡
24-A	C2b	8-33°-E	(楕円形)	[5.30]×[4.73]	15-60	平坦	7	7	1	自然	縄文土器、石楯、磨石、打製石 斧、磨製石斧、石楯、勾玉、石 楯、磨石	S124-B→本跡
24-B	C2b	8-16°-W	楕円形	8.26×7.90	10-25	平坦	4	6	1	自然	縄文土器、土製陶板、スプーン 系土製品	SK81-82→本跡→S124-A、SK74-79- 148
25	C2c		円形	4.36×(2.88)	10-17	平坦	3	1		自然	縄文土器	SK163→本跡→SK164
26	B31s	不明	不明	不明	不明	平坦	6	4	1	不明	縄文土器	TK1→本跡、埋没土器
28	C32b	8-35°-E	楕円形	5.25×4.68	10-20	平坦	4	7	2	自然	縄文土器	S130、SK309-115→本跡→SK77
29	C3a	8-3°-E	楕円形	4.19×3.89	5-14	平坦	3	2	1	自然	縄文土器、異形台付土器、磨石 磨製石斧、石楯、石楯、石楯	TK2→本跡→SK104
30	C3c		[円形]	5.66×(3.76)	10-15	平坦	5	1	1	自然	縄文土器	SK109-115→本跡→S128
31	B42b	8-11°-E	新鋭形	柄部1.6×1.2	不明	凹凸				不明	縄文土器、耳飾り	S117→本跡
32	B21j	不明	不明	不明	不明	凹凸	6	3	1	不明	縄文土器	TK1→本跡
33	B31j		[円形]	[7.60]	不明	平坦				不明	縄文土器	TK1、SK118→本跡→SK111-112-116

今回の調査では、竪穴住居跡32軒を検出した。大半の竪穴住居跡は、掘り込みが浅く、さらに遺構の重複が激しく、遺存状況は良好とは言えない。壁の立ち上がり及び床の広がりを確認することができず、炬やピットだけしか検出できなかった竪穴住居跡もある。なお、竪穴住居跡と思われる遺構に第1～33号まで番号をつけたが、第11・13・27号住居跡については、欠番とした。また、第15号、第24号住居跡については、調査の過程で重複関係のある2軒の住居跡であることが判明したため、それぞれ第15-A号、第15-B号、第24-A号、第24-B号住居跡とした。

2 土坑

当遺跡からは、土坑が112基検出されている。出土遺物及び形態から縄文時代の土坑及び性格不明な土坑も検出されている。ここでは土坑の形状、規模、出土遺物等に特徴があるものについて記載し、それ以外の土坑については実測図及び土坑一覧表だけの掲載とした。時期については、底面出土位置及び覆土の堆積状況、出土量等から推定した。また、多時期にわたり、しかも遺物の偏りがない場合は「A式期～B式期」で記載した。出土遺物が少なく、推定困難なものについては「不明」とした。また、重複関係については備考欄に記載した。

第7号土坑（第74図）

位置 調査区の東部、B6d区。

規模と平面形 長径1.35m、短径1.17mの楕円形、深さ60cmである。

長径方向 N-73°-E

壁面 緩やかに立ち上がる。

底面 皿状である。

覆土 3層からなる自然堆積である。

遺物 縄文土器及び縄文土器片が、覆土中から328点出土している。第81図の1・2は、深鉢形土器で覆土中層から出土している。3は深鉢形土器の口縁部片、4・5は胴部片でいずれも覆土中から出土している。6は磨製石斧で覆土上層から出土している。

所見 本跡は、自然堆積であるが、覆土中層から同時期の遺物がまとまって出土している。時期は、出土遺物から縄文時代後期（称名寺Ⅱ式期）の土坑と思われる。

第17号土坑（第74図）

位置 調査区の東部、B6d区。

規模と平面形 長径1.23m、短径1.10mのほぼ円形で、深さ145cmである。

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 皿状である。

覆土 7層からなる人為堆積である。

遺物 縄文土器及び縄文土器片が、覆土中から526点出土している。第82図の1は、深鉢形土器で覆土中層から、2～5は深鉢形土器の口縁部及び胴部片で、6は磨製石斧、7は石皿でいずれも覆土中から出土している。

所見 本跡は、出土遺物から縄文時代後期（堀之内Ⅰ式期）の土坑と思われる。

第47号土坑 (第75図)

位置 調査区西部, B3a区。

規模と平面形 長径1.25m, 短径1.04mの楕円形で, 深さ59cmである。

長径方向 N-47°-W

壁面 垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 3層からなる自然堆積である。

遺物 縄文土器及び縄文土器片が, 覆土中から57点出土している。第84図の1は, 深鉢形土器で覆土下層から出土している。2は口縁部片で覆土中から出土している。

所見 本跡は, 出土遺物から縄文時代後期(堀之内I式期)の土坑と思われる。

第52号土坑 (第75図)

位置 調査区の西部, B3b区。

規模と平面形 長径2.63m, 短径1.85mの楕円形で, 深さ75cmである。

長径方向 N-25°-W

壁面 緩やかに立ち上がる。

底面 皿状である。

覆土 4層からなる自然堆積である。

遺物 縄文土器及び縄文土器片が, 覆土中から1,492点出土している。第85図の1は, 深鉢形土器で覆土中から出土している。2~6は口縁部, 7は凹石でいずれも覆土中から出土している。

所見 本跡は, 自然堆積であるが, 多量の遺物がまともって出土しており, 投棄された可能性も考えられる。

時期は, 出土遺物から縄文時代後期(堀之内式期)の土坑と思われる。

第74号土坑 (第76図)

位置 調査区の西部, C3c区。

重複関係 本跡は, 第24-B号住居跡に掘り込まれており, 本跡の方が古い。

規模と平面形 長径1.38m, 短径1.33mのほぼ円形で, 深さ80cmである。

壁面 ほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 6層からなる人為堆積である。

遺物 縄文土器及び縄文土器片が, 覆土及び底面から313点出土している。その他, 覆土中層及び底面から多量の石器がまともって出土している。第87図の1~3は, 深鉢形土器の口縁部及び胴部片で覆土下層から出土している。4の石鏃, 5~13の石鏃はいずれも底面から出土している。

所見 本跡からは, 覆土中及び底面から9点の石鏃及び半製品と剥片が出土している。出土遺物及び形状から縄文時代中期(加曾利EⅢ式期)の石器制作に伴う遺構と思われる。

第105号土坑 (第77図)

位置 調査区の西部, C3js区。

規模と平面形 長径0.69m、短径0.65mのほぼ円形で、深さ57cmである。

壁面 外傾しながら立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 4層からなる自然堆積である。

遺物 縄文土器及び縄文土器片が、覆土中び底面から225点出土している。第89図の1は異形台付土器で、底面から斜位の状態で、2は台付土器の鉢部で底面から出土している。3は深鉢形土器の口縁部片で、覆土中から、4の耳飾りは底面から出土している。

所見 本跡は、出土遺物から縄文時代後期（安行Ⅱ式期）の土坑と思われる。

第111号土坑（第77図）

位置 調査区の西部、B3j₆区。

重複関係 本跡は、第33号住居跡に掘り込まれ、第20号住居跡を掘り込んでおり、第20号住居跡より新しく、第33号住居跡より古い。

規模と平面形 長径0.99m、短径0.85mの楕円形で、深さ31cmである。

長径方向 N-65°-W

壁面 外傾しながら立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 2層からなる自然堆積である。

遺物 第90図の1の深鉢形土器が、底面から1点出土している。

所見 本跡からは、出土遺物から縄文時代後期（称名寺Ⅱ式期）の土坑と思われる。

第114号土坑（第77図）

位置 調査区の西部、B3j₆区。

規模と平面形 長径1.21m、短径0.89mの楕円形で、深さ10cmである。

長径方向 N-73°-W

壁面 緩やかに立ち上がる。

底面 皿状である。

覆土 1層からなる人為堆積である。

遺物 縄文土器及び縄文土器片が、覆土中及び底面から144点出土している。第89図の1・2は、深鉢形土器の口縁部で覆土中から、3の石剣、4の磨石はいずれも底面から出土している。

所見 本跡は、出土遺物から縄文時代晩期（安行Ⅲb式期）の墓壇と思われる。

第124号土坑（第77図）

位置 調査区の西部、B3h₈区。

重複関係 本跡は、第19号住居跡を掘り込んでおり、第19号住居跡より新しい。

規模と平面形 長径0.92m、短径0.65mの楕円形で、深さ58cmである。

長径方向 N-73°-W

壁面 外傾しながら立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 3層からなる人為堆積である。

遺物 縄文土器及び縄文土器片が、覆土中から43点出土している。第91図の1は、深鉢形土器で覆土中層から横位の状態で、2は口縁部で覆土中から出土している。

所見 本跡は、出土遺物から縄文時代後期（堀之内Ⅰ式期）の土坑と思われる。

第148号土坑（第78図）

位置 調査区の西部，C3c1区。

重複関係 本跡は、第24-B号住居跡を掘り込んでおり、本跡の方が新しい。

規模と平面形 長径1.41m，短径1.19mの楕円形で、深さ107cmである。

長径方向 N-88°-E

壁面 はほぼ垂直に立ち上がる。

底面 平坦である。

覆土 6層からなる人為堆積である。

遺物 縄文土器及び縄文土器片が、覆土中から610点出土している。第91図の1～3は、深鉢形土器の口縁部片で、4は磨石でいずれも覆土中層から出土している。

所見 本跡の時期は、出土遺物から縄文時代後期（加曾利BⅢ式期）と思われる。また、覆土下層から多量の炭化種子が出土していることから貯蔵穴と思われる（付章参照）。

第161号土坑（第78図）

位置 調査区の西部，C3a8区。

規模と平面形 長径0.57m，短径0.51mのはほぼ円形で、深さ74cmである。

壁面 はほぼ垂直に立ち上がる。

底面 凹凸である。

覆土 3層からなる自然堆積である。

遺物 縄文土器及び縄文土器片が、覆土中から8点出土している。第93図の1は、鉢形土器で覆土下層から出土している。

所見 本跡は、出土遺物から縄文時代後期（加曾利BⅠ式期）の土坑と思われる。

第1号土坑土層解説（第74図）

- 1 黒褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量，炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量・ローム中・小ブロック中量

第2号土坑土層解説（第74図）

- 1 暗褐色 ローム粒子中量，ローム中ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック微量
- 3 褐色 ローム粒子少量，ローム小ブロック微量

第3号土坑土層解説（第74図）

- 1 暗褐色 ローム粒子中量，炭化粒子少量

第6号土坑土層解説（第74図）

- 1 褐色 ローム粒子少量

第7号土坑土層解説（第74図）

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子中量，ローム中ブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子少量，ローム中ブロック微量

第13号土坑土層解説（第74図）

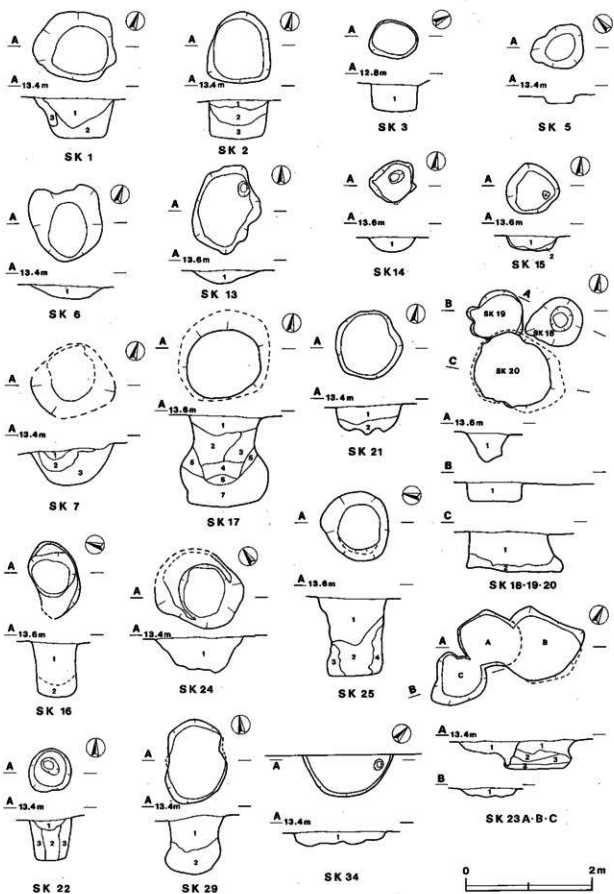
- 1 暗褐色 ローム粒子中量，炭化粒子少量

第14号土坑土層解説（第74図）

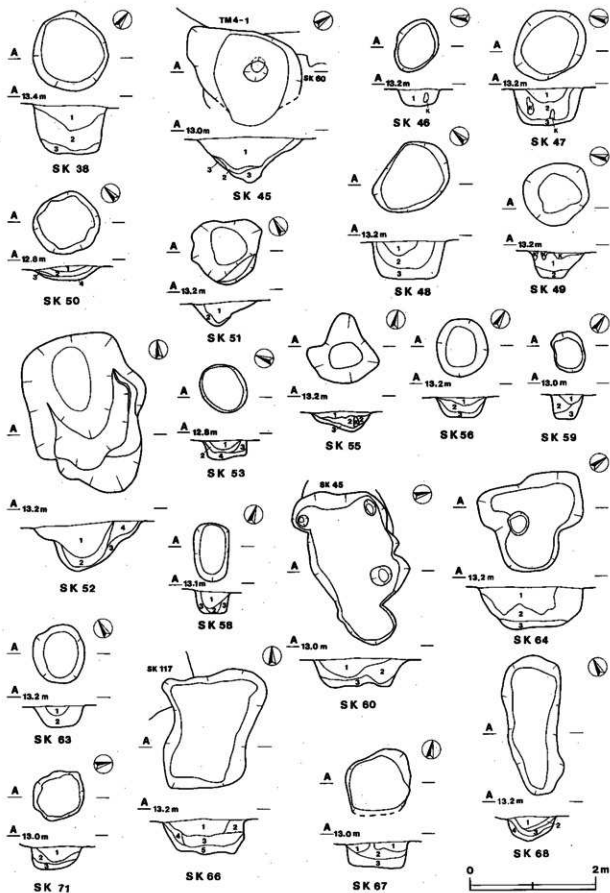
- 1 暗褐色 ローム粒子少量，炭化粒子微量

第15号土坑土層解説（第74図）

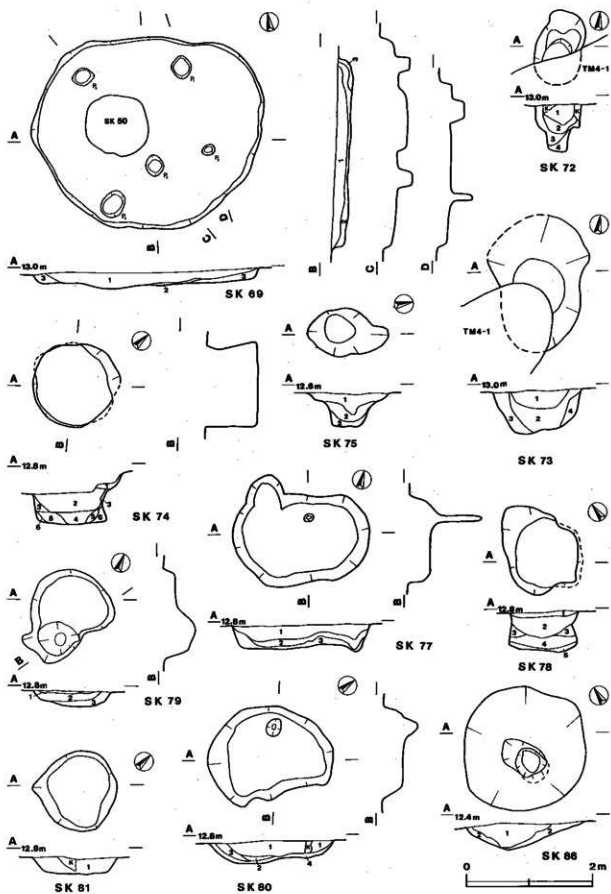
- 1 暗褐色 ローム粒子少量
- 2 褐色 ローム小ブロック少量



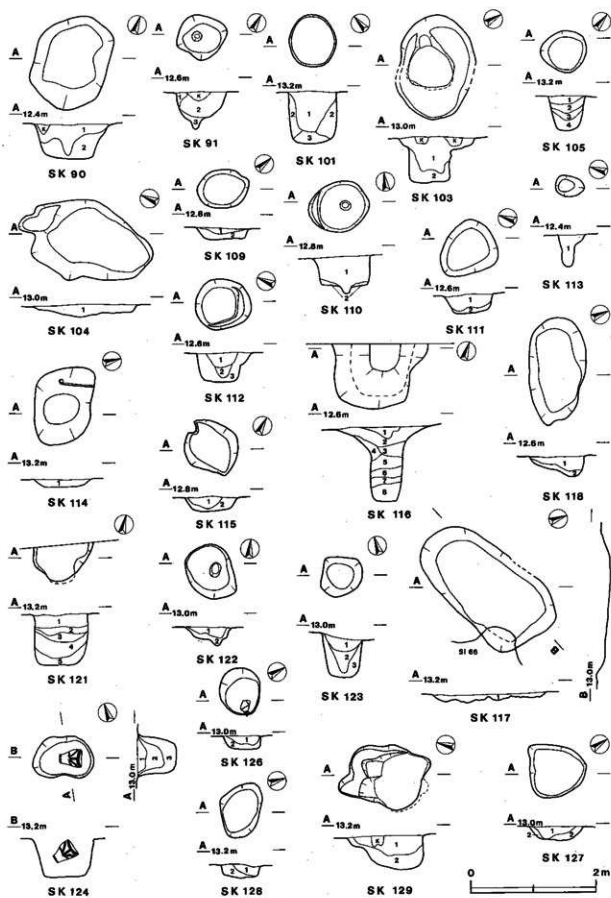
第74图 土坑实测图(1)



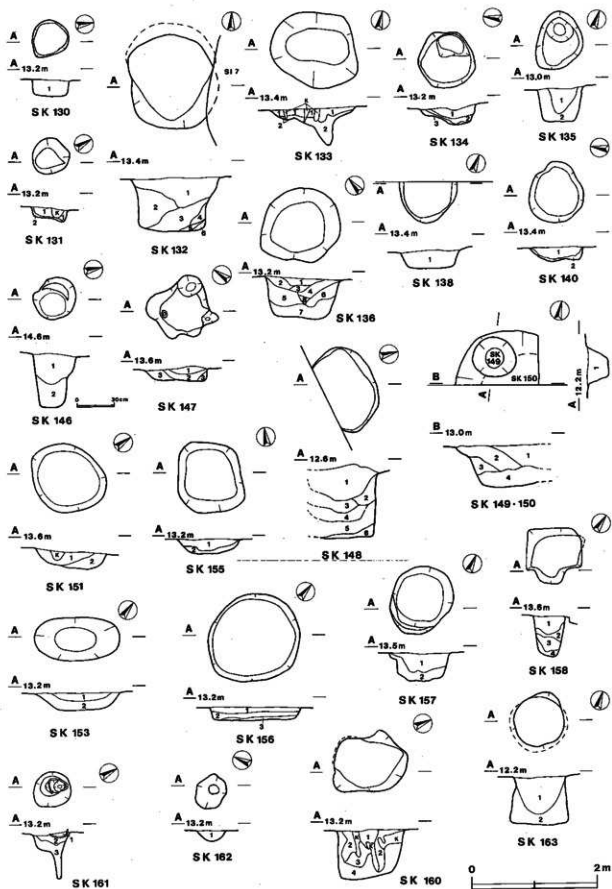
第75圖 土坑実測図(2)



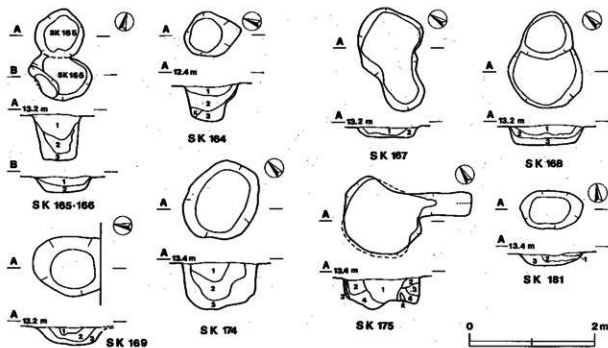
第76图 土坑实测图(3)



第77图 土坑实测图(4)



第78图 土坑实测图(5)



第79図 土坑実測図(6)

第16号土坑土層解説 (第74図)

- 1 暗褐色 ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量

第17号土坑土層解説 (第74図)

- 1 暗褐色 炭化・焼土・ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化・焼土粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
- 4 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量
- 5 褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 6 褐色 ローム粒子中量
- 7 褐色 ローム粒子中量, 炭化・焼土粒子微量

第18号土坑土層解説 (第74図)

- 1 暗褐色 ローム粒子多量

第19号土坑土層解説 (第74図)

- 1 暗褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子少量

第20号土坑土層解説 (第74図)

- 1 暗褐色 ローム粒子多量, ローム大・中ブロック少量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム大・中ブロック中量

第21号土坑土層解説 (第74図)

- 1 暗褐色 ローム小ブロック多量, ローム粒子中量
- 2 褐色 ローム中・小ブロック多量, ローム粒子中量

第22号土坑土層解説 (第74図)

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック少量, 炭化粒子微量

第23-A号土坑土層解説 (第74図)

- 1 暗褐色 ローム粒子多量, ローム中ブロック・炭化粒子少量

第23-B号土坑土層解説 (第74図)

- 1 暗褐色 ローム粒子多量, ローム大・中ブロック・炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量, ローム大・中ブロック中量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量

第23-C号土坑土層解説 (第74図)

- 1 褐色 ローム粒子・ローム中ブロック少量

第24号土坑土層解説 (第74図)

- 1 褐色 ローム中・小ブロック少量, ローム粒子微量

第25号土坑土層解説 (第74図)

- 1 褐色 ローム粒子中量, ローム大・中ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム中・小ブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子・ローム大・中ブロック多量
- 4 褐色 ローム粒子中量, ローム大・中ブロック微量

第29号土坑土層解説 (第74図)

- 1 黒褐色 ローム小ブロック少量, 炭化粒子・焼土ブロック微量
- 2 褐色 ローム小ブロック少量, 炭化粒子・焼土ブロック微量

第34号土坑土層解説 (第74図)

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック少量, 焼土・炭化粒子微量

第38号土坑土層解説 (第75図)

- 1 暗褐色 ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム中・小ブロック中量, ローム粒子微量

第45号土坑土層解説 (第75図)

- 1 暗褐色 焼土小ブロック・焼土粒子中量, ローム小ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム中ブロック・焼土粒子少量, 炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム小ブロック少量, 炭化粒子微量

第46号土坑土層解説 (第75図)

- 1 暗褐色 炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量

第47号土坑土層解説 (第75図)

- 1 黒褐色 焼土・炭化・ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子微量

第48号土坑土層解説 (第75図)

- 1 黒褐色 ローム小ブロック少量, 炭化・ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子微量

第49号土壌層解説 (第75図)

- 1 暗褐色 ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム中ブロック少量

第50号土壌層解説 (第75図)

- 1 極暗褐色 焼土小ブロック・ローム小ブロック中量、炭化粒子少量
- 2 暗褐色 焼土粒子・ローム小ブロック少量、炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子微量
- 4 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量

第51号土壌層解説 (第75図)

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量
- 2 褐色 ローム中・小ブロック少量

第52号土壌層解説 (第75図)

- 1 黒褐色 ローム小ブロック少量、炭化ブロック・炭化粒子・焼土小ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック少量、炭化ブロック・焼土粒子・ローム中ブロック微量
- 3 褐色 焼土粒子・ローム粒子微量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック中量、炭化粒子微量

第53号土壌層解説 (第75図)

- 1 極暗褐色 ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子中量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック少量、焼土小ブロック微量
- 3 褐色 焼土小ブロック微量
- 4 褐色 ローム中ブロック中量

第55号土壌層解説 (第75図)

- 1 褐色 炭化小ブロック・ローム粒子微量
- 2 褐色 炭化・ローム粒子微量
- 3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量

第56号土壌層解説 (第75図)

- 1 暗褐色 ローム小ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 褐色 焼土・炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム中ブロック・ローム粒子微量

第58号土壌層解説 (第75図)

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、炭化小ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子微量、炭化小ブロック微量
- 3 褐色 炭化・ローム粒子微量

第59号土壌層解説 (第75図)

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・焼土小ブロック少量、ローム中ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム中ブロック中量、炭化粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子微量
- 3 褐色 ローム小ブロック・ローム・焼土粒子少量

第60号土壌層解説 (第75図)

- 1 極暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック少量、焼土小ブロック・焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム中ブロック・焼土粒子微量

第63号土壌層解説 (第75図)

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、焼土・炭化粒子微量

第64号土壌層解説 (第75図)

- 1 暗褐色 炭化粒子中量、焼土粒子・ローム小ブロック少量
- 2 褐色 炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ローム中ブロック中量

第66号土壌層解説 (第75図)

- 1 暗褐色 ローム・焼土・炭化粒子中量
- 2 褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック少量
- 3 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量、焼土・炭化粒子微量
- 4 褐色 ローム粒子少量、ローム中ブロック微量
- 5 褐色 ローム・炭化粒子少量

第67号土壌層解説 (第75図)

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 2 褐色 ローム小ブロック・焼土・ローム粒子微量
- 3 褐色 ローム・炭化粒子微量

第68号土壌層解説 (第75図)

- 1 黒褐色 焼土・ローム粒子微量
- 2 暗褐色 焼土粒子・ローム小ブロック微量
- 3 褐色 焼土粒子・ローム小ブロック微量
- 4 褐色 炭化小ブロック微量

第69号土壌層解説 (第75図)

- 1 暗褐色 ローム小ブロック中量、炭化・焼土粒子少量
- 2 褐色 ローム小ブロック少量、炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム中ブロック少量、焼土粒子微量

第71号土壌層解説 (第75図)

- 1 暗褐色 ローム小ブロック中量、ローム中ブロック・焼土小ブロック・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック中量
- 3 褐色 ローム中ブロック少量

第72号土壌層解説 (第75図)

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック中量、ローム粒子・炭化小ブロック・焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム中ブロック・炭化・ローム粒子微量
- 4 褐色 ローム中ブロック・ローム粒子微量

第73号土壌層解説 (第75図)

- 1 暗褐色 ローム・焼土・炭化粒子・焼土小ブロック少量、炭化物微量
- 2 暗褐色 ローム・焼土粒子・焼土小ブロック中量、炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・焼土小ブロック微量
- 4 褐色 ローム粒子中量

第74号土壌層解説 (第75図)

- 1 褐色 ローム粒子中量
- 2 褐色 ローム粒子中量、焼土・炭化粒子少量
- 3 褐色 ローム大・中ブロック多量
- 4 黒褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック・炭化物少量
- 5 暗褐色 ローム粒子・ローム大・中ブロック少量
- 6 暗褐色 ローム大ブロック多量、ローム粒子少量

第75号土壌層解説 (第75図)

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 3 褐色 ローム大・中ブロック多量

第77号土壌層解説 (第75図)

- 1 黒褐色 ローム小ブロック少量、炭化小ブロック・焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・炭化小ブロック・焼土粒子微量
- 3 褐色 ローム小ブロック少量、炭化・ローム粒子微量

第78号土壌層解説 (第75図)

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子多量、炭化粒子中量、ローム小ブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量、ローム小ブロック少量
- 4 暗褐色 ローム中・小ブロック少量、炭化粒子微量
- 5 褐色 炭化物少量、ローム小ブロック微量

第79号土壌層解説 (第75図)

- 1 暗褐色 ローム粒子・砂粒少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・砂粒・ローム小ブロック・炭化粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量

第80号土壌層解説 (第75図)

- 1 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化小ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 炭化小ブロック・ローム小ブロック微量
- 3 暗褐色 炭化小ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 4 褐色 炭化小ブロック・ローム粒子微量

第87号土壌土層解説 (第76図)

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 白色微粒子微量

第88号土壌土層解説 (第76図)

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子・ローム中ブロック少量

第90号土壌土層解説 (第77図)

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量, 炭化粒子中量

第91号土壌土層解説 (第77図)

- 1 褐色 ローム粒子少量, 焼土・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム・焼土・炭化粒子中量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量, 焼土・炭化粒子・ローム小ブロック少量

第101号土壌土層解説 (第77図)

- 1 暗褐色 ローム粒子多量, ローム中ブロック・焼土・炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム大・中ブロック多量
- 3 褐色 ローム大・中ブロック多量, ローム粒子少量

第103号土壌土層解説 (第77図)

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック少量
- 2 褐色 ローム粒子少量

第104号土壌土層解説 (第77図)

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化小ブロック・焼土粒子微量

第105号土壌土層解説 (第77図)

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化・焼土粒子微量
- 2 暗褐色 焼土粒子中量, 炭化・ローム粒子少量
- 3 褐色 焼土粒子・ローム小ブロック微量
- 4 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック微量

第109号土壌土層解説 (第77図)

- 1 暗褐色 炭化・ローム粒子微量
- 2 褐色 炭化・ローム粒子微量

第110号土壌土層解説 (第77図)

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, ローム中ブロック・炭化物粒子微量
- 2 暗褐色 ローム大・中ブロック中量, ローム粒子少量

第111号土壌土層解説 (第77図)

- 1 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化物粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量

第112号土壌土層解説 (第77図)

- 1 黒褐色 炭化小ブロック中量, ローム中ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック中量, 炭化小ブロック少量
- 3 褐色 炭化小ブロック少量, ローム粒子微量

第113号土壌土層解説 (第77図)

- 1 褐色 ローム中・小ブロック多量, 炭化粒子微量

第114号土壌土層解説 (第77図)

- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量

第115号土壌土層解説 (第77図)

- 1 暗褐色 炭化・ローム粒子微量
- 2 褐色 炭化粒子・ローム小ブロック微量

第116号土壌土層解説 (第77図)

- 1 暗褐色 ローム小ブロック少量, ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム・炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子少量
- 4 褐色 ローム粒子中量
- 5 褐色 ローム粒子中量, ローム大・中ブロック少量
- 6 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子少量
- 7 暗褐色 ローム大・中ブロック少量, 炭化粒子少量
- 8 褐色 ローム粒子多量

第117号土壌土層解説 (第77図)

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量, 炭化粒子微量

第118号土壌土層解説 (第77図)

- 1 暗褐色 炭化・ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量

第121号土壌土層解説 (第77図)

- 1 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子多量, 炭化小ブロック微量
- 4 褐色 ローム粒子多量, ローム中ブロック少量
- 5 褐色 ローム粒子少量

第122号土壌土層解説 (第77図)

- 1 暗褐色 炭化・焼土・ローム粒子微量
- 2 褐色 炭化・ローム粒子微量

第123号土壌土層解説 (第77図)

- 1 黒褐色 ローム小ブロック多量, ローム粒子中量, 炭化粒子少量
- 2 黒褐色 ローム小ブロック・ローム粒子・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 ローム粒子少量, ローム小ブロック・炭化粒子微量

第124号土壌土層解説 (第77図)

- 1 暗褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム・炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量

第126号土壌土層解説 (第77図)

- 1 暗褐色 炭化・ローム粒子微量
- 2 褐色 炭化・ローム粒子微量

第127号土壌土層解説 (第77図)

- 1 暗褐色 ローム中量, 炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量

第128号土壌土層解説 (第77図)

- 1 褐色 ローム粒子中量
- 2 褐色 暗褐色土小ブロック微量

第129号土壌土層解説 (第77図)

- 1 暗褐色 焼土・炭化・ローム小ブロック微量
- 2 暗褐色 炭化・ローム粒子微量

第130号土壌土層解説 (第78図)

- 1 暗褐色 炭化粒子・ローム小ブロック微量

第131号土壌土層解説 (第78図)

- 1 暗褐色 炭化小ブロック・炭化粒子・ローム粒子微量
- 2 褐色 炭化・ローム粒子微量

第132号土壌土層解説 (第78図)

- 1 暗褐色 ローム粒子多量, 炭化物・ローム小ブロック少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子少量
- 4 褐色 ローム粒子中量
- 5 暗褐色 ローム中・小ブロック中量
- 6 褐色 ローム粒子少量

第133号土壌土層解説 (第78図)

- 1 暗褐色 ローム粒子多量, ローム小ブロック中量, 炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・炭化粒子少量

第134号土壌土層解説 (第78図)

- 1 暗褐色 ローム中ブロック・ローム粒子中量, 炭化粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量, ローム小ブロック・炭化粒子少量
- 3 褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量

第135号土壌土層解説 (第78図)

- 1 暗褐色 ローム小ブロック中量, 焼土粒子少量
- 2 褐色 ローム小ブロック少量

第136号土状土層解説 (第78図)

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、焼土粒子少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・焼土粒子少量
- 3 黒褐色 焼土粒子少量、ローム粒子・焼土小ブロック微量
- 4 暗褐色 焼土中・小ブロック・ローム中ブロック少量、焼土大ブロック微量
- 5 暗褐色 ローム小ブロック中量、焼土小ブロック少量
- 6 暗褐色 焼土小ブロック中量、ローム中・小ブロック少量
- 7 暗褐色 ローム小ブロック少量、焼土小ブロック微量
- 8 暗褐色 ローム中ブロック多量

第138号土状土層解説 (第78図)

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土・炭化粒子微量

第140号土状土層解説 (第78図)

- 1 暗褐色 焼土小ブロック・焼土・炭化粒子少量
- 2 褐色 ローム粒子少量

第146号土状土層解説 (第78図)

- 1 暗褐色 炭化粒子中量、ローム粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量

第147号土状土層解説 (第78図)

- 1 暗褐色 焼土・炭化・ローム粒子少量
- 2 暗褐色 焼土・炭化粒子中量、ローム粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子少量

第148号土状土層解説 (第78図)

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、炭化・焼土粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・ローム中ブロック中量、焼土・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ローム中ブロック多量、ローム粒子中量
- 4 黒褐色 ローム粒子少量
- 5 暗褐色 ローム粒子・ローム中ブロック中量、焼土・炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子・ローム中ブロック少量、焼土・炭化粒子微量

第149号土状土層解説 (第78図)

- 1 褐色 ローム中・小ブロック多量、炭化粒子少量

第150号土状土層解説 (第78図)

- 1 暗褐色 ローム粒子多量、炭化物粒子少量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック・炭化粒子少量
- 3 褐色 ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック・炭化粒子少量

第151号土状土層解説 (第78図)

- 1 暗褐色 炭化・焼土粒子少量
- 2 褐色 炭化粒子・ローム大・中ブロック微量

第153号土状土層解説 (第78図)

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、炭化・焼土粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子少量

第156号土状土層解説 (第78図)

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム小ブロック中量

第156号土状土層解説 (第78図)

- 1 暗褐色 炭化粒子・ローム大・中ブロック・ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子少量、炭化粒子・ローム中ブロック微量
- 3 褐色 ローム粒子・ローム中ブロック中量

第157号土状土層解説 (第78図)

- 1 暗褐色 ローム粒子多量、ローム大ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子多量、ローム大ブロック中量

第158号土状土層解説 (第78図)

- 1 暗褐色 炭化・ローム粒子少量
- 2 暗褐色 炭化・ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 3 暗褐色 炭化粒子少量、ローム粒子微量
- 4 暗褐色 炭化・ローム粒子・ローム中ブロック少量

第160号土状土層解説 (第78図)

- 1 暗褐色 炭化・ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子微量
- 4 暗褐色 ローム中ブロック少量、炭化粒子微量

第161号土状土層解説 (第78図)

- 1 暗褐色 ローム・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子少量

第162号土状土層解説 (第78図)

- 1 暗褐色 ローム中・小ブロック・焼土粒子微量

第163号土状土層解説 (第78図)

- 1 暗褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム中ブロック・ローム粒子微量

第164号土状土層解説 (第78図)

- 1 暗褐色 炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化・焼土粒子微量
- 3 暗褐色 炭化小ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子微量

第165号土状土層解説 (第78図)

- 1 暗褐色 炭化粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子中量、炭化粒子微量
- 3 褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量

第166号土状土層解説 (第78図)

- 1 暗褐色 炭化・ローム粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子中量、ローム大ブロック少量、炭化粒子微量

第167号土状土層解説 (第78図)

- 1 暗褐色 ローム中ブロック・ローム粒子・炭化粒子微量
- 2 褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック少量

第168号土状土層解説 (第78図)

- 1 暗褐色 炭化小ブロック・ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック微量
- 3 褐色 ローム粒子中量、ローム中ブロック微量

第169号土状土層解説 (第78図)

- 1 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・炭化小ブロック・ローム小ブロック微量

第174号土状土層解説 (第78図)

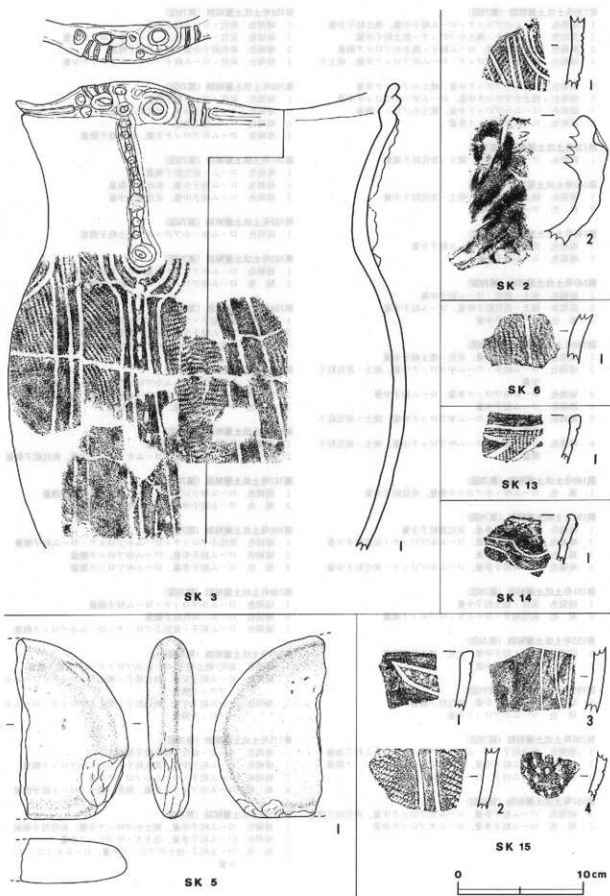
- 1 暗褐色 炭化・焼土粒子・ローム小ブロック・ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子・焼土大ブロック・ローム小ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子・焼土大ブロック・ローム小ブロック微量

第175号土状土層解説 (第78図)

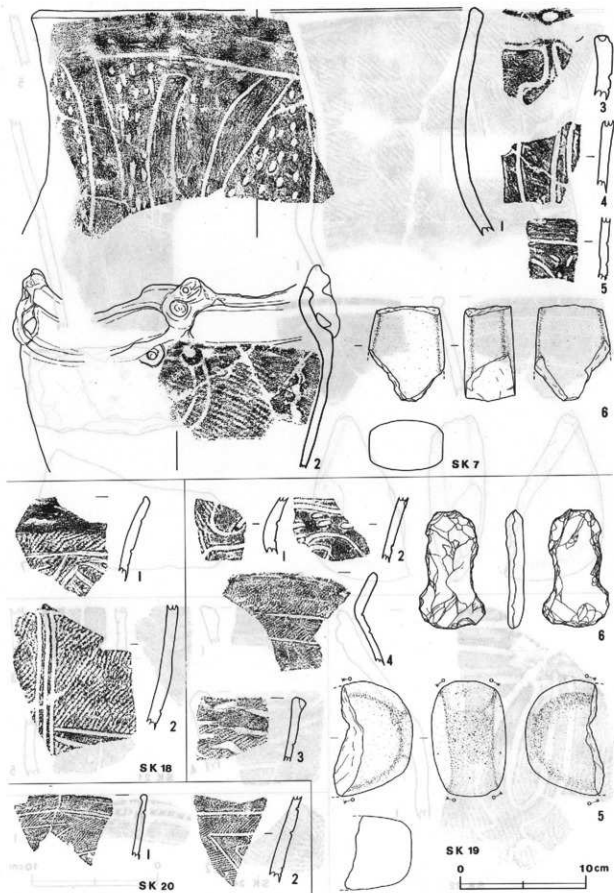
- 1 暗褐色 ローム・炭化・焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、炭化粒子・ローム小ブロック微量
- 3 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量
- 4 褐色 ローム中ブロック少量、炭化・焼土・ローム粒子微量

第181号土状土層解説 (第78図)

- 1 暗褐色 ローム粒子中量、焼土小ブロック少量、炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子多量、焼土大・中ブロック少量
- 3 褐色 ローム粒子・焼土中ブロック中量、ローム大ブロック少量

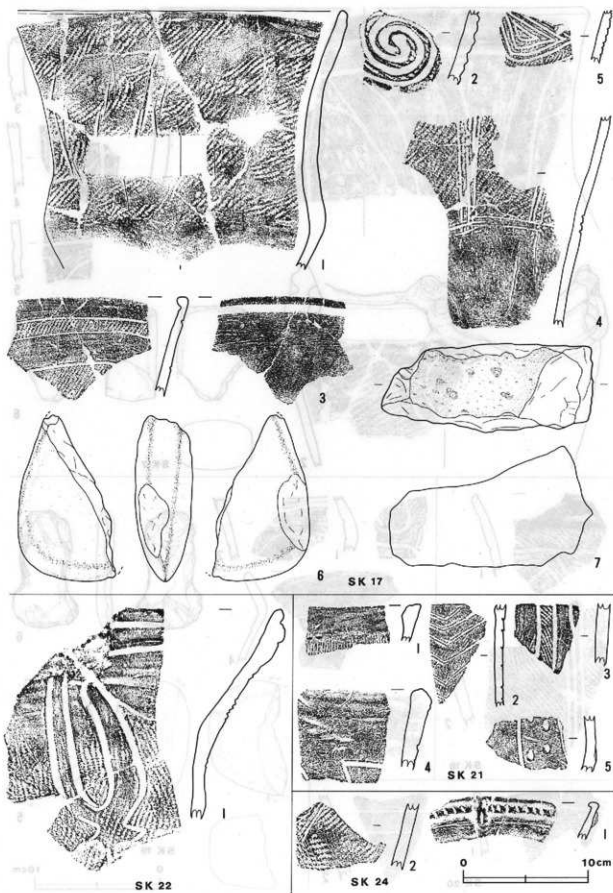


第80圖 土坑出土遺物実測・拓影図(1)

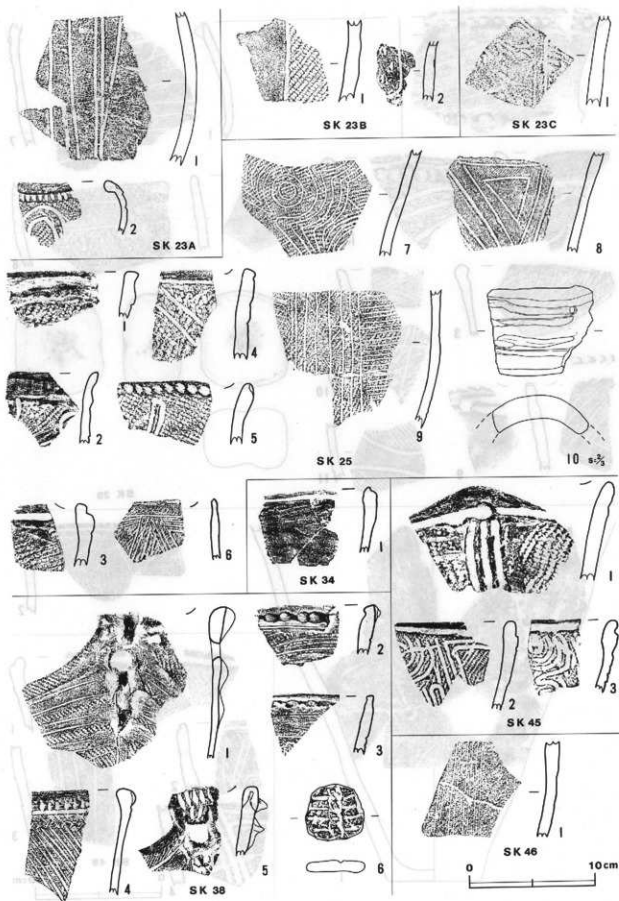


第81圖 土坑出土遺物実測・拓影図(2)

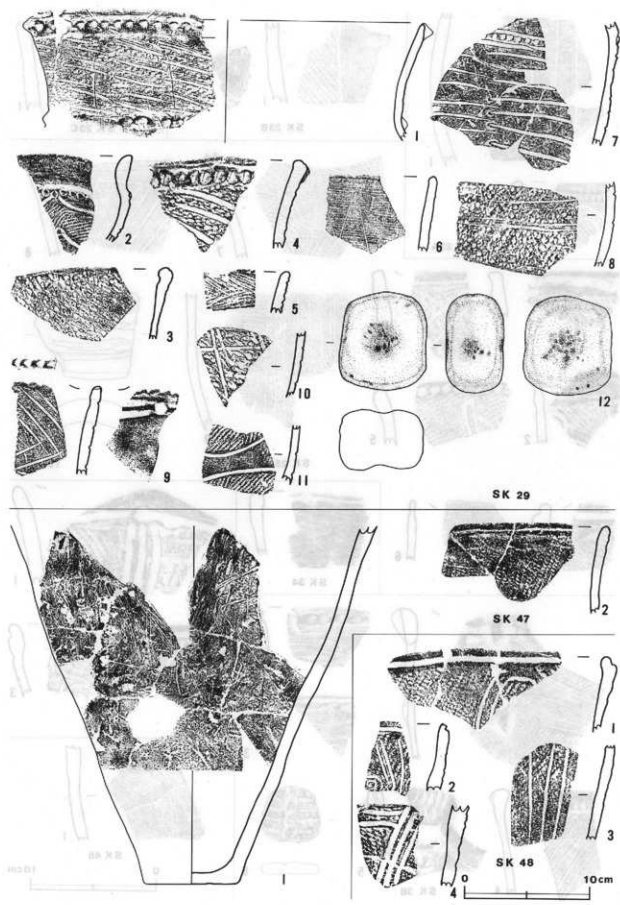
《新刊・東京府出土土器》



第82図 土坑出土遺物実測・拓影図(3)

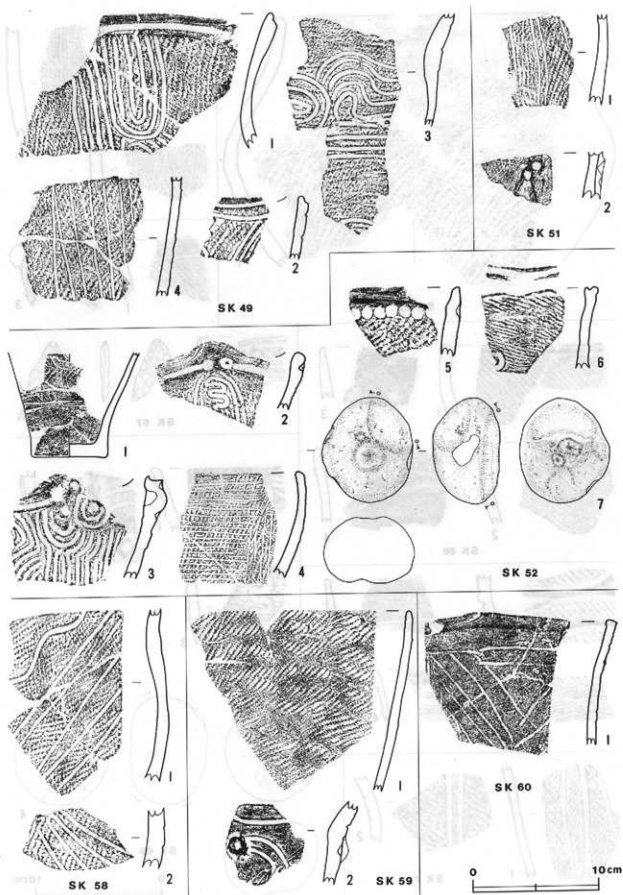


第83圖 土坑出土遺物実測・拓影図(4)

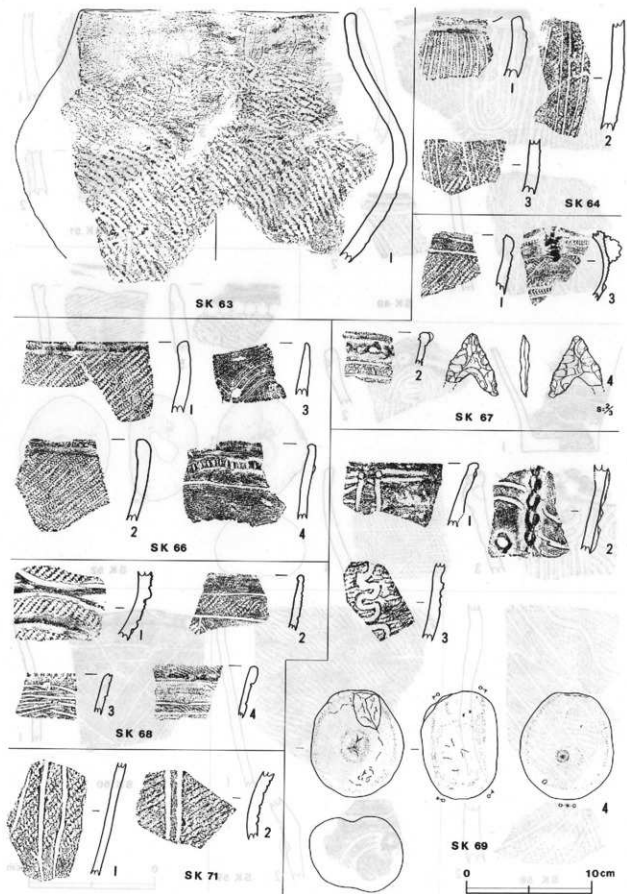


第84图 土坑出土遗物实测·拓影图(5)

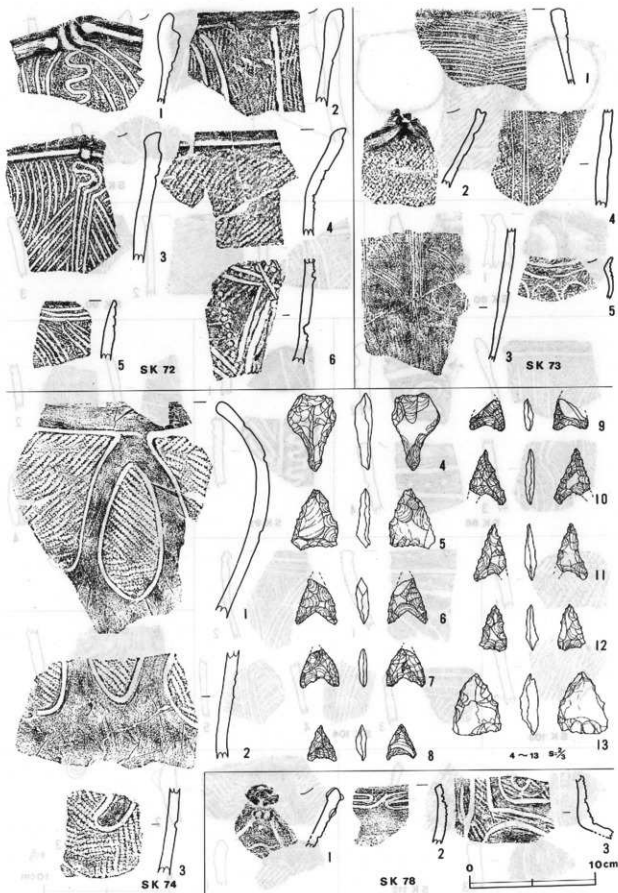
(本图选自《黄家湾出土陶器》图55)



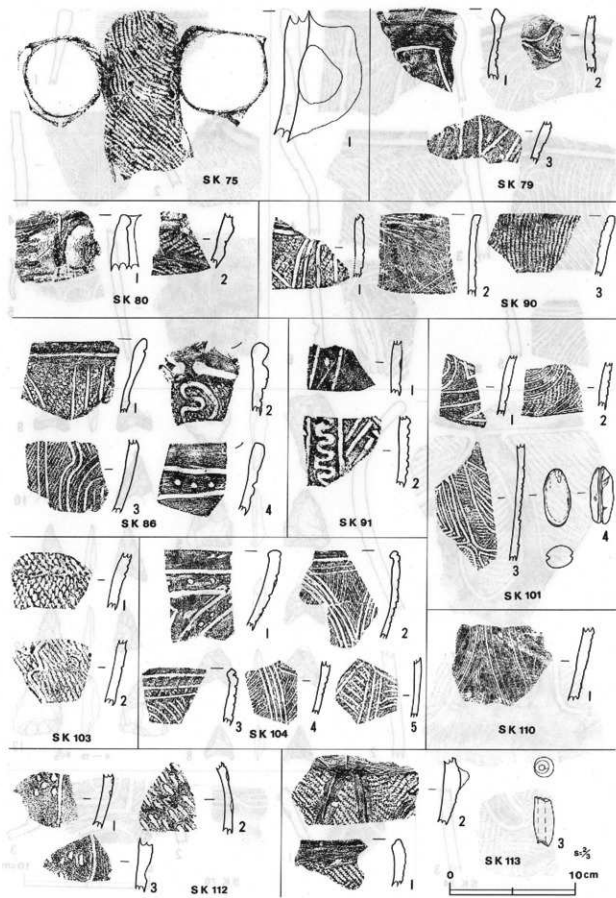
第85図 土坑出土遺物実測・拓影図(6)



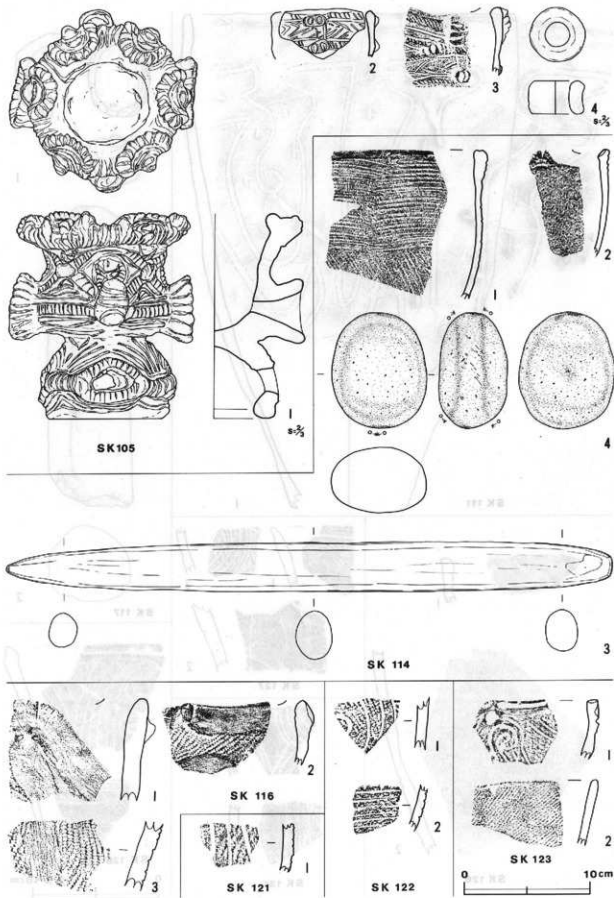
第86图 土坑出土遺物実測・拓影图(7)



第87图 土坑出土遺物実測・拓影図(8)

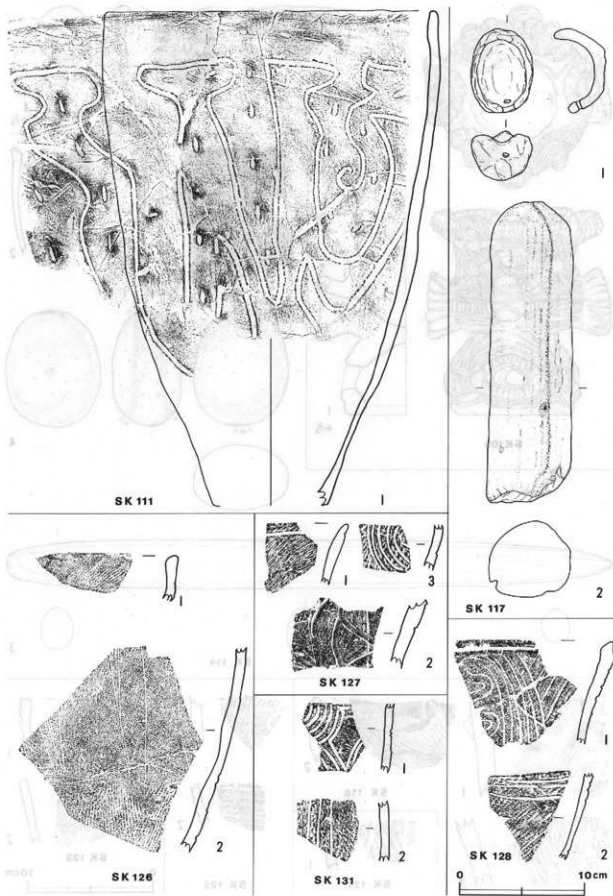


第88图 土坑出土遺物実測・拓影图(9)



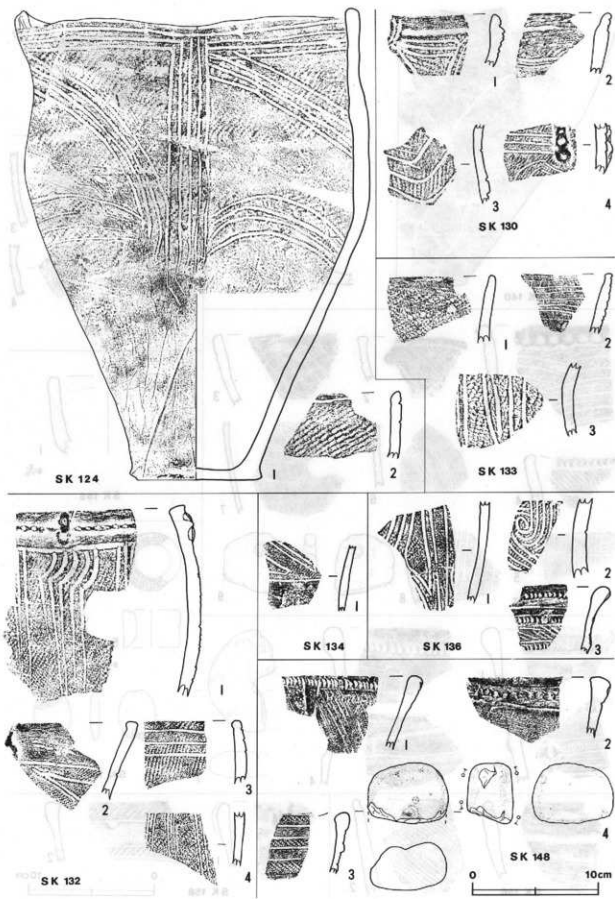
第89图 土坑出土遺物実測・拓影图(10)

中国考古学 第10卷 第1期 1987年



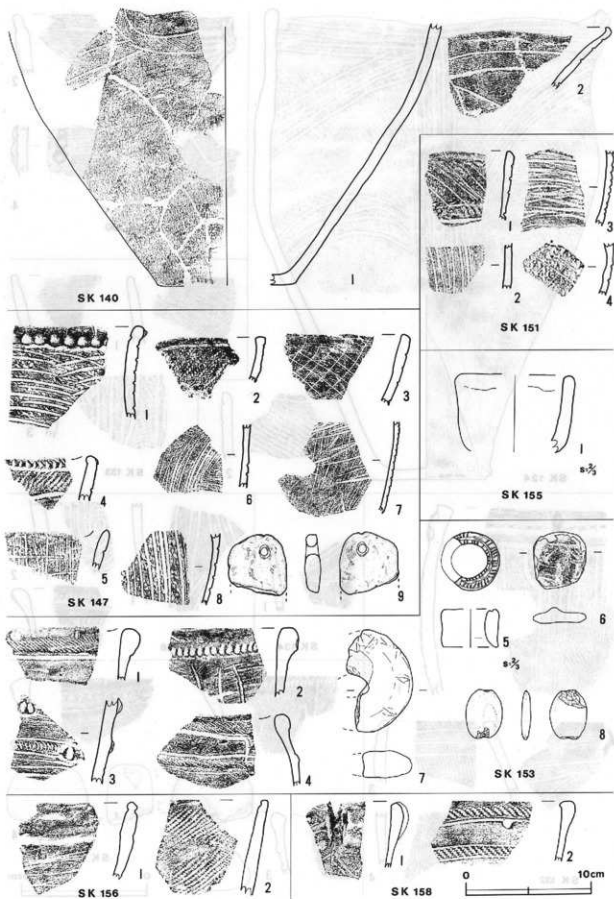
第90图 土坑出土遗物实测·拓影图(1)

拓影图 - 南京新石器时代土坑出土文物



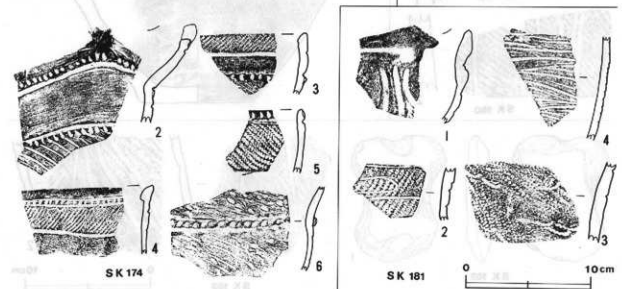
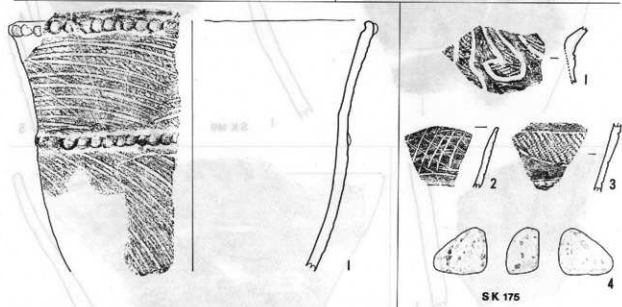
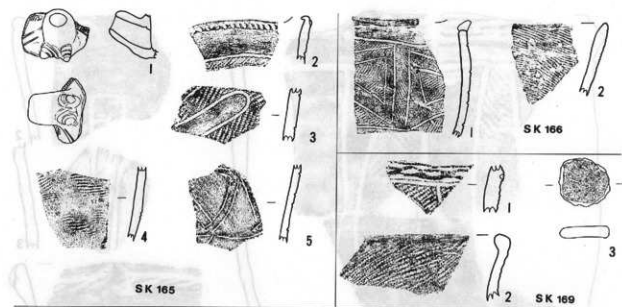
第91图 土坑出土遺物実測・拓影图(12)

中国考古学·殷周断代工程·出土文物·陶器



第92図 土坑出土遺物実測・拓影図(1)

京都府立総合資料館蔵



第94图 土坑出土遺物実測・拓影図(19)

土坑出土遺物観察表

図版番号	器 種	計測値(m)	器 形 及 び 文 様 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第 80 図 1	深鉢形土器	A (30.6)	口縁部から胴部下半にかけての破片。胴部は内彎し、外傾しながら口縁部に至る。口縁部直下は横方向の沈線が施され、突起の中央に 2 個の貫通孔を有し、回りには円形刺突文が施されている。口縁部から胴部にかけては、磨り消され隆帯上には押捺がなされている。胴部は、単筋縄文 L R の地文に曲線的な沈線及び直線状の沈線により文様が構成されている。	長石・スコリア にぶい橙色 普通	P 65 50% SX-3 覆土中 (堀之内 I)
	縄文土器	B (37.5)			
第 81 図 1	深鉢形土器	A (36.4)	口縁部から胴部上半にかけての破片。沈線により文様が構成されており、区画内は刺突列点文が施されている。	長石・石英・スコリア 橙色 普通	P 66 30% SX-7 覆土中層 (松名寺 II)
	縄文土器	B (18.2)			
2	深鉢形土器	A (23.0)	口縁部から胴部にかけての破片。胴部は外傾し、やや内彎しながら口縁部に至る。口縁部は無文で 4 個の輪状把手をもち、把手には円形刺突文が施されている。胴部は磨減が著しいが、単筋縄文 R L の地文に曲線的な沈線が施されている。	スコリア 浅黄褐色 普通	P 67 30% SX-7 覆土中層 (松名寺 II)
	縄文土器	B (16.2)			
第 82 図 1	深鉢形土器	A 26.6	胴部下半は磨滅した後中部でくびれ、緩やかに外傾しながら口縁部に至る。磨減が著しいが、口縁部直下から単筋縄文 R L が施され、くびれ部分は磨り消されている。	長石・石英 橙色 普通	P 68 50% SX-17 覆土中層 (堀之内 I)
	縄文土器	B (20.7)			
第 84 図 1	深鉢形土器	A (33.0)	口縁部及び胴部には粘土紐貼り付けの類文帯、胴部には斜め方向の粗い条線が施されている。	長石 橙色 普通	P 69 5% SX-29 覆土中 (加曾利 B II)
	縄文土器	B (9.5)			
第 84 図 1	深鉢形土器	B (28.6)	底部から胴部上半にかけての破片。平底で、胴部は外傾して立ち上がる。底部から胴部下半は無文で、胴部上半は粗い沈線が施されている。	長石・スコリア にぶい橙色 普通	P 70 60% SX-47 覆土下層 (堀之内 I)
	縄文土器	C 7.8			
	縄文土器				
第 85 図 1	深鉢形土器	B (8.4)	底部から胴部下半にかけての破片。平底で、緩やかに外傾しながら立ち上がる。横及び縦方向の沈線が施されている。	長石・石英 にぶい褐色 普通	P 71 50% SX-52 覆土中 (堀之内 II)
	縄文土器	C 6.2			
第 86 図 1	深鉢形土器	A 22.1	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は内彎し、外傾して立ち上がる。胴部は無筋縄文 L R が施され胴部から口縁部は磨り消されている。	長石・石英・スコリア にぶい黄褐色 普通	P 72 30% SX-63 覆土中 (堀之内 I)
	縄文土器	B (20.1)			
第 89 図 1	異形台付土器	A 6.9	台部は内彎し、胴部は「く」の字状から垂直に立ち上がり、口縁部に至る。口縁部上縁には連続刻文が施され、胴部は 4 単位の交差する刻文帯の中央部には、横長の瘤が随りつけられおり、瘤の上下には半月状の孔が穿たれている。胴部中位には 2 個の無みを施した中空でラッパ状の突起と横筋を施した縦長の瘤がラッパ状の突起と対に付けられている。台部は横長の突起に縦筋を施し、4 個の三角形の孔が穿たれている。	長石 にぶい赤褐色 良好	P 73 100% SX-105 底面 (安行 II)
	縄文土器	B 8.3			
	縄文土器	C 4.5			
	縄文土器	D 3.0			
2	異形台付土器	A (8.3)	台部欠損。口縁部から 2 段の隆起帯筋文が返る。口縁部隆起帯と第 2 隆起帯間には矢羽状の沈線が施され、隆起帯上にはブクム状筋文が付されている。	長石・石英 橙褐色 普通	P 74 20% SX-105 底面 (安行 II)
	縄文土器	B (3.7)			
第 90 図 1	深鉢形土器	A (26.3)	底部欠損。胴部は緩やかに外傾して立ち上がった後内彎し、口縁部に至る。沈線区画内は列点文が施されている。	長石・石英 黒褐色 普通	P 75 80% SX-111 底面 (松名寺 II)
	縄文土器	B (39.8)			
第 91 図 1	深鉢形土器	A 27.5	底部は平底。底部から胴部下半にかけては外傾しながら立ち上がり、胴部は内彎し外傾しながら口縁部に至る。単筋縄文 L R の地文に、口縁部は横方向の 4 本の沈線、口縁部から胴部にかけては曲線的な 4 本及び直下する 5 本の沈線により文様が構成されている。胴部下半から底部にかけては縦方向の削りが施されている。	長石・石英 にぶい褐色 普通	P 76 100% SX-124 覆土中層 (堀之内 I)
	縄文土器	B 37.9			
	縄文土器	C 10.6			
第 92 図 1	深鉢形土器	B (21.1)	胴部片。蛇行する平行沈線区画内は、無筋縄文 R が施されている。胴部下半は磨り消されている。	長石 橙褐色 普通	P 77 30% SX-140 覆土中 (堀之内 II)
	縄文土器	C (11.0)			
第 93 図 1	深鉢形土器	A (28.5)	口縁部から胴部下半にかけての破片。口縁部は、横方向の平行沈線区画内に輪状工具による押捺がなされ、大形の刺突文の裏面に 2 個 1 組の刺突文が施されている。胴部は、複筋縄文 R L R の地文に沈線が施され、磨り消されている。	長石・石英 にぶい橙褐色 普通	P 78 30% SX-149 覆土中 (堀之内 I)
	縄文土器	B (33.1)			
第 92 図 1	ミニアア土器	A (4.8)	胴部片。胴部は緩やかに立ち上がる。内・外面に指痕による整形痕が現われている。	長石・スコリア 橙褐色 普通	P 79 20% SX-155 覆土中
	縄文土器	B (3.1)			
第 93 図 1	深鉢形土器	A (29.7)	底部から口縁部にかけての破片。底部平底。胴部は、外傾して立ちあがる。口縁部から胴部中位にかけては無筋縄文が施され、胴部下位は磨り消されている。	長石・石英 にぶい橙褐色 普通	P 80 25% SX-161 覆土下層 (加曾利 B I)
	縄文土器	B 18.9			
	縄文土器	C 9.3			

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第94図1	注口土器 縄文土器	長さ(4.1)	注口部片。基部外径3.2cm、内径1.4cm、先端部外径1.9cm、内径1.2cm。基部から反り気味に注口部に至る。外面ナデ整形されている。	長石 褐色 普通	P81 5% SK-165 覆土中 (後期か)
第94図1	深鉢形土器 縄文土器	A (29.5) B (20.0)	口縁部から胴部にかけての破片。口縁部と胴部上半に組織文が貼付され、押捺が付されている。組織文は、弧線文及び何れの糸線が施されている。	長石・石英・スコリア 黒褐色 普通	P82 10% SK-174 覆土中 (加群日目)

土坑出土土製品観察表

図版番号	器種	計測値(cm)			重量(g)	現存率(%)	器形及び文様の特徴	備考
		最大長	最大幅	最大厚				
第83図10	扇輪状製品	[3.6]	[4.2]	1.0	(20.0)	30	孔径(4.1)cm。平行する4本の沈線が施されている。	D P 38 SK-25 覆土中 長石 褐色 普通
第83図6	土製円板	4.6	5.1	1.0	23.6	100	横及び縦行する沈線が施文。	D P 39 SK-38 覆土中
第88図4	土 鉢	4.6	2.2	1.9	17.2	100	楕円形で、扁平である。長軸に深い溝が1周している。	D P 40 SK-101 覆土中 長石・石英 褐色 普通
第89図4	耳 飾り	2.2	2.2	1.4	5.8	100	環形。内径1.4cmで表面及び側面は磨きが施され、無文である。	D P 41 SK-105 底面 長石 褐色 普通 (後期後葉)
第90図1	舟形土製品	6.7	5.0	4.2	65.8	100	丸底。内・外面は無文で、整形痕が強く残る。側面には、孔が1個穿たれている。	D P 42 SK-117 覆土中 長石・バミス 褐色 普通
第92図5	耳 飾り	2.3	[2.3]	1.5	(6.1)	70	環形。内径1.4cmで表面に磨きが施され、側面は磨きが施されている。	D P 43 SK-153 覆土中 長石 黒褐色 普通
6	土製円板	4.5	4.3	1.3	23.1	100	表面に貼衝が付されている。	D P 44 SK-153 覆土中
7	有孔円板形土製品	8.2	(5.3)	2.2	(87.7)	50	無文。ナデ整形がなされているが、摩滅が著しい。	D P 45 SK-153 覆土中 長石・石英 褐色 普通
第94図3	土製円板	3.9	4.2	1.0	18.0	100	表面に粗い糸線が施されている。	D P 46 SK-169 覆土中

土坑出土石器観察表

図版番号	器種	計測値				石質	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第80図1	石 皿	14.5	(9.0)	3.8	(720.0)	安山岩	Q66 欠損品 SK-5 覆土中
第81図6	磨製石斧	(7.7)	6.0	4.1	(360.0)	硬砂岩	Q67 定角式 欠損品 SK-7 覆土上層
第82図6	磨製石斧	(13.2)	(7.9)	4.6	(580.0)	花崗岩	Q68 定角式 欠損品 SK-17 覆土中
第82図7	石 皿	(17.0)	(7.1)	(9.6)	(1360.0)	安山岩	Q69 欠損品 SK-17 覆土中
第81図5	磨 石	9.3	(6.4)	6.0	(480.0)	安山岩	Q70 欠損品 SK-19 覆土中
第81図6	打製石斧	(9.4)	(5.3)	(1.4)	(80.0)	粘板岩	Q71 分断形 一部欠損 SK-19 覆土中
第84図12	凹 石	7.9	7.0	4.6	400.0	安山岩	Q72 SK-29 覆土中
第85図7	凹 石	8.4	7.2	5.4	340.0	安山岩	Q74 磨石兼用 SK-52 覆土中
第86図4	石 鏃	(2.5)	(2.0)	0.5	(1.2)	チャート	Q75 一部欠損品 凹基無基鏃 SK-67 覆土中
第86図4	磨 石	8.6	7.4	6.2	560.0	安山岩	Q76 SK-69 覆土中
第87図4	石 鏃	(3.1)	1.9	0.7	(2.8)	チャート	Q77 一部欠損品 SK-74 底面
5	石 鏃	2.4	1.8	0.6	1.9	チャート	Q78 凹基無基鏃 SK-74 底面
6	石 鏃	(1.9)	1.2	0.6	(0.9)	チャート	Q79 一部欠損品 凹基無基鏃 SK-74 底面
7	石 鏃	(1.5)	1.5	0.3	(0.5)	チャート	Q80 一部欠損品 凹基無基鏃 SK-74 底面
8	石 鏃	1.4	1.2	0.4	0.4	黒曜石	Q81 凹基無基鏃 SK-74 底面
9	石 鏃	(1.3)	1.5	0.4	(0.6)	チャート	Q82 一部欠損品 凹基無基鏃 SK-74 底面
10	石 鏃	2.3	(1.5)	0.4	(0.8)	チャート	Q83 一部欠損品 凹基無基鏃 SK-74 底面
11	石 鏃	2.3	(1.3)	0.5	(0.7)	チャート	Q84 一部欠損品 凹基無基鏃 SK-74 底面
12	石 鏃	(1.9)	(1.1)	0.5	(0.6)	チャート	Q85 一部欠損品 凹基無基鏃 SK-74 底面
13	石 鏃	2.5	(1.9)	0.8	(3.4)	チャート	Q86 一部欠損品 凹基無基鏃 SK-74 底面
第88図3	管状石製品	(2.0)	0.8	-	(1.1)	滑 石	Q88 一部欠損品 径0.3cmの穿孔 SK-113 覆土中
第89図3	石 剣	48.5	4.0	3.0	880.0	粘板岩	Q89 SK-114 底面
4	磨 石	9.3	7.7	5.6	560.0	安山岩	Q90 SK-114 底面
第90図2	石 棒	(23.7)	6.9	6.2	(1420.0)	粘板岩	Q91 欠損品 SK-117 覆土中

図版番号	器 種	計 測 値				石 質	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第92図9	浮 子	(5.0)	4.0	1.3	(8.0)	軽 石	Q92 欠損品 径0.9cmの穿孔 SK-147 覆土中
第91図4	磨 石	(4.8)	6.5	3.6	(160.0)	安 山 岩	Q93 磨石兼用 欠損品 SK-148 覆土中層
第92図8	石 錘	(4.0)	3.0	0.7	(13.0)	硬 砂 岩	Q94 一部欠損 SK-153 覆土中
第93図1	打製石斧	(10.1)	(7.8)	2.2	(200.0)	粘 板 岩	Q95 分断形 一部欠損 SK-162 覆土中
第94図4	浮 子	(3.8)	(4.3)	(2.6)	(9.3)	軽 石	Q96 欠損品 SK-175 覆土中

ここでは、前項で解説できなかった、土坑の出土遺物の出土状況及び拓影図の解説について記述する。

第2号土坑 (第74図)

第80図1・2は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1は胴部片で沈線、2は把手で握られており大きめの刺突が施されている。

第6号土坑 (第74図)

第80図1は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。胴部片で、縄文地文に沈線により区画がなされ磨り消されている。

第7号土坑 (第74図)

第81図3～5は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。3は口縁部片で口唇部に刺突がなされている。4・5は胴部片で、4は沈線区画内は列点文、5は平行沈線が施されている。

第13号土坑 (第74図)

第80図1は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。口縁部片で羽状縄文が沈線により区画されている。

第14号土坑 (第74図)

第80図1は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。口縁部片で隆帯上は押塗がなされ、平行沈線が施されている。

第15号土坑 (第74図)

第80図1～4は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1は口縁部片で列点文が施されている。2～4は胴部片で、2は単節縄文LRの地文に垂下する平行沈線が施され磨り消されている。3は2本の沈線、4は粗い刺突がなされている。

第17号土坑 (第74図)

第82図2～5は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。2は胴部片で同心円状のモチーフが描かれている。3・5は単節縄文LRの地文が沈線により区画されており、4は胴部片で単節縄文LRの地文に縦及び横方向の沈線が施され、胴部下半は縦方向の削りがなされている。

第18号土坑（第74図）

第81図1・2は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1は口縁部片で縄文地文に口縁部は磨り消され、胴部上半は横及び斜め方向の沈線が施されている。2は胴部片で縄文地文に垂下する3本の沈線が施され、横方向の平行沈線内は磨り消されている。

第19号土坑（第74図）

第81図1～4は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1・2は胴部片で沈線により区画され、2は列点文が施されている。3・4は口縁部片で、3は単節縄文LRの地文に沈線が施され磨り消しがなされている。4は胴部片が内巻し、口縁部は外傾して立ち上がり、単節縄文LRの地文に沈線が施されている。

第20号土坑（第74図）

第81図1・2は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1・2は単節縄文RLの地文に沈線により区画され、区画内は磨り消されている。

第21号土坑（第74図）

第82図1～5は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1は口縁部片で縦方向に粗い条線が施されている。2・3は胴部片で、2は「V」字状の沈線、3は垂下する沈線、4は口縁部片で無文、5は胴部片で列点文が施されている。

第22号土坑（第74図）

第82図1は覆土中層から出土した縄文土器片の拓影図である。口縁部から胴部にかけての破片で、口縁部は太い平行沈線が施され、頸部から胴部にかけては縄文地文に平行沈線が施されている。

第23-A号土坑（第74図）

第83図1・2は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1は胴部片で縦方向の沈線、2は口縁部から胴部にかけての破片で、口縁部は横方向の沈線上は縦長の刺突がなされ、胴部は単節縄文RLの地文に平行沈線が施され、区画内は磨り消されている。

第23-B号土坑（第74図）

第83図1・2は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1・2は胴部片で、1は単節縄文RLの地文に縦方向の沈線区画内は磨り消されている。2は列点文が施されている。

第23-C号土坑（第74図）

第83図1は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。胴部片で縦方向の沈線が施されている。

第24号土坑（第74図）

第82図1・2は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1は口縁部片で、押捺を加えた粘土紐上には縦長の貼瘤がなされている。2は胴部片で縄文地文に斜め方向の条線が施されている。

第25号土坑（第74図）

第83図1～9は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1～6は口縁部片で、1・3は口縁部直下に深めの沈線が施され、2は単節縄文LRの地文に削りがなされ、4は口縁部直下に沈線が施され、斜め方向の平行沈線が施されている。5は口縁部直下に縦長の刺突がなされている。6は単節縄文RLの地文に横及び斜め方向の沈線が施されている。7～9は胴部片で縄文地文に、7は円形及び蛇行する沈線、8は平行沈線区画内は磨り消され、9は縦及び横方向の沈線が施されている。いずれも堀之内式期に比定される。

第29号土坑（第74図）

第84図2～11は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。2は口縁部から胴部にかけての破片で、2は縄文地文に沈線及び円形竹管文が巡る。3～6は口縁部片で、3は格子状の沈線が施され、4は押捺を加えた粘土紐が貼付され、5・6は斜め方向の沈線が施されている。7・8・10は胴部片で横方向の粗い沈線が施され、9は口縁部片で口唇部は刻みが施されている。11は胴部片で単節縄文LRの地文に沈線が施され、沈線区画内は磨り消されている。いずれも、加曾利BⅡ式期に比定される。

第34号土坑（第74図）

第83図1は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。口縁部片で、口縁部直下には沈線が施されている。

第38号土坑（第75図）

第83図1～5は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1～5は口縁部片である。1は波状口縁で口縁部文様帯は4段の隆起帯縄文と瘤の貼付により構成され、孔が穿たれている。2・3は口縁部に隆線を貼り付け、指頭による押捺がなされている。4は縦刻み及び沈線を巡らせている。5は波状口縁の波頂部で、頂部の突起の貼瘤に刻みが施されている。いずれも、安行Ⅰ式期に比定される。

第45号土坑（第75図）

第83図1～3は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1～3は口縁部片で、1は口縁部下に横及び縦方向の沈線、2・3は蛇行する沈線が施されている。いずれも、堀之内Ⅰ式期に比定される。

第46号土坑（第75図）

第83図1は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。胴部片で、垂下する沈線が施されている。

第47号土坑（第75図）

第84図2は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。胴部片で、口縁部下に沈線が巡る。

第48号土坑（第75図）

第84図1～4は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1・2は口縁部片で、口縁部下に沈線が巡り、胴部は斜め方向の沈線が施されている。3・4は胴部片で、縦及び横方向の沈線が施されている。いずれも堀之内Ⅰ式期に比定される。

第49号土坑 (第75図)

第85図1～4は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1・2は口縁部片で、口縁部下に沈線が走り、胴部は平行沈線が施されている。3・4は胴部片で、3は縄文地文に曲線状の沈線、4は粗い沈線が施されている。

第51号土坑 (第75図)

第85図1・2は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1・2は胴部片で、1は縄文地文に縦方向の沈線が施され、2は隆帯上に刺突が施されている。

第52号土坑 (第75図)

第85図2～6は覆土下層から出土した縄文土器片の拓影図である。2～6は口縁部片で、2は口縁部下に沈線が走り、2箇の刺突が施されている。3は穿孔及び刺突が施され、4は縄文地文に横及び縦方向の沈線が施されている。5の口縁部下は磨り消され、連続刺突文が施され、6は口唇部に沈線が巡る。

第58号土坑 (第75図)

第85図1・2は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1・2は胴部片で、縄文地文に沈線が施されている。

第59号土坑 (第75図)

第85図1・2は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1は口縁部片で、単節縄文R Lが施文されている。2は胴部片で貼瘤に刺突が施されている。

第60号土坑 (第75図)

第85図1は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。口縁部片で、横及び斜め方向の沈線が施されている。

第64号土坑 (第75図)

第86図1～3は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1は口縁部片、2・3は胴部片で、縦方向の沈線が施されている。

第66号土坑 (第75図)

第86図1～4は覆土中層から出土した縄文土器片の拓影図である。1～4は口縁部片で、1は単節縄文L Rが施文され、2は付加条一種付加2条の縄文が施文されている。3は沈線が施され、4は隆帯上に刻みが施されている。

第67号土坑 (第75図)

第86図1～3は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1・2は口縁部片で、1は口縁部下に沈線が施され磨り消され、2は隆帯上に押捺がなされている。3は胴部片で刻文帯に縦長の瘤が貼られ横方向の刻

みが施されている。

第68号土坑（第75図）

第86図1～4は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1は胴部片で、単節縄文LRの地文に隆線及び沈線で文様が構成されている。2～4は口縁部片で、2は縄文地文に沈線が施され、3は口唇部に刻みが施され、4は縄文帯間は磨り消されている。

第69号土坑（第76図）

第86図1～3は覆土下層から出土した縄文土器片の拓影図である。1は口縁部片で、2本の沈線には2個の刺突がなされている。2・3は胴部片で、2は連続刺突を加えた隆帯が貼られている。3は縄文地文に蛇行沈線が施されている。いずれも、堀之内I式期に比定される。

第71号土坑（第75図）

第86図1・2は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1・2は胴部片で、単節縄文LRの地文に垂下する沈線が施されている。

第72号土坑（第76図）

第87図1～6は覆土下層から出土した縄文土器片の拓影図である。1～5は口縁部から胴部にかけての破片で、1は小波状口縁で沈線が廻り、胴部は弧線及び蛇行する沈線が施され、2は太い沈線が施されている。3・4は口縁部下に沈線が廻り、3は沈線により文様が構成され、4は単節縄文LRが施文されている。5は沈線により文様が構成され、6は胴部片で縦方向に連続刺突文が施されている。

第73号土坑（第76図）

第87図1～5は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1・2は口縁部片で、1は下向きの弧線が施され、2は小波状口縁で口唇部に刺突がなされている。3・4は胴部片で、沈線により文様が構成されている。5は口縁部片で縄文地文に沈線が施され、沈線区画内は磨り消されている。

第74号土坑（第76図）

第87図1～3は覆土下層から出土した縄文土器片の拓影図である。1は口縁部から胴部にかけての破片、2・3は胴部片で、縄文地文に沈線が施され、沈線区画内は磨り消されている。

第75号土坑（第76図）

第88図1は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。大形の楕状把手で、単節縄文LRが施文されている。

第78号土坑（第76図）

第87図1～3は覆土中層から出土した縄文土器片の拓影図である。1・2は口縁部片で、1は波状口縁で横長の瘤が貼られ、2は沈線により楕円区画がなされている。いずれも、安行Ⅲb式期に比定される。3は胴部

片で縄文地文に沈線が施され、流れ込みと思われる。

第79号土坑（第76図）

第88図1～3は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1は口縁部片、2・3は胴部片でいずれも列点文が施されている。

第80号土坑（第76図）

第88図1・2は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1は口縁部片で隆帯が貼られ、2は胴部片で縄文地文に隆線及び沈線が施されている。

第86号土坑（第76図）

第88図1～4は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1・2は口縁部片で、口縁部下に横方向の沈線が巡り、2は2個の刺突がなされている。3は胴部片で、単節縄文LRの地文に沈線が施されている。4は口縁部片で、無文で沈線区画内に刺突が施されている。

第90号土坑（第77図）

第88図1～3は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1は胴部片で、縄文地文に沈線が施されている。2・3は口縁部片で、2は粗い条線、3は単節縄文LRが施文されている。

第91号土坑（第77図）

第88図1・2は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1・2は胴部片で、1は列点文、2は蛇行する沈線が施されている。

第101号土坑（第77図）

第88図1～3は覆土中層から出土した縄文土器片の拓影図である。1～3は胴部片で、弧線状及び直線状の沈線により文様が構成されている。

第103号土坑（第77図）

第88図1・2は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1・2は胴部片で、1は単節縄文RLが施文され、2は沈線が施されている。

第104号土坑（第77図）

第88図1～4は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1～3は口縁部片で、1は沈線区画内に列点文が施され、2・3は口縁部下に沈線を巡らせ、曲線状の沈線により文様が構成されている。4・5は胴部片で、縦及び斜め方向の沈線により文様が構成されている。

第105号土坑（第77図）

第89図3は覆土下層から出土した縄文土器片の拓影図である。口縁部片で、縄文帯に縦長の貼瘤に横方向の

刻みが施され、刻文帯上にはブタ鼻状の貼瘤が接続されている。安行Ⅱ式期に比定される。

第110号土坑（第77図）

第88図1は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。胴部片で、粗い沈線が施されている。

第112号土坑（第77図）

第88図1～3は覆土下層から出土した縄文土器片の拓影図である。胴部片で、列点文が施されている。

第113号土坑（第77図）

第88図1・2は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1は口縁部片で、単節縄文RLの地文に口縁部下は削りがなされている。2は胴部片で、縄文地文に隆線及び沈線が施されている。

第114号土坑（第77図）

第89図1・2は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1・2は口縁部片で、1は弧線状の条線が施され、2は小突起に刻みが施されている。安行Ⅲb式期に比定される。

第116号土坑（第77図）

第89図1～3は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1・2は口縁部片で、単節縄文LRの地文に口縁部下は削りが施されている。3は胴部片で、単節縄文RLの地文に直線的に垂下する磨消帯が施されている。

第121号土坑（第77図）

第89図1は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。胴部片で、沈線が施されている。

第122号土坑（第77図）

第89図1・2は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。胴部片で、1は曲線状の沈線、2は直線状の沈線が施されている。

第123号土坑（第77図）

第89図1・2は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1・2は口縁部片で、1は小波状口縁で口唇部に沈線が施され、2は口縁部下から付加条一種付加2条の縄文が施文されている。

第124号土坑（第77図）

第91図2は覆土下層から出土した縄文土器片の拓影図である。口縁部片で、口縁部下に沈線が施され、堀之内式期に比定される。

第126号土坑（第77図）

第90図1・2は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1は口縁部片で、縄文地文に粗い削りがな

され、2は胴部片で縦方向の粗い沈線が施されている。

第127号土坑（第77図）

第90図1～3は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1は口縁部片で、沈線下に無節縄文Lが施文されている。2・3は胴部片で、縄文地文に曲線状の沈線が施されている。

第128号土坑（第77図）

第90図1・2は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1は口縁部片で、口縁部下に沈線が巡り、2は胴部片で、縄文地文に沈線が施されている。

第130号土坑（第78図）

第91図1～4は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1・2は口縁部片で、1は単節縄文RLの地文に口縁部直下から沈線により文様が構成されている。2は口縁部直下からヘラ状工具等による削りがなされている。3・4は胴部片で、3は単節縄文LRの地文に沈線が施され、沈線区画内は削りが施されている。4は粘土継上に連続刺突文が施されている。

第131号土坑（第78図）

第90図1・2は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1・2は胴部片で、曲線及び直線状の沈線が施されている。

第132号土坑（第78図）

第91図1～4は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1は口縁部から胴部にかけての破片で、隆線には押捺がなされ、貼瘤上には2個の刺突が施されている。2・3は口縁部片で、4は胴部片で、縄文地文に沈線が施されている。

第133号土坑（第78図）

第91図1～3は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1・2は口縁部片で、1は口縁部下から縄文が施文され、2は6条の横方向の沈線が施されている。3は胴部片で、縄文地文に縦方向の沈線が施されている。

第134号土坑（第78図）

第91図1は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。胴部片で、縄文地文に沈線が施されている。

第136号土坑（第78図）

第91図1～3は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1・2は胴部片で、1は直線及び斜め方向の沈線、2は曲線状の沈線が施されている。3は口縁部片で3段の刻文帯が施されている。

第140号土坑（第78図）

第92図2は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。口縁部片で、沈線区画内は磨り消しがなされている。

第147号土坑（第78図）

第92図1～8は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1～5は口縁部片で、1は口縁部に粘土紐に押塗が加えられ、下向きの弧線が施されている。2は単節縄文LRの地文に口縁部下に沈線が施され、3は格子状の沈線が施され、4は波状口縁で刻みが施されている。5は口縁部下から粗い条線が施されている。6～8は胴部片で、粗い条線が施されている。

第148号土坑（第78図）

第91図1～3は覆土下層から出土した縄文土器片の拓影図である。1～3は口縁部片で、1は口縁部に刻みが施され、2は粘土紐に押塗がなされ、3は3段の縄文帯間は磨り消されている。いずれも、加曾利BⅢ式期に比定される。

第149号土坑（第78図）

第93図2～5は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。2は口縁部片、3は胴部片で列点文が施され、4は口縁部下に沈線が巡り、刺突が施されている。5は胴部片で、蛇行する沈線が施されている。

第151号土坑（第78図）

第92図1～4は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1は口縁部片で、斜め方向の条線が施されている。2～4は胴部片で、2・3は粗い条線、4は格子状の沈線が施されている。

第153号土坑（第78図）

第92図1～4は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1・4は口縁部片で、縄文帯間は磨り消されている。2は口縁部下に押塗が加えられ、3は胴部片で、刻文帯上にブタ鼻状の貼瘤が付されている。

第156号土坑（第78図）

第92図1・2は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1・2は口縁部片で、1は横方向の粗い条線、2は付加条一種付加2条の縄文が施文されている。

第158号土坑（第78図）

第92図1・2は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1・2は口縁部片で、縄文帯間が磨り消され、1は瘤が貼付されている。

第160号土坑（第78図）

第93図1・2は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1・2は胴部片で、単節縄文LRの地文に沈線が施されている。いずれも、堀之内I式期に比定される。

第163号土坑（第78図）

第93図1・2は覆土下層から出土した縄文土器片の拓影図である。1・2は胴部片で、縄文地文に沈線が施されている。いずれも、堀之内I式期に比定される。

第165号土坑（第79図）

第94図2～5は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。2は口縁部片で、口縁部下には粘土紐上は押捺がなされ、磨り消されている。3～5は胴部片で、3は単節縄文RLの地文に沈線により楕円状の区画がなされ、区画内は磨り消されている。4は無節縄文が施文され、まばらな削りが施され、5は沈線が施されている。

第166号土坑（第79図）

第94図1・2は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1・2は口縁部片で、1は口縁部が外反し沈線により区画され磨り消されている。2は無節縄文Rが施文されている。

第169号土坑（第79図）

第94図1・2は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1は胴部片で、横長の連続刺突が粘土紐上に施され、2は口縁部片で、単節縄文LRが施文されている。

第174号土坑（第79図）

第94図2～6は覆土下層から出土した縄文土器片の拓影図である。2～5は口縁部片で、2は波状口縁で小突起を有し、口縁部と頸部には沈線が施され磨り消しがなされている。3は縄文帯間は磨り消され、4は口縁部下に刻みが施され、沈線区画内は単節縄文RLが施文されている。5は口縁部に刻みが施され、単節縄文RLの地文に沈線により区画がなされている。6は胴部片で、粘土紐上には押捺がなされている。

第175号土坑（第79図）

第94図1～3は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1・3は胴部片で、1は沈線で「J」字文を描き、区画内は磨り消し区画外は単節縄文LRが施文されている。3は沈線区画内に単節縄文RLが充填されている。2は口縁部片で、格子状の沈線が施されている。

第181号土坑（第79図）

第94図1～4は覆土中から出土した縄文土器片の拓影図である。1は口縁部片で、沈線上に孔が穿たれている。2～4は胴部片で、2は単節縄文LRの地文に沈線が施され、3は単節縄文RLが施文され、4は横方向の粗い条線が施されている。

表6 釈迦才仏遺跡土坑一覽表

土坑 番号	位置 方 向	長径(軸) 方 向	平 面 形	長径×短径 (m)	深 さ (cm)	壁面	底面	覆土	時 期	出 土 遺 物	備 考 *重複関係(新-旧)
1	B5fe	N-66°-E	楕円形	1.29×1.11	65	緩斜	平坦	自然	不明		
2	B5fo	N-10°-W	楕円形	1.15×0.99	63	外傾	平坦	自然	不明	縄文土器	
3	B6br	N-45°-E	楕円形	0.75×0.59	45	垂直	平坦	自然	不明	縄文土器	本跡→SI-2
5	B6es	N-47°-E	楕円形	0.80×0.69	25	垂直	平坦	自然	不明	石皿	
6	B5ea		円形	1.10×1.08	20	緩斜	皿状	自然	不明	縄文土器	
7	B6ds	N-73°-E	楕円形	1.35×1.17	60	緩斜	皿状	自然	吾名寺Ⅱ	縄文土器、磨製石斧	
13	B6ea	N-21°-E	楕円形	1.40×0.98	21	緩斜	皿状	自然	不明	縄文土器	
14	B6ez	N-42°-E	不整形円形	0.74×0.59	24	緩斜	皿状	自然	不明	縄文土器	
15	B6ds		円形	0.84×0.78	22	外傾	皿状	自然	後期前葉	縄文土器	
16	B6ds	N-66°-E	楕円形	1.25×0.72	89	垂直	平坦	自然	不明	縄文土器	
17	B6ds		円形	1.23×1.10	145	垂直	皿状	人為	堀之内Ⅰ	縄文土器、磨製石斧 石皿	
18	B6ds	N-66°-E	楕円形	0.94×0.79	46	外傾	皿状	自然	不明	縄文土器	
19	B6ds	N-76°-W	不整形円形	0.91×0.83	29	垂直	平坦	自然	後期後葉	縄文土器、打製石斧 磨石	本跡→SK-20
20	B6da	N-38°-E	(楕円形)	(2.32×1.52)	65	垂直	平坦	自然	不明	縄文土器	SK-19→本跡
21	B5ga		円形	1.09×1.05	48	外傾	凹凸	自然	不明	縄文土器	SI-4→本跡
22	B6ei		円形	0.70×0.66	65	垂直	平坦	人為	堀之内Ⅰ	縄文土器	
23-A	B5gr	N-4°-E	(楕円形)	(0.84×0.74)	46	緩斜	凹凸	自然	不明	縄文土器	SI-4、SK-23B-C→本跡
23-B	B5gr	N-3°-E	(楕円形)	(1.70×1.00)	44	緩斜	平坦	自然	不明	縄文土器	SI-4、SK-23C→本跡
23-C	B5gr	N-4°-E	(楕円形)	(0.80×0.70)	16	緩斜	平坦	自然	不明	縄文土器	SI-4→本跡→SK-23A-B
24	B6ea	N-22°-W	(楕円形)	(1.39)×1.09	58	緩斜	凹凸	自然	不明	縄文土器	
25	B6ea		円形	1.09×1.09	123	垂直	平坦	人為	堀之内Ⅰ期	縄文土器、陶輪状土 製品	
29	B5f	N-7°-E	楕円形	1.35×0.92	92	垂直	皿状	自然	加曾野BⅡ	縄文土器、凹石	
34	B4g		円形	1.43×1.38	40	外傾	凹凸	自然	不明	縄文土器	TM-6→SI-8→本跡
38	B4ge		円形	1.26×1.20	79	外傾	平坦	自然	安行Ⅰ	縄文土器、土製円板	
45	B3js	N-56°-E	(楕円形)	(1.64)×1.51	73	緩斜	凹凸	自然	堀之内Ⅰ	縄文土器	TM-4→本跡
46	C3aa	N-66°-W	楕円形	0.89×0.67	26	外傾	平坦	自然	不明	縄文土器	
47	B3ja	N-47°-E	楕円形	1.25×1.04	59	垂直	平坦	自然	堀之内Ⅰ	縄文土器	
48	B3ja	N-65°-W	楕円形	1.25×1.07	62	外傾	平坦	自然	堀之内Ⅰ	縄文土器	
49	B3ja		円形	1.06×0.98	43	緩斜	平坦	自然	不明	縄文土器	
50	B3js		円形	1.08×1.00	23	緩斜	皿状	自然	不明		
51	B3hr		不整形円形	1.09×1.09	36	緩斜	皿状	自然	不明	縄文土器	
52	B3hr	N-25°-W	楕円形	2.63×1.85	75	緩斜	皿状	自然	堀之内Ⅰ期	縄文土器、凹石	
53	B3je	N-9°-W	(楕円形)	(0.71)×(0.55)	31	垂直	平坦	自然	不明		
55	B3je	N-10°-W	不整形	1.18×1.00	32	緩斜	平坦	自然	不明		
56	B3je	N-17°-E	楕円形	0.92×0.82	34	緩斜	皿状	自然	不明		
58	B3je	N-15°-W	(楕円形)	(0.95)×(0.56)	35	外傾	平坦	自然	不明	縄文土器	
59	B3ba	N-77°-E	楕円形	0.64×0.47	41	垂直	平坦	人為	後期前葉	縄文土器	
60	B3js	N-81°-E	不定形	2.61×1.43	46	外傾	凹凸	自然	不明		
63	B3je	N-31°-E	楕円形	0.95×0.83	33	外傾	平坦	自然	不明	縄文土器	SI-22→本跡
64	C3je		不整形円形	1.55×1.50	68	垂直	平坦	自然	不明		
66	C3aa	N-18°-E	不整形円形	1.98×1.20	58	外傾	平坦	自然	堀之内Ⅱ	縄文土器	
67	B3ja	N-34°-E	楕円形	1.25×1.06	44	垂直	平坦	自然	不明	縄文土器、石皿	TM-2→本跡→SI-29
68	C3ba	N-68°-E	楕円形	2.24×0.81	35	外傾	皿状	自然	不明	縄文土器	TM-2→本跡
69	B3js	N-26°-E	楕円形	3.53×3.15	34	緩斜	平坦	自然	堀之内Ⅰ	縄文土器、磨石	本跡→SK-50 不明
71	B3js	N-44°-W	楕円形	0.88×0.78	35	垂直	平坦	自然	不明	縄文土器	

土坑 番号	位置 方 向	長径(軸) 方 向	平 面 形	長径×短径 (m)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	時 期	出 土 遺 物	備 考 *重複関係(新-旧)
72	B3j _a	N-30°-W	楕 円 形	1.21×0.75	75	外傾	皿状	人為	堀之内 I	縄文土器	TW-4→本跡
73	B3j _a	N-6°-E	(楕 円 形)	(2.19)×1.24	69	外傾	皿状	人為	不明	縄文土器	TW-4→本跡
74	C3c _a		円 形	1.38×1.33	80	垂直	平坦	人為	加曾利 E II	縄文土器、石鏡、石鏝	SI-24B→本跡 石鏝制作
75	C2a _a	N-16°-E	楕 円 形	1.30×0.75	49	緩斜	平坦	自然	不明	縄文土器	本跡→SI-23
77	C3b _a	N-76°-E	不整楕円形	4.18×1.44	36	外傾	平坦	自然	不明	縄文土器	SI-28→本跡
78	C3b _a	N-6°-E	不整楕円形	1.57×1.22	62	垂直	平坦	自然	安行Ⅱ b	縄文土器	
79	C3b _a	N-4°-E	楕 円 形	1.54×1.32	48	外傾	皿状	自然	不明	縄文土器	SI-24B→本跡
80	C3b _a	N-33°-E	不整楕円形	1.90×1.50	35	緩斜	平坦	自然	不明	縄文土器	
81	C2b _a		円 形	1.36×1.27	66	垂直	平坦	自然	不明		本跡(後世)→SI-24B
86	B2j _a		円 形	2.16×2.03	36	緩斜	皿状	自然	後期前葉	縄文土器	
90	C2a _a	N-2°-W	楕 円 形	1.55×1.18	55	緩斜	平坦	自然	不明	縄文土器	
91	C2b _a	N-50°-E	楕 円 形	0.84×0.74	60	外傾	皿状	人為	後期前葉	縄文土器	
101	B3j _a	N-24°-E	楕 円 形	0.85×0.76	85	垂直	平坦	人為	堀之内 II	縄文土器、土鏝	
103	B3j _a	N-48°-W	楕 円 形	1.68×1.19	72	外傾	平坦	自然	不明	縄文土器	SI-22→本跡
104	C3a _a	N-11°-W	楕 円 形	2.20×1.34	20	外傾	凹凸	自然	不明	縄文土器	TW-1→SI-29→本跡
105	C3j _a		円 形	0.69×0.65	57	外傾	平坦	自然	安行 II	縄文土器、耳飾り	
109	C3b _a	N-32°-E	楕 円 形	0.84×0.62	19	外傾	平坦	自然	不明		本跡(後世)→SI-28-30
110	C3a _a	N-59°-E	楕 円 形	0.92×0.78	47	垂直	平坦	自然	不明	縄文土器	本跡→SI-20
111	B3j _a	N-65°-W	楕 円 形	0.99×0.85	31	外傾	平坦	自然	称名寺 II	縄文土器	SI-33→本跡→SI-20
112	B3j _a	N-38°-W	楕 円 形	0.90×0.81	44	外傾	平坦	自然	称名寺 II	縄文土器	SI-33→本跡
113	B2j _a	N-2°-W	楕 円 形	0.45×0.35	51	外傾	皿状	自然	不明	縄文土器、管状石製品	
114	B3j _a	N-73°-W	楕 円 形	1.21×0.89	10	緩斜	皿状	自然	安行Ⅱ b	縄文土器、石例、磨石	墓壇
115	C3b _a	N-55°-W	(楕 円 形)	(0.99×0.85)	23	緩斜	平坦	自然	不明		本跡(後世)→SI-28-30
116	B2j _a	N-11°-W	(不 定 形)	(1.03)×1.16	118	垂直	平坦	自然	不明	縄文土器	
117	C3a _a	N-61°-E	楕丸長方形	2.34×1.20	12	緩斜	凹凸	自然	不明	舟形石製品、石棒	
118	B3j _a	N-71°-W	楕 円 形	1.74×0.86	49	外傾	皿状	自然	不明		本跡(後世)→SI-33
121	B3h _a	N-77°-E	(楕 円 形)	0.83×(0.56)	50	垂直	平坦	自然	不明	縄文土器	SI-21→本跡
122	B3h _a	N-23°-W	楕 円 形	0.89×0.70	30	緩斜	皿状	自然	不明	縄文土器	SI-21→本跡
123	B3h _a		円 形	0.73×0.69	80	垂直	平坦	自然	不明	縄文土器	SI-21→本跡
124	B3h _a	N-73°-W	楕 円 形	0.92×0.65	58	外傾	平坦	人為	堀之内 I	縄文土器	本跡→SI-19
126	B3h _a	N-70°-W	楕 円 形	0.81×0.63	18	垂直	平坦	自然	不明	縄文土器	本跡→SI-19
127	B3h _a	N-23°-E	楕 円 形	0.91×0.85	26	緩斜	皿状	自然	不明	縄文土器	本跡→SI-19
128	B3h _a	N-43°-W	楕 円 形	0.90×0.68	20	垂直	平坦	自然	不明	縄文土器	本跡→SI-19
129	B3i _a	N-19°-E	楕 円 形	1.32×0.99	56	緩斜	平坦	自然	不明	縄文土器	本跡(後世)→SI-19
130	B3i _a	N-30°-W	楕 円 形	0.64×0.57	27	垂直	平坦	自然	不明	縄文土器	本跡→SI-19
131	B3i _a		円 形	0.60×0.59	19	垂直	平坦	自然	不明	縄文土器	本跡→SI-19
132	B3i _a	N-19°-W	楕 円 形	1.57×0.91	80	垂直	平坦	人為	堀之内 I - II	縄文土器	SI-7→本跡
133	B3h _a	N-87°-W	楕 円 形	1.37×1.23	64	外傾	凹凸	自然	不明	縄文土器	SI-18→本跡
134	B3i _a		円 形	0.93×0.90	22	緩斜	平坦	自然	不明	縄文土器	SI-18→本跡→SI-19
135	B3h _a	N-11°-W	楕 円 形	0.94×0.71	60	垂直	平坦	自然	不明		SI-21→本跡→SI-18
136	B4g ₁		円 形	1.25×1.19	64	外傾	平坦	人為	堀之内 I - II	縄文土器	SI-17-31→本跡
138	B3h _a	N-74°-E	(楕 円 形)	0.87×(0.65)	29	緩斜	皿状	自然	不明		
140	B3h _a	N-81°-E	楕 円 形	0.98×0.85	23	緩斜	皿状	自然	不明	縄文土器	
146	B5h _a	N-29°-E	楕 円 形	0.32×0.24	87	外傾	平坦	自然	不明		本跡(後世)→SI-9
147	B5h _a	N-20°-W	楕 円 形	1.13×1.05	20	外傾	平坦	自然	不明	縄文土器、磨石	SI-9→本跡
148	C3c ₁	N-88°-E	楕 円 形	1.41×1.19	107	垂直	平坦	人為	加曾利 E III	縄文土器、磨石	本跡→SI-24B
149	C3c ₁		円 形	0.66×0.65	30	外傾	平坦	自然	不明	縄文土器	
150	C3c ₁	N-90°-W	(楕 円 形)	(1.34×0.86)	66	外傾	平坦	人為	不明		
151	B5g ₁		円 形	1.15×1.08	28	緩斜	皿状	自然	不明	縄文土器	

土坑 番号	位置 方 向	長径(軸 方 向)	平面形	長径×短径 (m)	深さ (cm)	壁面	底面	覆土	時 期	出 土 遺 物	備 考 *重複関係(新→旧)
153	B4j	N-58°-E	楕円形	1.36×0.70	30	傾斜	平坦	自然	後期後葉	縄文土器, 耳飾り, 円板, 穿孔円板, 石鏃	
155	B4is	N-5°-E	隅丸方形	1.10×1.00	23	外傾	平坦	自然	不明	縄文土器	
156	B4fs		円形	1.44×1.36	22	外傾	平坦	自然	不明	縄文土器	TM-6→SI-8→本跡
157	B5he	N-15°-E	楕円形	1.14×0.93	45	垂直	凹凸	自然	不明	縄文土器	本跡(後世)→SI-6
158	B5hz	N-12°-W	不定形	0.89×0.88	65	垂直	平坦	自然	不明	縄文土器	
160	B3ja	N-36°-W	不定形	1.16×0.99	79	外傾	平坦	人為	縄之内I	縄文土器	SI-22→本跡
161	C3aa		円形	0.57×0.51	74	垂直	凹凸	自然	加曾利B I	縄文土器	
162	C3aa	N-74°-E	楕円形	0.56×0.45	17	傾斜	屈状	自然	不明	縄文土器, 打撃石斧	
163	C2cr		円形	0.90×0.82	95	垂直	凹凸	自然	縄之内I	縄文土器	本跡→SI-25
164	C2ds	N-30°-W	楕円形	0.92×0.75	60	外傾	屈状	自然	不明	縄文土器	本跡(後世)→SI-25
165	C3aa		(円形)	0.79×(0.78)	78	垂直	平坦	自然	不明	縄文土器	
166	C3aa	N-72°-E	(楕円形)	0.94×(0.68)	25	外傾	屈状	自然	不明	縄文土器	
167	C3aa	N-55°-E	(楕円形)	1.65×(0.88)	16	傾斜	屈状	自然	不明	縄文土器	
168	C3aa	N-59°-E	(楕円形)	1.53×(1.15)	30	垂直	平坦	自然	不明	縄文土器	
169	C3ba	N-3°-E	(楕円形)	(1.10)×0.95	29	外傾	平坦	自然	不明	縄文土器, 土製円板	
174	B5he		円形	1.24×1.20	73	外傾	屈状	自然	加曾利B Ⅱ	縄文土器	本跡→SI-9
175	B5ge	N-66°-W	(楕円形)	1.50×(1.30)	50	垂直	凹凸	人為	不明	縄文土器, 浮子	
181	B5ge	N-43°-W	(楕円形)	1.10×(0.86)	30	外傾	平坦	自然	不明	縄文土器	

3 方形周溝墓

当遺跡からは、方形周溝墓が6基検出されている。いずれも、調査区の中央部及び西部に集中している。また、埋葬施設と思われる遺構はいずれからも確認できなかった。以下、検出した遺構及び遺物について記載する。

第1号方形周溝墓(第95図)

位置 調査区西部, B3j区を中心に検出。

重複関係 本跡は、第20・26・32・33号住居跡と重複している。いずれよりも、本跡の方が新しい。

規模と平面形 平面形は、東西方向最大長10.6m, 南北方向最大長(8.6)mで、わずかに縦長の隅丸長方形と思われる。方台部は、東西方向最大長8.2m, 南北方向最大長(7.3)mである。また、各コーナーは弧状を呈している。

方位 南北方位N-26°-Wと西に傾いている。

周溝 北部の一部が区域外に延びているが、周回していると思われる。上幅0.56~1.44m, 下幅0.24~0.76mと位置により幅に違いがあり、深さ0.34~0.56mである。底面は平坦であるが、南東部の方が浅い。方台部側と外周部側の壁の立ち上がり方に違いは認められず、どちらも緩やかに傾斜して立ち上がっている。周溝内には、土坑は確認されなかった。

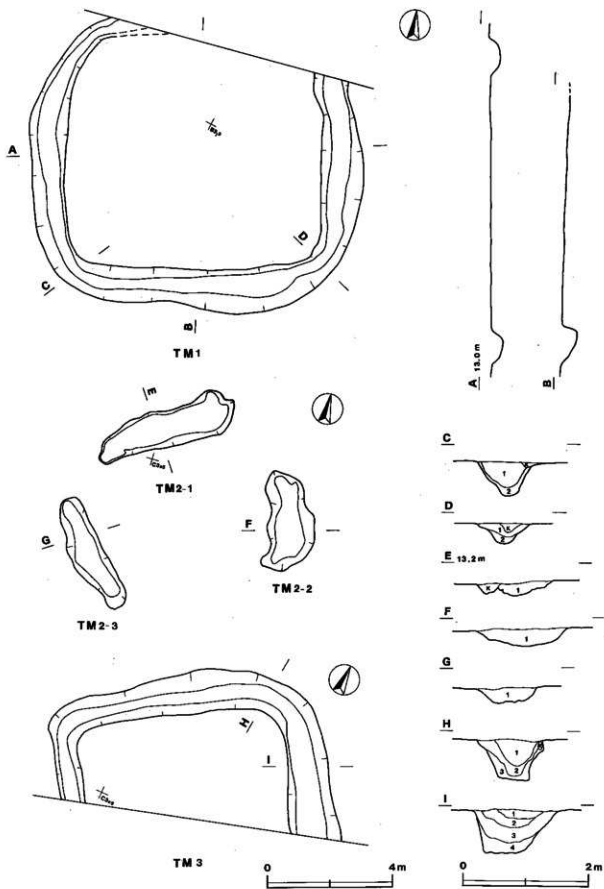
覆土 周溝内の覆土は2層で、いずれもロームブロックを含む褐色系の土が堆積しており、壁面の崩れによるものと思われる。また、各層ともレンズ状堆積となっていることから、自然堆積と思われる。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子多量, ローム大ブロック中量

2 褐色 ローム粒子中量, ローム大・中ブロック少量

遺物 遺物は、周溝内の覆土中から土師器片9点, 縄文土器片1,424点が出土している。第97図の1・2は、土師器高杯の脚部片でいずれも周溝南東部コーナーの覆土下層から潰れた状態で出土している。



第95图 第1~3号方形周溝墓实测图

所見 本跡は、方台部がすでに削平されており盛土は確認できなかった。時期は、出土遺物・形状から古墳時代前期と思われる。

第2号方形周溝墓（第95図）

位置 調査区西部，C3as区を中心に検出。

重複関係 本跡は、第29号住居跡，第67・68・104号土坑を掘り込んでいる。よって、いずれの遺構よりも新しい。

規模と平面形 コーナー部が離れた「コ」の字状に、3条の溝が配列している。南部に巡ると思われる溝は、確認できなかった。北部の溝の最大長4.4m，東部3.1m，西部3.8mである。

方位 南北方位N-42°-Wと西に傾いている。

周溝 上幅0.40~1.52m，下幅0.26~0.96mと位置により幅に違いがあり，深さ0.20~0.28mである。底面は平坦である。方台部側と外周側の壁の立ち上がりに違いは認められず，どちらも緩やかに傾斜して立ち上がっている。周溝内には，遺構に伴う土坑は確認されなかった。

覆土 周溝内の覆土は1層で，ロームブロックが少量認められ，自然堆積と思われる。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子中量，ローム小ブロック微量

遺物 遺物は，周溝内の覆土中から土師器片10点，縄文土器片1,172点出土している。第97図の3は，土師器製の口縁部片，4はミニチュア土器でいずれも周溝北東部コーナーの覆土下層から出土している。

所見 本跡は，方台部がすでに削平されており盛土は確認できなかった。時期は，出土遺物・形状から古墳時代前期と思われる。

第3号方形周溝墓（第95図）

位置 調査区西部，C3ca区を中心に検出。

規模と平面形 平面形は，東西方向最大長8.7m，南北方向最大長(4.8)mで，わずかに縦長の隅丸長方形と思われる。方台部は，東西方向最大長6.6m，南北方向最大長(3.4)mである。また，各コーナーは弧状を呈している。

方位 南北方位N-34°-Wと西に傾いている。

周溝 南部の一部が区域外に延びているが，周回していると思われる。上幅0.76~1.60m，下幅0.30~0.98mと位置により幅に違いがあり，深さ0.64~0.76mである。底面は平坦である。方台部側と外周部側の壁の立ち上がりに違いは認められず，どちらも緩やかに立ち上がっている。周溝内には土坑は確認されなかった。

覆土 周溝内の覆土は4層で，いずれもローム小ブロックを含む褐色系の土が堆積しており，壁面の崩れによるものと思われる。また，各層ともレンズ状堆積となっていることから，自然堆積と思われる。

土層解説

1 黒褐色 ローム小ブロック中量

2 暗褐色 ローム小ブロック多量

3 褐色 ローム小ブロック多量，炭化粒子微量

4 褐色 ローム小ブロック中量，炭化粒子微量

遺物 遺物は，周溝内の覆土中から土師器片5点，縄文土器片3,295点出土している。第97図の5は，土師器製の周溝西部の覆土下層から潰れた状態で出土している。

所見 本跡は，方台部が擾乱されており盛土は確認できなかった。時期は，出土遺物・形状から古墳時代前期と思われる。

第4号方形周溝墓(第96図)

位置 調査区の西部, B3is区を中心に検出。

重複関係 本跡は, 第45・72・73号土坑を掘り込んでおり, 本跡の方が新しい。

規模と平面形 周溝の一部のみが確認されている。よって, 規模と平面形は不明である。

方位 不明。

周溝 周溝の一部が確認されている。第2号方形周溝墓と同様に, 遺存する掘り込みが浅く, 周回するかは不明である。上幅1.42~1.78m, 下幅1.12~1.50mで, 深さ0.24mである。底面は平坦である。壁は, 緩やかに傾斜して立ち上がっている。

覆土 周溝内の覆土は2層で, いずれもロームブロック含む褐色系の土が堆積しており, 壁面の崩れによるものと思われる。また, 各層ともレンズ状堆積となっていることから, 自然堆積と思われる。

土層解説

1 褐色 ローム中ブロック・ローム粒子・炭化小ブロック・焼土 2 褐色 ローム中ブロック・炭化小ブロック少量
粒子少量

遺物 遺物は, 周溝内の覆土中から土師器片9点, 縄文土器片260点が出土している。第97図の6は, 土師器
竈で周溝内の覆土下層から出土している。

所見 本跡は, 第2号方形周溝墓と同様に, 周溝の覆土が薄く周溝の一部のみの確認であったが, 遺構に伴う
遺物の出土状況から方形周溝墓と判断した。時期は, 出土遺物から古墳時代前期と思われる。

第5号方形周溝墓(第96図)

位置 調査区中央部, B4h区を中心に検出。

重複関係 本跡は, 第17号住居跡を掘り込んでおり, 本跡の方が新しい。

規模と平面形 周溝西部の一部が確認されている。東西方向最大長(3.0)mで, 方台部は, 東西方向最大長(2.6)
mである。よって, 全体の規模と平面形は不明である。

方位 不明。

周溝 周溝の西部のみが確認されている。遺存する掘り込みが浅く, 周回するかしないかは不明である。上幅
0.54~0.70m, 下幅0.37~0.59mで, 深さ0.22mである。底面は平坦である。壁は, 緩やかに傾斜して立ち
上がっている。周溝内には, 土坑は確認されなかった。

覆土 周溝内の覆土は2層で, いずれもロームブロックを含む褐色系の土が堆積しており, 壁面の崩れによる
ものと思われる。また, 層はレンズ状堆積となっていることから, 自然堆積と思われる。

土層解説

1 暗褐色 ローム粒子少量 2 暗褐色 ローム中・大ブロック少量

遺物 遺物は, 第97図の7の土師器小形甕が周溝西部コーナーの覆土下層から, 横位の状態で1点出土して
いる。

所見 本跡は, 方台部がすでに削平されており盛土は確認できなかった。時期は, 出土遺物から古墳時代前期
と思われる。

第6号方形周溝墓(第96図)

位置 調査区中央部, B4js区を中心に検出。

重複関係 本跡は, 第4号溝に掘り込まれ, 第8号住居跡, 第34・156号土坑を掘り込んでいる。

規模と平面形 平面形は, 東西方向最大長(10.4)m, 南北方向最大長(6.8)mで, わずかに横長の隅丸長方形

と思われる。方台部は、東西方向最大長(8.6)m、南北方向最大長(5.3)mである。また、各コーナーは弧状を呈している。

方位 南北方位N-20°-Wと西に傾いている。

周溝 北部の一部が区域外に延びているが、周回していると思われる。上幅0.46~1.30m、下幅0.26~1.20mと位置により幅に違いがあり、深さ0.20~0.26mである。底面は平坦であるが、東部及び西部は浅くなっており、南部はやや深くなっている。方台部側と外周部側の壁の立ち上がり方は、方台部側はやや外傾しながら立ち上がるが、外周側は緩やかに傾斜して立ち上がる。周溝内には、土坑は確認されなかった。

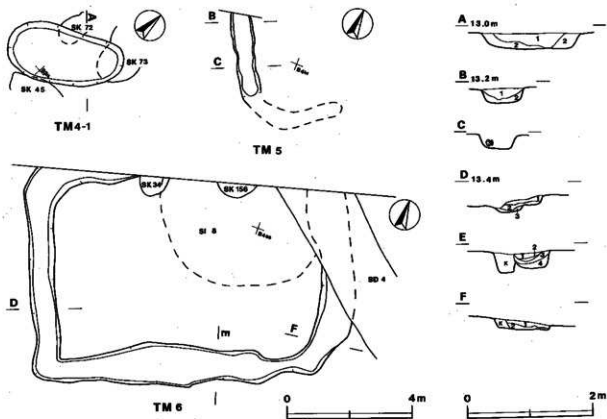
覆土 周溝内の覆土は4層で、いずれもロームブロックを含む褐色系の土が堆積しており、壁面の崩れによるものと思われる。また、各層ともレンズ状堆積となっていることから、自然堆積と思われる。

土層解説

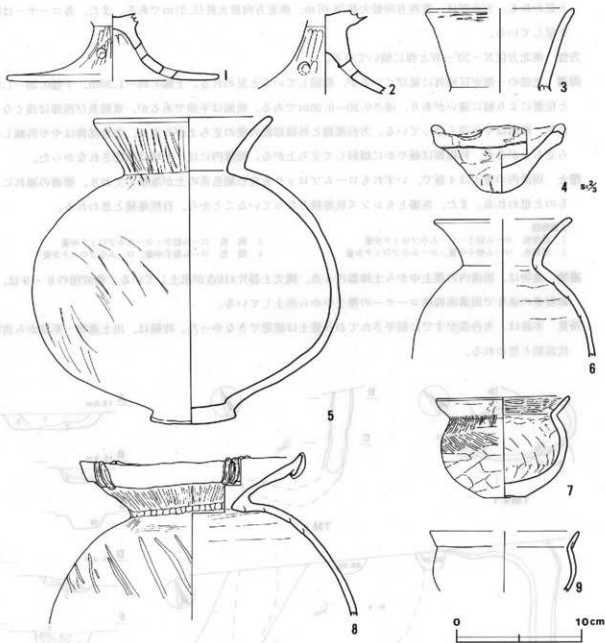
- | | |
|--------------------------|-------------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック少量 | 3 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック中量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量 | 4 褐色 ローム粒子中量、ローム小ブロック少量 |

遺物 遺物は、周溝内の覆土中から土師器片4点、縄文土器片416点が出土している。第97図の8・9は、土師器甕の破片で周溝南西部コーナーの覆土中から出土している。

所見 本跡は、方台部がすでに削平されており盛土は確認できなかった。時期は、出土遺物・形状から古墳時代前期と思われる。



第96図 第4~6号方形周溝実測図



第97図 第1～6号方形周溝墓出土遺物実測図

方形周溝墓出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第97図 1	高土師器	B(5.4) D(17.0) E(4.4)	脚部片。ラッパ状に下方へ開き、中位から柄部にかけて水平に近く広がる。中位に3孔、下位に3孔が空けられている。	外面一縦位の丁寧なヘラ磨き。 内面一横位のハケ目整形。	長石・スコリア にふい橙色 普通	P83 40% 第1号方形周溝墓 周溝南東部 コーナー覆土下層
2	高土師器	B(6.7) E(5.5)	脚部片。ラッパ状に下方へ開く。上位に3孔が空けられている。	外面一縦位の丁寧なヘラ磨き。 内面一横位の丁寧なハケ目整形。	長石 橙色 普通	P84 30% 第1号方形周溝墓 周溝南東部 コーナー覆土下層

図版番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
3	埴土師器	A(12.0) B(6.7)	口縁部片。外傾して立ち上がる。	外面一横位のヘラ磨き。 内面一横位のヘラ磨き。	長石・石英・スコリア にぶい橙色 普通	P85 10% 第2号方形周溝墓 周清北東部 コーナー覆土下層
4	手控土器 土師器	A(5.4) B 2.7 C 1.7	坏形。丸底で不安定である。外傾して立ち上がる。口縁部下に細い沈線が高る。	内・外面ともに指頭による粗いナデ。	長石・石英 暗褐色 普通	P86 55% 第2号方形周溝墓 周清北東部 コーナー覆土下層
5	壺 土師器	A 14.4 B 24.6 C 6.9	突出した小さい平底。体部は扁平な球形を呈し、最大径を中位にもつ。口縁部は「く」の字状に外傾して開く。	外面一体部はハケ目整形。口縁部粗い縦位のヘラナデ。 内面一体部はナデ。口縁部は横位のハケ目整形。	長石・スコリア にぶい橙色 普通	P87 85% 第3号方形周溝墓 周清西部覆土下層
6	壺 土師器	A 11.1 B 11.1	体部上半から口縁部にかけての破片。体部は内傾し、口縁部は外傾して立ち上がる。	外面一横位のヘラナデ。 内面一横ナデ。体部に輪模成。	長石 橙色 普通	P88 35% 第4号方形周溝墓 周清西土下層
7	小形壺 土師器	A 10.8 B 8.0 C 3.2	底部は僅かに窪みをもつ。体部は扁平な球形を呈し、最大径を中位にもつ。口縁部は頸部から「く」の字状に立ち上がる。	外面一体部上半はハケ目整形。下半はヘラ削り。頸部に縦位のハケ目整形。口縁部はハケ目整形後ナデ。 内面一体部はヘラナデ。口縁部は横位のハケ目整形。	長石・石英 明赤褐色 普通	P89 100% 第5号方形周溝墓 周清西部 コーナー覆土下層
8	壺 土師器	A 17.8 B(13.0)	体部上半から口縁部にかけての破片。体部は球形を呈し、有段口縁で、外傾して立ち上がる。	外面一体部はナデ後、縦位のヘラ磨き。口縁部は縦位のハケ目整形。上位は5組の棒状浮文が加飾され、筒は横ナデ。 内面一横ナデ。輪模成。	長石・石英 橙色 普通	P90 40% 第6号方形周溝墓 周清南西部 コーナー覆土中
9	壺 土師器	A(12.0) B(17.0)	体部上半から口縁部にかけての破片。体部は内傾し球形を呈する。口縁部は外傾して立ち上がり、折り返しの複合口縁である。	外面一体部はナデ後、縦位のヘラ磨き。口縁部は横ナデ。 内面一体部はナデ。口縁部は横位ハケ目整形。	長石 にぶい橙色 普通	P91 10% 第6号方形周溝墓 周清南西部 コーナー覆土中

4 塚

今回の調査では、近世の塚1基が検出されている。以下、その特徴について記載する。

第1号塚(第98図)

位置 調査区中央部、B4f9区を中心に検出。

方位 南北方位N-48°-Eと東に傾いている。

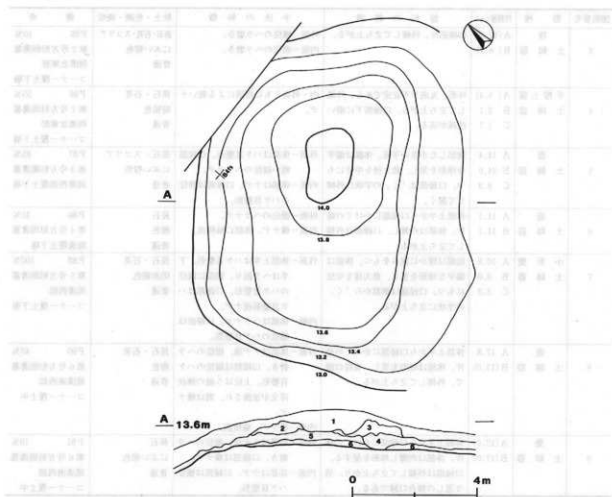
盛土 現況は漆の木等が萌生しており、木根による攪乱が認められ各層とも締まりがない。6層からなる人為堆積である。

土層解説

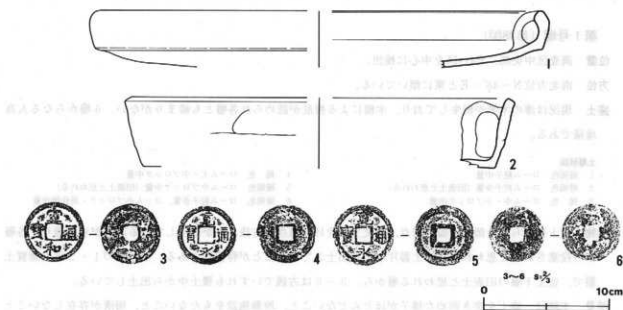
- | | |
|-------------------------|------------------------------|
| 1 暗褐色 ローム粒子中量 | 4 褐色 ローム大・中ブロック中量 |
| 2 暗褐色 ローム粒子少量(旧表土と思われる) | 5 暗褐色 ローム中ブロック少量(旧表土と思われる) |
| 3 褐色 ローム中・小ブロック中量 | 6 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック・炭化物少量 |

遺物 覆土中から、土師質土器片12点、縄文土器片19,051点、古銭4点が出土している。数が示す通り、各層から採集されたと思われる縄文土器片が多数出土していることが特徴的である。第99図の1・2は土師質土器で、盛土下層の旧表土と思われる層から、3～6は古銭でいずれも覆土中から出土している。

所見 本路は、盛土を突き固めた様子がほとんどないこと、埋葬施設をもたないこと、周溝が存在しないこと等から塚と判断した。時期は、土師質土器の出土状況から近世後半と思われる。



第98図 第1号塚実測図



第99図 第1号塚出土遺物実測・拓影図

塚出土遺物観察表

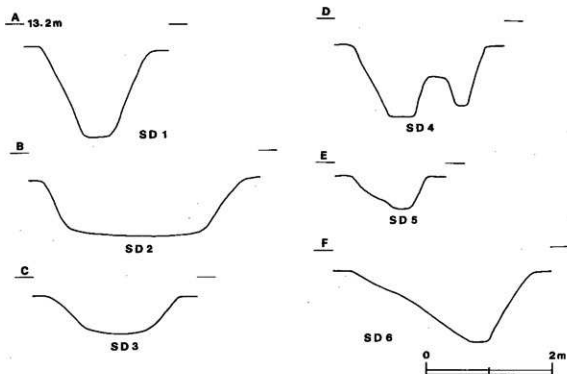
図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第99図 1	ほうろく 土師質土器	A (37.0)	底部から口縁部にかけての破片。 平丸底で、体部は内彎しながら立ち上がる。体部上位から下位に内耳貼り付け。	内・外歪ナダ。	長石・石英 黒色 普通	P92 30% 盛土下層 近世後半
		B 3.1				
		C (35.8)				
2	ほうろく 土師質土器	A (31.4)	底部から口縁部にかけての破片。 平底で、体部はやや外傾して立ち上がる。体部上位から下位に内耳貼り付け。	内・外歪ナダ。	長石・石英・スフィア にぶい褐色 普通	P93 10% 盛土下層 近世後半 底部は摩滅が著しい。
		B 5.7				

塚出土古銭観察表

図版番号	器種	計測値(cm)		初鋳年		出土地点	備考
		直径	重量	時代	年号		
第99図3	宣和通寶	2.5	2.7	北宋	1119	覆土中	M1
4	寛永通寶	2.5	2.8	江戸	1765	覆土中	M2
5	寛永通寶	2.5	2.2	江戸	1765	覆土中	M3
6	不明	2.3	2.4	不明	不明	覆土中	M4

5 溝

当遺跡からは、溝が6条検出されている。数条の溝によって区画されているようにも考えられるが、区域内に関連する遺構や遺物が確認されていないため、時期の判定や遺構の性格は不明である。よって、確認された溝については、一覧表で記載した。なお、各溝の断面図はここで掲載するが、配置や全体の形状については折り込みを参照されたい。



第100図 第1～6号溝実測図

表7 釈迦才仏遺跡溝一覧表

溝番号	位置	主軸方向	断面	形状	長さ (m)	上幅 (m)	下幅 (m)	最深 (m)	壁面	底面	覆土	出土遺物	備考
1	B6d7	N-24°-W	U 状	クランク	(44)	1.6-3.3	0.5-1.1	1.38	外傾	平坦	自然	縄文土器、打製石斧	時期不明
2	B6g1	N-80°-E	皿 状	直 線	(30)	2.8-3.2	1.6-2.4	0.86	垂直	平坦	自然	縄文土器	時期不明
3	B5f4	N-70°-E	皿 状	クランク	(40)	0.9-1.7	0.4-0.8	0.58	外傾	平坦	自然	縄文土器、打製石斧、土製品	時期不明
4	B4g7	N-70°-E	U 状	クランク	(19)	1.9-2.8	0.2-0.5	1.14	外傾	平坦	自然	縄文土器、土製品	時期不明
5	B4f4	N-30°-E	皿 状	曲 線	(20)	1.0-1.2	0.3-0.6	0.90	外傾	平坦	自然	縄文土器	時期不明
6	B4f1	N-31°-E	皿 状	直 線	(13)	2.6-3.2	0.3-0.8	1.04	外傾	平坦	自然	縄文土器	時期不明

6 井戸

当遺跡からは、井戸が1基検出されている。出土遺物は、縄文土器片が極少量で時期は不明である。

第1号井戸 (第101図)

位置 調査区中央部、B4h区。

重複関係 本跡は、第3号溝を掘り込んでいる。よって、本跡の方が新しい。

規模と形状 上面は長径64cm、短径50cmの楕円形である。深さは、湧水のため(1.76)mまでしか調査できなかった。掘り方は、確認面から0.64mまで垂直に掘り込み、そこから下は影らみ、径1.42mの円筒形に掘り込まれている。

長径方向 N-45°-W

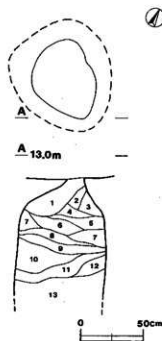
覆土 13層からなる人為堆積である。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子中量
- 2 暗褐色 ローム中ブロック中量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量
- 4 暗褐色 ローム小ブロック・ローム粒子少量
- 5 暗褐色 ローム小・中ブロック多量
- 6 暗褐色 ローム小ブロック少量、ローム粒子微量
- 7 暗褐色 ローム小・中ブロック中量
- 8 暗褐色 ローム粒子多量
- 9 暗褐色 ローム大・中ブロック多量
- 10 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック微量
- 11 暗褐色 ローム大・中ブロック中量
- 12 暗褐色 ローム粒子・ローム小ブロック微量
- 13 暗褐色 ローム粒子多量、ローム小ブロック微量

遺物 覆土上層から、混入と思われる縄文土器片が102点出土している。

所見 形状及び湧水の状況から井戸と判断したが、時期を判断する遺物が出土していないため、時期は不明である。

第101図 第1号井戸
実測図

7 遺物包含層及び遺構外出土遺物

当遺跡の中央部、B4j区を中心とする地点から、遺物包含層が検出されている。遺物は、縄文時代中期から晩期にかけての縄文土器片、石器、石製品、土製品が多数出土している。B4j区からB4i区にかけての、北西に最大幅(5.6)mで、標高差0.6mの傾斜する凹地に堆積した包含層である。遺物は、ほとんどが細片である。層位は、時代毎の堆積状況を示していない。

また、その他に遺構に伴わない遺物が多量に出土している。

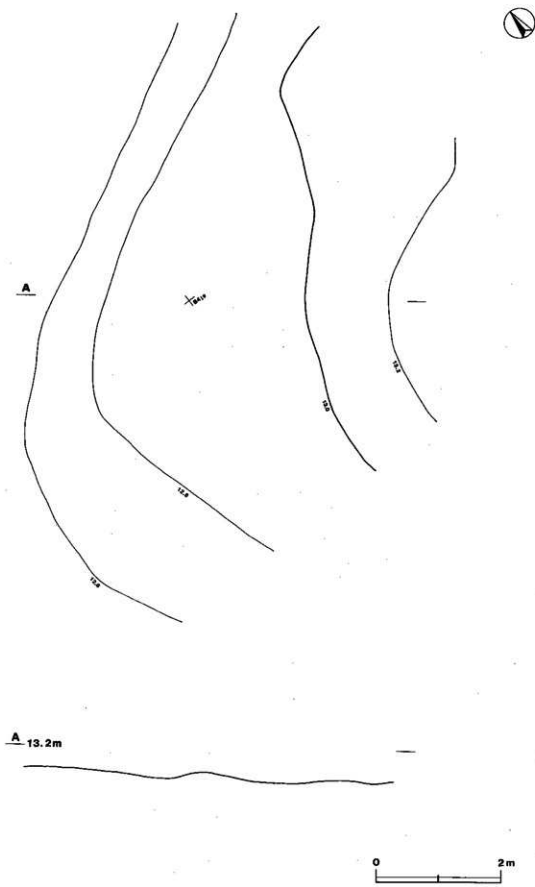
ここでは、包含層及び遺構外出土遺物について、観察表、実測図及び拓影図で一括して記載する。

包含層出土遺物観察表

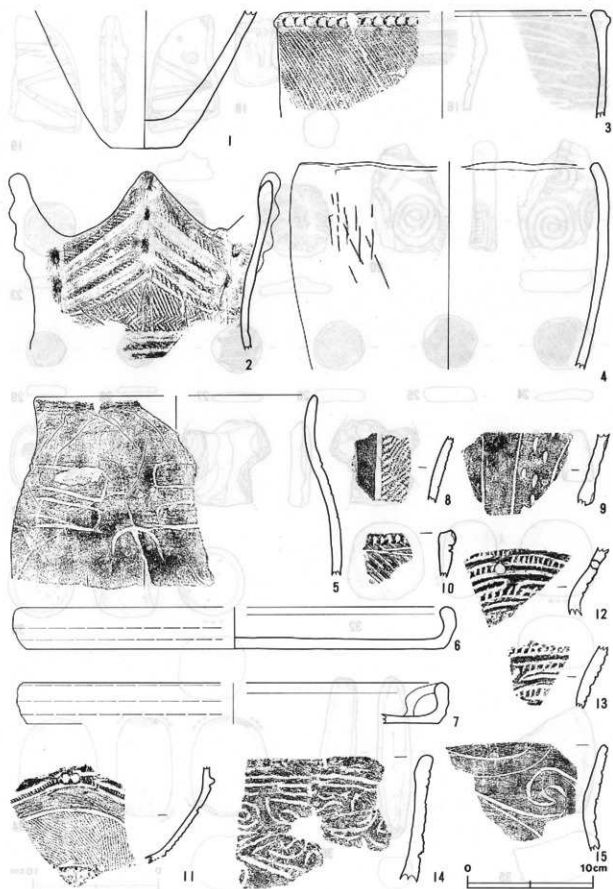
図版番号	器種	計測値(m)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第103図 1	深鉢形土器 縄文土器	B(11.3) C 5.5	胴部下半から底部にかけての破片。平底で、胴部は外傾して開く。胴部下半に縦方向の帯き、底部外面にも帯きが施されている。	長石・石英 にぶい橙褐色 普通	P94 15% (順之内Ⅱ)
2	深鉢形土器 縄文土器	A(21.6) B(14.4)	胴部上半から口縁部にかけての破片。波状口縁で、縄文帯間は磨り消され、粘瘤が付されている。	長石・スコリア 黒褐色 普通	P95 10% (安行Ⅰ)
3	深鉢形土器 縄文土器	A(26.0) B(8.7)	胴部上半から口縁部にかけての破片。口縁部は、押捺を加えた粘土線を貼り付け、胴部は斜行条線文が施文されている。	長石・石英・スコリア 暗褐色 普通	P96 10% (安行Ⅱ)
4	深鉢形土器 縄文土器	A(23.8) B(16.5)	胴部から口縁部にかけての破片。内彎して口縁部に至る。無文で、内面ナデ、外面削り後ナデで整形されている。	長石・スコリア にぶい橙褐色 普通	P97 10% (安行Ⅲa)
5	深鉢形土器 縄文土器	A(22.5) B(14.4)	胴部から口縁部にかけての破片。胴部は内彎し、口縁部は外傾して立ち上がる。沈線により2段の方形のモチーフが施されている。	長石 にぶい橙褐色 普通	P98 15% (安行Ⅲc)

図版番号	器種	計測値(m)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
6	ほうろく 土師質土器	A(35.0) B 3.4	底部から口縁部にかけての破片。平底で、体部は内彎して立ち上がる。	内・外面ナデ。	長石・石英・スコリア 黒褐色 普通	P99 30% 近世後半
7	ほうろく 土師質土器	A(34.1) B 3.3	底部から口縁部にかけての破片。平底で、体部は内彎して立ち上がる。体部上位から下位に内耳貼り付け。	内・外面ナデ。	長石・スコリア 明赤褐色 普通	P100 10% 近世後半

第103図8～17は包含層から出土した縄文土器片の拓影図である。8は胴部片で加曾利EⅢ式期に比定され、縄文地文に平行沈線が垂下し、沈線間は磨り消されている。9は胴部片で称名寺Ⅱ式期に比定され、列点文が施されている。10は口縁部片で安行Ⅰ式期に比定され、口縁部に刻みが施されている。11は胴部片で安行Ⅱ式期に比定され、刻文帯上にブタ鼻状の粘瘤が付されている。12・13は胴部片で大洞式の影響が見られる土器である。沈線及び刻みが施されている。14～16は口縁部片で安行Ⅲcに比定され、14・16は浅い横走り沈線が施され、15は入り組みの弧線文が施文されている。17は口縁部片で前浦式期に比定され、太く粗い縄文及び沈線が施されている。



第102図 包含層実測図



第103图 包含層出土遺物实测·拓影图(1)

江國清計・美奈野麻土出層発掘 図017(1)

包含層出土土製品観察表

図版番号	器種	計測値(cm)			重量(g)	現存率(%)	器形及び文様の特徴	備考
		最大長	最大幅	最大厚				
第104図18	土 甗	(5.6)	3.0	4.2	(51.5)	10	山形土偶の左脚部。つま先は突出する。文様は施されていない。	DP47 灰石・石英 褐色 普通 (後期中葉)
19	土 甗	(9.4)	(5.7)	2.4	(107.2)	25	楕円形を呈し、表・裏面ともに沈線により「く」の字状の文様が施され、裏面は貼瘤が付されている。	DP48 灰石・石英 暗褐色 普通 (晩期前葉)
20	土 甗	(8.8)	(6.3)	2.3	(106.1)	30	楕円形を呈し、表・裏面ともに渦巻状の沈線が施され、側面には沈線及び刻みが施されている。両面は、丁寧に磨かれている。	DP49 灰石・石英 明褐色 普通
21	土 甗 円板	5.9	5.9	1.5	42.8	100	表面に縄文帯及び貼瘤。	DP50
22	土 甗 円板	5.6	5.1	1.5	25.8	100	表面に縄文地に沈線。	DP51
23	土 甗 円板	4.4	4.2	1.0	19.3	100	表面に格子状沈線。	DP52
24	土 甗 円板	4.2	4.8	1.0	(19.0)	90	表面に条線。	DP53 一部摩滅。
25	土 甗 円板	4.3	4.4	1.2	24.8	100	無文。	DP54
26	土 甗 円板	3.9	4.1	1.1	17.3	100	無文。	DP55
27	土 甗 円板	3.9	4.1	0.9	12.0	100	表面に沈線。	DP56
28	土 甗 円板	3.0	3.3	0.5	4.6	100	表面に単純縄文LR。	DP57
29	土 甗 円板	2.7	3.2	0.9	8.9	100	表面に単純縄文LR。	DP58

包含層出土石製品観察表

図版番号	器種	計測値				石質	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
第104図30	磨製石斧	4.1	2.5	0.9	14.2	緑色片岩	Q97 定角式
31	打製石斧	(6.9)	(7.3)	1.9	(89.4)	砂	Q98 分銅形 欠損品
32	磨石	6.2	6.2	4.5	291.0	安山岩	Q99
33	磨石	5.6	5.3	5.3	218.1	安山岩	Q100
34	磨石	7.9	6.3	4.5	321.0	安山岩	Q101 磨石兼用
35	石 皿	(8.5)	(7.0)	4.1	(293.5)	安山岩	Q102 欠損品
36	砥石	13.0	2.7	3.0	180.0	緑泥片岩	Q103
37	勾玉	2.6	1.6	0.7	4.5	翡翠	Q104

遺構外出土遺物観察表

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第105図1	深鉢形土器 縄文土器	B(3.4) C(9.1)	底部から胴部下半にかけての破片。底部は上げ底で、縦線文が施文されている。	灰石 褐色 普通	P101 20% 表採 (岡山)
2	把手 縄文土器	長さ(8.2) 幅 7.7	中空の把手片。波状口縁先端部に付けられた、大型のC字状貼付文で縄文地に太い沈線が2個の刺突に連携している。側面は2個の孔が穿たれている。縄文帯上に連続刺突文が施されている。	灰石 褐色 普通	P102 5% 表採 (松名寺)
3	深鉢形土器 縄文土器	B(26.8)	胴部片。胴部は内彎する。単純縄文LRの地に蛇行する沈線が施されている。	灰石・石英 褐色 普通	P103 70% 表採 (堀之内I)
4	深鉢形土器 縄文土器	B(14.7) C 10.0	胴部下半から底部にかけての破片。平底で、胴部は外傾して開く。胴部下半に縦方向の帯きが施されている。	灰石 にぶい褐色 普通	P104 30% 表採 (堀之内)
5	把手 縄文土器	長さ(4.6) 幅 5.2	波状口縁波頂部の把手。沈線上に刺突が付され、中心部に大きな刺突が施されている。側面は、深めの連続刺突が施されている。	灰石・石英・スコリア 浅黄褐色 普通	P105 10% 表採 (後期中葉)

図版番号	器 種	所出地(a)	器 形 及 び 文 様 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第105図 6	把 手 縄 文 土 器	長さ(7.7)	胴上部の楕状把手。外面は単節縄文L Rの地文に深めの沈線が施され、把手の上下には深めの刺突が2個ずつ付されている。	長石・石英 にぶい褐色 普通	P106 10% 表採 (後期前葉)
7	深鉢形土器 縄 文 土 器	B(5.5) C(8.8)	胴部下半から底部にかけての破片。平底で、網代表が残されている。胴部は外傾して開く。胴部下半に縦方向の磨きが施されている。	長石・石英 にぶい褐色 普通	P107 10% 表採 (堀之内)
8	深鉢形土器 縄 文 土 器	B(4.3) C(9.1)	胴部下半から底部にかけての破片。平底で、網代表が残されている。胴部は外傾して開く。胴部下半に磨きが施されている。	長石 褐色 普通	P108 10% 表採 (堀之内)
9	深鉢形土器 縄 文 土 器	B(5.0) C(8.0)	胴部下半から底部にかけての破片。平底で、網代表が残されている。胴部は外傾して開く。胴部下半に単節縄文L Rが施文されている。	長石・スコリア 褐色 普通	P109 10% 表採 (堀之内)
10	深鉢形土器 縄 文 土 器	B(4.0) C(8.5)	胴部下半から底部にかけての破片。平底で、網代表が残されている。胴部は外傾して開く。胴部下半に縦方向の磨きが施されている。	長石・石英・スコリア 明赤褐色 普通	P110 10% 表採 (堀之内)
11	深鉢形土器 縄 文 土 器	B(4.2) C(6.0)	胴部下半から底部にかけての破片。平底で、網代表が残されている。胴部は外傾して開く。無文である。	長石・石英 灰白色 普通	P111 5% 表採
第106図 12	深鉢形土器 縄 文 土 器	A(24.6) B(15.7)	口縁部から胴部にかけての破片。波状口縁で、胴部は内彎し、口縁部はやや外傾して開く。口縁部は刻みが施され、沈線で区画され単節縄文L Rの地文に区画内は磨り消されている。頸部は楕状工具により押捺がなされ、胴部は単節縄文L Rが施文されている。	長石・雲母 黒褐色 普通	P112 5% 表採 (加曾利BⅡ)
13	鉢 形 土 器 縄 文 土 器	B(2.8) C(8.6) E 1.3	胴部下半から底部にかけての破片。平底で、網代表が残されている。胴部は外傾して立ち上がる。胴部下半は横方向の磨きが施されている。	長石 にぶい褐色 普通	P113 5% 表採 (後期中葉か)
14	皿 縄 文 土 器	A(11.8) B 3.6 C 4.0	胴部は内彎しながら立ち上がり、口縁部に至る。平底で磨きが施されている。胴部は、横方向の粗い沈線が施されている。	長石 暗赤褐色 普通	P114 50% 表採 (晩期前葉か)
15	深鉢形土器 縄 文 土 器	B(7.6) C 4.4	胴部下半から底部にかけての破片。平底で、胴部は凹状縄文が施文されている。	長石 にぶい褐色 普通	P115 20% 表採
16	異形台付土器 縄 文 土 器	B(7.7) C(6.2) D 3.8	台部から胴部にかけての破片。彎曲した台部で、胴部は「く」の字状を呈する。台部下端には連続刻文が施され、中位には2段の刻文帯が張り、刻文帯上には瘤が貼りつけられ、瘤を挟み上下に0.7cmの孔が穿たれている。胴部中位には刻みを施した中空でラッパ状の突起と刻文帯上に瘤が貼りつけられている。	長石・石英 明赤褐色 普通	P116 40% 表採 (安行Ⅱ)
17	異形台付土器 縄 文 土 器	E(3.5)	台部。刻文帯上に0.8cmの孔が穿たれている。上位には「く」の字状の沈線が施されている。	石英・スコリア にぶい赤褐色 普通	P117 20% 表採 (安行Ⅱ)
18	異形台付土器 縄 文 土 器	B(4.3)	胴部。胴部中位には、刻みを施した中空でラッパ状の突起が付けられている。	長石 褐色 普通	P118 20% 表採 (安行Ⅱ)
19	皿 縄 文 土 器	A(9.1) B 2.1	刻文帯が全周し、4列の刻文帯が施されている。	長石・スコリア にぶい黄褐色 普通	P119 50% 表採
20	注 口 土 器 縄 文 土 器	長さ(4.4)	注口部片。基部外径3.3cm、内径2.2cm、先端部外径1.7cm、内径1.2cm、基部からやや反り気味に先端部に至る。注口部に刻みが施されている。	長石 褐色 普通	P120 5% 表採 (安行Ⅱ)
21	深鉢形土器 縄 文 土 器	A(29.8) B(10.7)	胴部上半から口縁部にかけての破片。胴部は内彎し、外傾しながら口縁部に至る。頸部に沈線が施され、胴部及び口縁部ともに横方向の磨きが施されている。	長石 明赤褐色 普通	P121 10% 表採 (安行Ⅱb)
22	浅鉢形土器 縄 文 土 器	A(17.6) B 4.6	碗状で、内彎しながら口縁部に至る。口縁部には小突起が付けられ、沈線により文様が構成され、横方向の磨きが施されている。	長石・石英 黒褐色 普通	P122 30% 表採 (安行Ⅱb)
23	鉢 形 土 器 縄 文 土 器	B(2.7) C 9.1	底部から胴部下半にかけての破片。平底で、底部と胴部の境に沈線が巡る。胴部は単節縄文L Rが施文されている。	長石 明褐色 普通	P123 10% 表採 (安行Ⅱb)
24	鉢 形 土 器 縄 文 土 器	A(14.9) B 6.8	碗状で、内彎しながら口縁部に至る。丸底で、口縁部には小突起を有する。外面は、横方向の削りで整形されている。	長石・石英 黒褐色 普通	P124 40% 表採 (安行Ⅱc)
25	浅鉢形土器 縄 文 土 器	A(17.6) B(2.9)	胴部上半から口縁部にかけての破片。口唇部は2本1組の杖土紐が貼りつけられ、口縁部下半から単節縄文L Rの地文に、沈線により楕円状の区画がなされている。区画内は磨り消されており、上下にはブタ鼻状の瘤が貼りつけられている。	長石・石英 明赤褐色 普通	P125 20% 表採 (安行Ⅱ)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形及び文様の特徴	胎土・色調・焼成	備考
26	鉢形土器 縄文土器	A(10.6)	胴部上半から口縁部にかけての破片。胴部は内彎し、外傾しながら口縁部に至る。胴部及び頸部は沈線により区画され、区画内は列点文が施されている。	長石 にぶい黄褐色 普通	P126 30% 表採 (安行Ⅲc)
		B(8.7)			
27	鉢形土器 縄文土器	A(14.6)	筒状で、内彎しながら口縁部に至る。平底で、口縁部は平縁である。外面は、横方向の粗い彫りが施されている。	長石・スコリア にぶい褐色 普通	P127 40% 表採 (安行Ⅲc)
		B 8.0			
		C 5.5			
28	鉢形土器 縄文土器	B(2.8)	底部から胴部下半にかけての破片。平底で、胴部には雲形文が施されている。	長石・石英 黒褐色 普通	P128 40% 表採(大洞C.)
		C(4.6)			
29	皿 縄文土器	A(15.4)	筒状で、内彎しながら口縁部に至る。口縁部上端に2個1組の小突起を施し、胴部には半歯状文が施されている。	長石 灰褐色 普通	P129 40% 表採(大洞B C)
		B(4.6)			
第107図 30	深鉢形土器 縄文土器	A(17.6)	胴部上半から口縁部にかけての破片。口縁部上端に射突を施した小突起を有し、胴部は沈線及び列点文が施されている。	長石 にぶい褐色 普通	P130 40% 表採(称名寺Ⅱ)
		B(15.5)			
31	手捏土器 縄文土器	B(5.2)	底部から胴部にかけての破片。丸底で、胴部は内彎する。内・外面に指痕による雲形文が残されている。	長石 にぶい褐色 普通	P131 80% 表採
32	ミフナ土器 縄文土器	A(2.8)	壺型で、胴部は内彎し、口縁部に至る。胴部中に最大径をもつ。内・外面に磨きが施されている。	長石 褐色 普通	P132 50% 表採
		B 4.6			
		C(2.6)			
33	手捏土器 縄文土器	A(3.4)	底面は、凹凸で不安定である。輪痕が残る。	長石 にぶい褐色 普通	P133 70% 表採
		B(3.0)			
34	ミフナ土器 縄文土器	B(2.0)	底部から胴部上半にかけての破片。平底で、沈線により文様が施されている。	長石・スコリア にぶい褐色 普通	P134 30% 表採
		C(3.0)			
35	鉢形土器 縄文土器	B(4.3)	口縁部片で、表面に3段の赤彩が施されている。	長石 黒色 普通	P135 5% 表採
36	注口土器 縄文土器	長さ(3.3)	注口部片。基部外径2.9cm、内径1.7cm、先端部外径1.8cm、内径1.2cm。基部からやや反り気味に先端部に至る。	長石 にぶい褐色 普通	P136 5% 表採
		B(2.9)	台部片。斜め方向の沈線が施されている。全面に赤彩が施されている。	長石 褐色 普通	P139 20% 表採(晩期前葉)

図版番号	器種	計測値(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第107図 38	ほうろく 土師質土器	A(37.2)	底部から口縁部にかけての破片。平底で、体部は内彎して立ち上がる。	内・外面ナデ。	長石・雲母 褐色 普通	P140 15% 表採 近世後半
		C(31.7)				
39	ほうろく 土師質土器	A(30.0)	底部から口縁部にかけての破片。平底で、体部は内彎して立ち上がる。	内・外面ナデ。	長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	P141 10% 表採 近世後半
		B 5.1				
		C(25.0)				
40	ほうろく 土師質土器	A(31.5)	底部から口縁部にかけての破片。平底で、体部は内彎して立ち上がる。体部上位から下位に内耳彫りつけ。	内・外面ナデ。	長石 褐色 普通	P142 20% 表採 近世後半
		B 3.1 C(29.4)				
41	ほうろく 土師質土器	A(27.4)	底部から口縁部にかけての破片。平底で、体部は内彎して立ち上がる。体部上位から下位に内耳彫りつけ。	内・外面ナデ。	長石 褐色 普通	P143 10% 表採 近世後半
		B 2.7 C(24.6)				
42	陶器	A(11.6)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部は僅かに外反する。	ロクロ成形。体部内面及び外面まで鉄軸施軸。	胎土：にぶい黄褐色 軸：極暗赤褐色 良好	P144 5% 表採 (瀬戸・美濃系)
		B(5.0)				
43	陶器	A(11.5)	体部から口縁部にかけての破片。体部は内彎して立ち上がり、口縁部に至る。	ロクロ成形。体部内面及び外面まで鉄軸施軸。	胎土：にぶい黄褐色 軸：極暗赤褐色 良好	P145 10% 表採 (瀬戸・美濃系)
		B(1.8)				

遺構外出土土製品観察表

図版番号	器種	計 画 値(cm)			重 量 (g)	現存率 (%)	器 形 及 び 文 様 の 特 徴	備 考	
		最大長	最大幅	最大厚					
第108図	1	土 偶	(7.8)	(6.5)	(5.6)	(121.5)	30	中空の透光彫糸土偶の頸部。頸部は、王冠状の裝飾が施されている。顔面の形状は楕円形を呈し、頸頂部は2本の沈線が施され、眉及び額の回りは単筋縄文L字が施されている。目は1本の沈線、鼻の下には2本の沈線が施され、高い鼻をもち、一部が欠損している。頸頂部に赤彩がある。	D P 50 表探 長石・石英 黒褐色 普通 (晩期後葉)
	2	土 偶	(6.4)	(4.2)	(3.4)	(82.6)	20	みみずく土偶の頸部。刻みを施したボタン状の粘着で目と口が描かれている。後頸部は粘着に縦方向の刻みが施されている。	D P 60 表探 長石・石英 黒褐色 普通 (後期後葉) 摩滅が著しい
	3	土 偶	(6.8)	(7.0)	(3.0)	(84.8)	20	みみずく土偶の頸部。頸部で額の輪郭を表現し、ボタン状の粘着で目と口を表現し、右目は欠損している。鼻は棒状の粘土を貼りつけている。頸頂部は、不整形な彫りが施されている。	D P 61 表探 長石・パミス 橙色 普通 (後期後葉)
	4	土 偶	(4.7)	(2.5)	(2.0)	(19.1)	10	みみずく土偶の右脚部。単筋縄文R Lの地文に、3本の沈線が施されている。	D P 62 表探 長石・石英 赤褐色 普通 (後期後葉)
	5	土 偶	(6.8)	(3.6)	(2.1)	(36.7)	10	みみずく土偶の右脚部。側面に刻み、表面に1本の沈線が施されている。	D P 63 表探 長石・石英 黒褐色 普通 (後期後葉)
	6	土 偶	(5.5)	(4.2)	(1.5)	(34.3)	10	右腕部片。連続した小突起が弧線状に施されている。	D P 64 表探 長石・石英 黒褐色 普通 (晩期)
7	土 偶	(5.3)	(6.2)	(4.5)	(144.4)	10	右脚部。深めの沈線を通らせ、上部には縦方向の刻みが施されている。	D P 65 表探 長石・石英 橙色 普通 (後期後葉か)	
8	土 偶	(6.9)	(4.9)	(4.0)	(129.8)	20	左脚部。沈線を通らせ、側面には縦方向の渦巻状の沈線が施されている。	D P 66 表探 長石・パミス 橙色 普通 (晩期後葉)	
9	土 偶	(5.3)	(4.5)	(4.8)	(72.2)	20	右脚部。足は全体に突出気味で縦方向の磨きが施され、文様は施されていない。	D P 67 表探 長石・石英 赤褐色 普通 (後期)	
10	土 偶	(4.4)	(2.9)	(3.3)	(35.3)	10	左脚部。つま先は突出する。文様は施されていない。	D P 68 表探 長石 橙色 普通 (後期)	
11	土 偶	(3.9)	(2.9)	(1.8)	(18.2)	10	左腕部片。表面は楕円状の沈線が施されており、裏面は文様は施されていない。	D P 69 表探 長石 黒褐色 普通 (晩期前葉)	
12	耳飾り	5.7	5.5	2.5	47.5	100	滑車形。外面に刻みを施した小突起が12個、中間部と中心部に4個ずつ付けられている。中心部は1.1cmの孔が穿たれており、それを取り巻く最大径2.1cmの孔が穿たれている。	D P 70 表探 長石・石英 赤褐色 普通 (後期後葉)	
	耳飾り	5.3	5.1	2.8	39.1	100	滑車形。外面に刻みを施した小突起が12個、中心部に4個付けられている。中心部は0.9cmの孔が穿たれており、それを取り巻く最大径1.9cmの孔が穿たれている。	D P 71 表探 長石・石英 赤褐色 普通 (後期後葉)	
14	耳飾り	5.5	5.5	1.9	49.4	100	滑車形。内径1.8cm。5本の半円形状の粘土粒を貼り付け、表面及び側面は磨きが施されている。	D P 72 表探 長石 黒褐色 良好 (後期後葉)	
15	耳飾り	5.4	5.4	2.1	(48.1)	90	滑車形。内径1.7cm。外周に7個の小突起が施されている。表面及び側面は磨きが施されている。	D P 73 表探 長石 黒褐色 良好 (後期後葉)	
16	耳飾り	(4.9)	(4.8)	(1.7)	(23.3)	90	滑車形。内径2.0cm。孔内面に刻みを施した縦長の粘着が施されている。	D P 74 表探 長石 橙色 普通 (後期後葉)	
17	耳飾り	2.0	1.9	1.6	5.0	100	環形。内径1.2cmで無文である。	D P 75 表探 長石 橙色 普通 (後期後葉)	
第109図	18	耳飾り	2.6	(2.5)	2.3	(7.9)	90	滑車形。内径0.7cmで無文である。	D P 76 表探 長石 橙色 普通 (後期後葉か)
19	耳飾り	(2.7)	(2.8)	2.5	(10.3)	90	滑車形。内径0.8cmで無文である。	D P 77 表探 長石 橙色 普通 (後期後葉か)	
20	耳飾り	(2.3)	(2.2)	2.3	(8.6)	90	滑車形。無文である。	D P 78 表探 長石 褐色 普通 (後期後葉か)	
21	耳飾り	3.0	2.9	1.7	11.0	100	滑車形。外周に、刻みを施した小突起が4個施されている。	D P 79 表探 長石 橙色 普通 (晩期後葉)	
22	耳飾り	2.3	2.3	2.2	11.6	100	白形。無文で、ナヤにより整形されている。	D P 80 表探 長石 橙色 普通 (後期後葉)	

図版番号	器 種	計 測 値 (cm)			重 量 (g)	現存率 (%)	器 形 及 び 文 様 の 特 徴	備 考
		最大長	最大幅	最大厚				
23	耳 飾 り	1.9	1.8	1.7	6.3	100	白形。表・裏面ともに凹んでおり、無文である。	D P 81 表採 長石 ぶい橙色 普通 (後期後葉)
24	耳 飾 り	1.5	1.6	1.6	4.2	100	白形。表面の外周に削みが施され、側面は磨きが施されている。	D P 82 表採 長石 橙色 普通 (後期後葉)
25	耳 飾 り	[5.6]	[5.6]	2.2	(14.4)	20	清草形。円形の貼瘤が2個施され、表面及び側面は磨きが施されている。	D P 83 表採 長石 赤褐色 普通 (後期後葉)
26	耳 飾 り	[5.6]	[5.6]	2.3	(14.8)	50	清草形。内径 [3.7] cm。外周及び内周に削みを施した小突起を有し、磨きが施されている。	D P 84 表採 長石・雲母 黒褐色 普通 (後期後葉)
27	耳 飾 り	[8.2]	[8.2]	1.5	(10.9)	30	環形。内径 [4.5] cm。表面は沈線により文様が描かれ、磨きが施されている。	D P 85 表採 長石・雲母 黒褐色 普通 (晩期前葉)
28	耳 飾 り	[7.6]	[7.6]	(1.2)	(5.8)	30	清草形。内径 [5.0] cm。外周及び内周に削みが施され、表面及び側面は磨きが施されている。	D P 86 表採 長石・バミス 黒褐色 普通 (後期後葉)
29	耳 飾 り	[5.6]	[5.7]	1.9	(4.6)	20	環形。内径 [4.2] cm。無文で、丁寧な磨きが施されている。	D P 87 表採 長石・バミス 黒褐色 普通 (晩期前葉か)
30	耳 飾 り	[5.6]	[5.6]	1.9	(5.4)	20	環形。内径 [3.8] cm。無文で、粗い磨きが施されている。	D P 88 表採 長石・石英 橙色 普通 (後期後葉か)
31	耳 飾 り	[5.6]	[5.6]	1.8	(2.6)	20	環形。内径 [4.2] cm。無文で、丁寧な磨きが施されている。	D P 89 表採 長石・バミス 黒褐色 普通 (晩期前葉)
32	耳 飾 り	[3.0]	[3.0]	1.6	(3.7)	50	清草形。通かし彫りで、側面は粗いナデ彫りが施されている。	D P 90 表採 長石 橙色 普通 (後期後葉)
33	土 版	(6.8)	(5.4)	2.0	(77.8)	50	楕円形を呈し、表面は沈線を縦に2分する弧線状沈線が描かれている。表面は粗い磨きが施されている。	D P 91 表採 長石・雲母 黒褐色 普通 (安行目)
34	土 版	6.9	3.9	1.8	52.5	100	楕円形を呈し、表面は縦及び横方向の沈線で文様が描かれている。表面は無文である。	D P 92 表採 長石・雲母 ぶい橙色 普通
35	土 版	(6.0)	(3.4)	2.4	(41.8)	20	楕円形を呈し、側面から表面にかけて沈線により文様が描かれている。両面ともに丁寧な磨きが施されている。	D P 93 表採 長石・バミス 黒褐色 普通 (安行目)
36	土 版	(4.1)	(4.4)	2.0	(30.9)	40	楕円形を呈し、表面は沈線を縦に2分する弧線状沈線が描かれている。表面は中心部に刺突が施されている。(安行目)	D P 94 表採 長石・バミス 黒褐色 普通 (安行目)
37	有孔円形土製品	(9.3)	(4.7)	3.1	(129.9)	50	無文。内径 [1.4] cm。ナデ彫りがなされている。	D P 95 表採 長石・石英 褐色 普通
38	有孔土製品	(3.9)	(4.1)	1.0	(13.7)	90	不整形形。内径 [0.8] cm。円形の沈線が施され、連続する刺突がある。	D P 96 表採 長石・バミス 赤褐色 普通
39	有孔土器片	(4.2)	(4.9)	1.3	(29.3)	30	貫通孔が1個施されている。	D P 97 表採 長石 褐色 普通
40	土製円板	(7.7)	8.4	1.3	(86.4)	90	深鉢形土器の底部片の再利用。	D P 98 表採
41	土製円板	6.3	7.1	1.0	56.6	100	無文。円板状であるが縁は未調整。	D P 99 表採
42	土製円板	5.2	5.8	1.2	38.3	100	無文。円板状であるが縁は未調整。	D P 100 表採
43	土製円板	5.3	4.8	0.8	19.5	100	無文。円板状であるが縁は未調整。	D P 101 表採
44	土製円板	4.2	5.3	1.0	25.1	100	無文。円板状であるが縁は未調整。	D P 102 表採
45	土製円板	4.1	5.3	1.3	28.1	100	斜め方向の条線が施されている。	D P 103 表採
46	土製円板	4.3	5.3	0.9	21.0	100	条線が施されている。	D P 104 表採
47	土製円板	4.7	4.9	0.9	20.1	100	縄文文に沈線が施されている。	D P 105 表採
48	土製円板	4.5	4.5	1.2	27.0	100	無文。	D P 106 表採
49	土製円板	4.5	4.6	0.9	17.6	100	沈線が施されている。	D P 107 表採
50	土製円板	4.7	4.8	0.7	18.4	100	沈線に削みが施されている。	D P 108 表採
51	土製円板	4.4	4.5	1.3	18.7	100	条線が施されている。	D P 109 表採
52	土製円板	4.0	4.0	1.5	18.8	100	2段の瘤が施されている。	D P 110 表採
53	土製円板	4.2	4.4	1.2	19.2	100	彫み及び条線が施されている。	D P 111 表採
54	土製円板	4.2	4.3	0.8	19.1	100	無文。	D P 112 表採
55	土製円板	4.2	3.8	1.0	17.0	100	無文。	D P 113 表採
56	土製円板	4.1	4.1	1.2	22.3	100	無文。	D P 114 表採
57	土製円板	3.9	3.8	1.3	20.1	100	単筋縄文及び沈線が施されている。	D P 115 表採
58	土製円板	3.7	4.3	0.8	12.6	100	縦方向の沈線が施されている。	D P 116 表採
59	土製円板	3.3	4.0	1.0	14.2	100	縄文文間は磨り消しが施されている。	D P 117 表採
60	土製円板	4.0	3.6	1.0	18.0	100	無文。	D P 118 表採
61	土製円板	3.6	3.5	1.1	13.9	100	無文。	D P 119 表採
62	土製円板	3.6	3.4	1.0	13.9	100	無文。	D P 120 表採
63	土製円板	3.4	3.5	1.1	15.1	100	無文。	D P 121 表採
64	土製円板	3.5	3.4	1.0	16.5	100	単筋縄文しりが施されている。	D P 122 表採
65	土製円板	3.8	4.0	0.8	11.4	100	縄文文間は磨り消しが施されている。	D P 123 表採

図版番号	器 種	計 測 値 (cm)			重 量 (g)	現存率 (%)	器 形 及 び 文 様 の 特 徴	備 考
		最大長	最大幅	最大厚				
第110図66	土製円板	4.0	3.6	0.6	8.6	100	無文。	D P 124 表採
67	土製円板	3.5	3.7	0.9	13.4	100	無文。	D P 125 表採
68	土製円板	3.5	3.6	0.8	10.3	100	単線縄文し京の地文に、沈線及び磨り出しが施されている。	D P 126 表採
69	土製円板	3.1	3.6	1.0	11.7	100	帯い糸線が施されている。	D P 127 表採
70	土製円板	3.5	3.6	0.7	9.1	100	縄文が施文されている。	D P 128 表採 磨減が著しい。
71	土製円板	3.6	3.6	0.6	7.5	100	沈線区画内に単線縄文Rしが施文されている。	D P 129 表採
72	土製円板	3.3	3.6	0.8	9.9	100	無文。	D P 130 表採
73	土製円板	3.3	3.2	0.5	7.9	100	単線縄文に沈線が施されている。	D P 131 表採
74	スプーン形土製品	(6.5)	(3.5)	(2.9)	(34.4)	70	内・外面は、丁寧にナデ整形がされている。	D P 132 表採 長石・石英・褐色 普通
75	動物形土製品	(8.3)	4.5	3.6	(123.2)	60	体部の下半周にかけたの破片。腹部に最大径1.4cm、深さ1.0cmの孔があけられている。	D P 133 表採 長石・石英・パミス 褐色 普通
76	土 鉢	3.9	2.4	1.5	16.6	100	楕円形を呈し、長軸に深い溝が1周している。	D P 134 表採 長石 褐色 普通
77	土 鉢	4.2	1.2	1.2	6.3	100	長方形を呈し、長軸に浅い溝が1周し、溝上に径0.3cmの孔が穿たれている。	D P 135 表採 長石 褐色 普通
78	不明土製品	6.3	4.6	4.4	75.5	100	口部は、円形で深目の沈線が施されている。胴部は、段を有し丁寧に磨きが施されている。	D P 136 表採 長石・石英 褐色 普通
79	不明土製品	3.8	3.8	3.1	(46.7)	90	表・裏・側面ともナデ整形がされている。短楕である。	D P 137 表採 長石・石英 におい褐色 普通
80	不明土製品	(4.0)	(4.3)	-	(25.0)	-	フラップ状に開き、2個の径0.8cmの孔が穿たれている。丁寧に磨きが施されている。	D P 138 表採 長石・石英・パミス におい褐色 普通

遺構外出土石製品観察表

図版番号	器 種	計 測 値				石 質	備 考
		長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
第111図1	磨製石斧	(9.9)	5.2	2.8	(260.0)	硬砂岩	Q105 乳棒状 一部欠損 表採
2	磨製石斧	(8.7)	4.6	2.1	(140.0)	砂 岩	Q106 定角式 一部欠損 表採
3	磨製石斧	(7.4)	(7.2)	3.6	(220.0)	安山岩	Q107 定角式 欠損品 表採
4	磨製石斧	(6.5)	(5.0)	3.2	(163.9)	安山岩	Q109 乳棒状 欠損品 表採
5	磨製石斧	(7.1)	(6.1)	3.3	(197.4)	流紋岩	Q110 乳棒状 欠損品 表採
6	打製石斧	(9.1)	(5.2)	1.7	(97.1)	砂 岩	Q108 分銅形 未製品 表採
7	打製石斧	(12.1)	7.8	2.1	(200.0)	安山岩	Q111 分銅形 一部欠損 表採
8	打製石斧	(11.5)	7.6	1.5	(160.0)	安山岩	Q112 分銅形 一部欠損 表採
9	打製石斧	(11.7)	7.6	2.1	(220.0)	硬砂岩	Q113 分銅形 一部欠損 表採
10	打製石斧	(12.5)	(7.6)	3.4	(320.0)	砂 岩	Q114 分銅形 一部欠損 表採
11	打製石斧	11.5	8.1	2.0	160.0	砂 岩	Q115 分銅形 表採
第112図12	打製石斧	(13.1)	7.0	3.0	(340.6)	頁 岩	Q116 分銅形 一部欠損 表採
13	打製石斧	(11.1)	7.4	2.3	(240.0)	安山岩	Q117 分銅形 一部欠損 表採
14	打製石斧	12.0	6.6	1.9	160.0	粘板岩	Q118 分銅形 表採
15	打製石斧	(11.4)	(7.7)	2.5	206.5	粘板岩	Q119 分銅形 表採
16	打製石斧	13.0	(6.5)	1.7	(160.0)	粘板岩	Q120 分銅形 一部欠損 表採
17	打製石斧	9.9	6.5	(2.9)	(180.0)	粘板岩	Q121 分銅形 一部欠損 表採
18	打製石斧	(10.3)	6.6	1.9	(140.0)	安山岩	Q122 分銅形 一部欠損 表採
19	打製石斧	10.1	6.7	2.3	140.3	硬砂岩	Q123 分銅形 表採
20	打製石斧	9.2	6.8	1.7	120.0	安山岩	Q124 分銅形 表採
21	打製石斧	10.3	6.4	1.8	120.0	安山岩	Q125 分銅形 表採
22	打製石斧	8.7	5.7	2.0	100.0	安山岩	Q126 分銅形 表採
第113図13	石 棒	(26.1)	4.8	2.2	(480.0)	緑泥片岩	Q127 欠損品 表採
24	石 棒	(14.7)	6.5	5.1	(840.0)	緑泥片岩	Q128 欠損品 表採

図版番号	器 種	計 測 値				石 質	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
25	石 棒	(12.4)	4.6	2.0	(220.5)	緑泥片岩	Q129 欠損品 表採
26	石 棒	(8.6)	2.7	2.5	(120.0)	粘板岩	Q131 欠損品 表採
27	石 棒	(6.7)	3.2	0.9	(40.0)	緑泥片岩	Q133 欠損品 表採
28	石 剣	(12.8)	3.3	2.6	(160.0)	粘板岩	Q130 欠損品 表採
29	石 剣	(10.8)	(3.0)	(1.0)	(40.0)	粘板岩	Q132 欠損品 表採
30	石 剣	(7.1)	3.7	2.6	(100.0)	粘板岩	Q134 欠損品 表採
31	独 結石	12.8	6.9	2.8	380.0	安山岩	Q135 表採
32	独 結石	(9.7)	4.8	4.0	(220.0)	硬砂岩	Q136 欠損品 表採
33	磨 石	9.1	6.8	4.8	440.0	安山岩	Q137 表採
34	磨 石	9.8	6.1	4.5	420.0	安山岩	Q138 巖石兼用 表採
第114図35	磨 石	8.3	6.9	5.4	420.2	安山岩	Q139 表採
36	磨 石	6.8	6.4	4.8	300.4	安山岩	Q140 表採
37	磨 石	7.2	6.7	3.3	240.6	安山岩	Q141 巖石兼用 表採
38	磨 石	7.4	6.5	3.8	260.5	安山岩	Q142 表採
39	磨 石	6.2	6.0	5.2	260.2	安山岩	Q143 表採
40	磨 石	6.8	6.3	4.8	260.2	安山岩	Q144 表採
41	磨 石	6.8	6.2	4.2	240.6	安山岩	Q145 表採
42	磨 石	6.3	5.8	3.6	180.3	安山岩	Q146 表採
43	磨 石	6.1	6.2	3.9	220.3	安山岩	Q147 表採
44	磨 石	6.0	6.4	4.5	220.1	安山岩	Q148 表採
第115図45	磨 石	(8.5)	7.5	4.3	(420.0)	安山岩	Q149 欠損品 表採
46	石 皿	(14.4)	(11.5)	3.9	(708.6)	安山岩	Q150 欠損品 表採
47	石 皿	(11.2)	(7.7)	4.6	(362.9)	安山岩	Q151 欠損品 表採
48	石 皿	(10.1)	(7.1)	5.9	(428.0)	安山岩	Q152 欠損品 表採
49	石 皿	(8.0)	(7.7)	5.1	(281.8)	安山岩	Q153 凹石兼用 欠損品 表採
50	石 皿	(6.4)	(10.3)	4.0	(181.3)	安山岩	Q154 凹石兼用 欠損品 表採
51	石 皿	(7.4)	(7.0)	4.1	(169.7)	安山岩	Q155 欠損品 表採
52	石 皿	(5.5)	(7.2)	5.5	(164.8)	安山岩	Q156 欠損品 表採
53	石 皿	(5.0)	(5.8)	3.7	(83.7)	安山岩	Q157 欠損品 表採
54	凹 皿	(11.0)	(10.6)	4.2	(677.6)	安山岩	Q158 欠損品 表採
第116図55	凹 皿	(10.5)	(13.1)	3.8	(411.2)	安山岩	Q159 欠損品 表採
56	凹 皿	(7.9)	(10.3)	4.4	(268.3)	輝石	Q160 欠損品 表採
57	凹 皿	(7.1)	(10.1)	4.4	(332.8)	安山岩	Q161 欠損品 表採
58	アソビ石	(8.8)	9.5	4.7	(360.0)	安山岩	Q162 一部欠損品 表採
59	石 錘	(8.1)	3.4	1.2	(55.5)	砂 岩	Q163 一部欠損品 表採
60	砥 石	(7.1)	(3.2)	(3.6)	(96.1)	砂 岩	Q164 欠損品 表採
61	浮 子	(5.8)	(4.5)	(1.9)	(16.5)	輝 石	Q165 欠損品 表採
62	浮 子	(5.2)	(3.7)	(2.7)	(11.6)	輝 石	Q166 欠損品 表採
63	石 鏝	(2.9)	1.9	0.4	(1.5)	チャート	Q167 凹基無蓋鏝 一部欠損品 表採
64	石 鏝	2.4	1.6	0.3	0.9	チャート	Q168 凹基無蓋鏝 表採
65	石 鏝	2.6	1.5	0.3	0.6	チャート	Q169 凹基無蓋鏝 表採
66	石 鏝	2.7	1.5	0.5	0.9	チャート	Q170 凹基無蓋鏝 表採
67	石 鏝	2.2	1.6	0.4	0.7	チャート	Q171 凹基無蓋鏝 表採
68	石 鏝	1.7	1.4	0.4	0.6	チャート	Q172 凹基無蓋鏝 表採
69	勾 玉	2.5	1.6	0.8	4.1	滑 石	Q173 表採
70	小 玉	1.3	1.2	0.9	2.8	硬 玉	Q174 径0.4cmの透孔 表採

第117～120図1～86は縄文土器片の拓影図である。

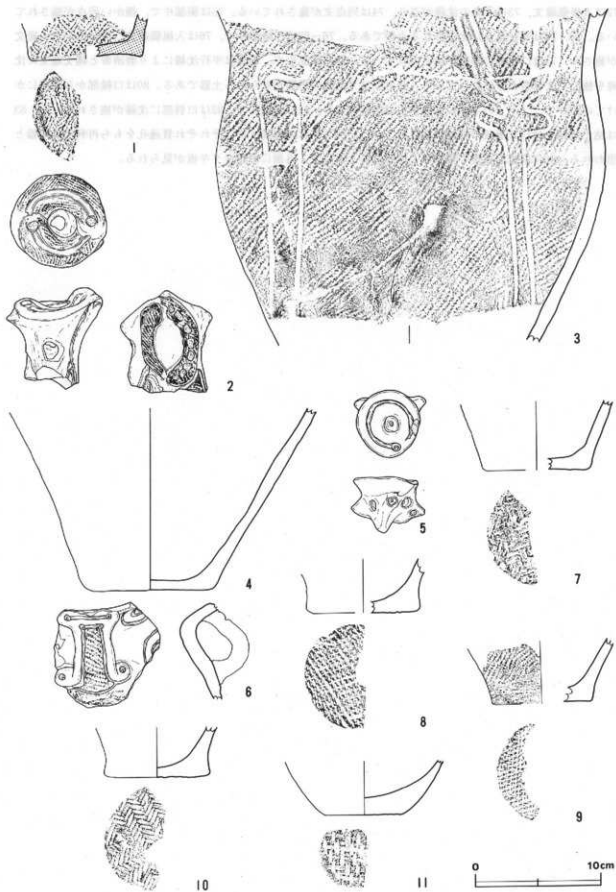
1～5は前期の土器で、黒浜式期に比定される。1は口縁部から胴部にかけての破片で、口縁部下から単節縄文R Lが施文され、胴部中心位には粘土紐貼り付けの上下に太い沈線が巡らされている。2～5は胴部片で、縄文が施文されている。

6～11は中期の土器である。6～8は加曾利EⅢ式期に比定される土器である。6は口縁部片で、沈線及び連続する刺突が施されている。7・8は胴部片で、7は縄文地文に平行沈線が垂下し、沈線間は磨り消され、8は微隆起線及び単節縄文R Lが施文されている。9～11は加曾利EⅣ式期に比定される土器である。9～11は口縁部片で、9・10は大形の把手が付けられ、11は口縁部は磨り消帯、微隆起線下は羽状縄文が施文されている。

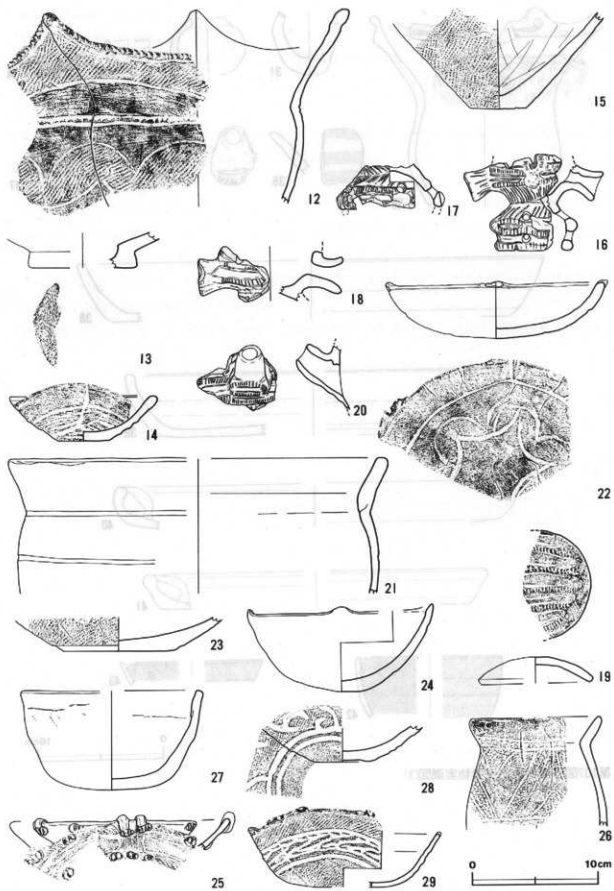
12～62は後期の土器である。12～18は称名寺式期に比定される土器である。12～14は口縁部片で、縄文及び沈線が施文され、13は連続刺突片が施されている。16は波状口縁の波頂部で、大形のC字状貼付文で太い沈線が2個の刺突に連携している。15・17・18は胴部片で、15は列点文、16は縄文地文に太い沈線で区画され、17は連続刺突が施されている。19～31は堀之内Ⅰ式期に比定される土器である。19・21～24は波状口縁部片で、19～22・24は沈線により文様が描かれ、23は連続刺突が施されている。25～31は胴部片で、25～30は平行及び蛇行する沈線が施され、31は胴部を垂下する隆線に刻みが施されている。32～37は堀之内Ⅱ式期に比定される土器である。32～35は口縁部片で、32は単節縄文R Lの地文に沈線、33は隆線上に刻み、33は口縁部下の隆線上に縦長の刺突が施されている。35は表・裏面に文様が施されている。表面は、隆線上に刻み及び縦長の刺突が施され、裏面は縄文地文に沈線が施されている。36・37は胴部片で、縄文地文に沈線が施されている。38～42は加曾利BⅠ式期に比定される土器である。38・39は口縁部片で、38は沈線、39は横帯文が施されている。40は口縁部から胴部にかけての破片で、口唇部に刻み、口縁部下から横帯文が施文されている。41・42は胴部片で、41は深めの沈線、42は粘土紐貼り付けに押捺が加えられている。43～46は加曾利BⅡ式期に比定される土器である。いずれも口縁部片で、43は蛇行する沈線、44は平行沈線区画内に刻みが施されている。45・46は格子状の沈線が施されている。47～49は加曾利BⅢ式期に比定される土器である。47は口縁部から胴部にかけての破片で、口縁部は磨り消され、胴部は格子状の沈線が施されている。48は小突起を有し、49は波状口縁で刻み及び斜め方向の条線が施されている。50～52は曾谷式期に比定される土器である。いずれも口縁部片で、50は口縁部に平行沈線、51は沈線区画内に2段の刻みが施され、52は口縁部が磨り消されている。53～58は安行Ⅰ式期に比定される土器である。53は波状口縁で隆起帯縄文間に貼瘤が付され、貼瘤に孔が穿たれている。54は口縁部から胴部にかけての破片で、胴部に刻文帯が施されている。56・57は口縁部片で、56は口縁部に縄文帯、57は口縁部に刻文帯、刻文帯間は磨り消されている。58は胴部片で、刻文帯上に円形の瘤が貼られている。59～62は安行Ⅱ式期に比定される土器である。59は波状口縁で縄文帯上に縦長の瘤に横方向の刻みが施されている。60は小突起を有し、縄文帯上には縦長の瘤に縦方向の刻みが施され、刻文帯上にはブタ鼻状の貼瘤が付されている。61は縄文帯上に貼瘤が付され、62は刻みが施されている。

63～85は晩期の土器である。63～66は安行Ⅲa式期に比定される土器である。いずれも口縁部片で、63は口縁部から胴部にかけて粗い刻文帯が施され、64は縄文帯間は磨り消されている。65は貼瘤が付され、66は外反する小突起を有する。67～71は安行Ⅲb式期に比定される土器である。67は「く」の字状に外傾する口縁部である。68は波状口縁で、沈線による楕円区画がなされている。69は小突起を有し、太い沈線で文様が描かれている。70は鋸歯状の突起が付けられ、縄文地文に沈線が施されている。71は波状口縁で波頂部に粘土紐が巻つけられている。72～75は安行Ⅲcに比定される土器である。72～74は口縁部片で、いずれも小突起を有する。

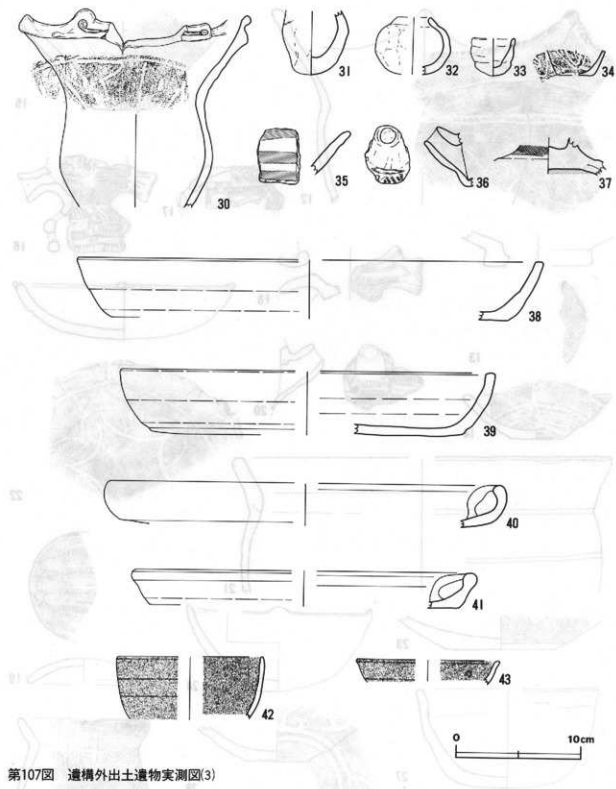
72は入組弧線文，73は4条の沈線が巡り，74は列点文が施されている。75は胴部片で，細かい列点が施されている。76-79は安行Ⅲdに比定される土器である。76-78は口縁部片で，76は入組弧線文，77は三叉状入組文が施され，78は口唇部に押捺が加えられている。79は胴部片で，胴部は平行沈線により磨消帯と縄文地文に沈線を施した文様帯が分けられている。80-83は大洞式の影響が見られる土器である。80は口縁部から胴部にかけての破片で，「く」の字状に外傾する口縁部である。81は胴部片で，82は口唇部に沈線が施されている。83は粘土紐貼り付けに横長の押捺が施されている。84・85は口縁部片で，それぞれ貫通孔をもち再利用の土器と思われる。86は須恵器大甕の胴部片と思われる土器片で，外面に平行タキキ痕が見られる。



第105图 遺構外出土遺物実測図(1)



第106图 遺構外出土遺物実測図(2)

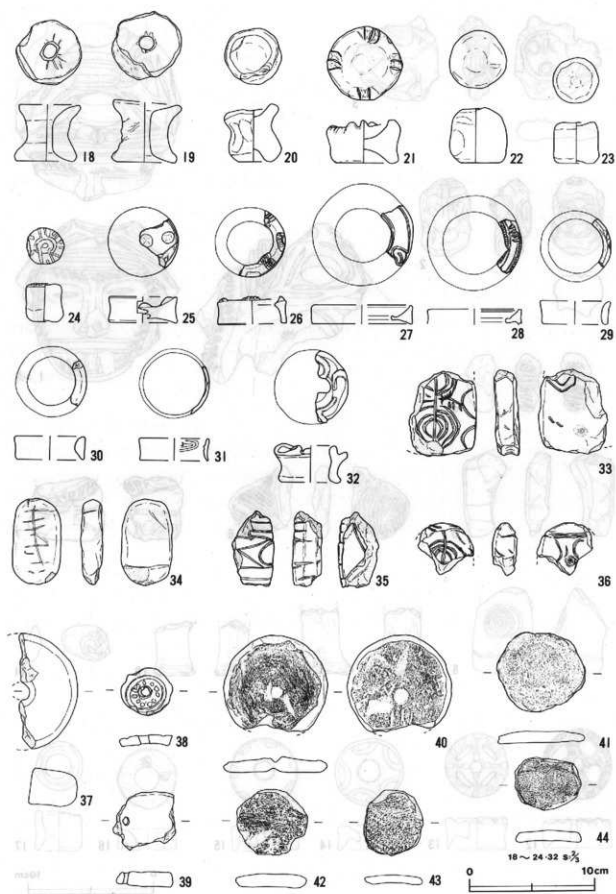


第107図 遺構外出土遺物実測図(3)



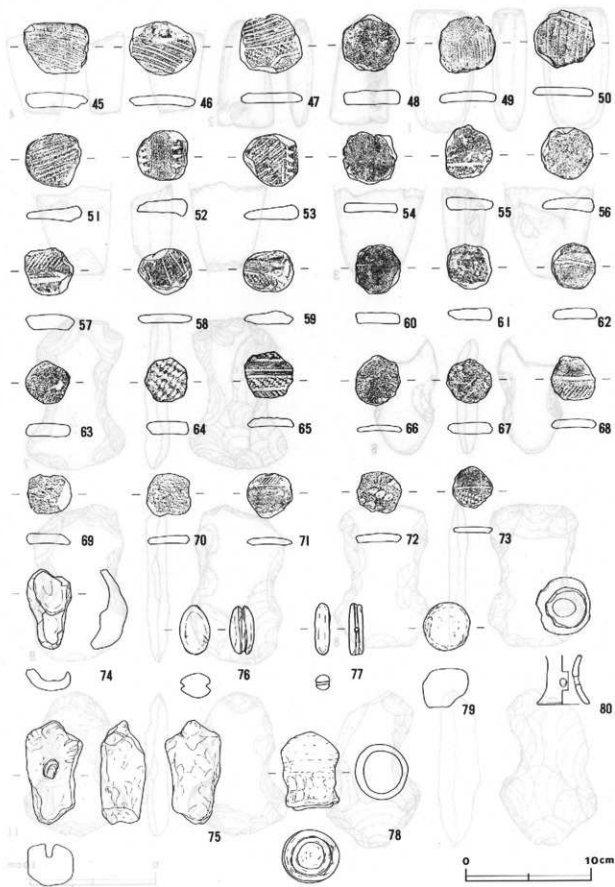
第108图 遺構外出土遺物実測図(4)

108图 遺構外出土遺物実測図(4)



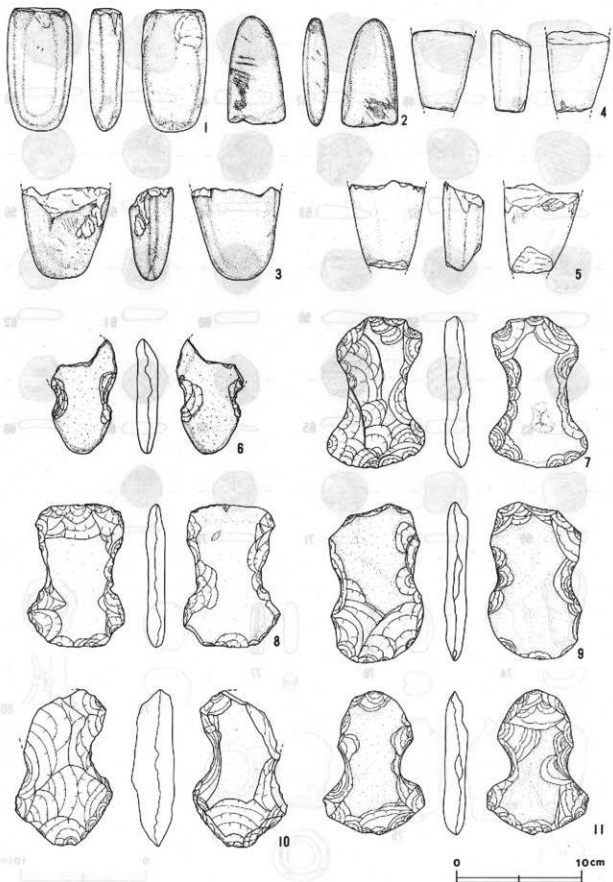
第109図 遺構外出土遺物実測図(5)

小笠原県伊豆市出土の遺物 図50(第5)



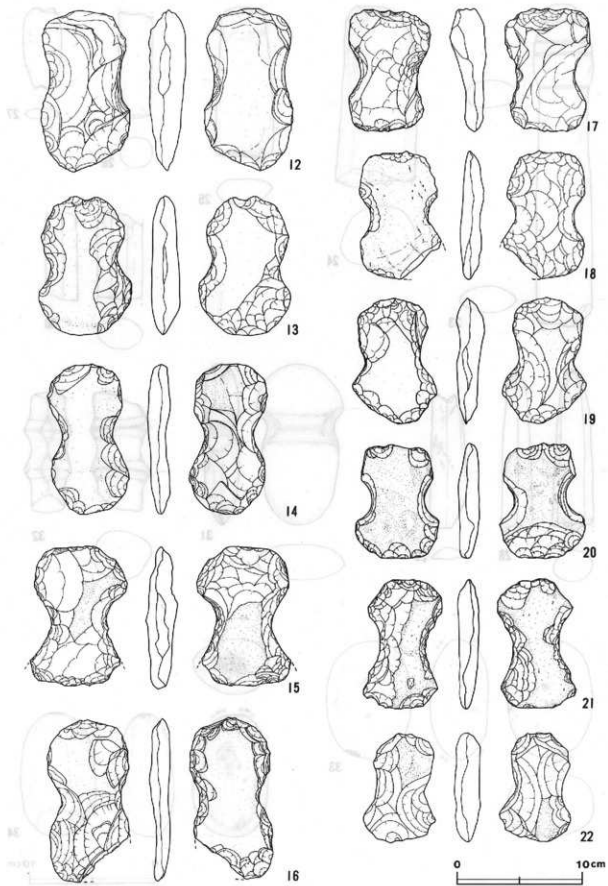
第110图 遺構外出土遺物実測図(6)

平野実測所出土古代陶器 図111部



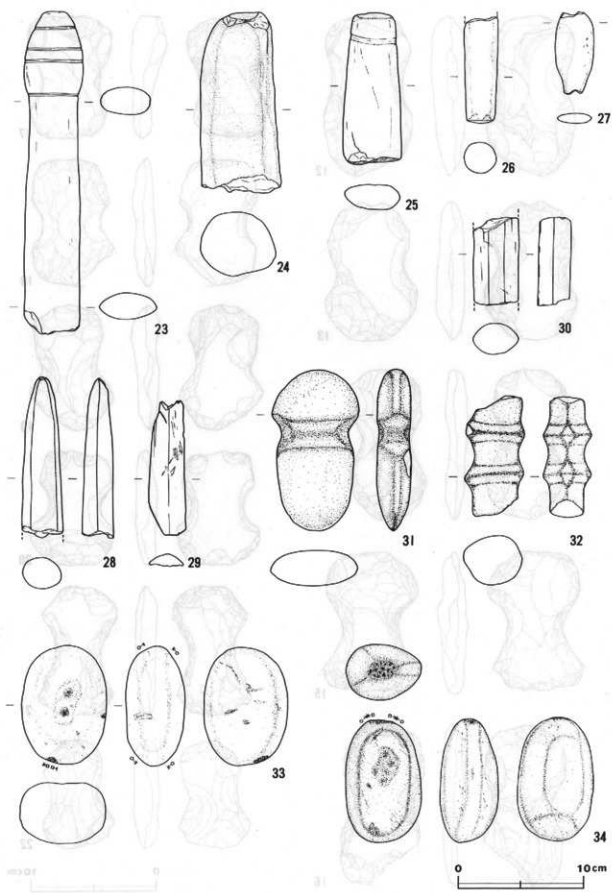
第111图 遺構外出土遺物実測図(7)

① 図 ② 実測 ③ 出土 ④ 断面 ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫



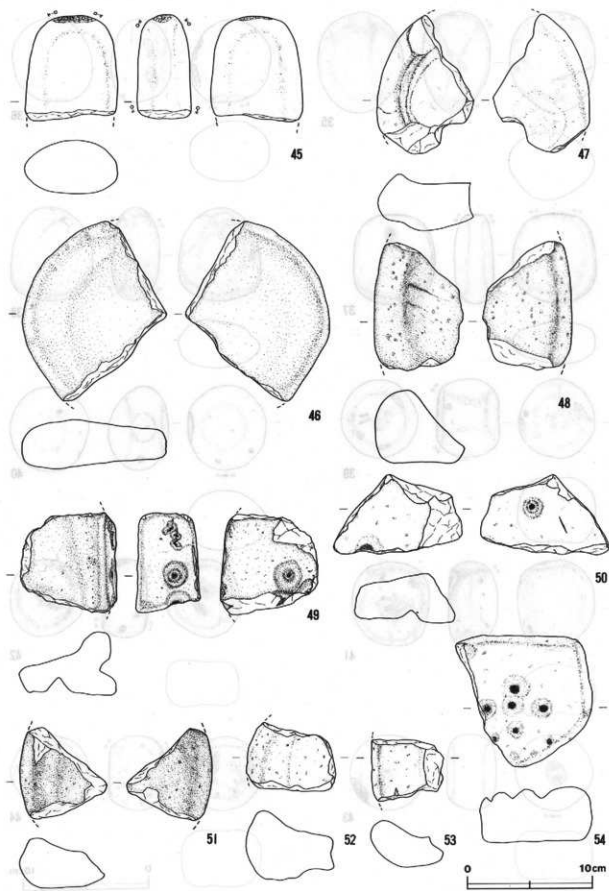
第112図 遺構外出土遺物実測図(8)

⑧ 遺構外出土遺物実測図(8)



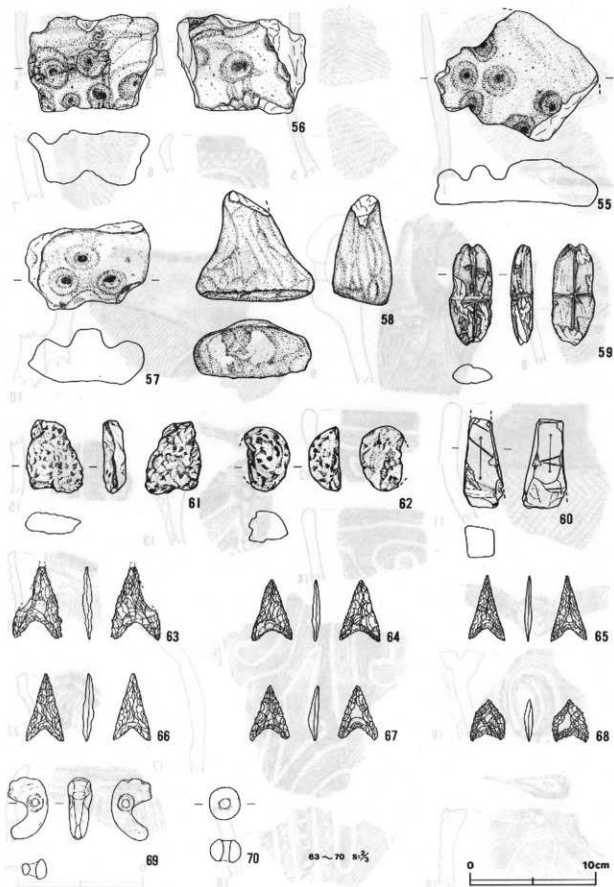
第113圖 遺構外出土遺物実測図(9)

※図は実物と同一スケールで撮影したものである



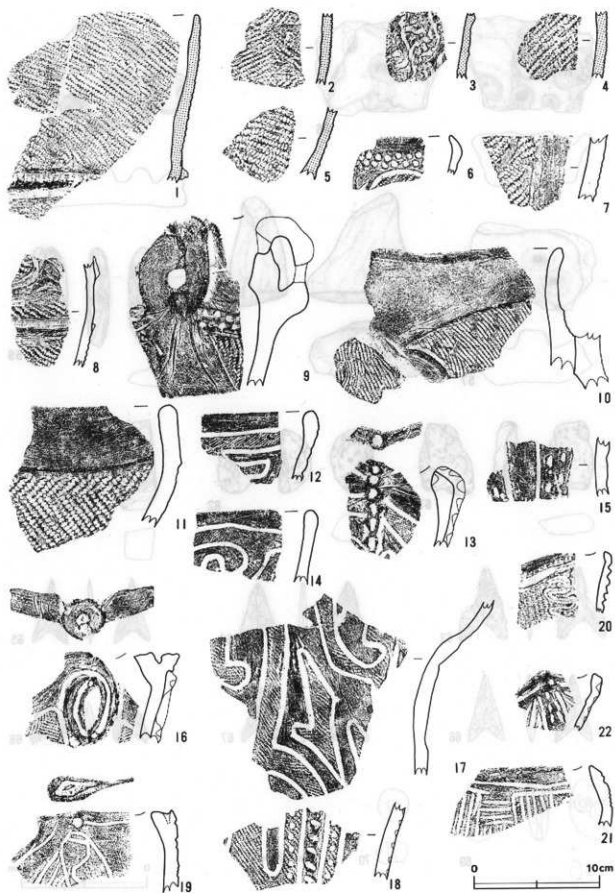
第115図 遺構外出土遺物実測図(1)

筑前国高田郡高田町出土の遺物 図115



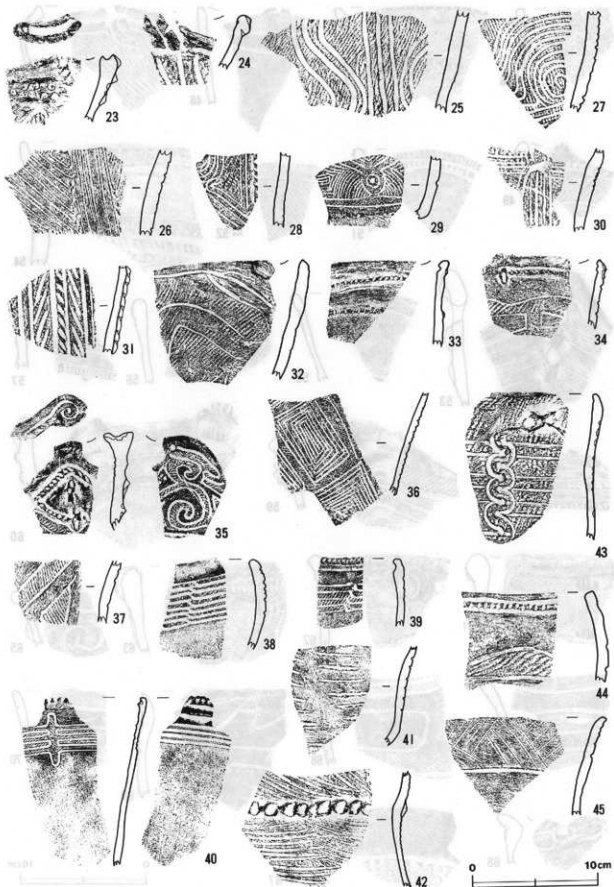
第116圖 遺構外出土遺物実測図(12)

東京国立博物館出土資料部 図録(第

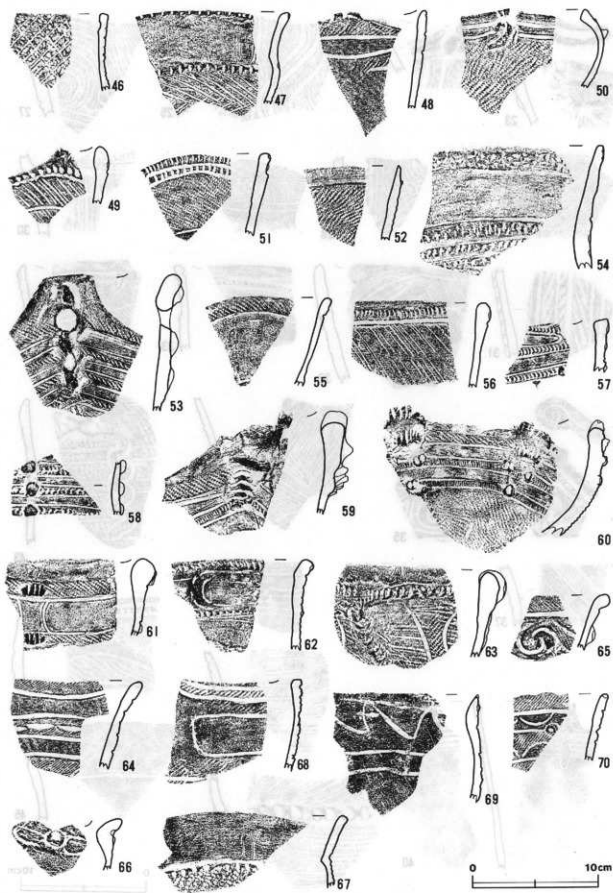


第117图 遺構外出土遺物実測拓影

新石器时代出土文物拓影 图117



第118圖 遺構外出土遺物実測拓影図(14)



第119圖 遺構外出土遺物実測拓影図(15)

和國漢代青銅器出土実測影 図119

第4節 まとめ

当遺跡の調査により明らかになった遺構は、竪穴住居跡32軒、土坑34基、方形周溝墓6基、塚1基、井戸1基、溝6条、不明土坑78基である。時期は、縄文時代中期後葉から晩期前葉にかけての遺構が中心である。遺物は、縄文土器の他に多数の土製品と石製品が出土している。特に、土製品では多数の耳飾りと県内でも出土例の少ない土製仮面が出土している。ここでは、各時期の検出遺構と出土遺物について概要を述べ、まとめたい。

1 縄文時代

当遺跡の中心となる時期で、遺構は縄文時代中期から晩期にかけて検出されている。遺物は、縄文時代前期から晩期にかけてのものが出土している。前期の遺物は、黒浜式期の土器片が少量出土しているだけで、この時期に該当する遺構は見られない。集落が営まれたのは、中期後葉と思われる。以下、大きく5つの時期に区分し、それぞれの時期について概観してみたい。

I期 中期後葉 II期 後期前葉 III期 後期中葉 IV期 後期後葉 V期 晩期前葉

* 時期特定困難なものは除く。

I期 中期後葉 (加曾利EⅢ-加曾利EⅣ式期)

当該期の住居跡は7軒で、加曾利EⅢ式期5軒、Ⅳ式期1軒、Ⅲ-Ⅳ式期1軒である。検出された位置は、調査区の東部から2軒(第1・2号住居跡)、西部から4軒(第15-B・20・24-A・28号住居跡)である。また、第1・2・24-A・28号住居跡は、屋内施設として土器埋設炉を有する。特に、第1・24-A号住居跡では、2個の深鉢形土器が炉に設置されている。特徴的な土坑としては、第24-A号住居跡に近接する第74号土坑の底面から石製品(石鏃10点・石錘1点)が出土している。刺片も多く検出され、石器製作に伴う遺構と思われる。しかし、同様の遺構は、他には見られなかった。

II期 後期前葉 (称名寺I-堀之内Ⅱ式期)

当該期の住居跡は11軒で、称名寺Ⅱ式期1軒、称名寺式期1軒、堀之内Ⅰ式期6軒、堀之内Ⅱ式期2軒、堀之内Ⅲ式期1軒である。今回の調査で、最も多い軒数である。検出された位置は、調査区の東部から2軒(第3・5号住居跡)、西部から9軒(第7・16・24-B・25・26・29・30・32・33号住居跡)である。第7・25・29・30号住居跡は、壁の立ち上がりをとらえることができたが、他の住居跡は、掘り込みが浅くとらえられなかった。炉跡も、ほとんどが確認面と同レベルで検出されている。住居を構築する際、ローム面をあまり掘り込まず、床をローム面付近に作っていたと思われる。そのため壁の立ち上がりがとらえにくく、平面プランがはっきりとらえられなかったと思われる。出土遺物では、第24-B号住居跡の北部壁際の覆土下層から土製仮面が出土している。

III期 後期中葉 (加曾利BⅠ-加曾利BⅢ式期)

当該期の住居跡は検出されなかった。しかし、土坑は、第29・148・161・174号の4基が検出されている。遺物も他の時期に比較して少ない。当該期の住居跡は検出されなかったが、遺物の出土から、調査区に隣接あるいは近接地区に集落の存在が想定できる。

Ⅳ期 後期後葉（安行Ⅰ～安行Ⅱ式期）

当該期の住居跡は5軒で、安行Ⅰ式期2軒、安行Ⅱ式期3軒である。検出された軒数は少ないが、遺物は多数出土している。検出された位置は、調査区の中央部から3軒（第6・10・14号住居跡）、西部から2軒（第18・31号住居跡）である。第10号住居跡は、住居の建て替えを行ったと思われる2列の壁柱穴が検出された。今回の調査では、近接する時期もほぼ同時期の第9号住居跡でも同様の壁柱穴が検出されている。第18・31号住居跡は、出入り口施設をもつ柄鏡形住居跡である。また、第31号住居跡は、時期を異にするが柄鏡形の住居跡である。第18号住居跡は3軒の重複、第17・31号住居跡は住居跡が調査区域外に延びており、全体構造は把握できなかった。3軒は、近接して構築されている。遺物は、祭祀に用いられたと思われる異形台付土器や装身具の耳飾りが多数出土している点も特徴的である。

Ⅴ期 晩期前葉（安行Ⅲa～安行Ⅲc式期）

当該期の住居跡は3軒で、安行Ⅲb式期2軒、安行Ⅲc式期1軒である。検出された位置は、調査区の中央部から1軒（第12号住居跡）、西部から2軒（第17・21号住居跡）である。第21号住居跡は、住居跡が調査区域外に延びており、全体構造はつかめなかったが、掘り込みが深く多数の遺物が出土している。第15-A号住居跡も、出土遺物が多く、時期は出土遺物から安行Ⅲaから安行Ⅲcまでの晩期と思われるが、耳飾り・土版等の土製品が多数出土している。他にも、石剣・石匙・勾玉等の石製品や多数の耳飾りが出土している。

以上、Ⅰ～Ⅴ期までに時期を分類し概要を述べてきたが、今回調査をした隣接する大橋A遺跡⁽³⁾では、黒浜式期の住居跡が検出され、また、当遺跡においても黒浜式期の土器片が出土しており、近隣にこの時期の集落の存在を予測させるものである。また、このⅤ期をもって人々の活動の痕跡は見られなくなり、古墳時代まで空白の期間になるとと思われる。

ここで、今回の調査で出土している耳飾り及び土製仮面についてふれてみたい。耳飾りは、全部で44個出土している。形状別では、白形が4個、環形が16個、滑車形が24個である。遺構内からの出土が23個、遺構外から21個である。時期的には、後期後葉から晩期にかけてのものがほとんどである。他の類別としては、当遺跡から北東に約10kmほどに位置する小山市寺野東遺跡⁽⁴⁾から、当遺跡と同様に多数の耳飾りが出土している。土製仮面は、第24-B号住居跡の北部壁際の覆土下層から顔面を下にした状態で出土している。時期は後期前葉である。県内では古河第一中学校蔵⁽⁵⁾（出土不明）、近県では前述の小山市寺野東遺跡⁽⁶⁾、桶川市後谷遺跡⁽⁷⁾、羽生市発戸遺跡⁽⁸⁾、板倉町本遺跡⁽⁹⁾で土製仮面が出土している。祭祀的・呪術的な観点から貴重な資料と言える。

2 古墳時代

今回の調査では、古墳時代前期の方形周溝墓が6基検出された。猿島地方では、初めての検出である。いずれの遺構も、調査区域外に延び全体の構造は把握できなかった。また、方台部もすでに削平されており、盛土の遺存も確認されておらず、遺構に伴う土坑も確認されていない。しかし、方形周溝墓が検出されたことにより、この時期、墓域であったことが明らかになり、周辺に集落の存在が推察される。

3 近世

今回の調査では、塚が1基検出されている。その他の施設等は確認されておらず、性格については不明である。しかし、表土中から土偶・土版・円板等の縄文時代の遺物が出土している。近代になって、畑等から選ばれ投棄されたものである。

注

- (1) 総和町教育委員会 『駒羽根遺跡・大橋A遺跡』 1991年3月
- (2) 栃木県文化振興事業団 『寺野東遺跡』 栃木県埋蔵文化財調査報告第152集 発掘調査概要報告 1994年7月
- (3) 鶴見 貞雄 「古河一中所在の土製仮面」 『古河市史研究』 4 1979年
- (4) 桶川市教育委員会・東部遺跡群発掘調査会 「後谷遺跡第4次調査現地説明会資料」 1988年
- (5) 埼玉県 「発掘遺跡」 『新編埼玉県史 資料1』 1980年
- (6) 宮田 裕紀枝 「本遺跡出土の土製仮面(土面)について」 『利根川』 18 1997年5月

参考文献

- ・茨城県教育財団 『冬木地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書 冬木A貝塚・冬木B貝塚』 (茨城県教育財団文化財調査報告第Ⅹ区) 1980年3月
- ・茨城県教育財団 『土浦北工業団地造成地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ 原出口遺跡』 (茨城県教育財団文化財調査報告第94集) 1995年3月
- ・茨城県教育財団 『都市計画道荒川沖木田余線街路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 宮前遺跡』 (茨城県教育財団文化財調査報告第118集) 1997年3月
- ・茨城県教育財団 『伊奈・谷和原丘陵部特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書2 前田村遺跡 C・D・E区』 (茨城県教育財団文化財調査報告第116集) 1997年3月

付 章

釈迦才仏遺跡から出土した炭化材・種実遺体の種類

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

釈迦才仏遺跡は、利根川左岸の台地上に位置する。発掘調査により、縄文時代・古墳時代・中～近現代の集落跡や墓地跡が検出された。このうち、縄文時代の集落では、住居跡から住居構築材と考えられる炭化材、土坑からは食物残渣と考えられる種実遺体などが検出されている。茨城県では、これまでに古墳時代や奈良・平安時代の炭化材や種実遺体の種類を明らかにした例は多いが、縄文時代の資料は少ない。

本報告では、これらの炭化材および種実遺体の種類を明らかにし、当該期の植物利用に関する資料を得る。

1. 炭化材の樹種

(1) 試料

試料は、縄文時代後期前葉および晩期の住居跡から出土した、住居構築材と考えられる炭化材2点（S I 24炭化材、S I 21炭化材）である。

(2) 方法

木口（横断面）・柀目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の断面を複製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて材木組織の特徴を観察し、種類を同定する。

(3) 結果

S I 24炭化材はクリに、S I 21炭化材はトネリコ属に同定された。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科

環孔材で孔部は1～4列、孔部外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。

・トネリコ属 (*Fraxinus*) モクセイ科

環孔材で孔部は2～3列、孔部外で急激に管径を減じたのち漸減する。道管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、単独または2個が複合、複合部はさらに厚くなる。道管は単穿孔を有し、壁孔は小型で密に交互状に配列する。放射組織は同性、1～3細胞幅、1～20細胞高。

(4) 考察

住居構築材と考えられる炭化材は、クリとトネリコ属に同定された。このうちクリは、縄文時代の焼土住居跡から出土する住居構築材の樹種に最も多く確認されている種類である(千野, 1983, 1992; 高橋・植木, 1994)。クリの木材は、強度・耐朽性に優れており、住居構築材としては適材といえる。また、後述するように種実遺体にクリが認められていることから、集落周辺で木材の入手が容易であったことも考えられる。これらのことが、使用された背景に考えられる。

一方、トネリコ属の木材も比較的強度が高く、住居構築材に確認された例も比較的多い。遺跡周辺で普通に見られる種類であったと考えられ、クリと同様に住居構築材として利用されていたことが推定される。なお、

SI24とSI21とで出土した種類が異なることから、両住居跡で用材選択が異なっていた可能性がある。しかし、各住居跡1点の調査であるため、断定には至らない。各住居跡から住居構築材と考えられる炭化材が複数検出されていれば、これらについても同定を行うことで用材選択の傾向が確認できるかも知れない。

2. 種実遺体の種類

(1) 試料

試料は、縄文時代後期中葉の土坑(SK148)から出土した種実遺体である。試料は、一括採取され、プラスチック容器に納められている。

(2) 方法

緩やかに乾燥させたあと、双眼実顕微鏡で観察し同定した。

(3) 結果

大部分はコナラ属 (*Quercus* sp.)の炭化した子葉であるが、その中にクリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)の子葉も1個体のみ含まれる。子葉は完形のものではなく、半分に割れたものも多少含まれるが、大部分は細片になっている。コナラ属は楕円形で炭化しており、大きさは大きなもので長さ1.5cm程度。曲面には縦方向に維管束の筋の跡がみられる。一方クリは、破片部から推定される全体の形状は半球型で、大きさは1.5cm程度。表面のしわはコナラ属よりも不規則で荒く、大きい。

(4) 考察

出土したコナラ属とクリは、いずれも可食植物であり、遺跡から出土例も多い。コナラ属は食用に際し「あく抜き」が必要になる。これらの種実に関するあく抜き技術は、これまでの研究例により縄文中期以降に本格化したといわれている。(渡辺, 1975)。クリは生食可能であることから、その利用はさらにさかのぼると考えられる。いずれの種実も収量が多く、周辺に広く分布し、かつ保存も利くことから、縄文時代の重要な植物食量であったと考えられる。

(引用文献)

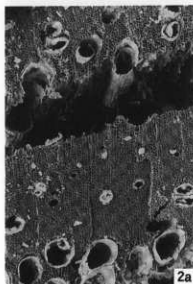
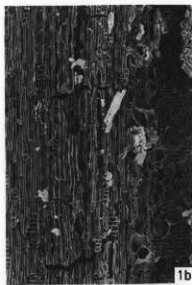
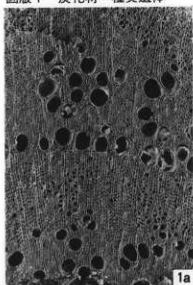
千野裕道(1983)縄文時代のクリと集落周辺植生 一南関東地方中心に一。東京都埋蔵文化財センター研究論集, II, p.25-42.

千野裕道(1991)縄文時代に二次林はあったか 一遺跡出土の植物性遺物からの検討一。東京都埋蔵文化財センター研究論集, X, p.

高橋 敦・榎木真吾(1994)樹種同定からみた住居構築材の用材選択。PALYNO.2, p.5-18.

渡辺 誠(1975)縄文時代の植物食。247p, 雄山閣。

図版1 炭化材・種実遺体



200 μ m : a
200 μ m : b, c

1cm : 3
1cm : 4-6

1. クリ (SI24炭化材) a: 木口, b: 柎目, c: 板目
2. トネリコ属 (SI21炭化材) a: 木口, b: 柎目, c: 板目
3. コナラ属 (SK148)
4. コナラ属 (SK148)
5. コナラ属 (SK148)
6. クリ (SK148)